

都城市所在

こざこ
小迫遺跡

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書4

2021

宮崎県埋蔵文化財センター

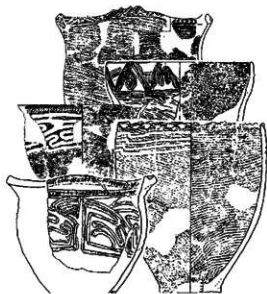
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第257集

都城市所在

こざこ
小迫遺跡

Kozako Site

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書4



2021

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、地域高規格道路「都城志布志道路」の一部となる県道飯野松山都城線（金御岳工区）道路改良工事に伴い、平成30年度に都城市梅北町に所在する小迫遺跡の発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査記録を掲載した報告書です。

小迫遺跡では、縄文時代と古墳時代から中世にかけての様々な遺構や遺物が発掘されました。なかでも、後期旧石器時代の終わり頃から縄文時代草創期にかけての遺物群や、縄文時代早期および中～後期頃の集落跡の存在が明らかになったことは大きな成果の一つです。これらの遺構や遺物は、厚く堆積した火山灰層の間にて発見されており、都城盆地を舞台に大規模な噴火災害を乗り越えて勇躍する当時の人々の暮らしを今に伝えています。

さらに、石器に用いられた石材の産地には、人吉盆地や錦江湾沿岸・大隅半島産等といったものがあることから、当時の広域的な交流のあり方も読み取ることができます。小迫遺跡の位置する都城盆地は、古くから南部九州の文化交流・物資流通の十字路であったと言えます。

このように、本書にて報告する調査成果は、都城盆地のみならず、本県と鹿児島県をまたぐ大淀川上流域の歴史文化を解明する上においても、貴重な資料になるものと考えられます。

本書や出土品などが学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場において活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関、地元の方々
に心より厚くお礼申し上げます。

令和3年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 山元 高光

例 言

- 1 本書は、県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴い、平成30年度に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した、都城市梅北町に所在する小迫（こごご）遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は都城土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。調査期間は、平成30年8月20日から平成31年3月18日までの127日間である。
- 3 発掘調査は、宇和田幹彦、今塩屋毅行ならびに永山鏡太郎（現 都城市教育委員会）が担当し、平井祥藏、高村哲、甲斐尚和の協力を得た。現地調査における図面作成及び写真撮影等は、調査担当者が分担して行った。
- 4 発掘調査および報告書作成に伴う、測量業務（グリッド杭設置）、空中写真撮影、自然科学分析（放射性炭素年代測定、樹種同定、植物珪酸体分析）および石器実測（一部）は、下記のとおり業務委託した。
 - ・ 測量業務 南日本総合コンサルタント株式会社
 - ・ 空中写真撮影 九州航空株式会社
 - ・ 自然科学分析 株式会社 古環境研究センター
 - ・ 石器実測委託 株式会社 バスコ
- 5 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて整理作業員の補助を得て行った。デジタル図化作業は平井及び加藤真理子、デジタル編集作業は加藤の協力を得た。また、遺物の写真撮影は主に今塩屋毅行が行った。
- 6 本書における図中の方位は、国土座標第Ⅱ系（世界測地系）の座標北（G. N.）、国土地理院発行地図は真北を指す。また、本書中の座標値についても世界測地系に準拠しており、標高は海抜絶対高である。
- 7 本書にて使用した位置図等は、国土地理院発行の電子地形図2万5000分の1『都城』『末吉』および宮崎県都城土木事務所より提供の2000分の1図をもとに作成している。
- 8 本書で使用した遺構略記号は、下記のとおりである。

SA：竪穴建物跡 SB：平地式建物跡 SC：土坑 SI：集石遺構 SG：道路状遺構 SX：竪穴状遺構
Gr：グリッド F：建物跡内の地床跡 H：建物跡内の土坑（屋内土坑）

なお、竪穴建物跡実測図中の柱穴（ピット）のうち、網掛け表示のものは、主柱穴である。
- 9 本書に掲載している土層断面及び土器の色調等については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』（2008年版）に拠る。
- 10 石器の分類は日高広人、石器石材の同定については赤崎広志による助言を得て、大竹進太郎、吉行真人および今塩屋毅行が行ったが、最終的な責任は今塩屋にある。
- 11 石器実測図における使用痕の表現は下記のとおりとした。
 - ・ 平面図、側面図等のうち面的に図示可能なもの（磨面・砥面等）…網掛け
 - ・ 平面図、断面図等での使用痕の範囲… ← → で範囲を示し、使用痕名を記載（敲打・磨痕・砥痕等）
- 12 本書の執筆は、第Ⅰ～第Ⅲ章を今塩屋、第Ⅲ章のうち、第4節（4）-c）-a）-d）を加藤、第Ⅴ章は今塩屋・加藤が合議の上で今塩屋が行った。編集作業は、加藤が主に行い、今塩屋がこれを補佐した。また、第Ⅳ章（自然科学分析）のうち、第1～第3節は、古環境研究センターによる委託成果品のうち、概要のみを掲載した。第4節は、県工業技術センター材料開発部の協力のもと、赤崎広志が執筆した。
- 13 出土遺物およびその他の諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて保管收藏している。

本文目次

第1章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第3節	発掘調査の方法と経過	2
第4節	整理作業及び報告書作成等	2
第II章	遺跡の立地と環境	
第1節	遺跡の立地と地形	3
第2節	地理的環境	3
第3節	歴史的環境	3
第III章	調査の成果	
第1節	基本層序	6
第2節	調査成果の報告にあたって	8
第3節	古墳時代～中世の遺構と遺物(第II層の調査)	9
	(1) 概要	
	(2) 遺構	
	(3) 遺物	
	(4) 小結	
第4節	縄文時代中～晩期の遺構と遺物(第III・IV層の調査)	13
	(1) 概要	
	(2) 層位と旧地形	
	(3) 遺構	
	(4) 遺物	
	(5) 小結	
第5節	縄文時代早期の遺構と遺物(第IX層の調査)	74
	(1) 概要	
	(2) 層位と旧地形	
	(3) 遺構	
	(4) 遺物	
	(5) 小結	
第6節	後期旧石器～縄文時代草創期の遺物(第IX層の調査)	96
	(1) 概要	
	(2) 層位と旧地形	
	(3) 遺物	
	(4) 小結	
第IV章	自然科学分析の結果	
第1節	樹種同定	123
第2節	放射性炭素年代測定	123
第3節	植物珪酸体分析	123
第4節	蛍光X線分析	128
第V章	総括	
第1節	後期旧石器～縄文時代草創期	131
第2節	縄文時代早期	132
第3節	縄文時代中～晩期	133
第4節	中世	137

挿図目次

第1図	小迫遺跡周辺の主要な遺跡・史跡分布図	4
第2図	小迫遺跡の周辺地形(詳細図)	5
第3図	調査区と周辺地形図	5
第4図	調査区縦横断面(層断面図)	7
第5図	古墳時代～中世・時期不明の遺構分布図(第II層)	10
第6図	土坑・堅穴状遺構実測図	11
第7図	道路状遺構(中世・第II層)出土遺物実測図	12
第8図	縄文時代中～後期の遺構分布図(第III・IV層)	15
第9図	堅穴建物跡実測図(1)・(2)	16-17
第10図	堅穴建物跡実測図(3)	18
第11図	堅穴建物跡実測図(4)	19
第12図	堅穴建物跡実測図(5)・(6)	20-21
第13図	堅穴建物跡実測図(7)	22
第14図	堅穴建物跡実測図(8)	23
第15図	堅穴建物跡実測図(9)	24
第16図	堅穴建物跡実測図(10)	25
第17図	堅穴建物跡実測図(11)	26
第18図	堅穴建物跡実測図(12)	27
第19図	土坑実測図	29
第20図	土坑・陥し穴状遺構実測図	31
第21図	集石遺構実測図・土坑等分布図	32
第22図	第III・IV層遺物分布図(土器)	36
第23図	第III・IV層遺物分布図(石器)[1][2]	37-39
第24図	遺構出土遺物実測図(土器)[1]	44
第25図	遺構出土遺物実測図(土器)[2]	45
第26図	遺構出土遺物実測図(土器)[3]	46
第27図	遺構出土遺物実測図(土器)[4]	47
第28図	遺構出土遺物実測図(土器)[5]	48
第29図	遺構出土遺物実測図(土器)[6]	49
第30図	遺構出土遺物実測図(土器)[7]	50
第31図	遺構出土遺物実測図(土器)[8]	51
第32図	遺構出土遺物実測図(土器)[9]	52
第33図	遺構出土遺物実測図(土器)[10]	53
第34図	遺構出土遺物実測図(土器)[11]	54
第35図	第III・IV層出土遺物実測図(土器)[1]	55
第36図	第III・IV層出土遺物実測図(土器)[2]	56
第37図	第III・IV層出土遺物実測図(土器)[3]	57
第38図	第III・IV層出土遺物実測図(土器)[4]	58
第39図	第III・IV層出土遺物実測図(土器)[5]	59
第40図	第III・IV層出土遺物実測図(土器)[6]	60
第41図	第III・IV層出土遺物実測図(土器)[7]	61
第42図	第III・IV層出土遺物実測図(土器)[8]	62
第43図	第III・IV層出土遺物実測図(土器)[9]	63
第44図	第III・IV層出土遺物実測図(土器)[10]	64
第45図	第III・IV層出土遺物実測図(土器)[11]	65
第46図	縄文土器深鉢底部断面図	66
第47図	遺構出土遺物実測図(石器)[1]	67
第48図	遺構出土遺物実測図(石器)[2]	68

第49図	遺構出土遺物実測図(石器) [3].....	69
第50図	第Ⅲ・Ⅳ層出土遺物実測図(石器) [1].....	70
第51図	第Ⅲ・Ⅳ層出土遺物実測図(石器) [2].....	71
第52図	第Ⅲ・Ⅳ層出土遺物実測図(石器) [3].....	72
第53図	第Ⅲ・Ⅳ層出土遺物実測図(石器) [4].....	73
第54図	縄文時代早期の遺構分布図(第IX層).....	75
第55図	堅穴建物跡実測図.....	78
第56図	平地式建物跡実測図.....	79
第57図	土坑実測図(1).....	79
第58図	土坑実測図(2).....	80
第59図	土坑・陥し穴状遺構実測図.....	81
第60図	集石遺構実測図.....	83
第61図	第IX層出土遺物分布図(1) [器種別].....	87
第62図	第IX層出土遺物分布図(2) [土器].....	88
第63図	第IX層出土遺物分布図(3) [石器].....	89
第64図	遺構出土遺物実測図(土器).....	90
第65図	第IX層出土遺物実測図(土器) [1].....	91
第66図	第IX層出土遺物実測図(土器) [2].....	92
第67図	第IX層出土遺物実測図(土器) [3].....	93
第68図	第IX層出土遺物実測図(土器) [4].....	94
第69図	遺構及び第IX層出土遺物実測図(石器).....	95
第70図	第XI層出土遺物分布図(1) [調査区全体(器種別)].....	97
第71図	第XI層出土遺物分布図(2) [遺物集中区(器種別)].....	99
第72図	第XI層出土遺物分布図(3) [遺物集中区(石器石材料)].....	99
第73図	第IX層遺物分布図(4)・(5) [調査区全体(土器・石器石材料)].....	100・101
第74図	第XI層出土遺物実測図(土器).....	103
第75図	第XI層出土遺物実測図(石器) [1].....	104
第76図	第XI層出土遺物実測図(石器) [2].....	105
第77図	第XI層出土遺物実測図(石器) [3].....	106
第78図	暦年校正結果(1)・(2).....	126・127
第79図	暦年校正年代マルチプロット図.....	127
第80図	白色物質と粘土鉱物のX線強度比較.....	128
第81図	桑木津留産と三船産黒曜石の双眼実体鏡写真.....	129
第82図	黒曜石の Sr・Rb 比率散布図.....	130
第83図	縄文時代中～後期の主な土器型式.....	135
第84図	縄文時代中～後期の遺構変遷図(第Ⅲ・Ⅳ層).....	136

表 目 次

第1表	小泊遺跡における遺構・遺物と検出層位.....	6
第2表	石器石材料分類表.....	8
第3表	遺構および第Ⅲ・Ⅳ層出土石器組成表.....	39
第4表	遺構および第IX層出土石器組成表.....	94
第5表	第XI層出土石器組成表.....	101
第6表	遺構一覧表(1)～(2).....	107・108
第7表	土器観察表(1)～(12).....	109～120
第8表	石器計測表(1)～(2).....	121・122
第9表	樹種同定結果一覧表.....	125

第10表	放射性炭素年代測定結果一覧表.....	125
第11表	B区北側西壁における植物珪酸体分析結果.....	128
第12表	成分分析の比較(赤色物質).....	128
第13表	成分分析の比較(黒曜石).....	130

写 真 図 版 目 次

図版1	遺跡の立地(1)・遺跡の立地(2)
図版2	遺跡の立地(3)・遺跡の遠望・遺跡から見た眺望 基本土層
図版3	調査区全景(1)・SA7を切り込む SX1・SG2土層断面
図版4	B区近景(1)・第Ⅲ・Ⅳ層遺物出土状況 発掘調査風景(1)・B区近景(2)
図版5	SA1全景・SA4全景・SA6全景 SA6地床坪内遺物出土状況・SA8全景
図版6	SA9遺物出土状況・SA11全景・遺構検出状況 A区近景(1)・(2)
図版7	SA13全景(1)・SA13全景(2)・SA13堅穴部内柱穴 SA13土層断面・SA13柱穴内遺物出土状況
図版8	SA16遺物出土状況・SA19遺物出土状況 SA22遺物出土状況(1)・(2)・SA23全景 SA23地床坪検出状況・SA25・26とその周辺 SA27とその周辺
図版9	SA31全景・SA32全景・SA33遺物出土状況 SC24遺物出土状況・SC25土層断面・SC28土層断面 SC29全景・SC52遺物出土状況
図版10	SC53遺構検出状況・SC53遺物出土状況 SC95遺構検出状況・SC95全景・SI10焼窯検出状況 小穴内遺物出土状況・A区第V～VII層除去作業状況
図版11	調査区全景(2)・SA45遺構検出状況・SA45全景
図版12	SA46遺構検出状況・SA46全景・SA46土層断面(1)・(2) SB1全景・SC76土層断面・SC88遺物出土状況 SC89全景
図版13	A区近景・B区近景
図版14	B区集石遺構群・SI1全景・SI9全景・遺構検出状況 発掘調査風景(2)
図版15	B区近景・発掘調査風景(3) 遺物出土状況(1)・(2)・シミュレーションによる第XII層
図版16	樹種同定における試料写真 B区北側西壁における植物珪酸体分析結果
図版17	縄文時代中～後期の土器(1)
図版18	縄文時代中～後期の土器(2)
図版19	縄文時代中～後期の土器(3)
図版20	縄文時代中～後期の土器(3)・石器
図版21	縄文時代早期の土器・石器
図版22	縄文時代草創期の土器・石器 後期旧石器時代の石器

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

地域高規格道路「都城志布志道路」とは、宮崎県都城市を起点に鹿児島県於市を経由して志布志市に至る、総延長約 44 km の自動車専用道路で、都城・大隅定住自立圏の地域振興や防災・経済・医療対策の機能強化を図ることを目的に平成 6 年 12 月に指定された。その計画路線は、九州縦貫自動車道宮崎線（都城 I.C）と東九州自動車道（志布志 I.C）および物流拠点である中核国際港湾の志布志港を結ぶものである。

都城志布志道路のうち、宮崎県側では約 22 km が工事施工区間であり、その路線構成は都城 I.C—五十町 I.C 間（約 13.4 km）が一般国道 10 号都城道路（国土交通省事業）、五十町 I.C—県境（約 8.5 km）が県道 12 号都城東環状線および県道 109 号都賀山都城線のバイパス（県事業）である。

都城志布志道路の路線内に所在する埋蔵文化財については、25 遺跡 393,700 m² の存在が把握されており、平成 9 年度以降、宮崎県教育庁文化財課による試掘・確認調査の結果をもとに、工事計画と遺跡の保護に関する協議調整と発掘調査および調査報告書の刊行が進められてきた。県事業区間においては、小迫遺跡を含む 12 箇所の遺跡が該当しており、計画的な発掘調査と調査報告書刊行の結果、平成 31 年度までに五十町 I.C—金御岳 I.C 区間が開通している。

小迫遺跡は、金御岳 I.C—県境区間（金御岳工区）にあり、本県側の路線内の遺跡としては最も南に位置する。同工区内では小迫遺跡を含む 15 箇所の遺跡が把握されており、これまでに保木島遺跡（平成 27・29～30 年度）、嫁坂遺跡（平成 28～29 年度）、上高遺跡（平成 29～30 年度）、大浦遺跡（平成 30 年度）の発掘調査が実施され、調査報告書の刊行も順次進められている。

工事路線は、小迫遺跡の西側隣接部分に計画されていたが、事前の踏査等によって当該路線部分まで遺跡範囲の拡大が予想されたため、用地買収の完了をもって、県文化財課と県埋蔵文化財センターによる試掘調査を実施した（平成 30 年 3 月）。トレンチ調査の結果、御地降下軽石層上面や鬼界アカホヤ火山灰層下位等に遺物包含層が存在することが明らかとなり、堅穴建物跡といった遺構も存在する可能性も高くなった。

これを受けて、遺跡範囲の拡大措置を講じたうえで、遺跡の取り扱いに関する協議を進めた結果、道路建設の詳細設計による工事掘削範囲等の輸送によっても現状保存が困難な 2,600 m² については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることになった。

上記の経緯を経て、平成 30 年 3 月に県道飯野山都城線（金御岳工区）地域連携推進事業の一環として、県都城土木事務所より発掘調査の依頼がなされ、平成 30 年 8 月に県埋蔵文化財センターを調査機関とする発掘調査の着手へと至ったものである。

第 2 節 調査の組織

小迫遺跡の発掘調査・報告書作成にあたっては下記の体制で実施した（平成 30～令和 2 年度）。

【調査主体】

宮崎県教育委員会

【事業調整等】

宮崎県教育庁文化財課

埋蔵文化財担当リーダー

飯田 博之（平成 30～令和 2 年度）

同 主査 松本 茂（平成 30 年度）

同 主査 藤木 聡（平成 31 年度）

同 主査 伊斐貴充（令和 2 年度）

【発掘調査・整理作業及び報告書作成】

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長 長峯 勝志（平成 30 年度）

山元 高光（平成 31～令和 2 年度）

副所長兼総務課長 田中 礼子（平成 30 年度）

内野真由美（平成 31 年度）

副所長兼調査課長 赤崎 広志（令和 2 年度）

総務課長 鈴木 勝代（令和 2 年度）

総務担当リーダー

寺原真由美（平成 30～31 年度）

阿波野ゆかり（令和 2 年度）

調査課長 吉本 正典（平成 30 年度）

赤崎 広志（平成 31 年度）

主幹兼調査第一担当リーダー

松林 豊樹（平成 30 年度）

和田 理啓（平成 31～令和 2 年度）

（試掘調査担当）

調査第一担当主査 宇和田幹彦（平成 29 年度）

埋蔵文化財調査員 下田代清海（平成 29 年度）

永山鏡太郎（平成 29 年度）

（本調査担当）

調査第一担当主査 宇和田幹彦（平成 30 年度）

同 今塩屋毅行（平成 30 年度）

埋蔵文化財調査員 永山鏡太郎（平成 30 年度）

（報告書作成担当）

調査第一担当主査 今塩屋毅行（平成 31～令和 2 年度）

調査協力等（五十音順）

中郷地区公民館・都城市教育委員会文化財課

和田義三氏（地元協力者）

第3節 発掘調査の方法と経過

1 発掘調査の方法

調査区の設定 調査区の設定にあたっては、発掘調査対象地の南北側が工事現場や工事関係事務所、東西側が山林(民有地)に囲まれており、全面的な表土剥ぎや遺構精査が可能となる排土搬出等は困難と判断されたことから、排土置き場の確保の観点からA・B区に2分割した(第4図)。
グリッドの設定 調査区全体を国土座標(世界測地系)に拠る10m×10mのグリッドに設定し、南北方向のグリッド線に数字、東西方向のグリッド線にアルファベットを付与して、その交点をグリッド名とした(第3図)。

作図記録 発掘調査の円滑化・迅速化を図るために、遺物の取り上げに伴う三次元情報の取得、遺構の作図においては、トータルステーションと連動した電子平板[(株)CUBIC製の「遺構くん」ソフト搭載のノート型パソコン]を使用した。ただし、遺構図作成においては、使用機器の特性や使用者の技術的制約等により、集石遺構図や各遺構の土層断面図等については担当職員や調査員が図化を行った。

また、地形測量における等高線は、電子平板を用いた約1～2m間隔で取得した任意のメッシュデータの記録と遺構上端の標高を加えたデータを用いてソフトウェア上で作成したもので、現地にて検討・修正を経て掲載している。

写真記録 遺構や遺物出土状況等の写真撮影機器として、フィルム中判カメラ(6×7判)ならびに一眼レフデジタルカメラ(フルサイズ:1200万画素)を使用した。デジタルカメラは35mmフィルムカメラの代替機として使用するものであり、デジタル画像の保存形式は、TIFFとRAWを基本としている。メモ記録写真の画像取得には、コンパクトデジタルカメラ(APS方式)を用い、デジタルカメラによる動画撮影を調査状況や遺構完掘状況等を対象に行った。

遺構面(第V・X層上面)の垂直写真撮影は業務委託し、A・B区を合成したモザイク写真として取得した。

2 発掘調査の経過

発掘調査は、2,600㎡を対象に平成30年8月20日～平成31年3月18日まで実施した。

当初計画ではA区北半部から着手の予定であったが、旺盛に繁茂する竹木の伐開作業や廃棄物の整理に時間を要したため、伐開作業の終了した重機進入路側のB区(基本土層の第II～IV層)から実施することとした。以後、A区(第II～IV層)とB区南半部(第IX層)→A区(第VIII・IX層)とB区南半部(第XI層)→A区南半部(第XI層)→B区北半部(第VIII・IX・XI層)の順に調査を進めた。

調査中には、遺構の多層存在(第V・X層上面)、遺物包含層(第XI層)の面的な広がりなど、事前の確認調査では把握困難であった事象が相次いで判明したが、当初計画の調査期間内に現地作業を完了することができた。

なお、A区北半と南半部を隔てる里道やA区南半部の南東隅部分にて新たに検出された掘乱坑(伐採木の焼却坑)は、深々度まで掘削が及んでいたため、調査除外とした。

調査経過の概略は以下のとおりである。

H30.8.20	発掘調査着手 現場事務所等設置作業
H30.8.29	重機による表土剥ぎ開始(B区)
H30.9.5	発掘作業員雇用開始 縄文中～後期遺物包含層掘削開始(B区)
H30.10.3	縄文中～後期の遺構検出、精査開始(B区)
H30.10.25	縄文中～後期遺構面の空中写真撮影(B区)
H30.10.29	表土剥ぎ(A区) 縄文早期遺物包含層掘削開始(B区南半)
H30.11.5	縄文中～後期遺物包含層掘削開始(A区)
H30.11.14	縄文中～後期の遺構検出、精査開始(A区)
H30.12.14	縄文中～後期遺構面の空中写真撮影(A区)
H30.12.18	縄文早期遺物包含層掘削・遺構精査開始(A区)
H31.1.21	縄文早期遺構面の空中写真撮影(A区)
H31.1.24	縄文早期遺物包含層掘削・遺構精査開始(B区北半)
H31.2.14	ウォーターフローテーション作業開始 縄文草創期遺物包含層掘削・遺構精査開始
H31.2.26	縄文草創期・早期遺構面の空中写真撮影(B区北半)
H31.3.4	発掘作業員雇用終了、フローテーション作業終了
H31.3.5	現場事務所等撤去、埋め戻し作業開始(A・B区)
H31.3.18	埋め戻し終了、現地撤収

発掘調査中では、堅く建物跡や土坑底面付近に堆積する埋土を対象に土壌サンプリングを行い、現地にてウォーターフローテーション作業にて炭化物等の回収を行った。

第4節 整理作業及び報告書作成等

1 整理作業の経過

整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センター本館および分館にて実施した。平成31年度は遺物水洗および注記・接合作業、フローテーション作業で得られた炭化物の選別作業、遺物実測や拓本の一部を行った。

令和2年度は遺物実測・拓本・トレース作業ならびに図版作成作業、遺物や図面記録類に関する収蔵作業のほか、報告書作成等を進めた。

また、石器実測図作成の一部と、フローテーションで得られた炭化物や現地にて採取した土壌等の自然科学分析については業務委託とした。

2 報告書原稿の作成等

遺構や遺物実測図を掲載した図版作成作業においては、手書きトレースによる浄書のほか、Adobe社製の各種ソフト(IllustratorCS6/CC・PhotoshopCS6/CC・InDesignCS6/CC)によるデジタル製図やレイアウト等の編集も併用した。遺物写真撮影は、一眼レフデジタルカメラを使用している。

3 教育普及活動等

宮崎県立図書館にて開催された、遺跡発掘報告会(令和元年9月1日)において、調査成果の概要と整理作業等の状況の報告を行っている。

第二章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地と地形

小迫遺跡は、宮崎県都城市梅北町に所在する縄文時代～中世にかけての集落跡および遺物散布地である。鹿児島県曾於市との県境に程近い、都城盆地南縁部の東から西へ延びる細長い丘陵上（標高約190m）に分布するこの遺跡範囲のうち、発掘調査対象地（調査区）は丘陵のほぼ中央部に位置し、舌状に張り出す尾根の根元にある。階段状の畑地造成がなされているが、現況はスギ林である。

調査区とその周辺は、北東隅側（標高192m）から南西隅（標高188m）にかけて緩やかに傾斜する幅狭い平坦地が続く地形であるが、南北側は落差15m前後の急崖となる。調査区の中央には、西側の谷部から続く里道（壁面高約1.5～2.5m、底面幅約2m）があり、調査区の東側隣接地の段々畑に接続し、南辺側の崖際にも巡る。地元民の話では、農耕用の馬車道であったという（第2・3図）。

第2節 地理的環境

小迫遺跡の所在する都城盆地の南縁部、特に県境一帯は、金鉤岳や天ヶ峰を支峰とする鰐塚山系と大隅半島中央部に広がる高限山地が向かいあう地形にあり、その境目を縫うように中岳を水源とする大淀川が西流している。この大淀川に流込むわが河川が形成する、大小様々な開析谷と浸食作用に細分化された地形面は、都城市南部から鹿児島県曾於市東部（旧末吉町）地域に特徴的な地形と景観を形づくっている（写真図版1・2）。

小迫遺跡の立地する地形も、これら開析谷によって形成されたものであり、鰐塚山系の支峰、天ヶ峰を頂点とする脊梁の南側裾部を東西に分析するように延びる開析谷（仙人谷・川原谷）によって細長い丘陵となった。谷底には小河川が穿ち、湧水点も散在するなど取水しやすい環境にある。

このような地理的特性によって、遺跡の南・西側は沖積地（水田面）と広大な成層シラス台地、遠くには宮田山がそびえる開けた眺望となる。一方、遺跡の北側は、仙人谷を隔てて一段高い平坦地（畑作地）が広がる地形となり、南側に比べて遮蔽的な眺望となる（第1～3図、写真図版2）。

第3節 歴史的環境

旧石器時代 都城盆地一帯では、シラスをはじめとする厚い火山灰に覆われているため、当該期の発掘調査事例は数少ない。大岩田上村遺跡、中床丸遺跡、池増遺跡、雀ヶ野遺跡等では、細石刃石器群が出土している。

縄文時代 草創期の遺跡としては、県内最古級の土器片と細石刃が相伴して出土した軍人原遺跡がある。王子山遺跡では、堅穴状遺構・炉穴・集石遺構等が検出され、隆帯文土器も出土した。小迫遺跡の周辺では、隆帯文土器が出土した川原谷出水遺跡や、板島論摩テラスを含む層の下部から集石遺構が検出された笹ヶ崎遺跡がある。

早期の遺跡としては、笹ヶ崎遺跡、中床丸遺跡、高橋遺跡、塚坂遺跡Ⅰ、上高遺跡などにおいて集石遺構等が検出されている。これらの遺跡では貝殻文円筒形土器や押型文土器の他、塞ノ神式土器等も出土している。

中期も前期同様に遺跡数は少ないが、前期ないし中期の堅穴建物跡や陥し穴遺構が上高遺跡にて検出されている。さらに、笹ヶ崎遺跡と高橋遺跡では深浦式土器が出土している。春日式土器の出土例も知られている。

後期になると遺跡の数が増加し、都城盆地や大淀川上流域（鹿児島県曾於市）に広がる丘陵の尾根部や裾部、台地の縁辺さらには扇状地上に立地するようになる。大淀川源流域に近い宮之迫遺跡（鹿児島県曾於市）には、後代に宮之迫式土器と呼ばれる阿高式系土器が多量に出土しており、大隅半島における後期前半頃の様相を表徴する代表的な遺跡とされている。都城盆地側でも塚坂遺跡においては、宮之迫式土器を伴う堅穴建物跡が検出され、緩毛原第2遺跡でも宮之迫式土器が出土している。その他、磨研縄文系土器や黒色磨研系土器の出土や遺構の調査例も少なくない。

晩期では、小迫遺跡周辺においては、高橋遺跡、笹ヶ崎遺跡、大年遺跡、塚坂遺跡や上高遺跡等に在り土器や黒川式土器の出土やそれに伴う堅穴建物跡や土坑といった遺構が調査されている。

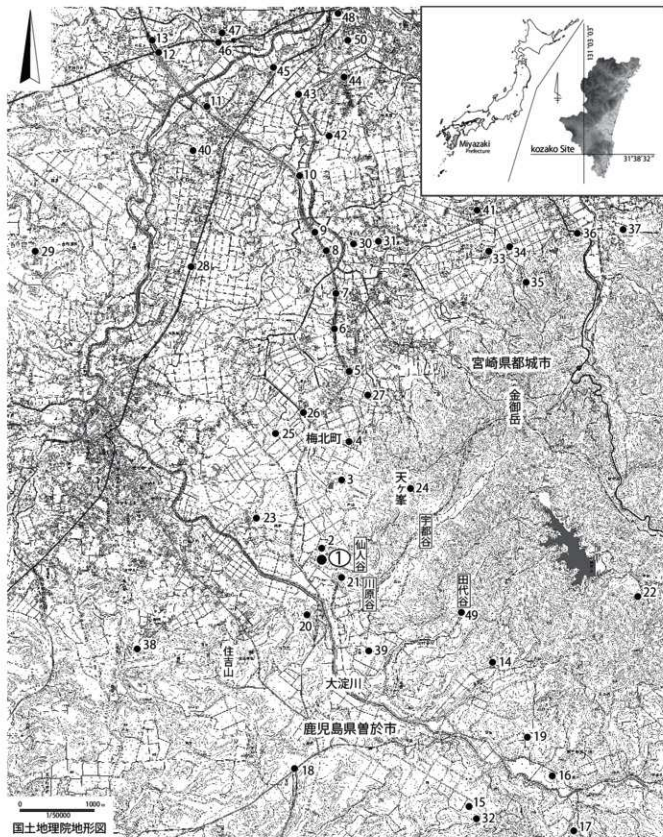
弥生時代 都城盆地では、坂元A遺跡の水田、黒土遺跡では擦り切り孔を有する石庭丁や榎玉痕を有する土器片等の存在など、初期水稲耕作文化を具体的に示す調査例があり、時代を通じて盆地全体に遺跡が展開していく。小迫遺跡の北側の位置にある大浦遺跡では、中期後半の土器群が検出されている。

古墳時代 南部九州特有の墓制である地下式横穴墓の一大分布圏に都城盆地も包含されるが、盆地の北縁部には高城牧ノ原古墳群、志和地古墳群、高崎古墳群が代表される高塚古墳群が集中する。平峰遺跡、笹ヶ崎遺跡、高橋遺跡、大年遺跡等では中期頃の集落跡が確認され、盆地の南部域に進出していく過程が読み取れる。

古代～中世 都城盆地一帯では古代から中世期の遺跡調査例も多いことも特徴的である。特に都城市梅北地区から鹿児島県曾於市にかけては、島津荘の祖とされる平季基と関連性のある遺跡や史跡なども数多い。筆無遺跡では、溝状遺構に囲まれた掘立柱建物跡や周溝墓、土坑墓などが確認され、大浦遺跡では白磁碗を伴う周溝墓が検出されている。

また、文明年間に降下した板島起源の白ボラによって埋没した遺構も各遺跡で確認されており、筆無遺跡、大年遺跡、笹ヶ崎遺跡、上高遺跡例等が挙げられる。

近世 尾崎第一遺跡（貴船寺跡）において中世末から近世に及ぶ土坑墓が数多く検出されている。旧今町街道（現国道269号線）に現存する「今町一里塚」は、一里塚の国史跡としては九州地方で唯一である（第1図）。



- | | | | | | | | |
|------------|-------------|------------|------------|------------|------------|-------------|--------------|
| 1 小迫遺跡 | 2 大浦遺跡 | 3 上高遺跡 | 4 線坂遺跡(II) | 5 保木島遺跡 | 6 中床丸遺跡 | 7 大年遺跡 | 8 登ヶ崎遺跡 |
| 9 高橋遺跡 | 10 梅北針谷遺跡 | 11 筆無遺跡 | 12 佃女木遺跡 | 13 平峰遺跡 | 14 久保第II遺跡 | 15 荒神免遺跡 | 16 南之郷中学校校遺跡 |
| 17 井手ノ上遺跡 | 18 原村第1遺跡 | 19 宮之迫遺跡 | 20 平松城跡 | 21 川原谷出水遺跡 | 22 中岳洞穴 | 23 平季墓の墓 | 24 天ヶ峰陣跡 |
| 25 榎毛原第2遺跡 | 26 線坂遺跡(I) | 27 梅北佐土原遺跡 | 28 今町一里塚 | 29 井手ノ上遺跡 | 30 梅北城跡 | 31 尾崎第1・2遺跡 | 32 土合原第1~3遺跡 |
| 33 下筋牟田遺跡 | 34 王子原第2遺跡 | 35 王子原遺跡 | 36 上安久遺跡 | 37 野添遺跡 | 38 虎丸城跡 | 39 三枝第1~3遺跡 | 40 上針谷・下針谷遺跡 |
| 41 梅北北原遺跡 | 42 横尾原遺跡 | 43 大岩田上村遺跡 | 44 黒土遺跡 | 45 宮尾・立野遺跡 | 46 岩立遺跡 | 47 油田遺跡 | 48 大岩田城 |
| 49 田代谷遺跡 | 50 大岩田村ノ前遺跡 | | | | | | |
- [1~13は都城志布志道路建設関連に伴って発掘調査を行った遺跡]

第1図 小迫遺跡周辺の主要な遺跡・史跡分布図



第2図 小迫遺跡の周辺地形(詳細図) S=1/12,000



第3図 調査区と周辺地形図

第三章 調査の成果

小迫遺跡における発掘調査では、大きく4つの時代(時期)にわたる遺構と遺物が検出された。

発掘層位順に上層から順に、古墳時代～中世等(遺物包含層:第II層、遺構検出:第III層)、縄文時代中～晩期(遺物包含層:第III・IV層、遺構検出:第V層)、縄文時代早期(遺物包含層:第VII・IX層、遺構検出:第X層)、後期旧石器時代～縄文時代草創期(遺物包含層:第XI層)となる。

各時代の主な遺構と遺物の概要等については、第1表にて一覧化した。

第1節 基本層序

基本層序と当時の環境 発掘調査の結果、表土から最下層の淡黄色砂質土まで大きく16層(第I～XVI層)の堆積が確認された。XV層とその下位の堆積層は、分厚い成層シラス層とみられる。第4図は、調査区の東西・南北方向の壁面における土層断面図である。

また、各層堆積層における古環境の推定を目的に、植物珪酸体分析を実施している。本節では概要の記載にとどめており、詳細については第IV章を参照されたい。

基本層序

【第I層】 黒色土 (Hue10YR 4/1)

耕作土やスギ植林後の腐植土層で層厚約0.4m。近世～近代の陶磁器や銭貨等を含む。第I～II層の堆積層は、陸稲栽培のほか、メダケ属、ススキ属ウシクサ族、シバ属、キビ族、マダケ属等が生育し、シイ属、カシ類、クスノキ科等の照葉樹林が分布していたと推定されている。

【第II層】 黒色土 (Hue5YR 1.7/1)

古墳時代～中世の遺物包含層で、層厚約0.4m。テフラ混入の度合いにより2層に細分される。桜島3(文明)軽石(SZ-3, AD1476年)を含むII a層、霧島御池高原テフラ(Kr-Th, AD1235年?)を含むII b層である。

【第III層】 にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5/4)

縄文時代後期前葉～晩期の遺物包含層で、層厚約0.1～0.2m。霧島御池軽石をまばらに含むサクサクとした土質である。第IV層よりは茶色の濃い色調である。シイ属、カシ類、クスノキ科等の照葉樹林が分布し、部分的にススキ属やウシクサ族、キビ族、メダケ属等が生育する草原的な環境が推定されている。

【第IV層】 明黄褐色土 (Hue10YR 7/6)

縄文時代中期後葉～後期前葉頃の遺物包含層である。層厚約0.2～0.3m。霧島御池軽石を多く含む硬質な土質で、平面的観察的には第V層と見分けが付きにくい。B5・B6・C5・C6・D2・D3・E3・F3Gr。周辺を中心に堆積していた。

【第V層】 黄色砂質土 (Hue2.5Y 8/8)

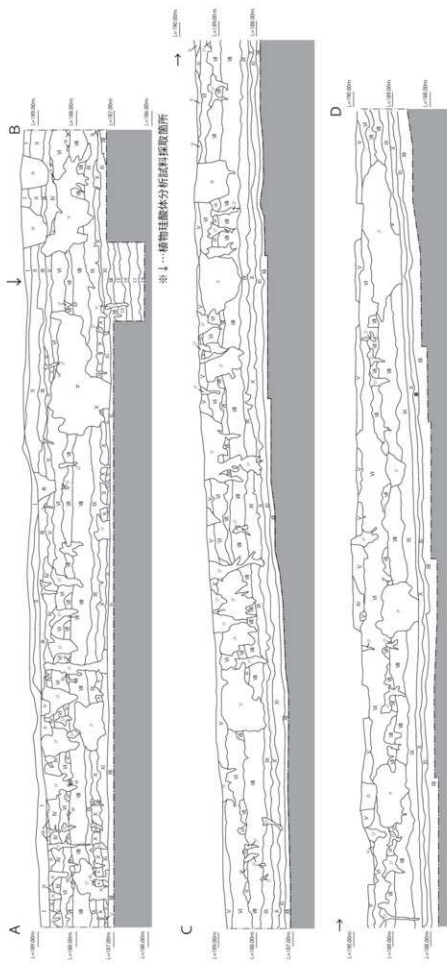
霧島御池軽石(Kr-M, 約4,600年前)層で、層厚約0.2～0.3m。軽石は黄色や黄白色を呈し、粒径0.5cm以下と細かく、密に凝集して固くしまった硬質な土質である。炭化物粒の混入も認められる。第III層と同様な古環境が推定されている。なお、B5・C5・D4～5・E4・F4Gr周辺は、黄色より青みの強い色調[浅黄色(Hue5Y 7/4)]となる。

【第VI層】 にぶい黄褐色土 (Hue10YR 7/4)

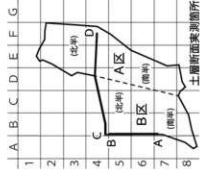
境界アカホヤ火山灰を多く含む層で層厚約0.4m。第VIII層上部とおおむね同様な植生の再生が推定されている。

基本土層	火山灰	時代	主な遺構	主な遺物
第I層	—	近世～現代	—	陶磁器(薩摩焼・肥前焼)、瓦、銭貨(寛永通宝・1銭銅貨)
第II層	Kr-Th SZ-3	古墳時代～ 中世	土坑5基、堅穴状遺構1基、 道路状遺構2基、小穴(柱穴)	須恵器、緑輪陶器、土師器
第III/IV層	—	縄文時代 中～晩期	堅穴建物跡40軒、土坑34基、 集石遺構2基、陥し穴状遺 構4基、小穴(柱穴)	縄文土器〔春日式、大平式、中尾田 皿型、阿高式、宮之迫式、南福寺式、 本野原(指宿)式、成川K式、市夷式、 納曾式、黒川式、無文土器など〕 石器〔石鏃、石匙、石鏃、楔形石器、 スクレイパー、石斧、織器、使用痕 刺片、二次加工刺片、石核、刺片、チッ プ、磨石、敲石、磨石、石皿、台石、 石鏃〕
第V層	Kr-M	—	—	—
第VI層	—	—	—	—
第VII層	K-Ah	—	—	—
第VIII層	Sz-11	—	—	縄文土器〔塞ノ神式土器〕 石器〔刺片、チップ〕
第IX層	—	縄文時代早期	堅穴建物跡6軒、平地式建 物跡4軒、土坑15基、陥し 穴状遺構7基、集石遺構8 基、小穴(柱穴)	縄文土器〔前平式、加栗山式、古田式、 下刺基式、中原式、手向山式、天道ヶ 尾・妙見式、平橋式、押型土器(楕 円・山型)など〕 石器〔石鏃、楔形石器、スクレイパー、 使用痕刺片、二次加工刺片、石核、 刺片、チップ、磨石、敲石、石皿、 台石〕
第X層	Sz-S	—	—	—
第XI層	—	後期旧石器～ 縄文草創期	—	石器〔細石刃、細石刃核、ブランク、 尖頭器、石鏃、楔形石器、両面加工 石器、スクレイパー、二次加工刺片、 使用痕刺片、石核、刺片、チップ〕

第1表 小迫遺跡における遺構・遺物と検出層位



※ ↓…植物建群体分析試料採取箇所



土層注記

- I 黒色土 (Hue 10R 4/1)
- II 黒色土 (Hue 5YR 1/1)
- III にぶい黄褐色土 (hue 10R5/4)
- IV 明黄褐色土 (hue 10R 7/6)
- V 黄色砂質土 (hue 2.5Y 8/6)
- VI にぶい黄褐色土 (hue 10R 7/4)
- VII 黄褐色砂質土 (hue 10R 6/8)
- VIII 黒褐色土 (hue 2.5Y 2/1)
- IX 黒色土 (hue 10R 2/1)
- X 黄色砂質土 (hue 5Y 8/8)

- 現表土 (腐植土層)
- IIa層：福島文明軽石 (SZ-3) を含む
- IIb層：福島新島高原テフラ (K-Tb) を含む
- III層：福島新島軽石をまばらに含み、サクサクとした土質
- IV層：福島新島軽石を多く含み、固く締まる
- V層：福島新島軽石 (K-T) 層
- VI層：アカヤ水山灰を多く含む層
- VII層：境界アカヤ水山灰 (K-Ab) 層
- VIII層：福島本川水山灰 (SZ-S/P1) を含む、硬質で締まりよい
- IX層：粒子細かい、やや粘性あり
- X層：福島隠摩テフラ (SZ-S/P14) 層

- XI にぶい褐色粘質土 (hue 2.5R 5/4) 粘性に富むが、サクサクと割れやすい
- XII 灰褐色粘質土 (hue 2.5R 4/2) 粘子の多いローム質土
- XIII にぶい褐色粘質土 (hue 2.5R 7/4) 粘性の強いローム質土
- XIV にぶい黄褐色粘質土 (hue 10R 6/4) ローム質土で、層下硬は褐色砂質土のブロックを斑点状に含む
- XV 灰白色砂質土 (hue 5Y 8/2) 始皇人戸水砂浜埋積物 (A-1to) の上層
- XVI 淡黄色砂質土 (hue 5Y 8/4) 始皇人戸水砂浜埋積物の一部で、褐色砂質土のブロックをまばらに含む、第IV層より白みが強い
- XVII 樹皮 樹皮および埋積物共同積土層化したもの
- XVIII 腐植 後世のブミクバ、イモの貯蔵穴、薪竹に伴う排水溝等
- XIX 腐植 後世のブミクバ、イモの貯蔵穴、薪竹に伴う排水溝等
- 層部木腐 腐植堆積したもの

第4図 調査区縦横断土層断面図

【第VII層】黄橙色砂質土 (Hue10YR 8/8)

鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah,約7,300年前)層で、層厚約0.1～0.2 m。第VI層が貫入的に入り込む。なお、F2g 周辺は第三・IV層直下は第VII層の堆積となる。

【第VIII層】黒褐色土 (Hue 2.5Y 2/1)

縄文時代早期中葉～後葉頃の遺物包含層で、桜島 11 火山灰 (Sz-Sy, 約 8,000 年前) を含み、層厚約 0.5 m。しまりのよく硬質な土質である。テフラが比較的に凝集する第VIII層上部は、淡黄色 (Hue 5Y 8/3) の発色となる。

この第VIII層上部の堆積物は、カシ類、シイ属、クスノキ科等の照葉樹林の分布や、部分的にススキ属やウシクサ族等が生育する草原的なところも見られたと推定される。第VIII層下部では、ススキ属やウシクサ族、ササ属やキビ族等も生育する草原的な環境で、シイ属等の樹木 (照葉樹) の生育も推定されている。

【第IX層】黒色土 (Hue 10YR 2/1)

縄文時代早期前半～中葉頃の遺物包含層で、層厚約 0.2～0.5 m。やや粘性のある土質で、灰白・黄橙色粒等も含まれる。第VIII層下部と同様な環境が推定されている。

【第X層】黄色砂質土 (Hue 5Y 8/8)

桜島高摩テフラ (Sz-S/Sz-14, 約 12,800 年前) 層であり、層厚は約 0.1～0.2 m。部分的に土壌化している。クスノキ科やイソノキ属等の照葉樹 (常緑広葉樹) の分布や、ササ属のうちチマキやササ節型が優勢となることから、相対的に積雪量 (降水量) の増加が推定されている。

【第XI層】にぶい褐色粘質土 (Hue 7.5YR 5/4)

後期旧石器時代に縄文時代草創期の遺物包含層で層厚約 0.1～0.3 m。粘性に富むが、サクサクと崩れやすい。やや黒味を帯びる。第X層と同様な環境が推定されている。

【第XII層】灰褐色粘質土 (Hue 7.5YR 4/2)

粘性の強い堆積層で、層厚約 0.1 m である。ササ属ミヤコザサ節が優勢に繁茂する状況であることから、当時は冷涼～寒冷で積雪 (降水量) の少ない比較乾燥した気候環境であったと推定されている。

【第XIII層】にぶい橙色粘質土 (Hue 7.5YR 7/4)

第XIII層堆積物は、第XII層と同様な環境が推定されている。

【第XIV層】にぶい黄褐色粘質土 (Hue 10YR 6/4)

層下部は橙色砂質土のブロックが斑点状に含まれる。堆積当時の周辺環境は、ススキ属、ウシクサ族、キビ族、メダケ属、ササ属等が生育するイネ科植生であったと考えられ、何らかの樹木も生育していたと推定されている。

【第XV層】灰白色砂質土 (Hue 5Y 8/2)

始良戸火砕砕堆積物 (A-Ito, 約 29,000 年前) の上層にあたり、層厚は 0.3 m。部分的に少量ながらススキ属やウシクサ族等のイネ科草本類が生育し、周辺には何らかの樹木が生育していた可能性が考えられている。

【第XVI層】淡黄色砂質土 (Hue 5Y 8/4)

始良戸火砕砕堆積物の一つである。橙色砂質土のブロックをまばらに含み、第XV層より白みが強い土色の堆積層である。

第2節 調査成果の報告にあたって

報告順について 本書では、遺構や遺物の報告について、発掘調査を進めた層位順 (上層から下層へ) とする。

ただし、遺構検出遺物包含層の除去後に表出した無遺物層 (火山灰層) の上面にて行ったことから、検出層位は遺構本来の掘り込み面ではない。よって、各遺構の所属層位については、遺構検出層位・遺構埋土や出土遺物の時期を勘案して、下記のように整理する。

(イ) 第II層、第III～V層に伴う遺構：第V層上面検出分 (ロ) 第IX層に伴う遺構：第X層上面検出分

遺構番号 遺構番号は、何らかの遺構として平面検出された順に付している。なお、堅穴建物跡 (SA) と土坑 (SC) については、精査の結果や報告書作成段階での検討により、地山層の変色や微地形などの鑑み、擾乱や相成等と判断したものがある。下記に示した堅穴建物跡 2 軒と土坑 30 基分については、振替等の整理は行わずに欠番とする。

堅穴建物跡 (SA) …SA47・48

土坑 (SC)

SC 7 SC 9 SC10 SC13 SC14 SC18 SC19 SC20 SC23
SC26 SC32 SC33 SC35 SC44 SC45 SC47 SC51 SC56
SC59 SC62 SC64 SC71 SC72 SC74 SC75 SC79 SC85
SC92 SC93 SC94

石材分類 今回の調査で出土した石器のうち、主な石材の特徴や産地については下記のように分類した。

石材名	特徴
礫岩	砂質より大きい粒径の礫が多く含まれるもの
砂岩	黄色系統の色調を呈し、肉眼で見ると砂粒が確認されるもの 硬質砂岩 (硬質で灰色または黒みがかったもの)、宮崎層群産出の化石 (オキベリナ) を含むものがある いわゆる実質岩のうち、薄い層状に剥離するもの。黒灰色や濃緑色を呈する
頁岩	頁岩のうち、シリカに富む緻密な堆積岩
珪質頁岩	黒色と褐色があり、チャーほど珪質かつ堅硬ではない
チャート	灰色や茶色の色調を呈する微粒で、珪質な堆積岩
凝灰岩	火山灰 (火山砕屑物) が固結してできた岩石の一種で、灰色でも青みがかった緑色を呈する
流紋岩	流紋構造が確認されるもので、表面は白色に風化したものや、灰色・黒灰色を呈する
石英	白色で不純物を含む
安山岩	霧島火山群由来とみられる火成岩など 安山岩 (灰色のもの)、多孔質の安山岩 (多孔質で黒・灰色・褐色)、ガラス質安山岩 (ガラス質が強いもの)、濁輝石安山岩 (灰白地に黒色の大きな斑晶を含む) がある
燧石	燧石産地：白色ないし灰白色で透過性の低いもの 土牛燧石：光沢がなく、透過性のない黒灰色のもの。肉眼観察では境界がつきにくい 桑木津燧石：暗灰～濃褐色で、硬面は軟肌状ないし平滑であるもの。透過性が高く、微小な気泡を含み、縞状構造をなすものがある
三輪燧石	透過性が高く一見して桑木津燧石に類似するが、微小な黒色の鉱物が母状を呈する
花崗岩	大隅半島産出とみられ、石英分に富み、金色の雲母鉱物を含む
ホルンフェルス	砂岩や頁岩等が熱変成を受けたもの 風化面は灰ばないし白色を呈し、物を入ったような状態

第2表 石器石材分類表

第3節 古墳時代～中世の遺構と遺物（第II層の調査）

(1) 概要

基本土層の第V層上面にて検出された遺構のうち、古墳時代～中世の遺物包含層である第II層由来の埋土を有するものは、土坑5基・堅穴状遺構1基(SX1)・道路状遺構2条(SG1・2)と小穴(ピット)群である。各遺構の法量や出土遺物の内容については遺構一覧表(第6表)を参照されたい。

(2) 遺構

a) 土坑(第5・6図)

土坑は、5基(SC1・2・15・16・39)検出された。不整な楕円形プランで、長軸方向の一端に柱状の掘り込みを有するもの(SC1・2)や長方形プラン(SC15・SC39)等がある。

SC1 B5Gr.に位置し、平面形は不整な楕円形。長軸長1.05m、短軸長1.05m、深さは0.45m、長軸方向は南北方向をとる。土坑の南側端部には、直径0.3mで検出面からの深さ0.75mの小穴(ピット)が垂直に掘り込まれている。

土坑埋土は桜島3(文明)軽石を含む黒褐色土や灰黄褐色土が主体で、1b層より縄文土器深鉢片が出土している。

SC2 SC1と同じくB5Gr.に位置しSC1の南側にある。両遺構とも類似した形態であり、同一方向に揃うため、一対となる可能性がある。平面形は不整な楕円形で、南北方向にとる長軸長は1.57m、短軸長1.05、深さは0.2mである。土坑の南側端部には、直径0.2mで検出面からの深さ0.55mの小穴(ピット)が垂直に掘り込まれているため、SC1に類似した遺構断面形を呈する。

土坑埋土は桜島文明軽石を含む褐色土が主体で、遺物の出土はない。埋土1・2層と3層との関係から、なんらかの立柱に関連した遺構と考えられる。

SC15 B7・C7Gr.に位置する。平面形はやや歪な長方形で、長軸長は2.13m、短軸長1.15m、深さは0.43mを測る。断面形は逆台形で、土坑埋土の上層は桜島3(文明)軽石を含む灰色土、下層は基本土層の第V～VIII層由来のブロック土塊を含む褐色・黒色系埋土である。

出土遺物には黒曜石(三船・上牛鼻産)の剥片・チップがあるが、縄文時代の遺物が混入したものと判断される。

SC16 A8Gr.に位置し、調査区の南端に位置する。平面形はやや歪な楕円形で、長軸長は1.85m、短軸長1.17m、深さは0.46mである。断面形は矩形ないし逆台形で、土坑埋土の上層は桜島文明軽石を含む灰色土である。

埋土中より磨製石斧(第51図576)と珪質頁岩製の剥片が出土したが、縄文時代の遺物の混入である。

SC39 E6Gr.に位置する。平面形や規模ならびに埋土の堆積状況もSC15に近く、長軸長は2.61m、短軸長1.09m、深さは0.51mである。遺物の出土はない。

b) 堅穴状遺構(第5・6図)

SX1 SX1は、C6Gr.に位置し、縄文時代の堅穴建物跡であるSA7を切る。平面形は東西辺がやや張り出す長方形で、長軸長2.55m、短軸長1.97m、深さは0.4mである。長軸方向は南北方向をとる。堅穴部の北側は段状のテラスとなる。堅穴中央部の床面には主柱穴が9箇所あり東西辺に平行するように並ぶ。柱穴の直径は0.3m前後、深さは0.25mを測る。遺構埋土の上層は桜島3(文明)軽石を含む黒褐色土で、最終埋没時期を示す。

遺物は埋土中から縄文土器深鉢片と黒曜石の石核(第52図584)等が出土したが、遺構本来に伴う遺物ではない。

c) 道路状遺構(第5・7図)

道路状遺構は、2条検出された。調査区南側のSG1と北側のSG2である。平面形や断面形状から溝状遺構に類似するが、平坦な底面には硬化層(面)が認められることから道路状遺構として報告する。

SG1 SG1はA7・B8Gr.に位置し、調査区外から東西方向に直線的に延びる溝状の掘りかたを持つ。第IIb層を掘り込み、第VI層を底面とする構造で、現存長は9.4m、幅は調査区壁面側で3.65m(上幅)、底面の幅(下幅)は0.75m、検出面からの深さ(残深)は0.8mを測る(第7-1・2図)。

遺構の断面形は逆台形で、壁面の両層付近には緩い段がつく。底面付近には互層状の硬化層(第7-2図の5層)が約0.1mの厚さで認められた。この硬化層を除去すると、直径0.2～0.3m、深さ0.1m前後の円形ピット(小穴)が検出され、これが2m間隔で並ぶ。遺構の東端部より外側にもピットが円状に並ぶことから、これらピット列もSG1に伴うものとする、調査区内におけるSG1の長さは約13mと復元できる(第7-1図)。

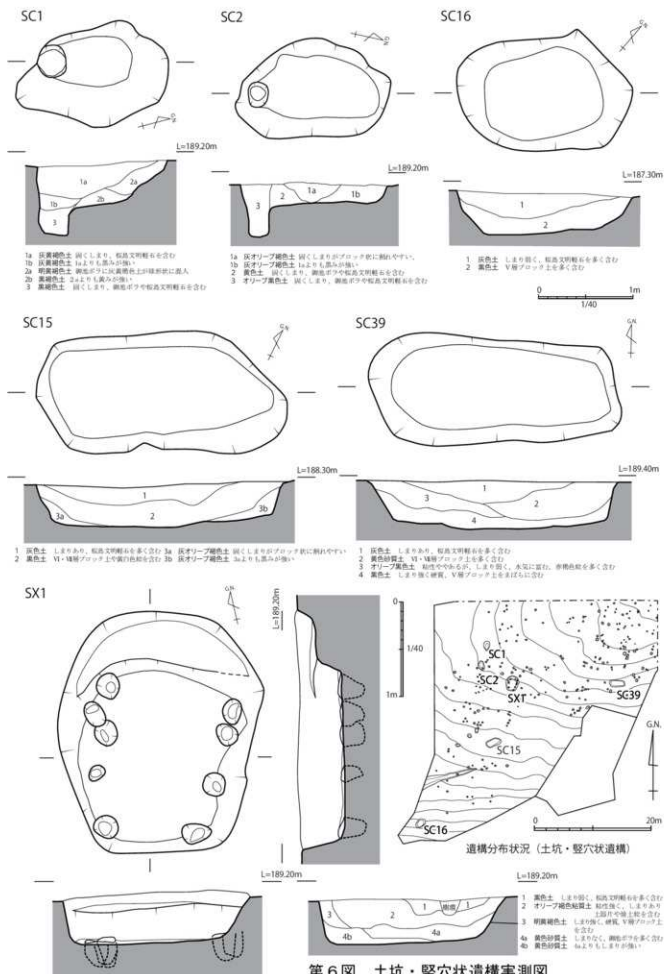
遺構埋土中層付近には層厚0.1mを測る桜島文明軽石の堆積層(第7-2図の2層)が確認された。それより下位の3・4層には硬化面の形成もなく、2層それ自体も硬化していないことから、3・4層堆積時には道路状遺構としての機能は終えていたものとみられる。

遺物は、3・4層中より縄文土器の深鉢片や黒曜石(三船産)の剥片等が7点出土したが、縄文時代の遺物である。

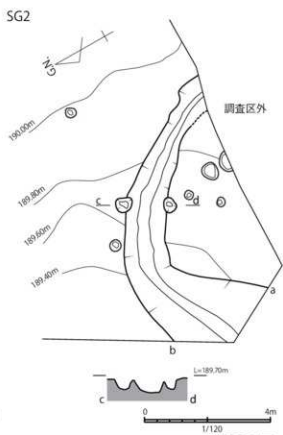
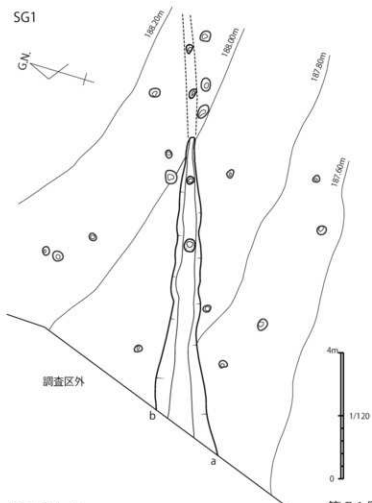
SG2 SG2はD3・E3Gr.に位置し、調査区外の急崖から調査区内に向けて大きくカーブする。第IIb層を掘り込み第V層を底面とする構造で、現存長は9.0m、幅は調査区壁面側で3.6m(上幅)、底面の幅(下幅)は0.4m、深さは0.5mを測る(第7-3・4図)。遺構断面形は緩く開くV字形で、北側壁面の中途には段状のテラス面がつく。底面付近には互層状の硬化層(第7-4図の7・8層)が約0.1mの厚さで形成されていた。遺構埋土の中層付近の4層下部や6層でも硬化層が認められるため、溝状に開削後、埋没過程を経ながら道路等として断続的な使用が読み取れる。埋土最上層は層厚0.1mを測る桜島3(文明)軽石の堆積層(1



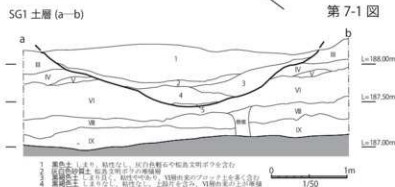
第5図 古墳時代～中世・時期不明の遺構分布図(第Ⅱ層)



第6図 土坑・竪穴状遺構実測図



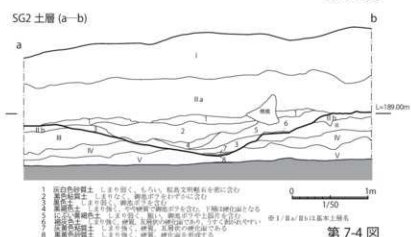
第7-3図



第7-1図

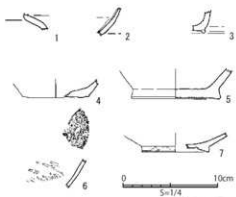
- 1 黒色土、土質、粘性なし、灰白粉砂中程度文明ボヤを含む
- 2 灰白色砂土、土質、粘性なし、粉砂中程度文明ボヤを含む
- 3 黒色土、土質、粘性あり、凝結部のプロットを多く含む
- 4 黒色土、土質、粘性なし、土質中程度、凝結部のプロットを多く含む
- 5 黒色土、土質、粘性なし、凝結、互層状の礫化面が形成
- 6 黒色土、土質、粘性なし、凝結、互層状の礫化面が形成
- 7 灰白色砂土、土質、粘性なし、凝結、互層状の礫化面が形成
- 8 黒色土、土質、粘性なし、凝結、互層状の礫化面が形成

第7-2図



- 1 灰白色砂土、土質、粘性なし、凝結文明ボヤを含む
- 2 黒色土、土質、粘性なし、凝結文明ボヤを含む
- 3 黒色土、土質、粘性あり、凝結文明ボヤを含む
- 4 黒色土、土質、粘性なし、凝結文明ボヤを含む
- 5 黒色土、土質、粘性なし、凝結文明ボヤを含む
- 6 黒色土、土質、粘性なし、凝結文明ボヤを含む
- 7 灰白色砂土、土質、粘性なし、凝結文明ボヤを含む
- 8 黒色土、土質、粘性なし、凝結文明ボヤを含む

第7-4図



第7-5図

第7図 道路状遺構(中世)・第Ⅱ層出土遺物実測図

層)で、それより上層は基本土層の第Ⅱb層が厚く堆積する。

なお、遺構平面の中ほど付近では、両側肩部を挟みこむように掘り込む小穴(ピット)2基も検出された(第7-3図)。直径0.3～0.5m、検出面からの深さ0.4mを測る。SG2とセット関係にあるものとすばね、仕切りまたは扉(門)的な機能を有したものと小穴と考えられる。

e) 小穴(ピット)群(第5図)

小穴群は等高線に沿って平坦面や緩斜面に分布している。直径0.2～0.3m、深さ0.3～0.5mのものが大半で、埋土は黒色土に霧島御池軽石が多く混入するものが多く、霧島御鉢高原デフラマ板島3(文明)軽石を含むものは少数である。現地および図上にて掘立柱建物跡等の復元を試みたが、確実性の高いものは見いだせなかった。ただし、真北ないし東西方向に等間隔に並ぶ3個ないし4個の柱穴列を見出せることから、桁ないし梁行が2間ないし3間規模の掘立柱建物跡が複数棟存在した可能性が高いといえる。

(3) 遺物(第7図)

第Ⅱ層は、後世の畑地造成によって多くは削平を受けており、D2・3およびE2・3Gr、周辺、B6・D5・D6・B7・C7Gr、周辺でのみの遺存していた。なお、重鋸による表土剥ぎの関係で深く削りこんでしまい、遺物の多くは回収できずにいまい。遺物には古墳時代～平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器等があり、7点を図化掲載した(第7-5図)。

1は土師器壺の肩部で古墳時代中～後期(5～6世紀代)のものと考えられる。2は須恵器壺の胴部片で内面に鉄滓が付着しており、鋳造関連に伴う遺物である。古墳時代後・終末期(6～7世紀)のものとみられる。

3は須恵器高台付塊の底部である。高台は体部側に寄った位置に貼り付けられるので、奈良時代～平安時代(8世紀末～9世紀初頭頃)の時期とみられる。4は土師器杯の底部で、底径と体部の立ち上がりから10世紀前半頃とみられる。5は土師器壺または瓶の底部である。円盤状高台で、その端部は外方に張り出す。9～10世紀頃とみられる。

6は瓦器塊の体部とみられる。器面の風化が顕著であるが内面にヘラミガキ痕がわずかに残存している。11世紀中葉～14世紀中葉の時期層に収まるものとみられる。

7は緑釉陶器の碗底部である。丁寧に削り出された蛇の目高台で釉薬の発色もよい。型式的特徴から9世紀後半頃の東海産と考えられる。

(4) 小結(遺構の時期について)

土坑・不明遺構・道路状遺構の時期は、遺構埋土の上・中層における板島3(文明)軽石(SZ-3、AD1476年)の堆積や混入状況から軽石降下直前には既に埋没が進んでいたとみられるので、概ね15世紀前半頃と推定される。

柱穴群については、第Ⅱ層出土遺物には古墳時代～平安中世期の土器類が認められることから、概ね古墳時代後期～室町時代のものと考えられる。

第4節 縄文時代中～晩期の遺構と遺物(第Ⅲ・Ⅳ層の調査)

(1) 概要

遺構 竪穴建物跡40軒、土坑34基、陥し穴状遺構4基、集石遺構2基、小穴(ピット)群がある。これらは第Ⅴ層上面にて検出された遺構のうち、第Ⅲ・Ⅳ層中ないし第Ⅴ層上面から掘削されたものである。特に、竪穴建物跡と土坑群や集石遺構は、縄文時代中期後葉～後期前葉(春日式土器～本野原式土器併行期)に属するものと考えられる。遺物 縄文土器は、第Ⅲ・Ⅳ層や遺構埋土中から春日式・大平式・中尾田Ⅲ類・阿高式・宮之迫式・本野原式土器等の深鉢が主体的に出土したが、後期中葉～後葉段階に位置づけられる土器型式は少数である。

石器類は、石鏃・スクレイパー・石斧・磨石・蔽石のほか、石核や剥片等も数多く出土した。

(2) 層位と旧地形(第4・8図)

堆積状況 第Ⅲ層は、宮之迫式土器を主体とする遺物包含層で、調査区全体に広く形成していた。ただし、B5・B6・C5・C6Gr、周辺(B区)では面的ではなく、局所的な堆積状況であった。第Ⅳ層は春日式・大平式土器を主に包含する層で、B5～7・C5～7・D2・D3・D5・E2・E3・F3Gr、周辺(B区・A区北半)といった限定的な範囲で堆積していた(第4図)。

遺物包含層の取り分け 第Ⅲ・Ⅳ層の遺物取り上げに際しては、各層の堆積状況と遺物の関係を正確に把握できていなかったため、B区では、第Ⅲ層の遺物を第Ⅳ層のものと誤認し、逆にA区では、第Ⅳ層の遺物を第Ⅲ層出土としたものが少なからずあり、その分離・復元作業も困難であった。

よって、本報告書では、第Ⅲ層と第Ⅳ層の出土遺物を「第Ⅲ・Ⅳ層」として一括して整理している。

旧地形 E4・F4Gr、周辺の地形は、大きく地山掘削された里道(第3図)のため損なわれているが、第Ⅴ層上面および第Ⅴ層上面の等高線(第8-54図)の状況から、本来は西側から西側の谷部(仙人谷)に向かう谷地形であったと復元される。

また、F4-E7Gr、を結ぶ線から東側一帯も宅地や畑地造成により大きく損なわれているが、本来は下り勾配のやや急な斜面地であったと推定される。

(3) 遺構(第8図)

分布状況 竪穴建物跡群を主体とする遺構は、調査区の北東から南西に向けて緩やかに傾斜する尾根頂部に、大きく3つの群にまとまって分布している。北から、A群(E2・E3・F2Gr、周辺)、B群(D4・D5・E4・E5・F4Gr、周辺)、C群(B6・C6Gr、周辺)の遺構群に大別される(第8図)。各群とも平面形の円形や方形の竪穴建物跡が著しく切りあう(重なり合う)関係にあるものが多く、特にB群では竪穴建物跡群をさらに切り込む(後出する)方形の土坑群が多数確認された。

なお、調査区の南北側は急な崖面であることから、集落境界の一端を捉えており、集落自体は調査区の東西方向へ展開していたと考えられる。

a) 竪穴建物跡 (第8～18図)

本頁では、竪穴建物跡として検出された40軒(SA1～40)の構造上の特徴等をまとめたうえで、それぞれの竪穴建物跡について概要を記載する。各遺構の法量や出土遺物の内容については遺構一覧表(第6表)を参照されたい。

遺構埋土 掘削面の堆積層ならびに地山層の土色や土質によって違いがみられた。具体的には、㊶黄褐色で微細な炭化物粒、赤褐色粒を多く含む極めて硬質(SA1～6等)、㊷青灰色に近く硬質(SA7・8・20等)、㊸黒味の強い褐色でサクサクとした土質(SA10～12・14・15・24等)、㊹灰色がかかった黄褐色でサクサクとした土質(SA9・16・17・18・21～23・25～40等)、㊺橙黄色ないし褐色で粘性が強い(SA13・33)等である。

㊶～㊸は霧島御池軽石(第V層)、㊹は鬼界アカホヤ火山灰(第VI層等)やローム層由来の埋土である。

遺物出土状況 遺物も遺構検出面近くから埋土の中層にかけて出土する場合がほとんどであるが、㊲床面直上と埋土全体(SA6・19)、㊳埋土全体(SA10・33)、㊴遺構検出面～埋土中層(SA16～18・22)、㊵遺構検出面のみ(SA9)等の事例がある。

平面形と床面積 竪穴建物の平面形は方形(20軒)、円形(20軒)あり、全体が遺存するものは以下のとおりである。

○方形プラン

- ㊶3～4㎡(SA33・36・37)、㊷5㎡(SA11)、㊸7㎡(SA12・14・16)
- ㊹10㎡(SA15・23・24)、㊺11～13㎡(SA3・7・8)、㊻20㎡以上(SA13)

○円形プラン

- ㊼4㎡(SA27)、㊽6㎡(SA10)、㊾8～9㎡(SA9・22・28・34)
- ㊿10～11㎡(SA25・21)、㊻16㎡(SA2・17)、㊼20㎡以上(SA6・29)

方形・円形プランとも3～4㎡が最小床面積で、約2㎡ごとの階梯的な偏差分布であり、超小型(㊶・㊷)、小型(㊸・㊹・㊺・㊻)、中型(㊼・㊽・㊾)、大型(㊿)、超大型(㊻)といったサイズに区分可能である。時期差に加えて竪穴建物の居住者数や機能差を反映しているものと考えられる。

主柱穴配置や屋内施設等 主柱穴配置等が把握可能なものに着目すると、以下のとおりにまとめられる。

方形プラン…㊶:主柱穴ない、または不明(SA7・11・24・35～38)、㊷:主柱穴が2本の可能性(SA4・15)、㊸:主柱穴3本の可能性(SA12)、㊹:主柱穴4本の可能性(SA3・5・8・16・23・40)がある。

地床炉を有するもの(SA8・23・38)や張り出し(突出)部(SA8:竪穴部の長辺側、SA15:隅角部)をもつ。

円形プラン…床面積の大小の別なく主柱穴の存在が明確で、地床炉の保有率も高い。㊼:主柱穴は1本(SA1・2・16・32)、㊽:主柱穴は2本(SA13・29)、㊾:主柱穴2本で、主柱穴間に地床炉や屋内土坑を挟む(SA6・17・21・22・25・31)、㊿:竪穴内縁に沿って主柱穴を複数配置し、地床炉をもつ(SA28)、㊻:床面中心部に主柱穴を複数配置(SA18)、㊼:主柱穴3本～4本の可能性(SA10)がある。㊶～㊸は竪穴部内縁に沿ってピット列(補助柱穴)を有する。

床面の状況 第V層(霧島御池軽石)を床面とするものが多く、硬化が著しい。SA2・3・6は霧島御池軽石混の黄色砂質土、SA13はアカホヤ火山灰や縄文早期堆積層混じりの粘質土による貼り床で、柱穴等は貼り床から掘削される。

遺構各説

SA1 円形プラン。B6Gr.に位置し、SA2・5よりも古い。埋土中遺物のうち、7点を図化掲載した(第24図8～14)。

SA2 円形プラン。B6Gr.に位置し、SA5・6よりも古く、SA1よりも新しい。建物規模的にはSA6に近い。遺物埋土中から出土しており、深鉢や石斧、磨石、蔽石等22点を図化掲載した(第24図15～28、第35図508～515)。

SA3 方形プラン。B6・C6Gr.に位置し、SA4より古い。長軸は東西方向。埋土中遺物の3点を図化した(第24図29～31)。

SA4 方形プラン。B6・C6Gr.に位置し、SA5よりも古く、SA3よりも新しい。建物の長軸は南北方向と考えられる。出土遺物は、小破片のため図化掲載はしていない。

SA5 方形プラン。B6・C6Gr.に位置し、SA6より古くSA4より新しい。遺物は床面出土の1点を図化した(第24図32)。

SA6 円形プラン。B6Gr.に位置し、SA1～5よりも新しい。床面積は約23㎡と最大級である。地床炉は、長径約1m・深さ0.15mで北西側に浅い段状のテラスが付く。底面では厚さ約0.1mの炭化物と焼土層が堆積し、そこからやや浮いた位置で縄文土器深鉢2個体分(第24図33・34)と磨蔽石(第36図522)が出土した。

地床炉内で採取した炭化物について、放射性炭素年代測定を実施した。その結果、1070±20(BP)という値(第10表資料10参照)を得たが、出土土器の年代観とはかなりの開きがある。これは、コンタミネーションや試料採取時の汚染等が原因である可能性が高い。

また、竪穴部床面からは深鉢や蔽石・スクレイパー等がまとまって出土しており(第9・2図参照)、地床炉内と遺構埋土中遺物も含めた31点を図化掲載した(第24図33～55・第47・48図516～523)。

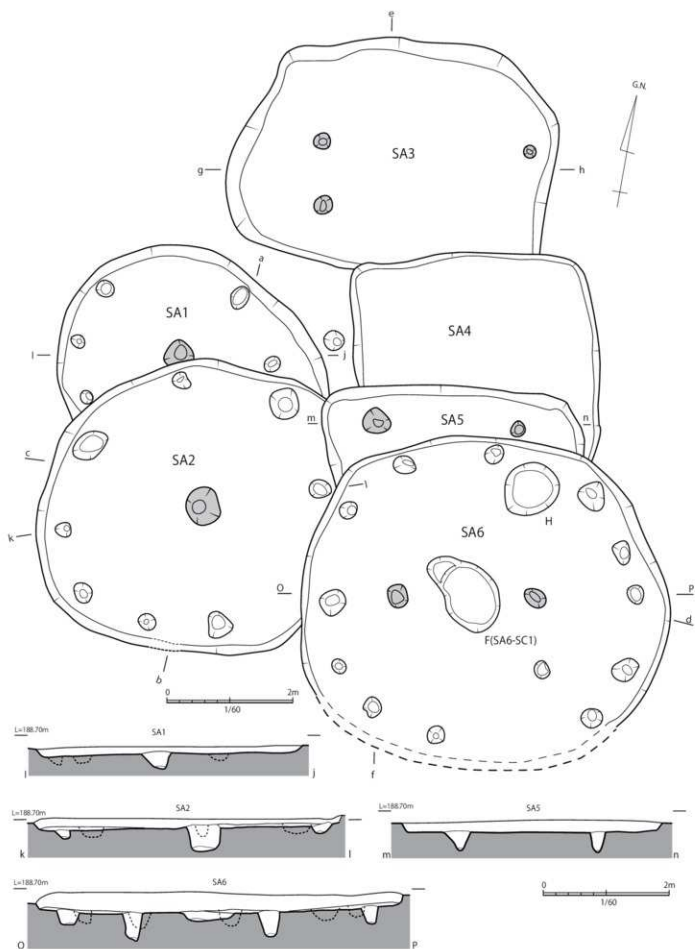
SA7 方形プラン。C6Gr.に位置し、中世の遺構であるSX1に切られる(第10図)。平面形は竪穴部の東西辺が影らむ台形状を呈することから、竪穴建物2軒の切りあいとも考えられるが、土層断面からは確認できない。建物主軸は東に振れる。埋土中の8点を図化掲載した(第26図56～63)。

SA8 方形プラン。C5・6/D5・6Gr.に位置し、竪穴建物跡群のB群とC群の間にある。他遺構と切りあうことなく、付近のSA7やSA3と同様に単独で立地する。

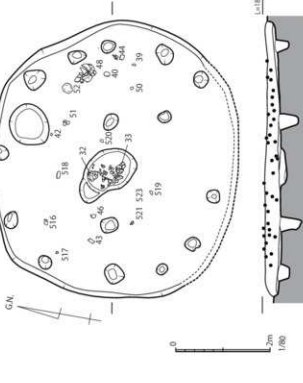
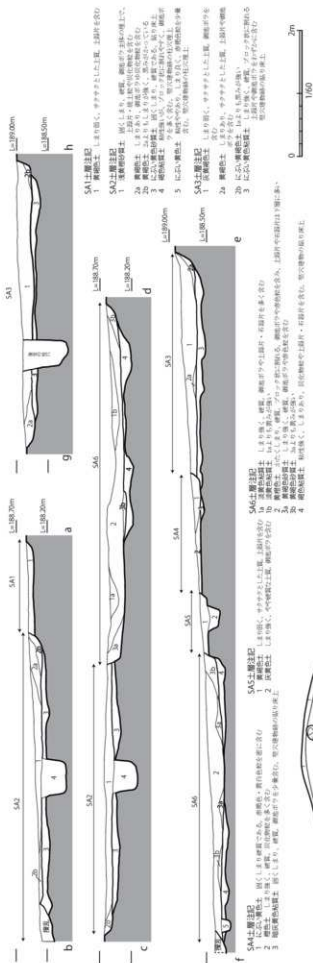
竪穴部の長軸は、等高線に対して直交する方向をとる。平面形は、北東隅部が方形にやや張り出す形状で、竪穴部中央から東側へ偏った位置に地床炉がある。平面形は隅丸方形で一辺約1m、深さ0.15mを測る。床面付近には焼土塊の生成が認められた。遺物は、竪穴部埋土中の6点を図化掲載した(第26図64～69)。



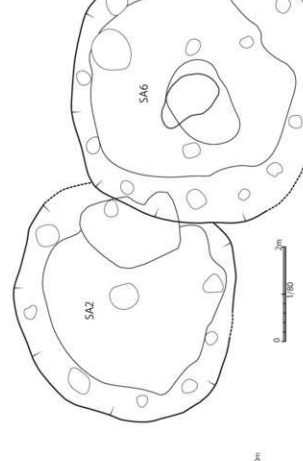
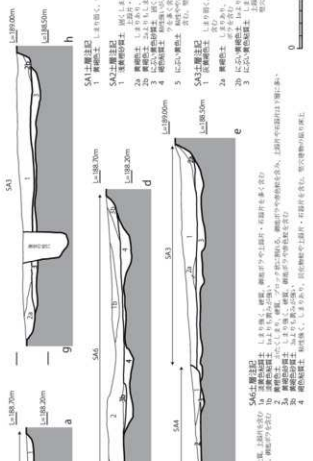
第8図 縄文時代中～後期の遺構分布図(第Ⅲ・Ⅳ層)



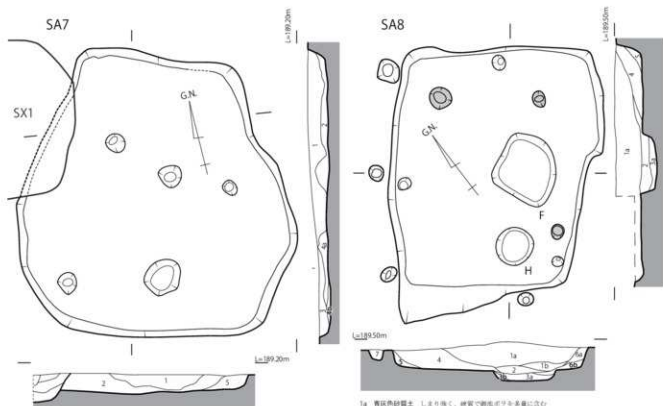
第9-1图 竖穴建物跡実測图(1)



竪穴建物跡床面遺物出土状況図 (SA6)
 ● 遺物出土位置
 ○ 土中遺物の出土位置

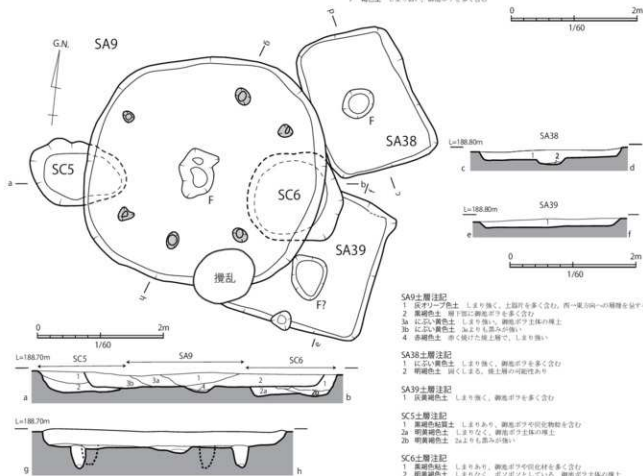


竪穴建物跡床面遺物出土状況図 (SA2・6)



- 1 灰黄褐色砂質土 固くしまり、破瓦、陶器ボタ主体の塊土で、上部片・柱土跡や灰化物跡を含む
- 2 黄褐色砂質土 固くしまり、破瓦、陶器ボタ主体の塊土を含む
- 3 黄褐色砂質土 しまりなく、V層がブロック土を含む
- 4a 赤褐色土 しまりなく、上部片や灰層を含む
- 4b 赤褐色土 しまりなく、上部片や灰層を含む
- 5 黄褐色土 固くしまり、破瓦、陶器ボタを多く含む

- 1a 黄褐色砂質土 しまりなく、破瓦で陶器ボタを多く含む
- 1b 黄褐色砂質土 しまりなく、破瓦を多く含む
- 2 オリーブ褐色粘質土 粘り強く、しまりあり、上部片や柱土跡を含む
- 3a 赤褐色土 しまりなく、灰化物跡や灰層を多く含む
- 3b 赤褐色土 しまりなく、破瓦、陶器ボタを含む
- 4 黄褐色砂質土 しまりなく、V層がブロック土を含む
- 5 赤褐色粘質土 しまりなく、破瓦、V層がブロック土を含む
- 6a 黄褐色砂質土 しまりなく、破瓦、上部片や陶器ボタを含む
- 6b 黄褐色砂質土 しまりなく、破瓦を多く含む
- 7 赤褐色土 しまりなく、陶器ボタを多く含む



- SA9土層注記
- 1 オリーブ色土 しまり強く、上部片を多く含む、西一東方向への層理を含む
 - 2 赤褐色土 粘り強く、陶器ボタを多く含む
 - 3a 粘り強い黄褐色土 しまりなく、陶器ボタ主体の塊土
 - 3b 粘り強い黄褐色土 しまりなく、陶器ボタを多く含む
 - 4 赤褐色土 赤く焼けた層で、しまり強い

- SA38土層注記
- 1 粘り強い黄褐色土 しまり強く、陶器ボタを多く含む
 - 2 赤褐色土 固くしまり、柱土跡の可能性あり

- SA39土層注記
- 1 灰黄褐色土 しまりなく、陶器ボタを多く含む

- SC5土層注記
- 1 黄褐色粘質土 しまりあり、陶器ボタや灰化物跡を含む
 - 2a 赤褐色粘質土 しまりなく、陶器ボタ主体の塊土
 - 2b 明黄褐色土 しまりなく、灰層を含む

- SC6土層注記
- 1 黄褐色粘質土 しまりあり、陶器ボタや灰化物跡を多く含む
 - 2 赤褐色粘質土 しまりなく、灰層が主として、陶器ボタ主体の塊土

第10図 竪穴建物跡実測図(3)

SA9 円形プラン。D4・5Gr. に位置し、SA38・39 と SC5・6 よりは新しい。床面中央には不整形な地床跡があり、長軸 0.8 m 深さ 0.15 m を測る。遺物は遺構検出面にてまとまって出土しており、縄文土器深鉢等 8 点を図化掲載した（第 26 図 70～77）。75 と 77 は SA1 出土土器と接合関係にある。

SA10 円形プラン。B6・7Gr. に位置し、SA2 の平面プランと接する。第 VI 層（アカホヤ火山灰を含む層）を床面とする。遺物は埋土全体から出土しており、縄文土器深鉢やスクレイパー・磨製石斧等 13 点を図化掲載した（第 27 図 78～85・第 48 図 524～528）。81 は、SA2 の貼り床出土のものと接合関係にある。

SA11 方形プラン。B7Gr. に位置し、SA10 に接している。長軸は、等高線に平行する方向である。第 VIII～IX 層（縄文時代早期堆積層）を床面とする。これは、第 V 層堆積以前の風倒木による土層横断が起きた地点に堅穴を掘削したためである。遺物は埋土中から出土した縄文土器深鉢 1 点を図化掲載した（第 27 図 86）。

SA12 方形プラン。B7Gr. に位置し、調査区南端にて単独で所在する。堅穴の長軸は南北方向を指向する。遺物は遺構検出面を中心に出土しており縄文土器深鉢やスクレイパー等 4 点を図化掲載した（第 27 図 87～89・第 48 図 529）。深鉢（87・89）は、SA11 と接合関係にある。

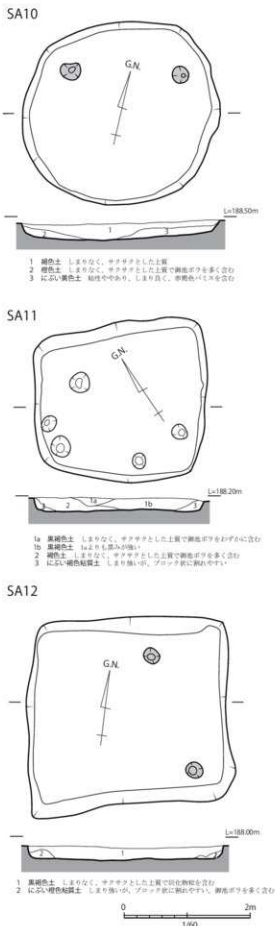
SA13 隅丸方形プラン。F2Gr. に位置し、調査区の北東隅にある。SA14・15 よりは新しい。SA13 周辺は、第 I 層（表土）直下が第 V 層（霧島御池軽石）となり、局所的には第 VI 層が表出している状態である。

堅穴部の中央に 2 本の主柱穴、堅穴内縁にそって補助的柱穴列が巡る建物構造である（SA13-I）。堅穴部の南端には、横長楕円形の堅穴状の掘り込み（SA13-II）があり、その北東隅付近から堅穴外に向かって、階段状のテラス面が 3 段取りつく。

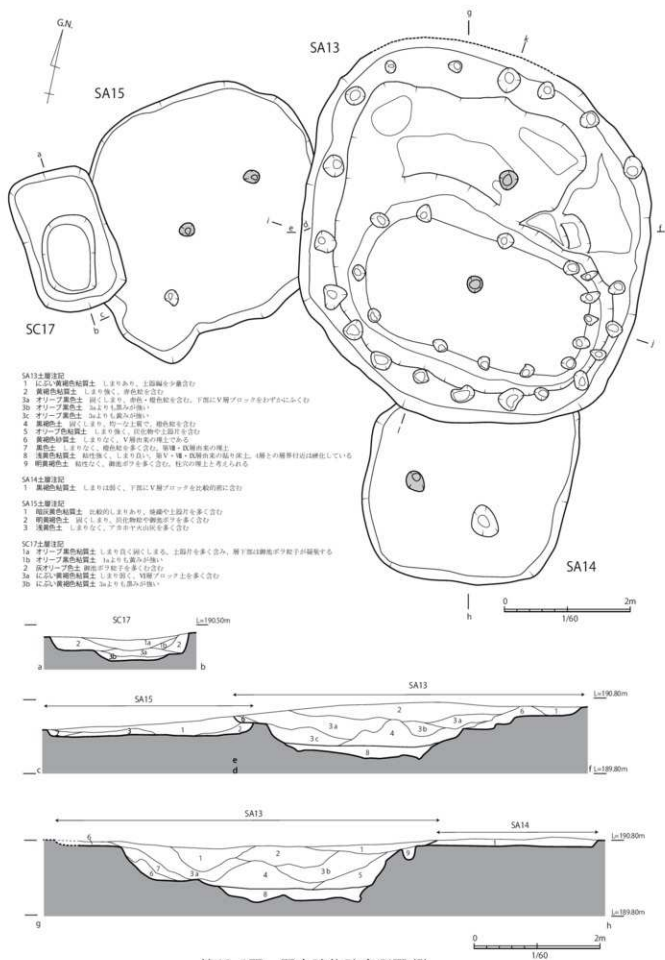
この堅穴状の掘り込みは、長軸 4.2 m・短軸 2.6 m で検出面からの高さ 0.7 m と深く、北側の堅穴床面との比高差は約 0.3 m である。壁面に沿って小さめの柱穴列が巡っている。床面は厚層 0.2～0.4 m の貼り床が施されている。SA13-I と SA13-II における柱穴の配置状況から、全柱穴を同時存在とみるのは建物構造上、困難であるが、堅穴部の土層断面観察では切りあい関係は読み取れない。よって、SA13-I は SA13-II の段階から堅穴部を拡張したものと考えられる（第 12-2 図右）。

遺物は、柱穴埋土のほか堅穴部の埋土中層から下層にかけて散漫な状態で出土した。縄文土器深鉢や磨製石斧転用の藏石等 10 点を図化掲載した（第 27 図 90～98・第 48 図 530）。

SA14 隅丸方形プラン。F2・3Gr. に位置し、SA13 よりは古い。堅穴部の長軸は南北方向を指向する。遺物は、埋土中出土の縄文土器深鉢 1 点を図化掲載した（第 27 図 99）。

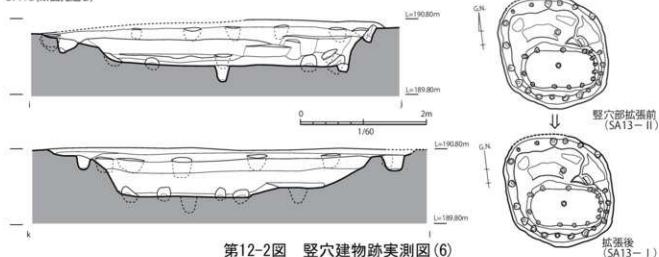


第11図 堅穴建物跡実測図(4)



第12-1図 竪穴建物跡実測図(5)

SA13(断面見直し)



第12-2図 竪穴建物跡実測図(6)

SA15 隅丸方形プラン。E2・F2Gr. に位置し、SA13やSC17より古い。長軸方向は等高線と直交。南東隅部には方形の張り出し部を持つ。遺構検出面から埋土中層にかけて出土した縄文土器深鉢4点を図化掲載した(第27図100～103)。

SA16 方形プラン。E2Gr. に位置し、SA17に接する。長軸は当等高線に直交する。遺物は遺構検出面から埋土中層を中心に出土しており、縄文土器深鉢や磨製石斧8点を図化掲載した(第28図104～110・第48図531)。

SA17 楕円形プラン。E2・3Gr. に位置し、SA18と切りあう。竪穴部の外縁には深さ0.15m前後の小穴(ピット)列並び、南縁側には不整な方形状の張り出し部がある。竪穴床面の中央付近には長軸2.6m・短軸2.1m、深さ0.1mの浅い楕円形の掘り込みがあり、掘りかたの肩部に沿って深さ0.1m程度の小穴列が巡る。遺物は遺構検出面から埋土中層から数多く出土し、縄文土器深鉢や打製石斧や磨製石等38点を図化掲載した(第28・29図111～143・第49図532～536)。

SA18 楕円形プラン。E3Gr. に位置し、SA17と切りあう。竪穴床面の中央付近には長軸約2mのごく浅い円形の掘り込みがあり、その肩部に沿って深さ約0.3mの主柱穴列が巡る。遺物はSA17同様遺構検出面から埋土中層にかけてまとも出土しており、縄文土器深鉢等8点を図化掲載した(第30図144～151)。

SA19 円形プラン。F3Gr. に位置し、全体の3/4は調査区外にある。埋土中層から床面付近にかけて出土した縄文土器深鉢等5点を図化掲載した(第30図152～156・第49図537)。

SA20 円形プラン。E4Gr. に位置する。北側の約1/2は削平を受けている。SA21より新しい。検出面から床面までの深さは0.5mと他の竪穴建物跡よりは深みである。埋土中層物の縄文土器深鉢5点を図化掲載した(第30図157～161)。

SA21 楕円形プラン。E4Gr. に位置し、SA20・26やSC28・27より古い。検出面から床面までの深さは0.5mと他の竪穴建物跡よりは深い。床面中央には円形地床炉(長軸0.7m・深さ0.15m)がある。炉内の炭化材について、縄文土器深鉢1点を図化掲載した(第30図162)。

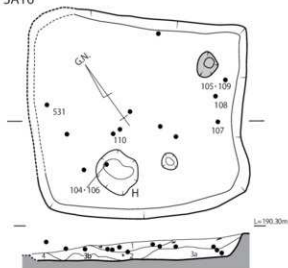
SA22 円形プラン。D4・E4Gr. に位置し、SC41より古い。SA23とは接する関係にある。床面中央に隅丸方形の地床炉(長軸1.3m・深さ0.1m)がある。炉内の炭化材について、樹種同定と放射性炭素年代測定を行った結果、タイミンタチバナ・3875±20(BP)という結果が得られた(第9表試料1・第10表試料11参照)。遺構検出面付近にてまとも出土した縄文土器深鉢10点を図化掲載した(第30・31図163～172)。163はSA23、171・172はSA36の出土土器と接合関係にある。

SA23 方形プラン。E4Gr. に位置し、SA30・SC28・29より古く、SA22・36とは接する関係にある。長軸は南北方向を指向する。床面中央よりやや東側の位置に地床炉(長軸1.5m・深さ0.1m)がある。炉内の炭化材について、樹種同定と放射性炭素年代測定を行った結果、ハイノキ属・3865±20(BP)という値が得られた(第9表試料2・第10表試料12参照)。遺物は遺構埋土および地床炉内から出土し、縄文土器深鉢等4点を図化掲載した(第31図173～176)。176はSA31・32の出土土器と接合関係にある。

SA24 方形プラン。F4Gr. に位置し、SA25・33より古い。柱穴や地床炉等は確認されなかった。埋土中層より縄文土器深鉢や剥片が少量出土したが、小破片のため未図化した。

SA25 隅丸三角形に近い円形プラン。E4・F4Gr. に位置し、SA24・26とSC24よりは新しく、SA33・SC24・SI10よりは古い。主柱穴の間に地床炉がある。遺物は、地床炉周辺の床面よりやや浮いた位置にて数点が出土した。このうち縄文土器深鉢等6点を図化掲載した(第31図177～182)。

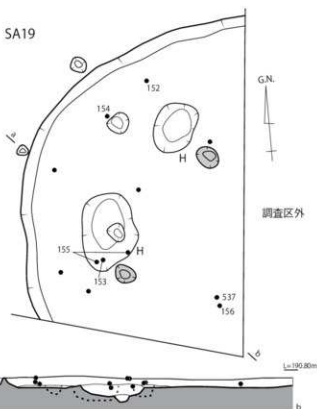
SA16



- 1 黄褐色土 しまりあり、V層がフロッツ土や上部を多く含む
- 2 明黄褐色土 やや固くしまる、V層がフロッツ土や上部を多く含む
- 3a オリーブ褐色粘質土 しまり強く、顕微鏡を多く含む
- 3b オリーブ褐色粘質土 ぬよもろみが多い
- 4 黄土色 ややしまりあり、顕微鏡を多く含む



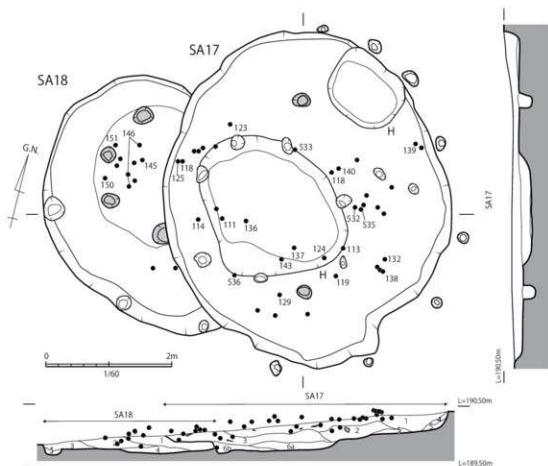
SA19



調査区外



SA18



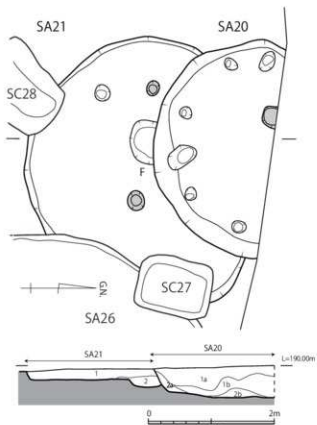
SA17土層注記

- 1 緑褐色土 しまりあり、顕微鏡を多く含む、上部や粗粒、石灰物も含む
- 2 暗黄褐色土 固くしまり、V層がフロッツ土や上部を多く含む
- 3 黄褐色土 顕微鏡が少なく含む、上部や粗粒も含む
- 4 明黄褐色土 石灰物や粗粒の層(V層)の積層土
- 5 オリーブ褐色土 しまりあり、顕微鏡を多く含む
- 6a 褐色砂質土 V層由来の単層土、粘土質や石灰物を多く含む
- 6b 褐色砂質土 ぬよもろみが多い
- 7 暗褐色土 しまり弱く、顕微鏡を多く含む

SA18土層注記

- 1 黄褐色土 固くしまり、顕微鏡や石灰物などを多く含む
- 2 灰黄色土 顕微鏡がやや粗粒を多く含む
- 3 オリーブ褐色土 顕微鏡が少なく含む
- 4 黄土色 顕微鏡が少なく含む、粗粒や石灰物や粗粒土の構成あり
- 5 緑褐色土 しまり弱く、顕微鏡を多く含む

第13図 竪穴建物跡実測図(7)

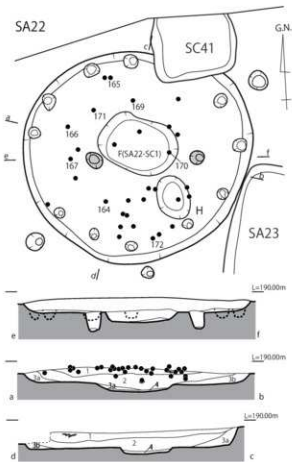


SA20土層注記

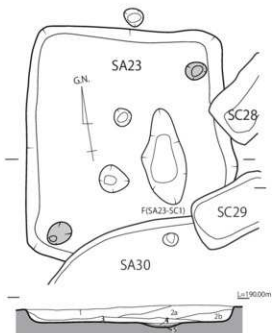
- 1a 黒褐色粘質土 しまり強く、硬質、断面ボタを多く含む
- 1b 黒褐色粘質土 しまりも黒みが強い
- 2a オリーブ褐色粘質土 しまり強く、硬質、断面ボタや土層片を含む
- 2b オリーブ褐色粘質土 しまりも黒みが強い

SA21土層注記

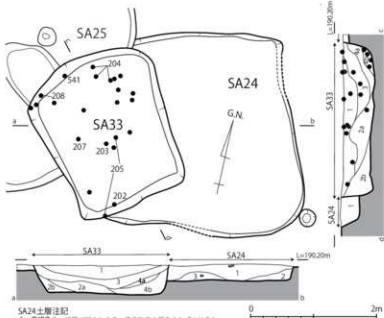
- 1 黒褐色粘質土 しまり強く、ヤカヤカとした土質、土層片や断面ボタをわずかに含む
- 2 黒褐色 粘質中や中あり、しまり強く、断面に凹凸物を含む



- 1 黒褐色粘質土 しまり強く、ヤカヤカとした土質、断面ボタや土層片を多く含む
- 2 オリーブ褐色土 しまり強く、断面フロック上を多く含む
- 3a 黒褐色粘質土 しまり強く、断面に凹凸物を含む
- 3b 明黄褐色土 しまりも黒みが強い
- 4 明黄褐色土 しまり強く、フロック状に割れやすい、断面層の可能性あり



- 1 黄褐色土 固くしまり、硬質、断面ボタや土層片を含む
- 2a オリーブ褐色土 しまり強く、断面に凹凸物や断面ボタをわずかに含む
- 2b オリーブ褐色土 しまりも黒みが強い
- 3 オリーブ褐色土 しまり強く、V層フロック上を多く含む
- 4 黄褐色土 しまり強く、凹凸物や断面ボタを多く含む
- 5 赤褐色土 しまり強く、断面層の可能性あり



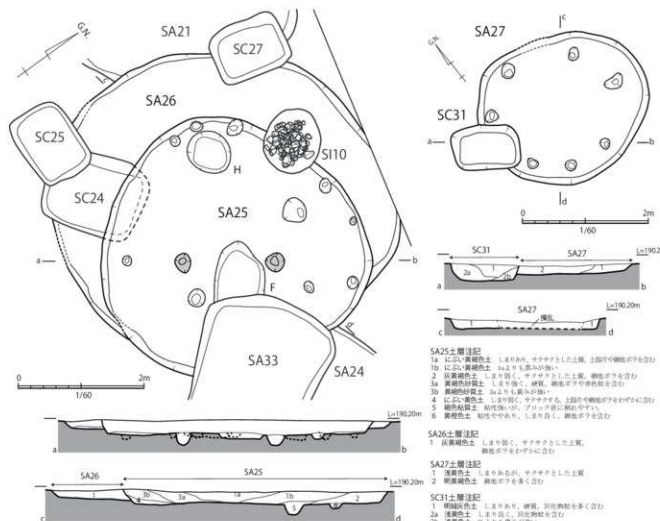
SA24土層注記

- 1 黄褐色土 硬質で固くしまる、断面に凹凸物や土層片をわずかに含む
- 2 黄褐色土 硬質で固くしまる、断面に凹凸物や土層片をわずかに含む
- 3 明黄褐色粘質土 硬質で固くしまる、断面に凹凸物や土層片を含む

SA33土層注記

- 1 黄褐色粘質土 しまり強く、断面に凹凸物、断面フロック上を多く含む
- 2a 暗黄褐色粘質土 しまり強く、断面フロック上を多く含む
- 2b 暗黄褐色粘質土 しまりも黒みが強い、土層片を含む
- 3 オリーブ褐色土 粘質中や中あり、しまり強く、断面に凹凸物を含む
- 4a 黄褐色粘質土 しまり強く、断面に凹凸物、断面フロック上を含む
- 4b 黄褐色粘質土 しまりも黒みが強い、土層片を含む

第14図 竅穴建物跡実測図(8)



第15図 竪穴建物跡実測図(9)

SA26 楕円形プラン。E4・F4Gr. に位置し、SA21よりは新しく、SA25とSC24・25・27やSI10よりは古い。床面の大半を他遺構により掘削されているため、主柱穴等の有無や構造は不明である。埋土中出土の縄文土器深鉢2点を図化掲載した(第32図183・184)。

SA27 楕円形プラン。E4Gr. に位置し、SA25・30の間にある。SC31は竪穴壁面の立ち上がりを切り込む。床面の中央部分は樹根により大きく攪乱されている。縄文土器深鉢片が埋土中より出土したが、小破片のため図化に堪えなかった。

SA28 円形プラン。D4・5Gr. に位置し、SA29・30・36・37よりも新しい。床面中央に地床炉(長軸0.9m・深さ0.15~0.2m)、その東側に屋内土坑(長軸1.1m・深さ0.3m)がある。埋土中より出土した縄文土器深鉢片を2点図化掲載した(第32図185・186)。

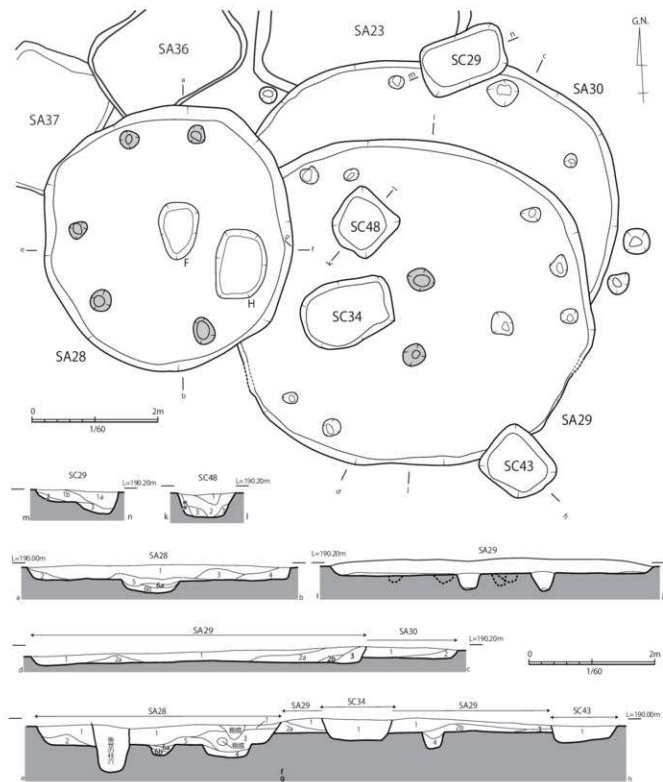
SA29 隅丸方形に近い楕円形プラン。E4・5Gr. に位置し、SA30よりは新しく、SA28とSC34・43・48よりは古い。遺構検出面付近から埋土中層の間から出土した縄文土器深鉢等を12点図化掲載した(第32図187~196・第49図538・539)。

SA30 隅丸方形に近い楕円形プラン。E4・5Gr. に位置し、SA23よりは新しく、SA28・29やSC29よりは古い。SA29と同規模と考えられる。遺物は遺構検出面から埋土中層にて出土し、縄文土器深鉢を1点図化掲載した(第32図197)。

SA31 円形プラン。E5Gr. に位置し、他遺構との切りあいのない竪穴建物である。床面中央には長軸2.2mのごく浅い掘り込みがあり、その中に主柱穴が2本収まる。埋土中出土の縄文土器深鉢片を2点図化掲載した(第32図198・199)。

SA32 隅丸六角形に近い円形プラン。E5Gr. に位置し、SC36・37・43よりは古い。付近にはSA29・31が近接している。埋土中出土の縄文土器深鉢片やスクレイパー等を3点図化掲載した(第32図200・201・第49図540)。

SA33 方形プラン。F4Gr. に位置し、SA24・25よりは新しい。検出面からの深さは0.45mと深めである。底面は平坦ではなく、やや起伏がある。遺物は遺構検出面から底面付近にかけて出土したが、遺構内の土砂堆積とともに混入したものである。そのうち、縄文土器深鉢や使用痕刺片等8点を図化掲載した(第32図202~208・第49図541)。



SC29土層注記

- 1a 青灰色砂質土 しまりあり、硬質である。跡部が少なく含む
- 1b 青灰色砂質土 6aよりも黄土が強い
- 2 に近い黄褐色土 粘性や中あり、しまり強く、赤褐色粒を少量含む
- 3 オリーブ灰土 しまり強く硬質、跡部が少なく含む

SC48土層注記

- 1 青灰色砂質土 しまりあり、硬質である。跡部が少なく含む
- 2 褐色土 粘性が少なく含む
- 3 に近い黄褐色土 粘性や中あり、しまり強く、赤褐色粒を少量含む

SA30土層注記

- 1 黄褐色土 しまり弱く、中々ヤカとした土質、上部片を含む
- 2 褐色黄褐色土 弱くしまり、硬質、跡部が少なく含む

SC34土層注記

- T オリーブ灰色砂質土 しまり強く硬質で、ブロック状に割れやすい、石灰化粒を多く含む

SC43土層注記

- T 青灰色砂質土 しまり強く硬質で、ブロック状に割れやすい、赤褐色粒を多く含む

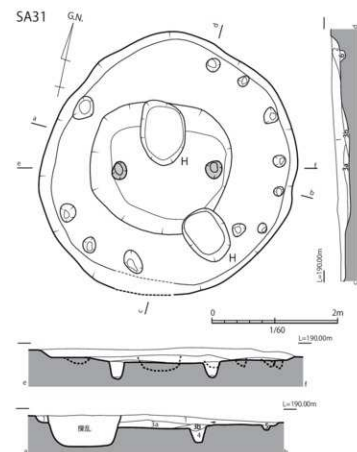
SA28土層注記

- 1 黄褐色土 しまり弱く、中々ヤカとした土質、上部片を含む
- 2 褐色黄褐色土 弱くしまり、硬質、跡部が少なく含む
- 3 に近い黄褐色土 しまり強く、硬質、跡部が少なく含む
- 4 淡黄色土 しまり弱く、跡部が中程度に含む
- 5 黄褐色土 しまり弱く、中々ヤカとした土質、上部片を含む
- 6a に近い赤褐色土 しまり弱く、跡部が中程度に含む
- 6b に近い赤褐色土 6aよりも黄土が強く、黄土層を含む

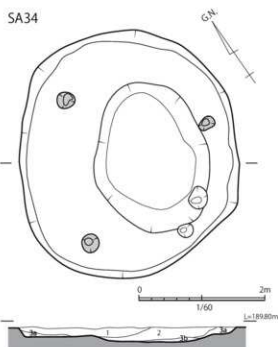
SA29土層注記

- 1 黄褐色土 しまり弱く、中々ヤカとした土質、上部片を含む
- 2a に近い黄褐色土 弱くしまり、硬質、跡部が少なく含む
- 2b に近い黄褐色土 2aよりも黄土が強い
- 3 褐色黄褐色土 弱くしまり、硬質、跡部が少なく含む
- 4 褐色土 しまり強く、硬質、跡部が中程度に含む

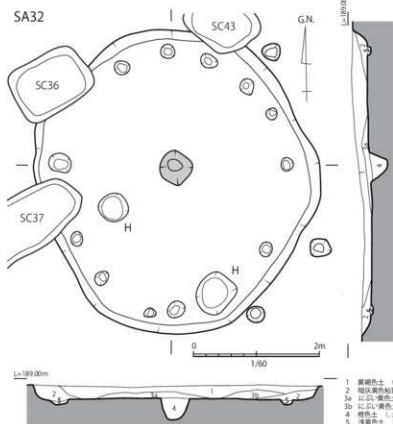
第16図 竪穴建物跡実測図(10)



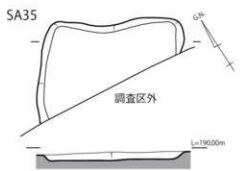
- 1 黄褐色土 しまり強く、調査ボヤを多く含む
- 2 赤色土 中層アロップ上層を多く含む
- 3a 比色黄褐色土 しまり強く、粘性や中あり、調査ボヤや土器片をわずかに含む
- 3b 暗褐色土 しまり強く、調査ボヤや土器片をわずかに含む
- 4 暗褐色土 しまり強く、調査ボヤを多く含む
- 5 オリーブ褐色土 しまり強く、中層アロップ上層を含む
- 6 暗褐色土 しまり強く、調査ボヤや土器片を多く含む
- 7 比色黄褐色土 しまり強く、調査ボヤを多く含む



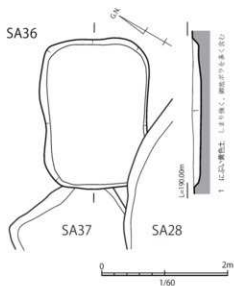
- 1 黄褐色土 しまり強く、調査ボヤを多く含む
- 2 比色黄褐色土 しまり強く、調査ボヤや土器片を多く含む
- 3a 暗褐色土 しまり強く、粘性や中あり、調査ボヤや土器片をわずかに含む
- 3b 暗褐色土 しまり強く、調査ボヤや土器片を多く含む



- 1 黄褐色土 しまり強く、中層アロップ上層、土器片を含む
- 2 暗褐色粘質土 粘性強く、しまり強く、調査ボヤを少量含む
- 3a 比色黄褐色土 しまり強く、粘性や中あり、調査ボヤを含む
- 3b 比色黄褐色土 しまり強く、粘性や中あり
- 4 褐色土 しまり強く、調査ボヤや土器片を多く含む
- 5 黄褐色土 しまり強く、中層アロップ上層を多く含む



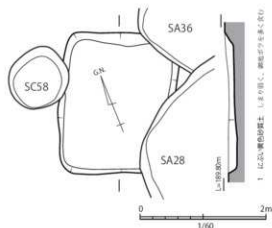
- 1 黄褐色粘質土 しまり強く、本堂に含む、調査ボヤを多く含む



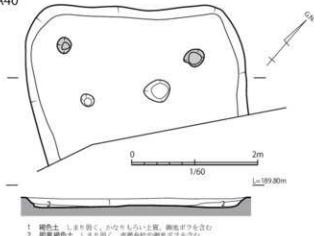
- 1 比色黄褐色土 しまり強く、調査ボヤを多く含む

第17図 竪穴建物跡実測図(11)

SA37



SA40



第18図 竪穴建物跡実測図(12)

SA34 隅丸方形に近い円形プラン。D5Gr.に位置し、他遺構との切りあいのない単独の竪穴建物。床面中央から東に偏した箇所には長軸2.4mのごく浅い掘り込みがある。支柱穴の可能性のある柱穴は、3箇所(直径0.35m・深さが0.3~0.4m)ある。その位置関係は三角形状となることから、テント状構造の上屋が想定される。

埋土から縄文土器深鉢片や磨製石斧、使用底剥片等が出土し、4点を図化掲載した(第33図209・第49図542~544)。

SA35 方形プラン。E3Gr.に位置し、南半部は里道にて失われている。遺構検出面付近から縄文土器深鉢片が出土しており、このうち6点を図化掲載した(第33図210~215)。

SA36 方形プラン。D4Gr.に位置し、SA37よりは新しく、SA28より古い。SA37~39と同様に床面積は約3㎡台と狭いことから、土坑とも考えられるが、他の土坑形状や底面積と比較した結果、竪穴建物跡として報告する。

柱穴や地床炉はなく、遺構検出面付近から出土した縄文土器深鉢等2点を図化掲載した(第33図216・第49図545)。

SA37 方形プラン。D4Gr.に位置し、SA28・36・58より古い。しく、SA28より古い。遺構検出面付近から出土した縄文土器深鉢片1点を図化掲載した(第33図217)。

SA38 方形プラン。D4Gr.に位置し、SA9より古い。床面中央に地床炉がある。遺構検出面付近から出土した縄文土器深鉢片等3点を図化掲載した(第33図218~220)。

SA39 方形プラン。D4Gr.に位置し、SA9・SC6より古い。床面中央に土坑があり、地床炉の可能性がある。埋土中の遺物は小破片のため未図化である。

SA40 方形プラン。E5Gr.に位置し、東半部は調査区外である。埋土中の遺物は小破片のため未図化である。

b) 土坑(第8・19~21図)

土坑として検出された34基(SC3~6・8・11・12・17・21・22・24・25・27~31・34・36~38・40~43・46・48~50・52・53・57・58・60)の構造上の特徴等をまとめたうえで、それぞれの土坑について概要を記載する。各遺構の法量や出土遺物の内容については遺構一覧表(第6表)を参照されたい。

土坑の分布 土坑は竪穴建物群の近くか、竪穴建物群と切りあう位置関係で分布している。特に、標高189.60~190.00mの範囲では群集している状況にある。

遺構埋土 竪穴建物跡と同様に個々の土坑の埋土には違いがみられた。⑦黄褐色で硬質(SC3・8・11・12・40)、⑧青灰色ないし青みの強い黄褐色で硬質かつ炭化材(物)を多く含む(SC24・29・31・34・36・37・43・46・48・60)、⑨黒味の強い褐色で炭化材(物)を多く含む(SC4~6・25・40・49・52・53・57)、⑩灰色がかった黄褐色(SC17・27・30・34・41・42・50)、⑪黄色で粘性強い(SC21・22)等がある。⑫~⑭は露島御池経石(第V層)、⑮は鬼界アカホヤ火尻(第VI層)やローム層由来の埋土である。

遺物出土状況 遺物の出土状態は、(i)出土なし、(ii)小破片が散漫、(iii)ある程度の破片が少量、のパターンがある。(iii)の場合、遺構検出面近くから埋土全体にわたって縄文土器深鉢底部が立位の状態でも出土した事例もある。平面形 土坑平面形は、方形と円形・楕円形に大別され、方形プランが全体基数の7割を占めている。また、方形プランは隅角がある程度整うが、円形・楕円形の場合は不整形である。

平面積 最小で0.2㎡台(SC8・50)、最大で2.3㎡(SC17)であり、概ね0.7~0.8m規模のものが基数的に多い。円形プランの底面積は0.2㎡~1㎡台までである。

主軸方向 方形・楕円形プランの長軸方向は東西方向、等高線に平行および直交・斜交(座標北から東へ振る)に大別される。前述の埋土分類とは、⑦: 等高線に直交・平行、⑧: 等高線に斜交、⑨: 東西方向、⑩: 東西方向・等高線に平行/斜交、⑪: 等高線に斜交、といった対応関係にある。

遺構各説

SC3 長方形プラン。D5Gr. に位置し、付近に SA8 がある。埋土中出土遺物のうち、縄文土器深鉢と石鏃の3点図化掲載した(第33図221・222・第49図546)。

SC4 円形プラン。D4Gr. に位置し、同規模のSC57・58と群集する。出土遺物は、小破片のため未図化である。

SC5 不整楕円形プラン。D5Gr. に位置し、SA9より古い。出土遺物には縄文土器深鉢片等があるが、小破片である。

SC6 円形プラン。D5Gr. に位置し、SA9より古い。SC5・SC6は同系統の埋土中であり、近接した位置にあることから、対になる可能性がある。

埋土中からは、炭化材(幅0.15×長さ0.3m大)が出土した。この炭化材について、樹種同定と放射性炭素年代測定を行った結果、シイ属・4075±25(BP)という値が得られた(第9表試料3・第10表試料14参照)。埋土中の遺物は縄文土器深鉢片があるが、小破片である。

SC8 円形プラン。B5Gr. に位置する。埋土中の遺物のうち、縄文土器深鉢を図化掲載した(第33図223・224)。

SC11 隅丸長方形プラン。C6Gr. に位置し、SA7とSA8の間にある。埋土中の遺物は、小破片のため未図化である。

SC12 隅丸長方形プラン。C7Gr. に位置し、SA8の南側にある。出土遺物は、小破片のため未図化である。

SC17 隅丸長方形プラン。E2Gr. に位置し、SA15～17の間にある。SA15よりは新しい。遺構検出面では、深鉢底部(第34図233)が立位で出土した。遺構埋土の上層では縄文土器深鉢片が親指大の炭化材数点と一緒にまとまって出土した。炭化材については、樹種同定と放射性炭素年代測定を行った結果、ヒサカキ属・3875±25(BP)という値が得られた(第9表試料4・第10表試料15参照)。図化掲載した遺物は縄文土器深鉢12点である(第33・34図225～236)。

SC21 方形プラン。F4Gr. に位置し、SC22と近接する。底面より縄文土器深鉢片(第34図237・238)が出土した。

SC22 長方形プラン。F4Gr. に位置し、SC21と近接する。出土遺物は小破片のため未図化である。

SC24 長方形プラン。E4Gr. に位置し、SA25・26より新しくSC25より古い。遺構検出面付近では、縄文土器深鉢の底部が立位状態で出土した(第34図239・写真図版9)。埋土中には微細な炭化物が多く含まれており、樹種同定と放射性炭素年代測定を行った結果、アワビキ属・4120±25(BP)という値が得られた(第9表試料5・第10表試料16参照)。

SC25 長方形プラン。E4Gr. に位置し、SA26やSC24よりは新しい。縄文土器深鉢片(第34図240)を図化掲載した。

SC27 長方形プラン。E4Gr. に位置し、SA21・26よりは新しい。出土遺物は、小破片のため未図化である。

SC28 長方形プラン。E4Gr. に位置し、SA21・23よりは新しい。底面構造は、一見して二段掘り状(写真図版9)であるが、底面や壁面の立ち上がりを粗い削削で終えているためである。出土遺物は、小破片のため未図化である。

SC29 長方形プラン。E4Gr. に位置し、SA23・30よりは新しい。出土遺物は、小破片のため未図化である。

SC30 長方形プラン。D4Gr. に位置し、SA22に接する。出土遺物は、小破片のため未図化である。

SC31 隅丸方形プラン。E4Gr. に位置し、SA27より新しい。埋土中出土遺物のうち、1点を図化掲載した(第34図241)。

SC34 隅丸長方形プラン。E4Gr. に位置し、SA29よりも新しい。埋土中出土遺物のうち、縄文土器深鉢片(第34図242～243)を図化掲載した。

SC36 長方形プラン。E5Gr. に位置し、SA32よりも新しい。出土遺物は、小破片のため未図化である。

SC37 隅丸長方形プラン。E5Gr. に位置し、SA32よりも新しい。出土遺物は、小破片のため未図化である。

SC38 長方形プラン。E5Gr. に位置し、SA32とSA42の間にある。埋土中の遺物は、小破片のため未図化である。

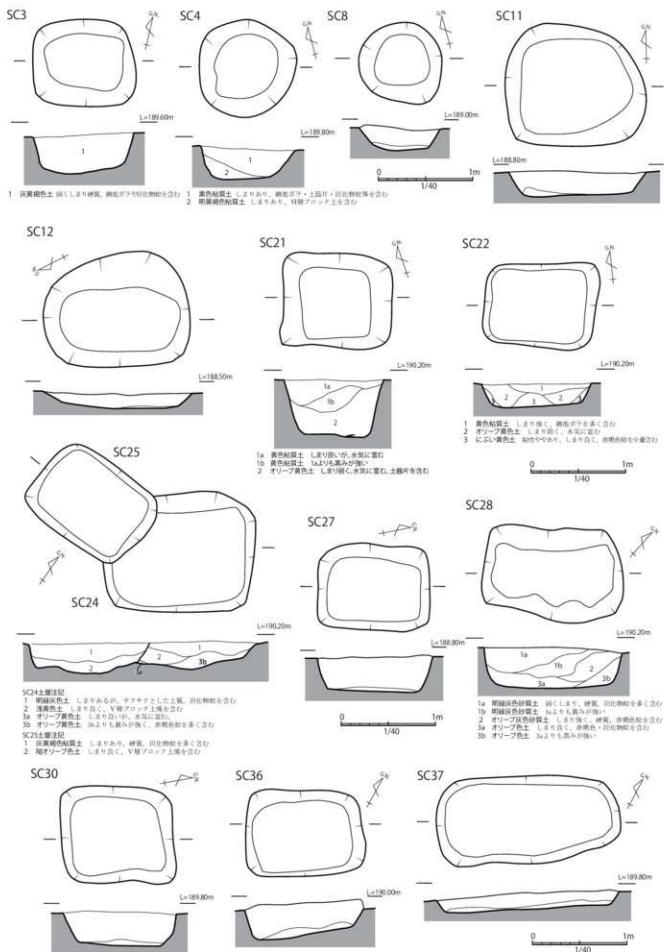
SC40 隅丸長方形プラン。E6Gr. に位置し、北側にSI4がある。第V層堆積以前の風倒木のため、土坑底面の掘り込みは第Ⅷ・Ⅸ層まで及んでいる。埋土中の遺物は、小破片のため未図化である。

SC41 方形プラン。E4Gr. に位置し、SA22より新しい。出土遺物は、小破片のため未図化である。

SC42 方形プラン。E4Gr. に位置し、SA20・21に接する。埋土中の遺物は、小破片のため未図化である。

SC43 長方形プラン。E5Gr. に位置し、SA29・32より新しい。埋土中の遺物は、小破片のため未図化である。

SC46 長方形プラン。D5Gr. に位置し、SA34とSA39の間にある。埋土中の遺物は、小破片のため未図化である。



第19図 土坑実測図

SC48 方形プラン。E4Gr.に位置し、SA29より新しい。SA15よりは新しい。遺構内では、炭化材や微細な炭化物粒がレンズ状に堆積していた。この炭化材の一つを対象に、樹種同定と放射性炭素年代測定を行った結果、コナラ属アカガシ亜属・3915 ± 25 (BP) という値が得られた(第9表試料6・第10表試料17参照)。また、埋土中の遺物のうち、縄文土器深鉢1点を図化掲載した(第34図244)。

SC49 不整楕円形プラン。F3Gr.に位置し、SA19に接する。より新しい。遺構埋土全体に炭化材や微細な炭化物粒がまばらに堆積していた。炭化材については、樹種同定と放射性炭素年代測定を行った結果、コナラ属アカガシ亜属・3920 ± 25 (BP) という値が得られた(第9表試料7・第10表試料18)。埋土中の遺物は、小破片のため未図化である。

SC50 不整長方形プラン。E6Gr.に位置し、付近にはSA40がある。埋土中の遺物は、小破片のため未図化である。

SC52 不整長方形プラン。F3Gr.に位置し、東側にSC54がある。遺構南端面から埋土中層にかけて、縄文土器深鉢片等がまとまって出土した。このうち、4点を図化掲載した(第31図285~288)。

SC53 不整形プラン。E3Gr.に位置し、SA18とSA35の間にある。遺構検出面から底面までの掘り込みの深さは浅い。遺構内全体から縄文土器深鉢片や石鏝等が出土した。このうち、3点を図化掲載した(第34図249・250・第49図547)。

SC57 不整楕円形プラン。D4Gr.に位置し、SC4やSC58と群集する。埋土中の遺物は、小破片のため未図化である。

SC58 不整形プラン。D4Gr.に位置し、SC4やSC57と群集する。埋土中の遺物は、小破片のため未図化である。

SC60 楕円形プラン。D5Gr.に位置し、SA28とSA39の間にある。埋土中の遺物のうち、縄文土器深鉢1点を図化掲載した(第34図251)。

c) 陥し穴状遺構(第8・20・21図)

検出面から底面までの深さが約1m以上と深いもの、底面に小穴(逆茂木痕)がある土坑を、陥し穴状遺構とする。陥し穴状遺構は4基(SC54・55・84・95)で、構造上の特徴等をまとめたうえで、個別遺構について概要を記載する。

遺構の法量や出土遺物の内容については、遺構一覧表(第6表)を参照されたい。

分布 SC54・55・95はE2・3/F3Gr.にあり、標高190.40~189.20mの等高線が大きく曲がる凹地形(地形変換線)に沿って分布する。遺構の主軸方向は等高線に対して斜交する。

SC84は、B4Gr.に位置し、北側は開折谷の崖面に近い。遺構の主軸方向は等高線に対して直交する。

遺構埋土 陥し穴状遺構の埋土は、霧島御池軽石に加えてアカホヤ火山灰を多く含むのが特徴である。SC84とSC95は、第四層ないし第五層から掘り込まれる(写真図版10参照)。SC54とSC55は黒味の強い黄褐色土が主体であることから、第三層面から掘り込まれたものと考えられる。

遺構各説

SC54 F3Gr.に位置し、東側にSA19、西側にSC52がある。検出面からの深さは1.17mで、断面形は逆台形状である。縄文土器深鉢の小破片と敲石が出土したが、未図化である。なお、埋土のフローテーションにより採取した炭化材について樹種同定と放射性炭素年代測定を行った結果、コナラ属アカガシ亜属で、3900 ± 20 (BP) という値が得られた(第9表試料8、第10表試料19参照)。

SC55 E3Gr.に位置し、北側にSC55がある。検出面からの深さは1.25mで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物には縄文土器深鉢と剥片等があるが、未図化である。

SC84 B4Gr.に位置し、南側は小穴群が広がる。検出面からの深さは1.22mで、底面には小穴4基(直径・深さ0.1m)があり、むづゆる逆茂木痕とみられる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はない。

SC95 E2Gr.に位置し、南側にSC55がある。小穴群が広がる。検出面からの深さは1.56mで、陥し穴状遺構4基の中で最も深い。遺物の出土はない。

d) 集石遺構(第8・21図)

集石遺構は2基(S14・10)検出された。2基ともに掘り込み(直径0.6~0.7m、深さ0.2m)を有するタイプで、拳大の焼礫が充填されている。遺物の出土はなく、配石もない。焼礫は砂岩や頁岩等で、遺跡周辺の崖面や河川にて採取可能な石材である。なお、遺構の法量等については、遺構一覧表(第6表)を参照されたい。

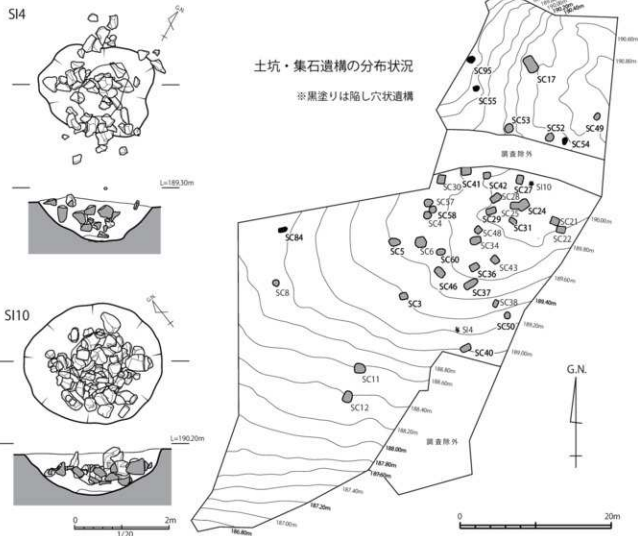
遺構各説

S14 D6Gr.に位置する。周辺には近接した遺構はなく、散礫も見当たらない。不整形の掘り込みの断面形は緩く開くVの字形である。焼礫はさほど密ではない。

S110 E4Gr.に位置し、SA25・26よりは新しい。比較的整った円形の掘り込みで、断面形は半球形である。掘り込みの中位付近では焼礫が集中し、その下層は炭化物を多く含む。

e) 小穴(ピット)(第8図)

堅穴建物跡に伴わない小穴は、調査区全体に分布する。そのうち、円形に巡る小穴列(B5/F5Gr.)や方形に巡る小穴列(E2Gr./C7・D7Gr.)等、規則的な配置(配列)を類推させるものが認められる。これらは、堅穴建物跡の主柱穴ないし掘立柱建物跡(平地式建物跡)の可能性が考えられるが、現地調査においては確実性のある根拠は得られなかった。



第21図 集石遺構実測図・土坑等分布図

(4) 遺物

a) 土器の分類

第Ⅲ層と第Ⅳ層および遺構から出土した縄文土器（深鉢）について、既存の土器型式（型式概念）との対応関係を基いて1類～15類に分類した。1～15類に対応する底部資料については、一括して16類として分類整理し、図化掲載した。個々の掲載遺物の分類名は、第7表を参照されたい。

なお、本項で記した分類は、既存の土器型式における分類基準とは必ずしも合致しない場合がある。

1類（春日式土器）

春日式土器の範疇のうち、その後半段階にあたる森木ヶ迫・南宮島段階（東1989ほか）に相当する一群とした。

口縁部形状は直線的に開くもの、緩く外反するものや内湾口縁のものがある。色調は茶褐色や淡い褐色で、器壁の厚みは、5類等と比べて薄手である。内外面の器面調整は、専ら横方向主体の貝殻条痕文であるが、肋の間隔が広い二枚貝を施文具とし、比較的丁寧である。

以下、突帯や沈線文等の有無から5つに細分した。

i類…直線的に開く口縁部や緩やかに外反する口縁部に突帯（刻目・刺突・押しき等）を付加するもの。

i-1類…口縁部外面に鋸歯状ないし複雑に組み合わせた突帯を貼付するもの（252・256・259等）。

i-2類…口縁部外面に三叉状の突帯を付加（258）。

i-3類…口縁端部に突帯を内傾させて貼り付け、さらに三角形や鋸歯状の突帯をその上に複数箇所貼付するもの（8・15・33・等）。

ii類…内湾口縁ないし口縁端部がわずかに内湾する口縁部に突帯（刻目等）や刺突文・沈線文を施すもの。

ii-1類…内湾口縁に1～2条の横位の刻目突帯を貼付するもの（261・262等）。

ii-2類…わずかに内湾する口縁部（口縁端部が内面側に屈曲）に刺突列点文・波状文・幾何学的な沈線文等を施すもの（263等）。

ii-3類…直線的に開く口縁部で、沈線文を施文（45等）。

iii類…口縁端部に刻目や沈線文の施文、受け口状（266等）。

iv類…直線的に開く、短く外反する口縁部に横位の突帯（刻目・押し文）を貼付。口縁端部に刻目施文もある。

- iv-1 類…口縁端部に突帯を1条付加する(268等)。
 iv-2 類…口縁端部より下の位置(指1本分位)に突帯を1条付加する(274等)。
 iv-3 類…口縁端部より下の位置に突帯を2条付加する(277等)。
 v類…突帯や沈線文等が施されない一群。口縁部は緩やかに外反、緩く内湾するもの等がある。
 v-1 類…口縁端部の上面(口唇部)に刻目等を施すもの(282・283等)。口縁端部は水平ないし、内傾するもので、その上面は平坦である。
 v-2 類…口縁部に押し引状の貝殻腹線刺突文(89)。
 v-3 類…貝殻条痕文のみ(286・287等)。貝殻条痕文はi~V-2類に類似した施文方法である。

2類(大平式土器)

宮崎県串間市大平遺跡における「第一類土器」(茂山1957ほか)に相当する一群とした。

褐色ないし赤褐色の色調を呈するものが多い。口縁部の形状と施文工具別の文様構成の観点により細分した。

- i類…口縁部は大きく袋状に内湾(キャリパー状)し、口縁部の小片根と胴部との境は明確な屈曲部をなす。
 i-1 類…棒状工具による横立/縦位の菱形文、横位の沈線文や鋸歯文等が施文されるもの(291等)。
 i-2 類…櫛歯状工具により縦/横位方向への施文や、鋸歯文を描くもの(290)。
 ii類…口縁部は立ち上がり気味に緩く内湾するもので、口縁部付け根から胴部へはゆるやかに移行する。
 ii-1 類…棒状工具による横立/縦位の沈線文や鋸歯文が施文されるもの(291・297等)。
 ii-2 類…櫛歯状工具により縦/横位方向への施文や、鋸歯文を描くもの(299・301等)。
 iii類…口縁部は直立気味で、口縁部の付け根と胴部との境は明瞭な段をなすもの。
 iii-1 類…棒状工具による横立/縦位の鋸歯文が施されるもの(302等)。
 iii-2 類…櫛歯状工具による横立/縦位の鋸歯文が施されるもの(70・245等)。

3類(中尾田Ⅲ類土器)

鹿児島県中尾田遺跡出土土器のⅢ類に相当する一群とした(鹿児島県教育委員会1981ほか)。口縁部に粘土帯を薄く扁平、または垂下気味に貼り付けて肥厚させる。貝殻腹線による波状文や列点文等の施文がある(21・189・306・307等)。形態的にはi類(春日式土器)のii類やiv類に類似する。

4類(阿高式土器)

口縁部を中心に、5類よりも太い凹線文の施文が特徴的な土器で、鉤手組の入組文や渦巻文のほか、刺突文(短凹線文)等によって、複雑な曲線的・直線的な文様が施されるものとした(29・176等)。凹線文で内面側の器面は凹凸になる。

5類(宮之迫式土器)

岩崎式土器や綾式土器、宮ノ前式土器等とも呼称された阿高式に類似する土器群で、「宮之迫式土器」(金丸2006)や太形凹線文系土器(真境2010)に相当するものとした。後述のようにⅢ・Ⅳ層にて最も多く出土した土器群である。

文様 主に、巻波文(渦巻文)・大波文(右/左に凸の波状文)・菱形文/上下三角文(菱形・三角の文様が横位・縦位・横位(S字状文様が横位・縦位の間に)・多重凹線文/沈線文(横位の凹線/沈線の数条)等(東2011)の多種多様な文様がある。

文様(施文)帯は、口縁部~胴部上半部分と、口縁部付近に集約される2者、さらに単帯のもの2帯(上下で2分割)の文様帯がある。2帯の場合は、上位は縦位の短凹線文等、下位は波状文や三角文、平行文等の文様構成となる。
 施文具と凹線文 複雑・単純な文様は、先端が丸まった棒状工具やへら状工具にて施文されたもので、4類(阿高式土器)よりは幅狭(細目)でシャープ且つ深い凹線文/沈線文の組み合わせである。

色調・胎土 土器の色調は褐色や黒みがかった褐色、赤褐色が主体であり、金雲母を含む個体も認められた。また、白色に近く精良に近い胎土のものも認められた。

分類 文様構成や文様の種類や、口縁部上面(口唇部)に施された押玉刻目の有無等により、大きく4つに分類した。

口縁部には平(単)口縁と波状口縁があり、そのまま開くもの、直線的に立ち上がるもの、外反するもの、内湾して丸みを帯びるものが挙げられる。共通要素としては器面調整には貝殻条痕文とナデ調整がある。

- i類…口縁部から胴部の上位にかけて、縦立・横立・斜位の幾何学的な凹線文や巻波文・大波文・三角文および多重凹線文を施すもの(317・319等)。
 i-1 類…文様構成は単体(317等)。
 i-2 類…刺突列点文を付加した2帯(123・319等)。
 ii類…文様帯は口縁部付近に集約される単帯であるもの。横長蛇行文や多重凹線文が施文される。口縁端部における押玉刻目の施文手法により細分した。
 ii-1 類…口縁端部には刻目なし(327・331等)。
 ii-2 類…口縁端部の刻目は、外側から外傾させて施文(335・337等)。口縁端部に食い込むような施文となると、鋸歯状口縁となる(340・341等)。
 ii-3 類…口縁端部の刻目は、端部上面(口唇部)に対して垂直に施文するもの(344・348・351等)と斜交するもの(345・347等)があり、鋸歯状口縁となる。
 ii-4 類…口縁端部の刻目は、端部の内側から交互に施文され、鋸歯状口縁となる(360・362・364等)。
 iii類…文様帯は口縁部付近に集約される2帯であるもの。下位の文様は横長蛇行文や多重凹線文(凹線文)等であり、上位の文様形態によって細分した。
 iii-1 類…上位文様帯は、貝殻腹線による刺突列点文であるもの(72・366等)。
 iii-2 類…上位文様帯は、棒状工具ないし指頭による円

形状の刺突列点文であるもの。刺突列点文の段数と縁端部の刻目の有無から細分した。

- iii -2-a 類…刺突列点文1段、刻目なし(370・371等)。
- iii -2-A 類…刺突列点文1段、刻目あり(372等)。
- iii -2-b 類…刺突列点文2段、刻目なし(373等)。
- iii -2-B 類…刺突列点文2段程、刻目あり(374・377等)。
- iii -3 類…上位文様帯は、棒状工具による縦位で太めなし幅狭な短凹線文。その長さはiii -2 類より長くiii -4 類より短いもの。短凹線文の段数と口縁端部の刻目の有無から細分した。
- iii -3-a 類…短凹線文1段、刻目なし(378・380等)。
- iii -3-A 類…短凹線文1段、刻目あり(385・386等)。
- iii -3-b 類…短凹線文2段、刻目なし(122等)。
- iii -3-B 類…短凹線文2段、刻目あり(389・390等)。
- iii -4 類…上位文様帯は、棒状工具による斜位やCの字形で、太めなし幅狭な短凹線文であるもの。短凹線文の段数や刺突列点ものとの組み合わせ、口縁端部の刻目の有無から細分した。
- iii -4-a 類…短凹線文1段、刻目なし(392等)。
- iii -4-A 類…短凹線文1段、刻目あり(393・395等)。
- iii -4-b 類…短凹線文1段+刺突列点文1段、刻目なし(397・398等)。
- iii -4-B 類…短凹線文1段+刺突列点文1段、刻目あり(401・404～407等)。
- iv 類…文様帯は口縁部へ胴部付近の単帯であるもので、多重沈線文内に斜線/刺突文によって充填されるもの。口縁端部の刻目の有無より細分した。
- iv -1-a 類…刻目なし(408・409等)。
- iv -1-A 類…刻目あり(410～414等)。

6類

5類に類似した文様帯構成に、刻目突帯を付加したものの。口縁端部は外方に向かう先細り状で、内面側には刺突列点文が一列施文される一群とした(417・418等)。口縁部資料のみで、全体形の把握可能な資料はない。

7類(南福寺式土器)

口縁部には、幅広い凹線による逆「S」字様の施文が施されるもの(419)。全体形の判明する資料がない。

8類(本野原式土器)

広義の指宿式土器における一様式であり、宮崎県宮崎市本野原遺跡を標識遺跡とする型式名として整理分別されたもの(金丸2006)に相当する。

i 類…「S」や「Σ」の字のような曲線的な文様を横方向に連続して施文(横長蛇行文)した沈線間に、貝殻刺突文で付加充填する(疑似縄文)もの(204等)。

ii 類…口縁部は、円文や連続刺突文等を伴う肥厚帯を伴い、胴部は沈線にて方形に区画した内部を入組文や曲線文等で充填する施文のもの(179・420・421等)。

9類(成川K式土器)

甕形文に類似した文様で、平行沈線や縦位の沈線で長方形状や「工」の字様のモチーフが描かれるもの(422～424)。

10類(磨消縄文系土器)

黒色の発色であり平滑に仕上げられた器面にヘラ状工具等で区画線を引き、その中をヘラ描き条線にて充填する、疑似縄文的な土器とした(426・427)。

11類(市来式土器)

口縁部の断面が三角形状を呈し、その外面には一列の刺突列点文が施されるもの(427)。

12類(納管式土器)

平行する沈線文間に短凹線文を連続させるもの(428)。

13類(黒色磨研系土器)

口縁部が「く」の字形に屈曲し、ヘラ磨き調整が施されるもの(429)。

14類(入佐式土器)

黒色磨研土器の一つで、外方へ開き気味の口縁部外面に横位の沈線文を数条施文するもの(430)。

15類(黒川式土器)

黒色磨研土器の一つで、口縁部外面に三角形の突帯を貼り付けるもの(431)。

16類(無文土器)

貝殻条文やナゲ調整の器面調整以外に施文が施されないものを一括した。口縁部は直立気味に立ち上がり、その端部は平坦(435・438)、丸みを帯びたもの(432・436)がある。

17類(底部資料)

1～16類の深鉢形土器の底部を一括して分類した。III・IV層出土遺物のうち、最小個体数として608点が確認された。底部の形態的特徴から、大きく4つに分類している。

Aタイプ…平底で、そのまま直線的に開くもの。

Bタイプ…平底で、底部の立ち上がりが屈曲するもの。

B-1タイプ…垂直気味に立ち上がり、それ以降は直線的に開くもの。わずかな上げ底状もある。

B-2タイプ…底部の端部がやや張り出し気味であるもの。わずかな上げ底状のものもある。

Cタイプ…平底で、底部の端部が外方へ大きく突出する。それぞれの底面にはナゲ調整仕上げの他に、木葉・綱代といった圧痕が残されているものもあり、底部内面には赤色顔料、底面には白色物質の付着が認められた個体も少なくない。これら底部の形態的特徴や付着物質等については、改めて述べる〔第三章-(4)-d、第四章〕。

a) 遺物の出土分布状況 [第Ⅲ・Ⅳ層] (第22・23図)

第Ⅴ層(露島御池軽石層)より上位に堆積する第Ⅲ層・第Ⅳ層出土遺物は、前述のように「第Ⅲ・Ⅳ層」出土遺物として一括している〔第4節(2)参照〕。

α) 土器の組成と出土分布 (第22・46図)

出土量 第Ⅲ・Ⅳ層(遺物包含層)と遺構から出土した土器は、プラスチックコンテナ箱(0.6×0.4×0.15m換算)で50箱分であった。その組成は、深鉢と浅鉢および土製品(円盤形土製品)であり、そのほとんどが深鉢である。そのうち500点を図化掲載した(第35～45図)。

組成 深鉢に着目すると、出土点数全体に占める1類～16類土器の口縁部や胴部破片点数における割合は、概ね5類土器(宮之迫式土器)が約70%、1類・2類土器(春日式・大平式土器)で約25%、その他の土器が約5%であった。特に、10～15類土器(磨消調文系～黒川式土器)は、小破片が数点ずつの出土量である。

なお、第Ⅲ・Ⅳ層および遺構出土の深鉢の最小個体数(底部換算)は、608個体である(第46図)。ただし、類別土器(土器型式)ごとの個体数の計上は、口縁部や胴部との接合関係が認められる個体に乏しいことから困難であった。

平面分布状況 各別土器の平面的な出土分布は、ある程度の濃淡差を読み取ることができる。1類～3類土器は概ね第Ⅳ層から出土しており、1類土器(春日式土器)は、SA1～7の位置するB6/C6Gr.、2類土器(大平式土器)はE2・3Gr.とE4/F4Gr.周辺に多い。3類土器(中尾皿類土器)は、散漫な分布であるが1・2類と出土分布範囲と同調的である。

5類土器(宮之迫式土器)は、第Ⅲ・Ⅳ層でも第Ⅲ層にて数多く出土しており、調査区全体に広く分布している。特にE2・3Gr.・D4Gr.およびB6/C6Gr.の第Ⅲ層にて集中的に掘出された。6類土器はE2/F2Gr.、8類土器(本野式土器)は、SA25・33の位置するF4Gr.周辺に限定的である。4類・7類・9～15類土器は、調査区全体で散漫な分布である。

β) 石器(石材別)の組成と出土分布 (第23図・第3表)

出土量 第Ⅲ・Ⅳ層(遺物包含層)と遺構から出土した石器は1314点である。総重量は37,708.8gで、そのうち94点を図化掲載している(第47～53図)。

組成 器種は打製石鏃、局部磨製石鏃、石匙、石錐、楔形石器、スクレイパー類、二次加工・使用痕剥片、打製石斧、磨製石斧、礮器のほか、石核、チップ(砕片)および磨石・敲石・磨敲石や石皿・台石と石錘(切目石錘)がある。類別土器ごとの出土量から鑑みると、これらの石器は1類(春日式)・2類(大平式)・3類(中尾皿類)・5類(宮之迫式)および8類(本野式)土器に伴うものが多いとみられる。

石材は、礫岩、砂岩類、頁岩類、チャート、石英、流紋岩、安山岩類、黒曜石類や花崗岩等がある。黒曜石には、主に上牛鼻産・桑木津留産・三船産の3産地のものが多くあり、黒曜石類における石器点数や重量比では三船産黒曜石が他産を圧倒している。

打製石鏃やスクレイパーといった剥片石器は、頁岩類・チャート・石英やガラス質安山岩ならびに黒曜石といった緻密で硬質な石材を用いる。本遺跡の場合は、緑色で薄身のスクレイパー(縦長・三角形)が多いのが特徴であり、表面には鉄分やマンガンの沈着が顕著である。

他方、砂岩利用のスクレイパーも一定量ある。この砂岩製スクレイパーは、円礫ないし石皿等を打割した剥片に簡単な刃調整を施したものであり、簡素かつおり、硬く重量感のある石材が選択されたものとみられる。石斧には有肩打製石斧と縦長の磨製石斧がある。磨製石斧は基部が先細り状のものや裁ち落としたような直線的なものがあり、大きさにも大小がある。石斧の再加工品(敲石等)も認められる。

磨石や敲石類には、砂岩や安山岩類が多い。宮崎群層由来の砂岩や大隅半島周辺で産出される両輝石安山岩や花崗岩を用いたものもある(第3表)。

平面分布状況 石器は、調査区全体に出土しているが、E2Gr. B5Gr. B6/C6Gr. 周辺では集中的に出土する傾向がある。なお、特定器種や石材の偏在的な分布は不明確である。

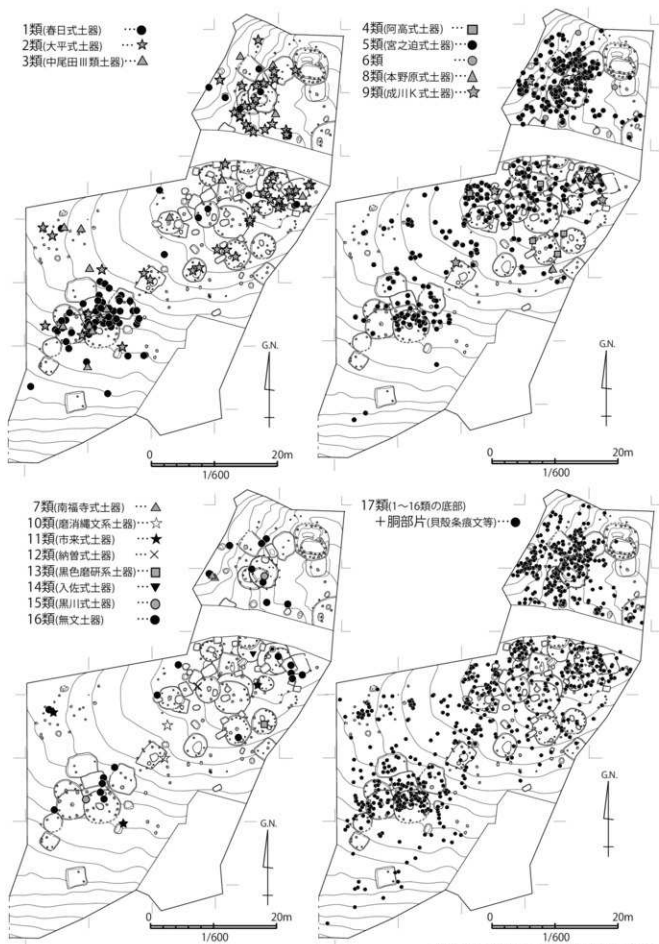
b) 遺構出土の遺物

SA1 8～14は縄文土器である。8は1類土器(春日式土器)で、口縁端部に刻目突帯を内側に貼り付け、さらに鋸歯状の刻目突帯を4箇所波頂部に置く。表面に付着した炭化物(スス)について放射性炭素年代測定を実施したところ、4065±25BPという値が得られた(第10表)。

9は6類、10・11は5類土器(宮之迫式土器)、12～14は底部資料である。底面はナデ仕上げで、底部の端部は外方に張り出すもの(12・13)がある。14は金雲母を胎土に含む。

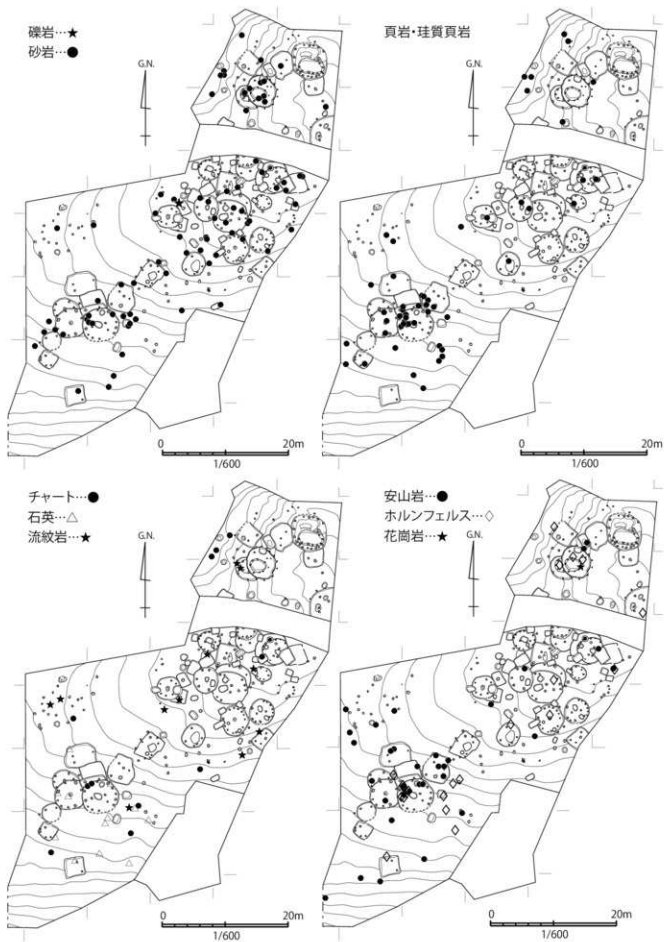
SA2 15～28は縄文土器類である。15は1類土器(春日式土器)で、貝殻燻刺突帯が施された鋸歯状の突帯を口縁端部に内側に貼り付ける。16～20・22も1類土器で口縁端部に刻目や刻目突帯を貼付する一群である。21は3類土器(中尾皿類土器)とみられる。25～28は底部資料である。底面はナデ仕上げ、底部はやや上げ底気味で、その端部は外方に張り出し気味のものが多い。

508～515は石器類である。508・509はホルンフェルス製の石斧である。508はおしやもじ形の打製石斧で、刃部部分は大きく礫面を残す。509は磨製石斧の基部で、先細り気味である。側縁部には成形時の敲打痕がそのまま残る。510はガラス質安山岩製のスクレイパーで、礫面の残る剥片の側縁部を微細な剥離を施して刃部とする。511はホルンフェルス製の横型石匙である。大型型で大きくなりである。512はチャート製の二次加工剥片である。逆三角形の平面形を成す。513・514は多孔質安山岩製の敲石で、主に側縁部に使用面がある。515は大隅半島産と考えられる両輝石安山岩製の磨石である。表裏とも磨面となるが、1/3程度が欠損する。



第22図 第三・IV層遺物分布図(土器)

グリッド・遺構埋土一括取り上げ遺物等は除く



第23-1図 第Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図(石器) [1]

SA3 29～31は縄文土器類である。29は、太めの凹線文であることから4類土器(阿高式土器)と考えられる。

SA5 32は縄文土器である。1類土器(春日式土器)で、貝殻腹縁刺突文が施文された鋳歯状の突帯を口縁部に内傾させて貼り付ける。

SA6 33～55は縄文土器および土製品である。33・34は地床炉内、39・40・42～44・46・48・50～52は床面、41・54は貼床土からの出土である。40・41は2類(大平式)土器、49は5類(宮之迫式)土器、それ以外は1類(春日式)土器である。

33は、貝殻腹縁刺突文を斜方向に連続して施文した口縁部を内傾させたもので、4箇所の波頂部には鋳歯状の突帯を貼り付ける。文様帯と貝殻条痕文との境には、貝殻腹縁刺突文を横立に連続して施文し、区画線とする。

34は、緩やかに開く口縁部の端部上面に刻目を密に施文するもので、補修孔も認められる。口縁部は、内側にやや突出させている。このほか、1類土器は鋳歯状の貼付突帯や刻目突帯を持つものや口縁部部に刻目を有するタイプ(i・iv・v類)が主体的である。

50～54は底部資料である。やや上げ底部気味で端部が外方に張り出し、底面の調整はナデ仕上げであるものが多いが、53の底面は木葉痕である。

55は円盤形土製品で、土器片の周縁部を丁寧に研磨して面取りしている。

516～523は石器類である。522は地床炉内出土、516～521・523は床面出土である。516・517は頁岩(緑色)製のスクレイパーである。516は三角形剥片の側縁、517は略三角形剥片の下縁を微細剥離して刃部とする。

518・519は三船産黒曜石製の石核である。518は石核成形することなく、礫の広口側で剥片剥離する。519は剥片剥離が進んでいる。520は砂岩製の敲石、521・522は砂岩製の磨敲石である。523は多孔質火山岩の敲石で、515と同じく赤色顔料(酸化鉄)が付着している。

SA7 56～63は縄文土器である。56・57・60・61は1類(春日式)土器、58・59は5類(宮之迫式)土器である。56は外傾させた口縁部部に刻目と杏形凹部を交互に施文させる。

底部資料のうち63は、SA23とSA31と接合関係を持つ網代底である。

SA8 64～69は縄文土器である。64は2類(大平式)土器で口縁部の立ち上がりは垂直気味となる。口縁部外面には、三角文と縦位の沈線文を組み合わせた図文を横立に連続的に配置した文様が施文される。沈線文自体は鋳歯状である。この64については、表面に付着した炭化物(スス)について放射性炭素年代測定を実施したところ、3965±25BPという値が得られた(第10表)。

65は5類(宮之迫式)土器で、斜位の短凹線文と多重沈線文の文様帯である。

SA9 70～77は縄文土器である。竪穴建物跡の検出面にてまとまって出土した。70は2類(大平式)土器で、口縁部は垂直に立ち上がり、縦位の鋳歯文が施文される。71は3類(中尾田類)土器とみられる。72～74は5類(宮之迫式)土器である。72は、器壁が比較的薄いつくりで、貝殻腹縁による刺突列点文と大波文による2帯の文様帯が構成される。下位の文様体に施文される大波文は、太めの凹線文である。

なお、72については表面に付着した炭化物(スス)について放射性炭素年代測定を実施したところ、4075±25BPという値が得られた(第10表)。

75～77は底部資料で、底面に網代痕が残る。

SA10 78～85は縄文土器である。全て1類(春日式)土器にあたる。78は内湾口縁に刺突列点文と沈線文が施文され胎土に金雲母を含む。79・80・82は刻目突帯の貼付、81は口縁部部に刻目を施す。81はSA2の貼床土土器と接合関係にある。

底部資料(84・85)の底面はナデ仕上げである。84の底部内面には赤色顔料の付着があり、蛍光X線分析の結果、ベンガラという結果が得られている(第12表)。

524～528は石器類である。524・525はホルンフェルス製の磨製石斧で、平面形は長方形の小型品である。526は頁岩(緑色)製の二次加工剥片である。バチ形の剥片の下縁には刃こぼれ状の微小な剥離痕があり、使用痕跡の可能性がある。527～528は頁岩(緑色)製のスクレイパーである。縦長(横長)剥片の側縁部(下縁)を二次加工して刃部とする。

SA11 86は縄文土器である。波状口縁の口縁部部に刺突列点文をもつ。1類(春日式)土器と考えられる。

SA12 87～89は縄文土器である。1類(春日式)土器にあたる。87・89はSA11出土遺物との接合関係があり、89は内傾気味の口縁部外面二押状の貝殻腹縁刺突文が施文される。

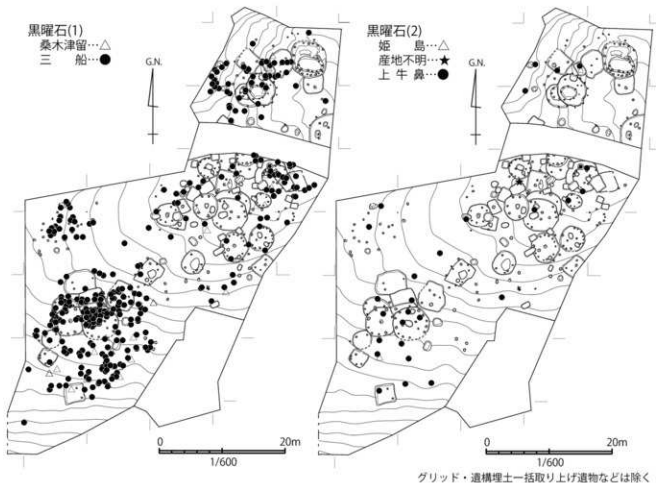
529は頁岩(緑色)製のスクレイパーである。平面三角形の剥片の側縁(下縁)を微細な剥離により刃部とする。

SA13 90～98は縄文土器である。90～92は5類(宮之迫式)土器である。94は外面に沈線文が施される。95～98は底部資料で、底面に網代痕が残る。

530はホルンフェルス製の磨製石斧を転用した敲石である。柱穴より出土した。石斧の基部と刃部側を平坦に再加工し、この両部分を敲石の使用面とする。青みがかっており、ずっしりと重い。

SA14 99は縄文土器である。5類(宮之迫式)土器である。胎土に金雲母を含む。

SA15 100～103は縄文土器である。5類(宮之迫式)土器にあたり、103の底面には網代痕が残る。



第23-2図 第Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図(石器) [2]

器種	Ⅲ・Ⅳ層														各計	重量 (g)	参考(カウント外)											
	打製石鏃	局部磨製石鏃	石鏃未製品	石鏃	石鏃未製品	楕形石器	楕形石器未製品	スクレイパー(楕形・棒形)	二次加工製片	使用痕製片	局部磨製石斧	磨製石斧	刮片	刮片				チップ(棒状)	磨石	磨石	石皿	石鉢	不明	原石				
礫岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	326.5		
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	8	5	10	-	-	1	4	40	-	4	9	13	5	2	-	-	-	-	101	23,308.1	
砂岩(硬質)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	2	1,397.5	
砂岩(含化石)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	519.5	
頁岩	-	1	-	-	-	-	-	21	4	19	-	-	-	-	69	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	115	904.6	
頁岩(雑質)	-	1	-	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	18	48.5	
チャート	2	-	1	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	10	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	17	114.8	
石英	2	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	17	112.0	
流紋岩	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	16	251.1	
安山岩	-	-	-	-	-	-	-	4	1	2	-	-	-	-	8	-	1	8	2	-	1	-	-	-	-	27	2,463.2	
安山岩(多孔質)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	-	-	-	-	-	-	-	8	1,121.6	
安山岩(崗輝石)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-	4	979.5	
ガラス質安山岩	2	-	-	1	-	-	-	1	1	3	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11	266.3	
ホルンフェルス	-	-	1	1	-	-	-	2	-	3	2	1	11	-	7	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	32	3,190.5	
黒曜石(三船)	-	-	2	-	-	2	1	2	15	9	-	-	-	-	37	684	55	-	-	-	-	-	-	-	-	2	809	1709.4
黒曜石(桑木津留)	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	52	11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	86	121.2
黒曜石(上牛鼻)	-	-	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	58	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	64	84.3	
黒曜石(姫島)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	0.9	
黒曜石(産地不明)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1.6	
花崗岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	772.7	
軽石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	15.0	織刺品(SA17) 122頁参照
各計	6	2	2	3	3	2	2	1	41	31	48	2	1	11	1	43	974	70	7	31	19	6	3	1	1	1314	37708.8	

第3表 遺構およびⅢ・Ⅳ層出土石器組成表

SA16 104～110は縄文土器である。108は1類(春日式)土器、104～107は5類(宮之迫式)土器にあたる。104は、波状口縁で、刻目のある瘤状突起と短凹線文および菱形文による2帯の文様構成である。109は胎土に金雲母を含む。

531はホルンフェルス製の磨製石斧である。基部は直線的に成形され、その端面は平坦である。

SA17 111～143は縄文土器および土製品である。遺構検出面付近からまとまって出土した。111は口縁部の立ち上がりは垂直気味な2類(大平式)土器で、その他の口縁部や胴部資料は5類(宮之迫式)土器である。

5類土器は、多重凹線文の112・114、沈線文間に刺突列点文を配す113・119、鋸歯状口縁で簡略化された大波文の115、短凹線文と大波文の2帯構成の118、波状口縁で短凹線文と菱形文の2帯構成の123等がある。このように文様とその構成は変化に富み多様である。

底部資料は130～142で、その立ち上がりは、垂直気味に立ち上がるものと、底部の端部が外方へ張り出すものも多く、網代痕を有するものが特徴である。127・131・141は胎土に金雲母を含む。

143は円盤形土製品である。5類土器の口縁部片を再利用したもので、周縁を丁寧に面取してメンコ状とする。

532～536は石器類である。532はホルンフェルス製の打製石斧で、バチ形を呈す。533はホルンフェルス製の磨製石斧で基部は直線的・平坦である。器面全体に細かい敲打調整が施され、肉厚なつくりである。刃部も鋭い。547は真岩(緑色)製の使用痕跡片である。535は三船産黒曜石の石核である。打面調整や打面転移がなされる。536は花崗岩製の磨製石で、石材は大隅半島産と考えられる。

SA18 144～151は縄文土器である。SA17出土遺物同様に5類(宮之迫式)土器にあたり、その文様は変化に富む。

SA19 152～156は縄文土器である。床面またはやや浮いた位置で出土した。152・153は簡素化された大波文が施文される5類(宮之迫式)土器である。153は胎土に金雲母を含む。154～156は底部資料である。154はへら描き斜線文がある。537はホルンフェルス製の打製石斧で小型品である。

SA20 157～161は縄文土器である。158は口縁端部に刻目が施文される資料で1類(春日式)土器である。157は鋸歯状口縁と大波文を持つ5類(宮之迫式)土器である。160・161は底部資料で、垂直気味に立ち上がる。圧痕を有する。

SA21 162は縄文土器である。深鉢の胴部下半部片である。

SA22 163～172は縄文土器である。検出面付近からまとまって出土した。164・166は、短凹線文と横長蛇行文ないし多重凹線文の2帯構成の文様帯を持つ。165は橋状把手が付くとみられ、胎土に金雲母を含む。

167～172は底部資料で、垂直気味に立ち上がるものと、端部が外方に張り出すものがあり、底面はナデ調整と網代痕のものがある。172はSA36出土遺物と接合にある。

SA23 173～176は縄文土器である。173は柱穴内出土で、1類(春日式)土器である。174は5類(宮之迫式)土器、176は刺突文や渦巻状の凹線文による文様構成から4類(阿高式)土器とした。176は、堅穴建物内土坑からの出土であるが、SA31・32の埋土中遺物と接合関係にある。この176については、表面に付着した炭化物(スス)の放射性炭素年代測定を実施したところ、3790±25BPという値が得られた(第10表)。

SA25 177～182は縄文土器である。177・178は直線的に開く口縁部に突帯が貼り付けられる1類(春日式)土器、179は方形区画内に入組文を充てる8類(本郭式)土器である。

SA26 183・184は縄文土器深鉢の底部である。端部は外方に張り出す形態で、底面はナデ仕上げである。

SA28 185・186は縄文土器である。185は口縁部の立ち上がりが垂直気味な2類(大平式)土器、186は5類(宮之迫式)土器である。

SA29 187～196は縄文土器である。187・188は2類(大平式)土器、189は3類(中尾田型)土器、190～192は5類(宮之迫式)土器である。192は鋸状把手のような突起がつく。195・196は底部資料で、196はわずかに上唇状となる。

538・539は石器類である。538はホルンフェルス製の磨製石斧で刃部を欠損する。基部は直線的なつくりでその端面は平坦である。539は硬質な砂岩製の磨製石である。

SA30 197は縄文土器の口縁部である。突帯が貼り付けられた痕跡から、1類(春日式)土器と考えられる。

SA31 198～199は縄文土器の口縁部である。198は1類(春日式)土器で、199は4類(阿高式)または5類(宮之迫式)土器の可能性が有る。

SA32 200・201は縄文土器である。201は柱穴内出土で、貝殻痕文による器面調整から1類(春日式)土器とみられる。

540は桑木津産黒曜石製のスクレイパーである。上縁は直線的に裁ち落とされ、両側縁部を刃部となす。

SA33 202～208は縄文土器である。堅穴建物跡内の埋土全体にて出土しており、その位置には高低差がある。

202は垂直気味に立ち上がる口縁部に縦位/横位の鋸歯文が施文される2類(大平式)土器である。203は、口縁部が立ち上がり気味に内湾し、4箇所を波頂部を持つ。口縁部付け根の締まりは強い。口縁部の施文は、縦位を基本

とした鋸歯文や2列1組の平行沈線文であるが、半截竹管状工具を用いて押しきりに施文するのが特徴的である。器形と文様構成から、2類(大平式)土器と考えられる。

204は、「S」の字を連続させた横長蛇行文が施文されており、沈線間を貝殻型刺突文で充填している。いわゆる疑似縄文と考えられ、8類(本町原式)土器と考えられる。胎土に金雲母を含む。

205は胴部資料で、内外面ともに粗いナデ調整である。206～208は底部資料で、208は上げ底で、底部は丁寧なナデ調整である。

541は頁岩(緑色)製の使用痕剥片である。薄く剥いだ剥片に刃こぼれ状の微小な刺突痕が残る。

SA34 209は縄文土器の口縁部である。2類(大平式)土器で、櫛歯状工具により縦位/横位の鋸歯文が施文される。

542～544は石器類である。542はガラス質安山岩製の石匙未製品である。縦長石匙とみられ、挟り入り部分と刃部の刺突調整が完結していない。

543はホルンフェルス製の敲石である。節理面で破断しているため、断面形はカマボコ状に見える。平面形や器面に残る擦痕から、本来は磨製石斧であったと考えられる。544は砂岩製の使用痕剥片である。肉厚な縦長剥片の側縁部に微小な刺突痕がある。

SA35 210～215は縄文土器である。210は2類(大平式)土器、211～215は5類(宮之迫式)土器である。

213・214は波状口縁を持つ大型の深鉢で太めの短凹線文と簡略化(集約化)された大波文の2帯構成である。215は中空な竹管状工具による刺突列点文が3段施文される。

SA36 216は縄文土器の底部である。端部は外方に張り出し気味である。545は頁岩製のスクレイパーである。礫面の残る三角形状剥片の側縁を刃部とする。

SA37 217は縄文土器の口縁部である。口縁端部に刻目が施される1類(春日式)土器とみられる。

SA38 218～221は縄文土器である。218は2類(大平式)土器、219は5類(宮之迫式)土器で横長蛇行文が施文される。

220は円盤形土製品で、周縁部の面取りは粗雑である。

SC3 222は縄文土器の底部から胴部にかけての資料で、網代痕を有する。546はガラス質安山岩製の打製石鎌である。平面形は二等辺三角形、凹基で脚部が発達している。

SC8 223～225は縄文土器で、223は底部、224は胴部である。底面や外面は粗いナデ調整で仕上げられる。225は縄文土器の口縁部である。口縁端部に指頭玉痕により浅く凹み、内傾している。

SC17 226～236は縄文土器および土製品である。229は刻目突帯を有し、口縁部が外傾する6類で、それ以外は概ね5類(宮之迫式)土器にあたる。228は大ぶりの菱形文、230は沈線間をさらに刺突文で充填する疑似縄文が施される。

233～236は底部資料で網代痕が残る。236の端部は外方に張り出し気味である。232は円盤形土製品で5類土器の胴部片を再利用したものである。

SC21 237・238は縄文土器である。237の文様は、一見して5類(宮之迫式)土器の多重凹線文に見えるが、変形した靴形文ないし「工」の字状とも解釈されるので、9類(成川式)土器の可能性もある。

237の表面に付着した炭化物(ス)について放射性炭素年代測定を実施したところ、3880±25BPという値が得られた(第10表)。

SC24 239は縄文土器の底部で、斜位のへら描き斜線文がある。底面はナデ調整で、わずかに上げ底状となり、その端部は大きく張り出す。

SC25 240は縄文土器の口縁部である。口縁部は垂直気味に立ち上がる2類(大平式)土器で、簡略的な沈線文である。

この240については、表面に付着した炭化物(ス)の放射性炭素年代測定を実施したところ、4075±25BPという値が得られた(第10表)。

SC31 241は縄文土器の口縁部である。大きく内湾した口縁部に丁寧な沈線文が施文される2類(大平式)土器である。

SC34 242～243は縄文土器の口縁部である。242は複雑かつ入り組む文様なので、4類(阿高式)土器の可能性がある。

SC48 244は縄文土器の口縁部である。貝殻縁線による刺突列点文が施される5類(宮之迫式)土器である。

SC52 245～248は縄文土器および土製品である。245は垂直に立ち上がる口縁部に櫛歯状工具による縦位の鋸歯文が施される2類(大平式)土器である。246は貝殻縁線の押し文が施文される突帯が現付される。1類(春日式)ないし3類(中尾田式)土器である。248は円盤形土製品である。

SC53 249・250は縄文土器である。249は渦巻状の貼付突帯のある5類(宮之迫式)土器である。250は内外面をナデ調整される底部であり、その端部は大きく張り出す。

547は頁岩製の切目石錘である。楕円形礫の長軸方向から切取目を入れて漁網錘とする。重さは約27.3g。

SC60 251は縄文土器の口縁部で、斜位の短凹線文と多重凹線文の2帯構成の文様帯をもつ。

c) 遺物包含層等の遺物

第三・IV層(遺物包含層)の出土遺物や弥生時代遺構から出土した縄文時代中～晩期の遺物について報告する。

A) 土器(第35～45図)

1類(春日式土器)[252～288]

252～257・259は、口縁部外面に鋸歯状ないし複雑な突帯を貼り付けるもの(i-1類)。258は口縁部に三叉状の突帯を貼り付けるもの(i-2類)。260は口縁端部に刻目突帯を内側させて貼付し、鋸歯状の突帯を付加するもの(i-3類)。

261・262は内湾口縁に1～2条の横位の刻目突帯を貼付するもの(ii-1類)。263・264はわずかに内湾する口縁部に刺突列点文を施すもの(ii-2類)。265は口縁端部に複雑な沈線文を施すもの(ii-3類)。文様構成は2類(大平式土器)と類似する。266は、口縁端部に施文で受け口状となる(iii類)。

267～273は、口縁端部に刻目突帯を1条貼り付けるもの(iv-1類)。268は胎土に金雲母を含む。274～276は、口縁部に刻目突帯を1条貼付するもの(iv-2類)で、iv-1類よりも刻目突帯の位置が指1本分程度下がる。277～280は、刻目突帯が2条となる(iv-3類)。281～288は沈線文や刻目突帯が施文されないもの。281～285は口縁端部の上面に刻目等を施すもの(v-1類)で、286～288は貝殻条痕文のみの調整である(v-3類)。

2類(大平式土器)[289～305]

289は、棒状工具による沈線文が施文され、内湾口縁のもの(i-1類)。291～298は、棒状工具による沈線文で口縁部を立ち上がり気味に縁内湾するもの(ii-1類)。

296の施文は押し引き状にみえる。299～301は櫛歯状工具で施文される条線文で、口縁部は立ち上がり気味に内湾するものである(ii-2類)。302は口縁部が直立する(iii-1類)もので押し引き状の施文である。303～305は櫛歯状工具による条線文で口縁部が直立するもの(iii-2類)である。

3類(中尾田Ⅲ類土器)[306～316]

306～310は、口縁部に薄く粘土帯を貼り付けて肥厚させ、刻目や刺突列点文を施文するものである。311はわずかに隆起する部分に円形の刺突列点文が施される。312～316は口縁端部に細い粘土帯を貼り付けたものである。

5類(宮之迫式土器)[317～416]

317～325は口縁部から胴部の上位にかけて、幾何学的な凹線文や巻波文・大波文等が施文される一群(i類)である。317は文様構成が単体(i-1類)、318・319は刺突列点文を付加した2帯の文様帯(i-2類)のものである。321～325は胴部資料であり、321・322の内面には赤色の化粧土が塗られる。

326～365は、口縁部に集約される単帯の文様帯で、横長蛇行文や多重沈線文(凹線文)等が施文される一群(ii類)である。326～333は口縁端部に刻目がないもの(ii-1類)、334～343は、口縁端部に刻目があり、外側から外縁させて施文(ii-2類)、344～359は口縁端部に刻目があり、

その端部上面(口唇部)に対して垂直に施文(ii-3類)、360～365は口縁端部に刻目があり、その刻目は器壁の内側から交互に施文される(ii-4類)。342の凹線文は、押し引き状である。350は胎土に金雲母を含む。

366～407は、2帯の文様帯を持ち、横長蛇行文や多重沈線文(凹線文)が多用される一群である(iii類)。366は貝殻腹縁の刺突列点文が施される(iii-1類)。367～371の上位文様帯は、円形状の刺突列点文が1段あるが、刻目がない(iii-2-a類)。372は刺突列点文が1段あり、刻目がある(iii-2-a類)、373は刺突列点文が2段あるが、刻目がない(iii-2-b類)、374～377は刺突列点文が2段で、刻目がある(iii-2-B類)。

370については、表面に付着した炭化物(スス)について放射性炭素年代測定を実施したところ、3855±25BPという値が得られている(第10表)。

378～382の上位文様帯は、縦位の短凹線文が1段あり、刻目がなくない(iii-3-a類)。383～388は短凹線文1段で、刻目がある(iii-3-a類)。389・390は短凹線文2段で、刻目がある(iii-3-b類)。378・386の胎土には金雲母が含まれる。

381については、表面に付着した炭化物(スス)について放射性炭素年代測定を実施したところ、3850±25BPという値が得られた(第10表)。

391・392の上位文様帯は、斜位やCの字形の短凹線文が1段あり、刻目がなくない(iii-4-a類)。393～396は短凹線文1段あり、刻目がある(iii-4-A類)。397～399は短凹線文1段と刺突列点文1段の組み合わせで、刻目がなくない(iii-4-b類)。400は口縁端部を失うが、上位文様帯は短凹線文1段と刺突列点文1段である。401～407は短凹線文1段と刺突列点文1段の組み合わせで、刻目がある(iii-4-B類)。

408～416の文様帯は単帯で、多重沈線文(凹線文)内に斜線や刺突文によって充填されるもの。いわゆる疑似縄文も含めている。408～409は刻目がなく(iv-1-a類)、410～414は刻目がある(iv-1-A類)。

415・416は胴部資料で、415・416と同じ疑似縄文である。

6類[417・418]

417・418の口縁部は直立気味で、その端部はわずかに外方へ開く。刻目突帯の上下には、多重沈線文や横長蛇行文が施文され、口縁部内面には刺突列点文が施される。

文様帯の構成的には5類(宮之迫式土器)に類似するが、突帯が貼り付けられる点で別型式と考えられる。

7類(南福寺式土器)[419]

419は口縁部を欠失するが、縦溝状に蛇行する凹線文(逆「S」字線)が施文されるもの。

8類(本野原式土器)[420・421]

420は口縁部、421は胴部片である。420は179(第31図)との類似性、421は入組文の施文構成から8類とした。胎土に金雲母を含む。

9類（成川式土器）[422～424]

422～424は、横位や縦位の沈線文（凹線文）を介して長方形や「工」の字様に表現されるものである。

422の口縁部は外反、423は内湾気味に直立、424は直立して頸部の締まりが強いものである。

10類（磨滑縄文系土器）[425・426]

425・426は黒色に仕上げられ、平滑に磨かれた器面にヘラ描き条線にて三角や円弧状の文様が施文される。

11類（市来式土器）[427]

427は、口縁部の断面が三角形を呈し、その外面には一列の刺突列点文が施されるものである。

12類（納曾式土器）[428]

428は黒色でヘラミガキ調整が施された器面に、沈線文と連続的な短沈線文を組み合わせて施文されたものである。

13類（黒色磨研系土器）[429]

429の口縁部は「く」の字形に屈曲し、ミガキ調整が施される。口縁部を失っているため、具体的な土器型式は不明である。頸部には指1本分の凹みがある。

14類（入佐式土器）[430]

430は口縁部外面に横位の沈線文を数条施文されている。

15類（黒川式土器）[431]

431は、口縁部外面に三角形の突帯を貼付されている。

16類（無文土器）[432～440]

432～440は、貝殻条痕文やナデ調整の器面調整以外に施文が施されないものである。432～434の口縁部は丸みを帯び、435～440の口縁部は平坦で、水平・外傾・内傾させている。432は胎土に金雲母を含む。

17類（底部資料）[441～495]

441～495は、遺物包含層（第Ⅲ・Ⅳ層）から出土し深鉢形土器の底部である。1cm刻みごとの底径別の形態別（後述のA～Cタイプ）に並べて掲載した。454・457・469・472・475は胎土に金雲母を含む。

d) 底部資料について

第Ⅲ・Ⅳ層および遺構からは、最小個体数として608点分の底部が出土したが、口縁部や胴部と接合したものが少なく、大部分が土器型式との対応関係が不明なものが大半である。その一方で、底面には、「網代痕」や白色で溶結した物質が固着しているものが多いのも特徴である。

本項では、底部の出土分布状況や底部の形態的特徴に基づく分類（A～Cタイプ）と、それぞれの底面に残された圧痕等との対応関係について、その傾向をまとめる。

i) 底部形態の分類とその分布 深鉢形土器の底部は最小個体数として608点が確認されており、前述のとおり底部の形態的特徴から大きく3つに分類される（図46参照）。

Aタイプは平底でそのまま直線的に開くもので、608点中95点確認された。Aタイプの出土はE2、E3Gr.に多く出土する。次にBタイプは平底で底部の立ち上がりが屈曲するもので、立ち上がりと端部の形態からB-1、B-2の二つのタイプに分かっている。B-1タイプは垂直気味に立ち上がるもの、B-2タイプは底部の端部がやや張り出し気味のものである。B-1タイプが608点中291点、B-2タイプが154点確認され、最も多く出土している。Bタイプの各グリッドの出土状況は、全体的に出土しているが、B-1タイプ、B-2タイプともにC6、E2グリッドからの出土数が最も多く、B-1タイプはさらにF2グリッドから集中して出土している状況がわかった。次にCタイプは平底で底部の端部が外方へ大きく突出する。Cタイプは出土量が少なく、比較検討を行うことは難しい。

4つのタイプの内、A、Bタイプは各グリッドからの出土が見られ、特に遺構が重複している調査区北側及び西側に多く出土する傾向が見られた。

ii) 底径 底部の直径は概ね4～14cmの間にある。そこで、2cmごとの区切りをし、ヒストグラムを作成した（第46図）。

Aタイプ、Bタイプとも8cm～14cmの大きさの底径が多く、Cタイプは判断が難しいが、4cm～12cmの大きさの底径を持つ深鉢があることが確認できた。

iii) 底面の調整・圧痕 ナデ等の調整があるもの314点と最も多いが、次いで網代痕のある底部が289点見られた。161・454は植物の繊維を糸で綴じた簾状、138は籠状の圧痕が見られる。木葉底は出土量が少なく、53・441・446・457・478の5点である。

iv) 白色物質の付着 第46図の円グラフは、白色物質の付着が確認できた底部の割合をあらわしたものである。白色物質が付着した土器底部は全個数の約82%に及び、中でも網代痕のある底部に付着することが多く、白色物質が付着した底部の内、約44%に当たる。この白色物質の自然科学的分析については、赤崎広志氏によって報告されている（赤崎2020）。

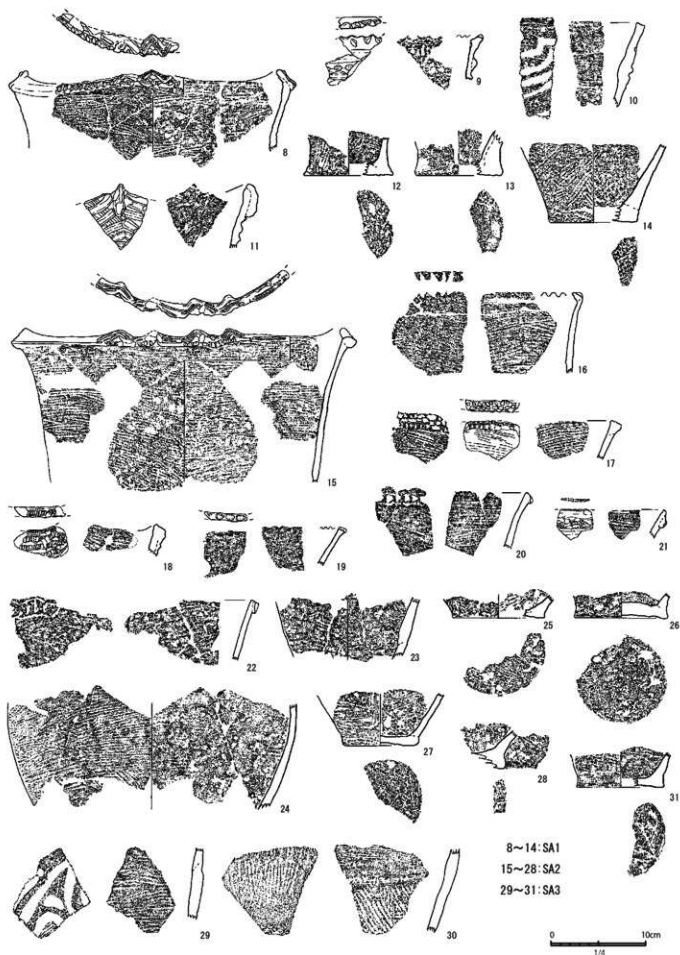
v) 赤色物質（顔料） 底部内面に赤色物質が付着する破片が5点あり、すべて図化掲載した（84・448・453・474・485）。このうち、84については蛍光X線分析によりベンガラとの結果が得られている（第IV章）。

その他 [496～498]

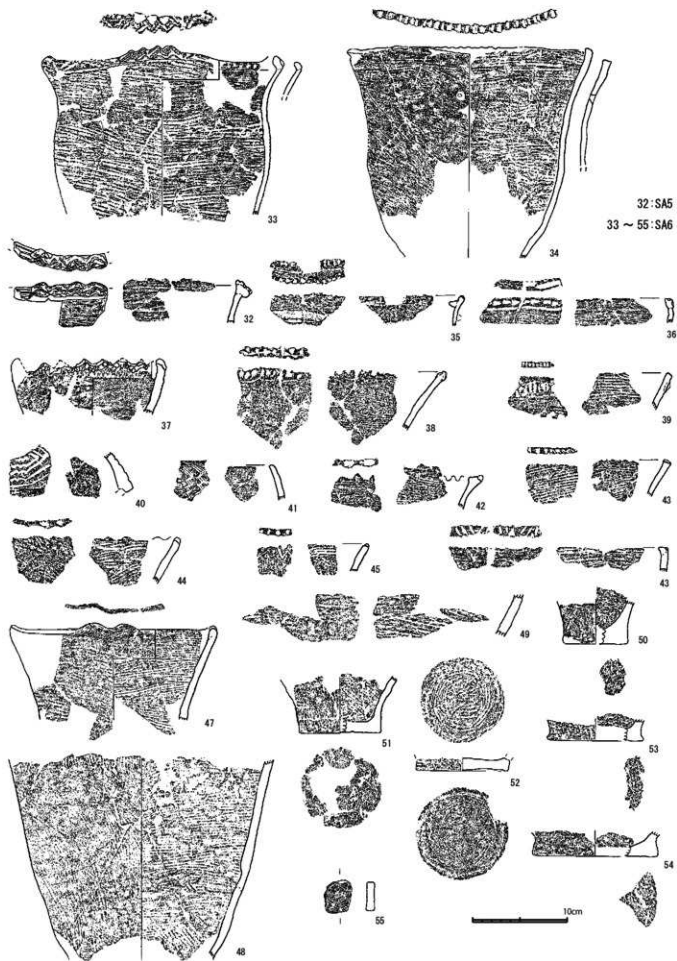
496・497は胴部資料で、496は2列一組の短沈線文が縦位に施文される。498は浅鉢とも考えられる。

円盤形土製品 [499～507]

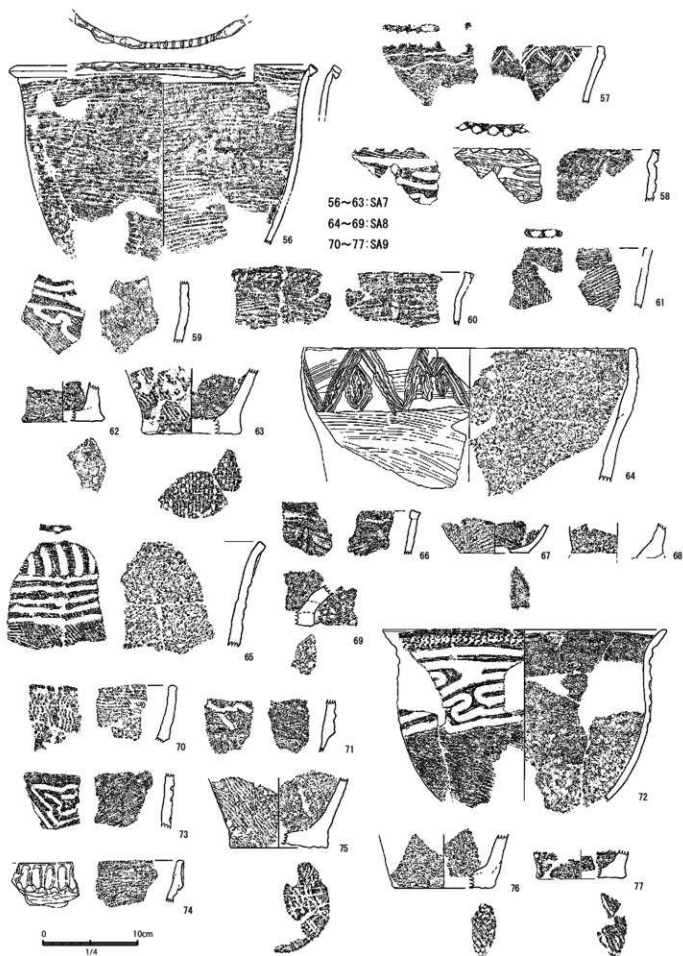
499～507は円盤形土製品である。507は大きいですが、自然為の割れてはいない。500・503・506は胎土に金雲母を含む。



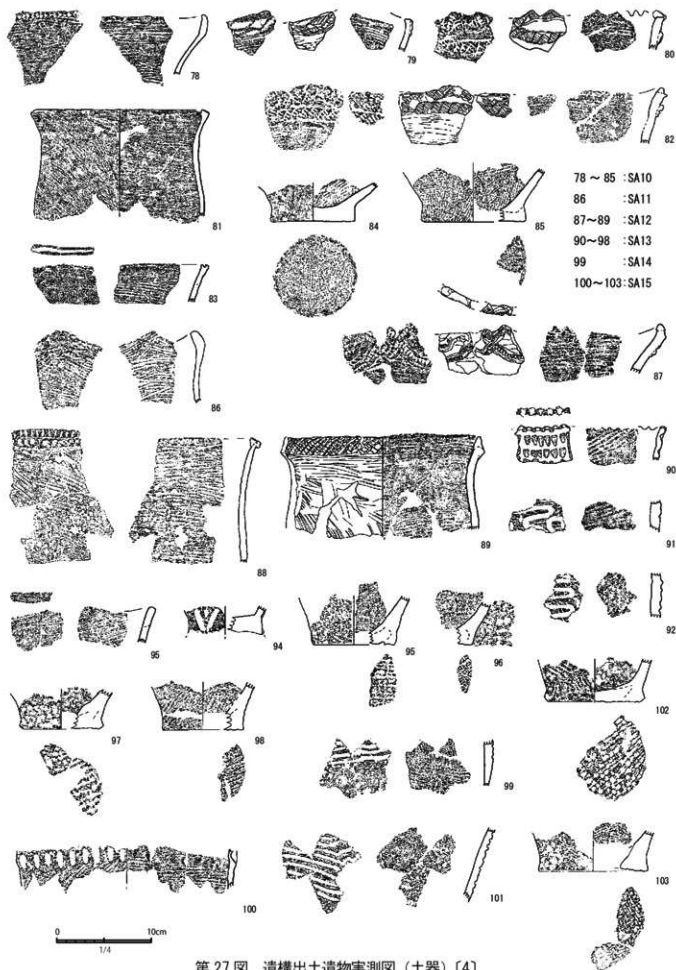
第 24 図 遺構出土遺物実測図(土器) [1]



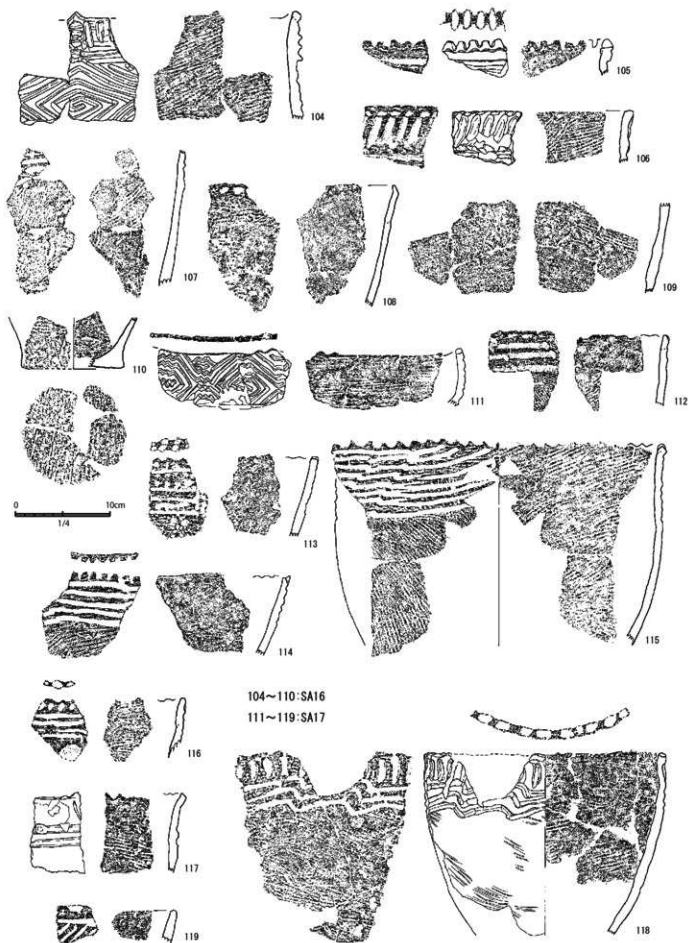
第 25 图 遺構出土遺物実測図(土器)〔2〕



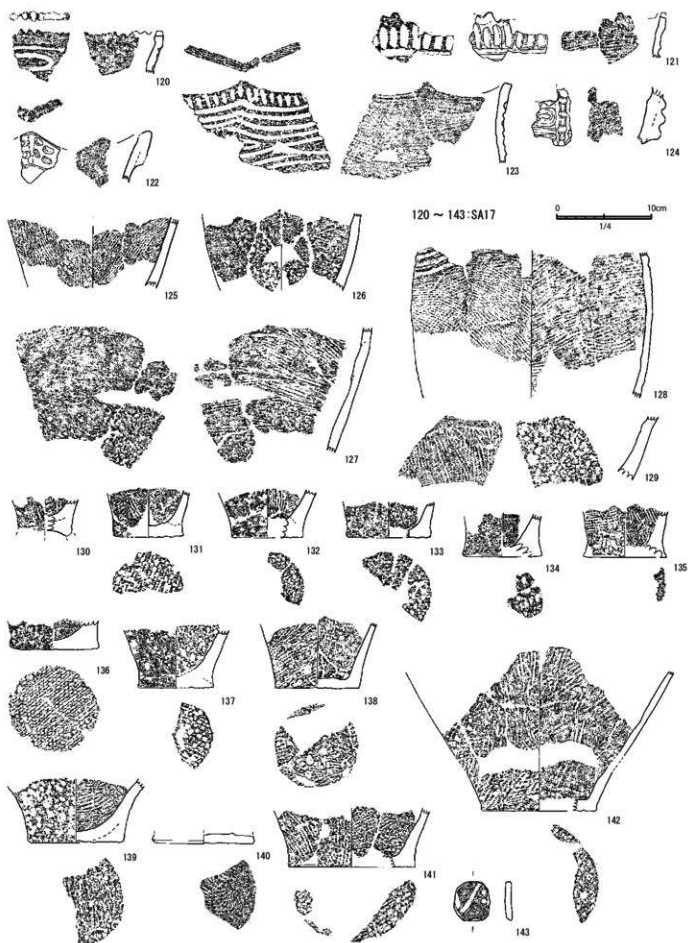
第 26 図 遺構出土遺物実測図(土器) [3]



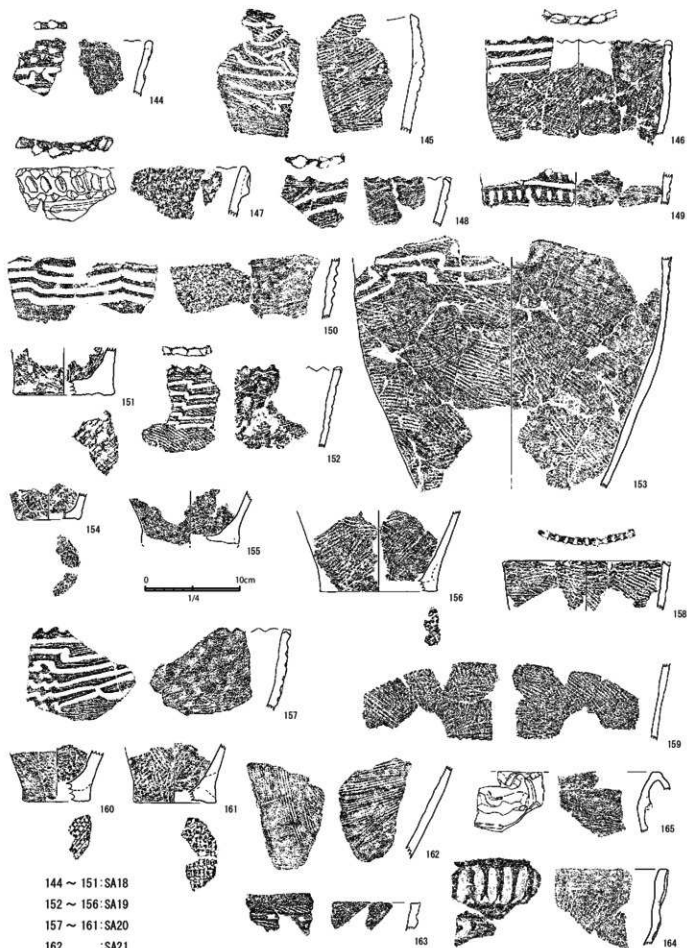
第 27 図 遺構出土遺物実測図(土器)〔4〕



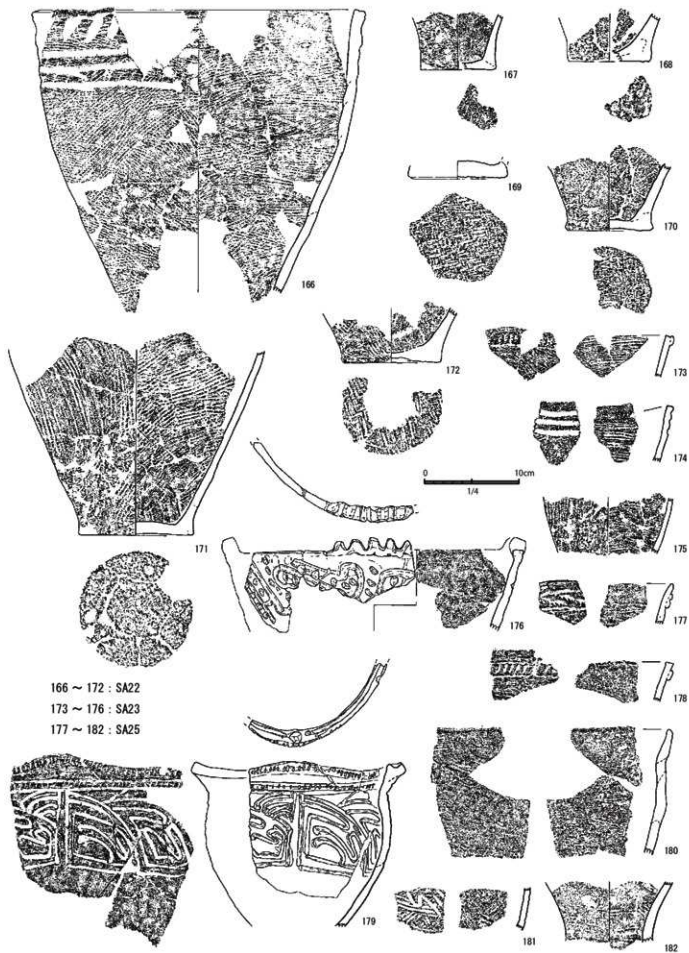
第 28 图 遺構出土遺物実測図(土器) [5]



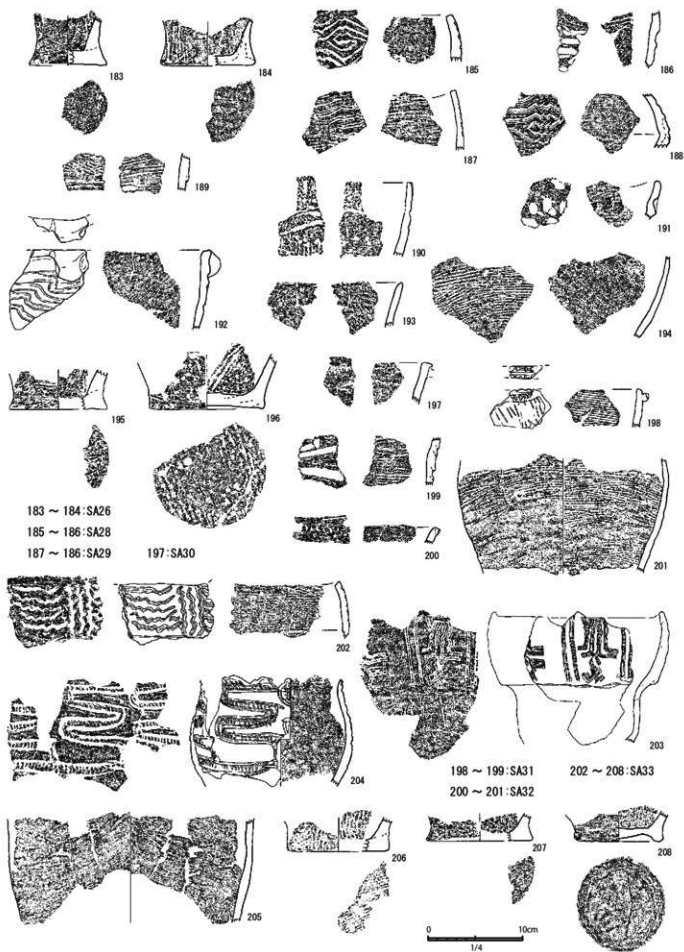
第 29 図 遺構出土遺物実測図(土器)〔6〕



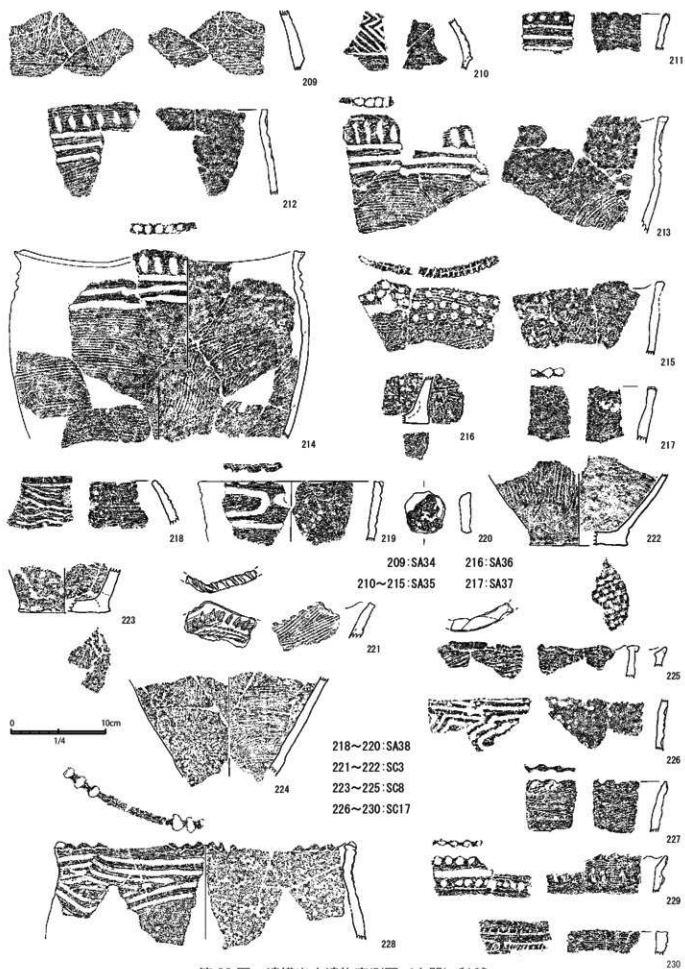
第 30 図 遺構出土遺物実測図(土器) [7]



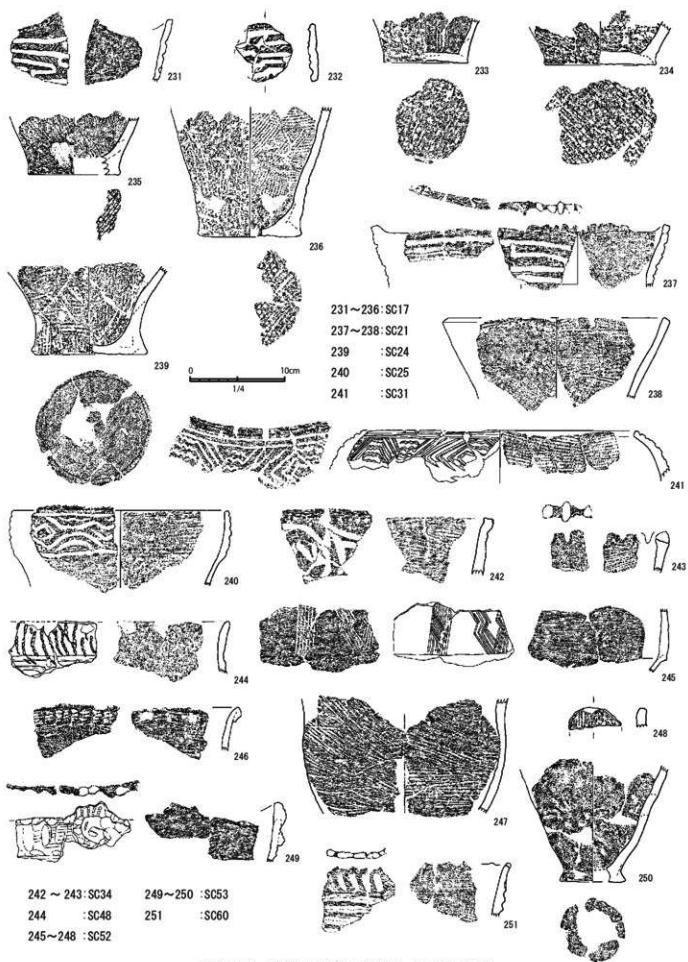
第 31 図 遺構出土遺物実測図(土器) [8]



第 32 図 遺構出土遺物実測図(土器) [9]



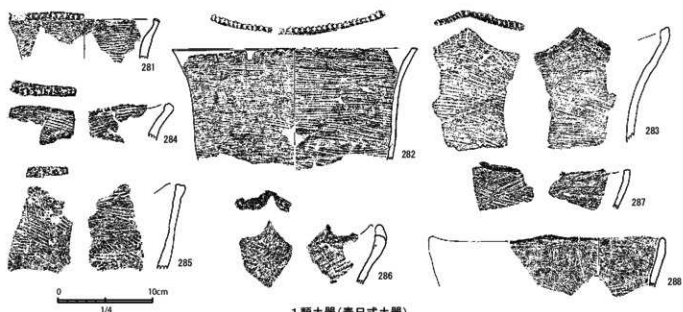
第33图 遺構出土遺物実測図(土器) [10]



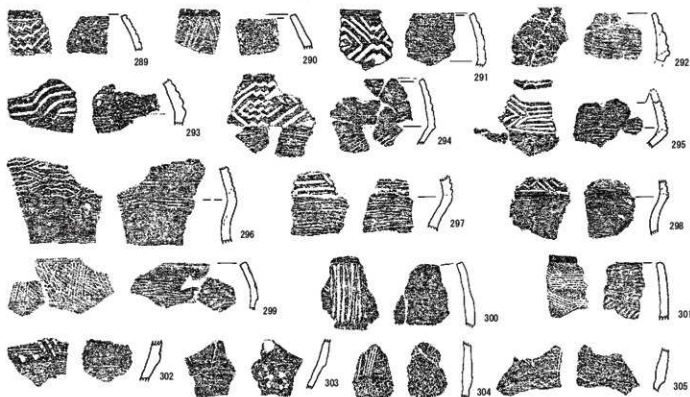
第 34 図 遺構出土遺物実測図 (土器) [11]



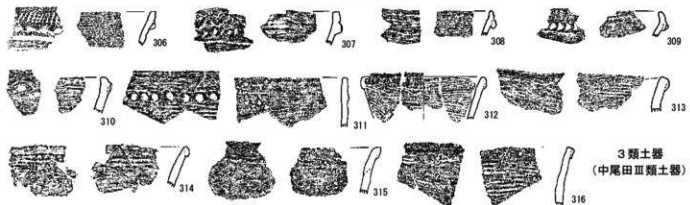
第 35 图 第三・IV層出土遺物実測図(土器)〔1〕



1類土器(春日式土器)



2類土器(太平式土器)

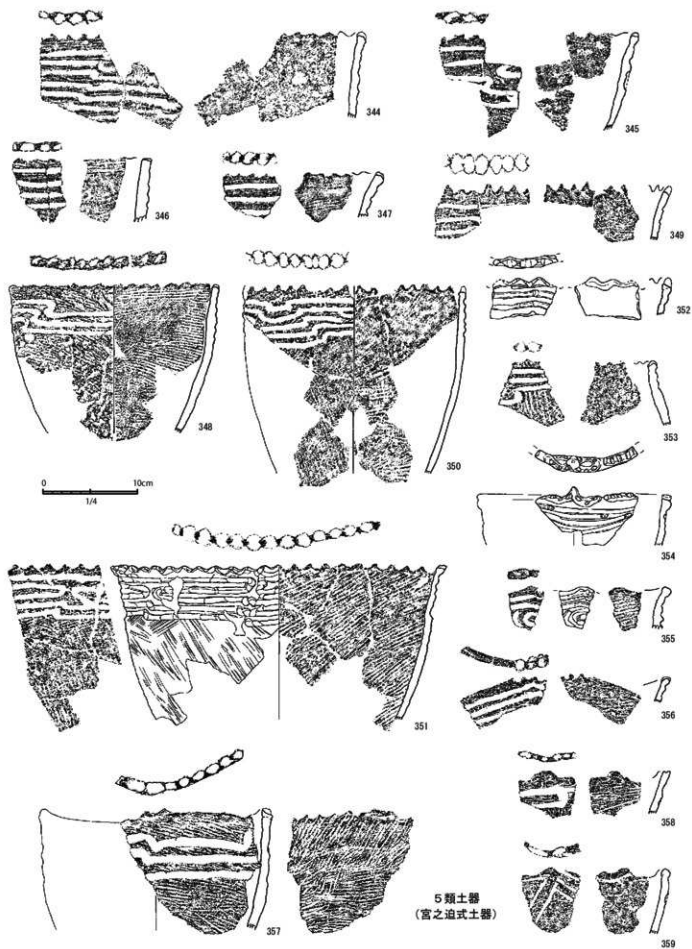


3類土器
(中尾田Ⅲ類土器)

第36図 第三・IV層出土遺物実測図(土器)〔2〕



第 37 图 第三・IV層出土遺物実測図(土器) [3]



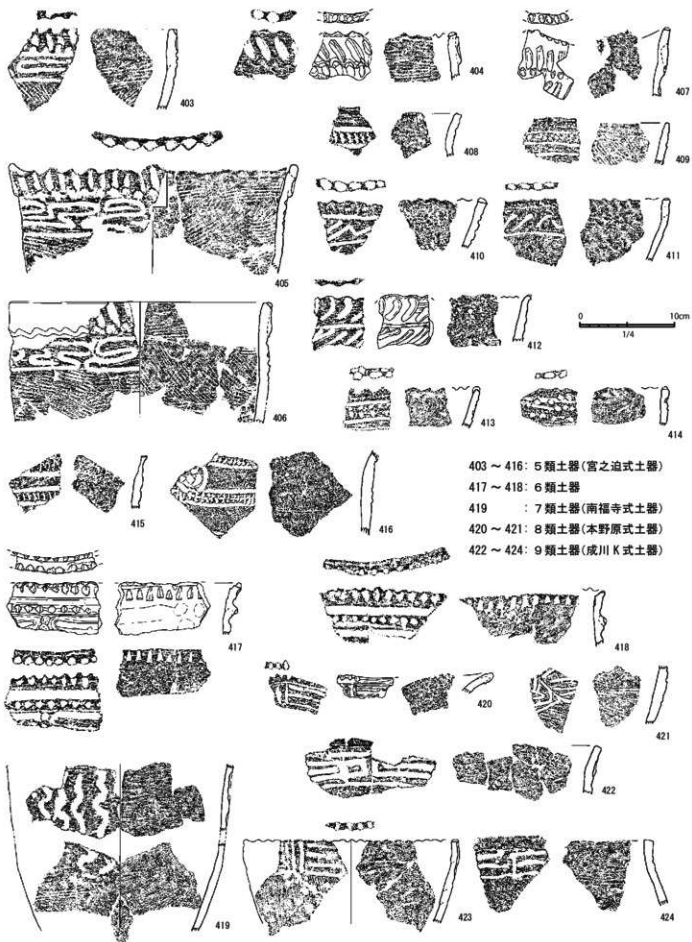
第38圖 第三・IV層出土遺物実測圖(土器) [4]



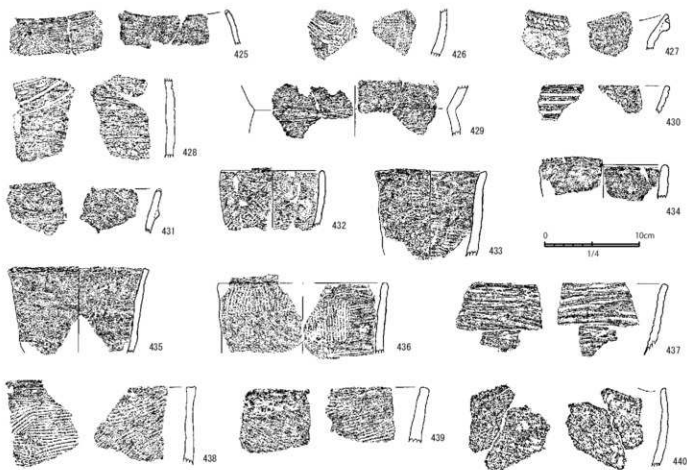
第 39 图 第三・IV 层出土遗物实测图 (土器) [5]



第40图 第三・IV層出土遺物実測図(土器)〔6〕



第41図 第三・IV層出土遺物実測図(土器)〔7〕



425～426:10 類土器 427:11 類土器(市来式土器) 428:12 類土器(納管式土器)
429:13 類土器 430:14 類土器(入佐式土器) 431:15 類土器(黒川式土器) 432～440:16 類土器

第42図 第三・IV層出土遺物実測図(土器)〔8〕

イ) 石器(第47～53図)

遺物包含層および他時期の遺構出土石器のうち、縄文時代に属するもの54点を図化掲載した。

打製石鏃(548～552) 二等辺三角形の平面形で、基部は平基(548・549)と抉りの入る凹基(550～552)がある。551・552は円形の抉りにより脚部を作り出す。

548は珪質頁岩、549・551はチャート、550は石英、552はガラス質安山岩の石材である。

局部磨製石鏃(553・554) 頁岩製で二等辺三角形の平面形で、基部はアーチ状の抉りを持つ。表表面を磨き出す。

石鏃(555) 珪質頁岩製で、剥片の下縁を鏃部とする。

石匙(556・557) 小型の石匙である。556はチャート、537は上牛鼻黒曜石製である。537は欠損品であり、一見して大型の石鏃ないし尖頭器様であるが、側縁部の片側のみ刃部を形成するので石匙とした。

スクレイパー(558～563) 558～561は三角形ないし縦長剥片をそのまま素材とし、その側縁(下縁)を細か

い剥離調整にて刃部とする簡素なつくりである。558・559は砂岩、561は安山岩製で、560・562・563に比べて大型である。560はチャート、562・563は三船産黒曜石製である。

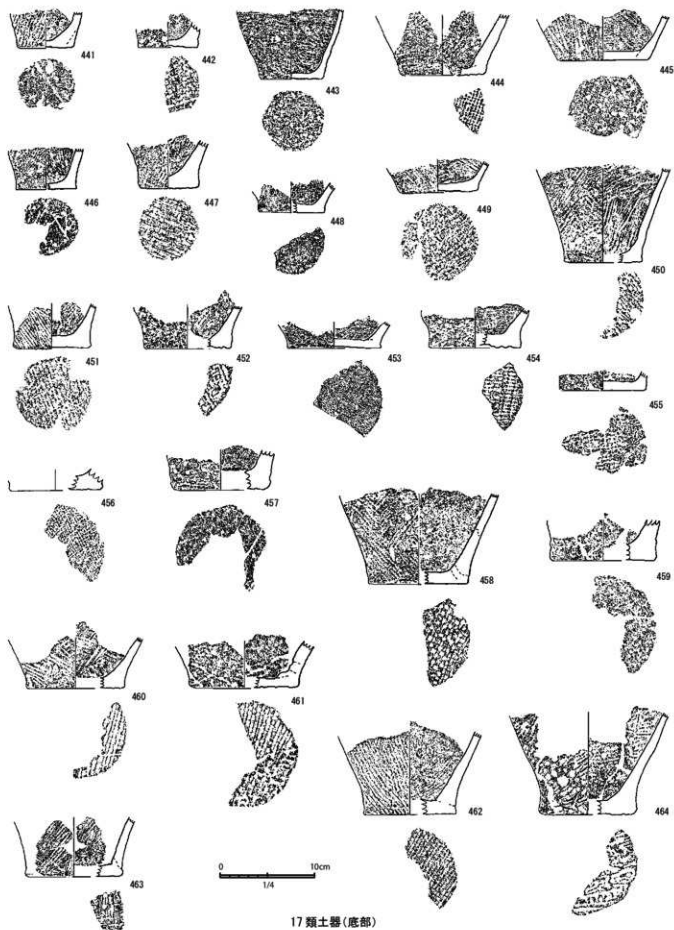
二次加工剥片(564～568) 564・565は頁岩、566は珪質頁岩、567は石英、568は上牛鼻産黒曜石を石材とする。

564～566は、方形状の比較的整った剥片、568はヘラ状ないしビック状の剥片の周縁を粗く二次加工するもので、スクレイパーに近い仕上がりである。567は石刃様の縦長剥片の末端部を集中的に剥離調整しており、石鏃状となる。

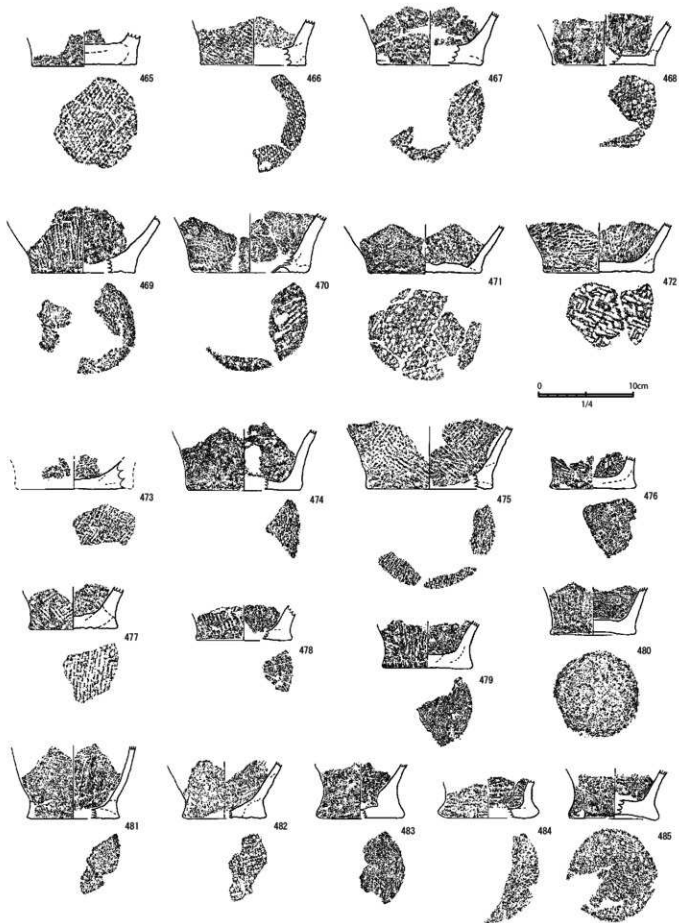
使用痕剥片(569～574) 569は砂岩、570は桑木留産黒曜石、571～574は三船産黒曜石製である。方形・鱗状や不定形剥片の下縁等に、刃こぼれ状の微細な剥離痕が残る。

磨製石斧(575～577) ホルンフェルス製で、基部や刃部が欠損している。575～577は小型(加工用)、578は大型(伐採用)石斧とみられる。

剥片(579) 磨製石斧(頁岩製)から剥離した剥片である。刃部再生剥片または、石斧を母材とした調整剥片とみられる。

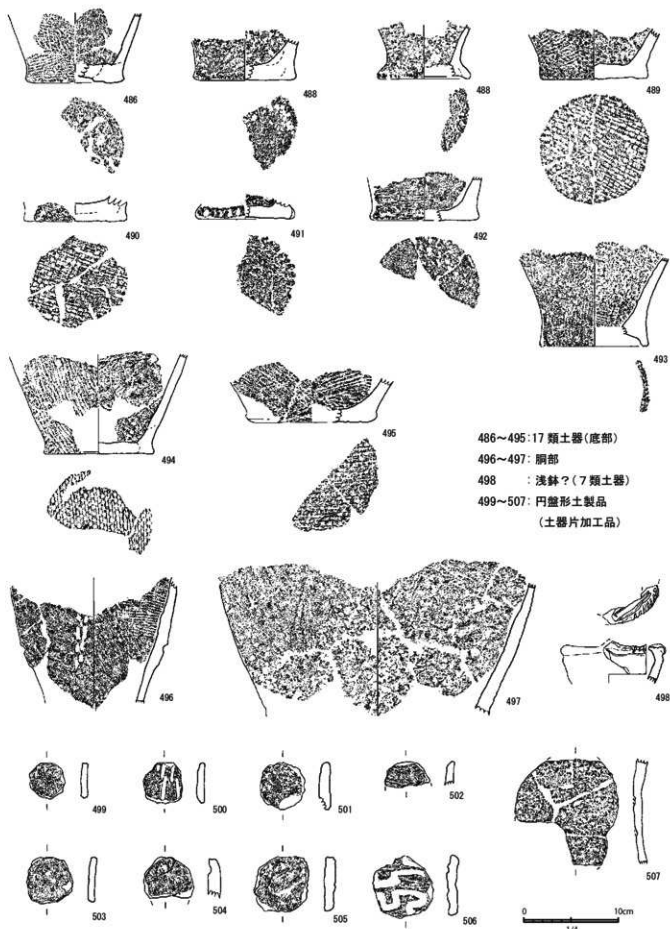


第 43 図 第三・IV層出土遺物実測図(土器) [9]

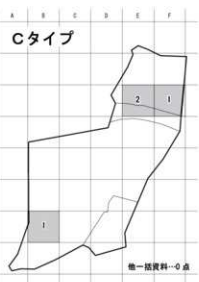
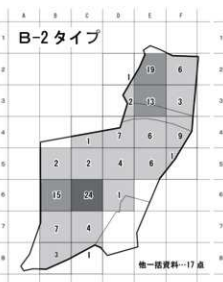
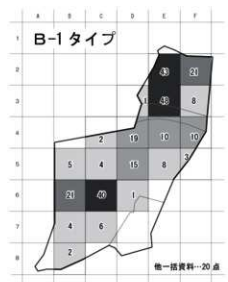
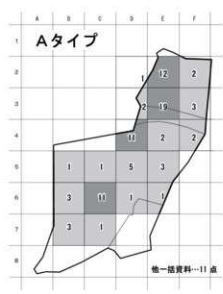
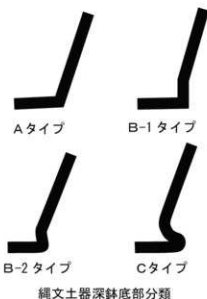


17 類土器 (底部)

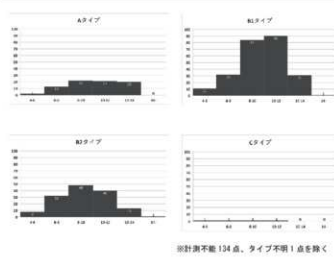
第 44 圖 第三・IV層出土遺物實測圖 (土器) [10]



第45図 第三・IV層出土遺物実測図(土器) [11]



各グリッド個体数分布状況

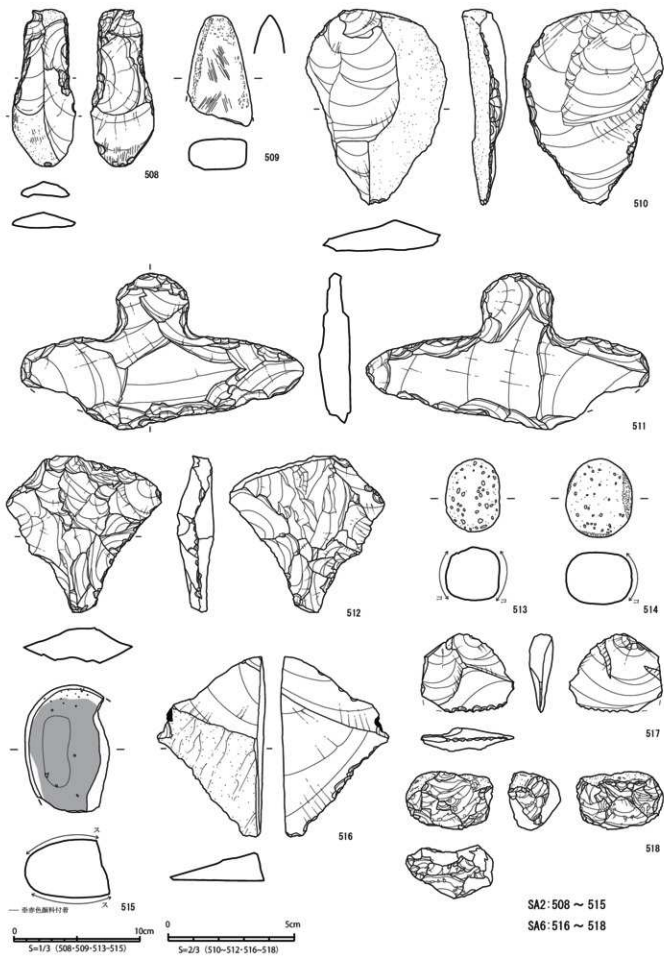


グラフ内数値は数量
白色物質付着不明--木炭1点、ナズ等3点

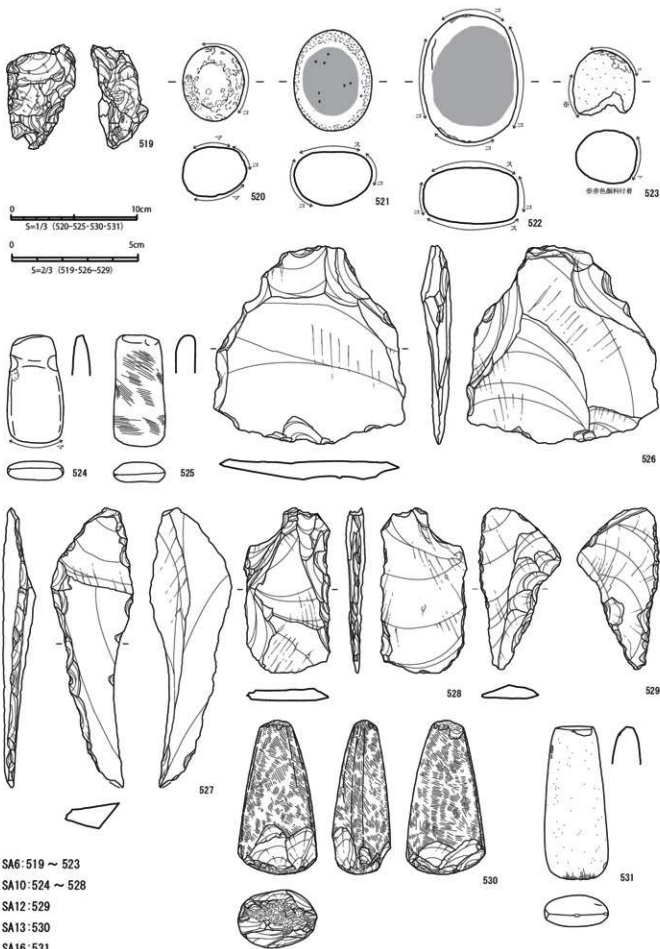
各タイプ別底径分布状況

白色物質と底部調整の関係

第46図 縄文土器深鉢底部関連図



第 47 图 遺構出土遺物実測図(石器) [1]



SA6: 519 ~ 523

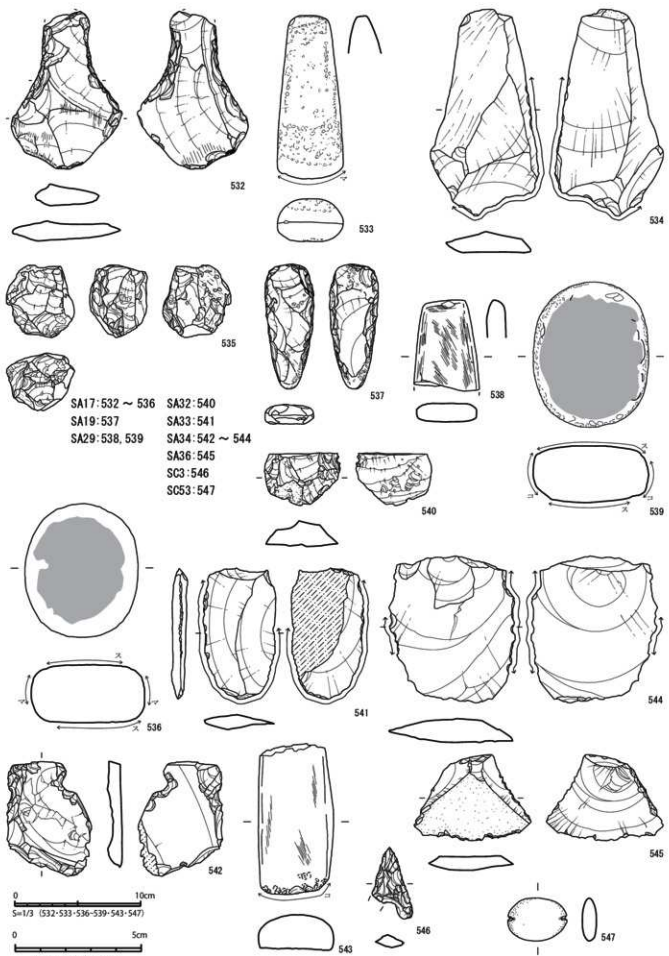
SA10: 524 ~ 528

SA12: 529

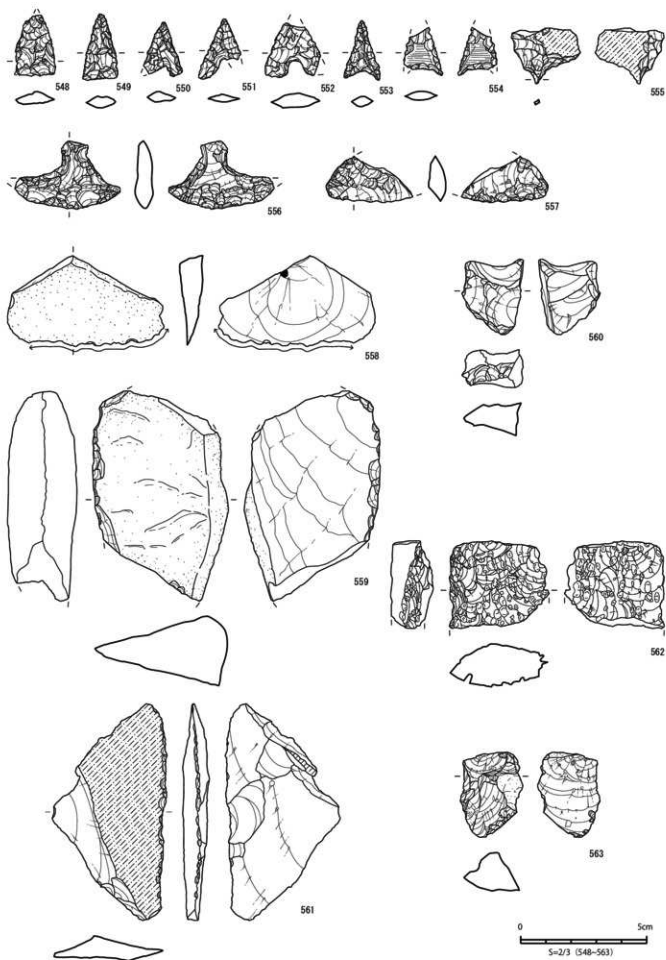
SA13: 530

SA16: 531

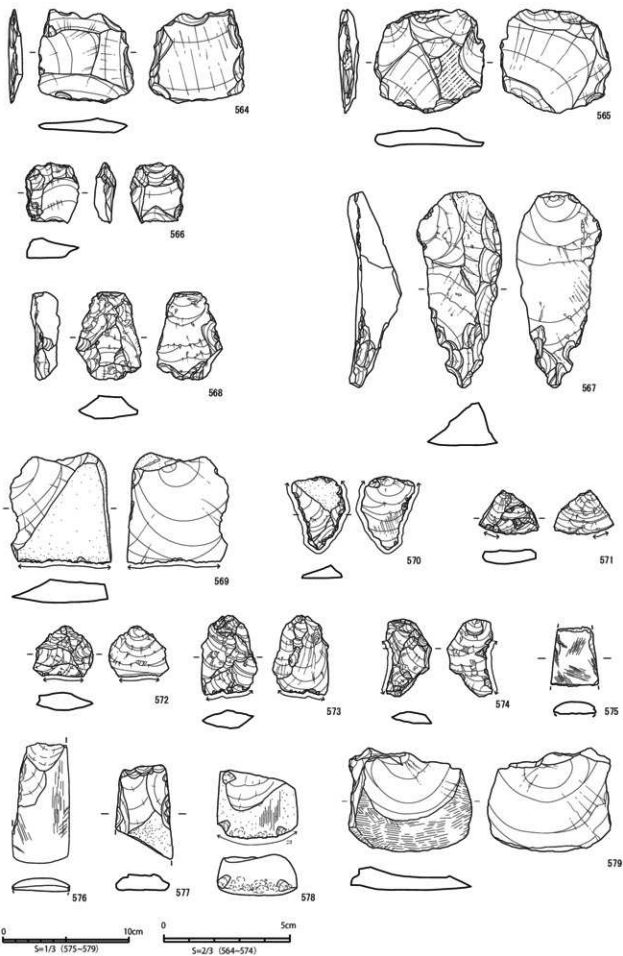
第 48 图 遺構出土遺物実測図(石器) [2]



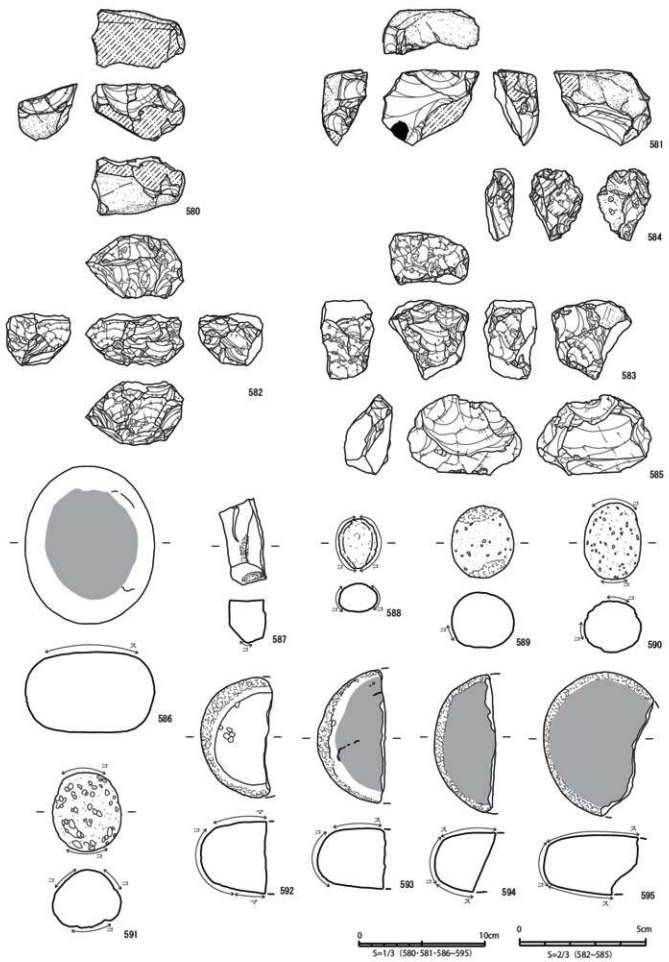
第 49 图 遺構出土遺物実測図(石器) [3]



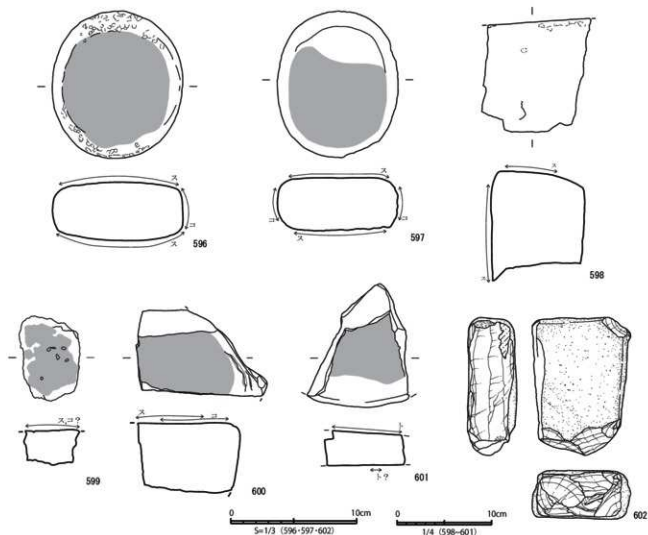
第50图 第三·IV層出土遺物実測圖(石器)[1]



第 51 图 第三・IV層出土遺物実測圖(石器)〔2〕



第 52 図 第三・IV層出土遺物実測図 [3]



第53図 第三・IV層出土遺物実測図(石器)〔4〕

石核 (580～585) 580・581は砂岩、582～584は三船産黒曜石、585は石英の石材を石核とする。580・581は石核成形することなく、礫の広口側で剥片剥離する。582～584は礫面を一部残すが、打面調整や打面転移によって剥片を剥離する。584はSX1(中世)の出土品である。

磨石 (586) 砂岩の円礫の表面を使用面とする。

敲石 (578・587～592) 578は磨製石斧の転用品である。588は砂岩製で、石皿ないし台石を打割して得た角柱状である。588～591は多孔質な安山岩の円礫を用いている。短辺側が使用面となる。592は砂岩製の円礫の周縁部を使用面とする。表裏面は磨滅している。

磨敲石 (593～597) 砂岩の円礫の表裏面に磨面、周縁に潰打痕が残り、断面は使用履歴に比例して箱型となる。597は宮崎県産の有孔虫化石(オキキュリナ)を含む砂岩製である。

石皿・台石 (598～602) 599は礫岩、その他は砂岩製で破砕や打割を受ける。602は台石としたが礫器の可能性もある。

(5) 小結

遺構の時期

遺構の床面(底面)出土土器ならびに埋土中出土の場合には最も新しい土器の型式を以て遺構の時期とするならば、堅穴建物跡の多くは、1類(春日式土器)・2類(大平式土器)・5類(宮之迫式土器)ならびに8類(本野原式土器)の時期にあたる(第6表)。よって、堅穴建物跡群は、縄文時代中期後葉～後期前葉の間に形成されたと考えられる。

一方、堅穴建物群と切りあう(重なり合う)土坑群は、堅穴建物跡群の形成期ないし、その後の時期と考えられ、後期中葉(11類:市来式土器)段階には、調査区内における遺構の形成活動は停滞ないし退潮的となる。

さらに、陥し穴状遺構群は、SC55出土遺物の内容から後期前葉以降に掘削されたものと考えられ、集落(堅穴建物・土坑)活動の衰微と軌を一にする事象とも解釈できる。

石器石材の選択 石器類も、土器の年代から概ね中期後葉～後期前葉に属するとみられる。特に、スクレイパー類に緑色の頁岩で薄く不定形な剥片を用いることや、黒曜石でも三船産を多用する石材選択のあり方は、縄文草創期・早期(第Ⅷ・Ⅸ・Ⅺ層)の様相と比較して特徴的ともいえる。

第5節 縄文時代早期の遺構と遺物（第Ⅷ・Ⅸ層の調査）

（1）概要

a) 第Ⅷ層 遺構は検出されず、第Ⅷ層の下部より、縄文土器深鉢片（甕ノ神式土器）や黒曜石の剥片とチップ（砕片）が数点出土したのみである。

b) 第Ⅸ層

遺構 堅穴建物跡6軒、平地式建物跡4軒、土坑15基、陥し穴状遺構7基、集石遺構8基、散敷11箇所、小穴（ピット）群がある。これらは、縄文時代早期前葉～中葉頃（前平式～手向山式土器併行期）の時期に営まれた遺構群である。
遺物 縄文土器深鉢片（前平式・加栗山式・吉田式土器、押型土器、手向山式土器等）や、石鏝・スクレイパー・磨石・敲石等の石器類も出土した。

なお、各遺構の掘り込み面（当時の生活面）は、第Ⅸ層の中～上層とみられるが、遺構検出作業は第Ⅸ層上面にて行った関係で、遺構内出土の遺物とすべきものを遺物包含層（第Ⅸ層）のものとして取り上げたものが少なからずある。

（2）層位と旧地形（第4・54図）

堆積状況 第Ⅷ・Ⅸ層は、調査区全体に広く堆積する遺物包含層である。なお、第Ⅲ～Ⅵ層堆積時は森林性土壌の形成期（第1節・第4図）であったため、樹根の深貫入や風倒木痕による擾乱が第Ⅷ・Ⅸ層まで及んでいた。

旧地形 基本地形は東から西へ延びる緩やかな丘陵尾根線と復元されるが、E3・4/F3・4Gr. 周辺は、比高差1m以上の谷地形となる。B5・6/B7/C7Gr. 周辺の等高線は大きく凹み、B7・8Gr. 周辺は舌状に張り出す地形となる。

（3）遺構（第54図）

分布状況 堅穴建物跡は、調査区の北東から南東に向けて緩やかに傾斜する尾根線上のうち、C5/D4・5/E4・5Gr. 周辺に群生している。また、平地式建物跡や土坑・集石遺構等は、堅穴建物群の内外に広く分布している。なお、SA43とSC61を結ぶ線から北側のE2～4/F3・4Gr. 周辺は、谷地形で散敷数箇所程度の遺構の疎らな空間であることから、集落（遺構群）範囲の北限になるとみられる。

a) 堅穴建物跡（第54・55図）

本項では、堅穴建物跡として検出された6軒（SA41～46）の構造上の特徴等をまとめたうえで、それぞれの堅穴建物跡について概要を記載する。各遺構の法量や出土物の内容については遺構一覧表（第6表）を参照されたい。

遺構埋土 基本土層の第Ⅸ～Ⅻ層由来の埋土であり、黒褐色や褐色系統の土色で、しりへの弱い軟質な土質である。第Ⅸ層のブロック土塊を含み場合もある。

遺物出土状況 遺構検出面近くから埋土の下位にかけて出土するケースが多く、床面直上の出土例は認められなかった。
平面形と床面積 平面形は方形または長方形で、隅部は直角とならずに丸みを帯びるものがある。床面積は、2㎡台（SA45）が最小で、3㎡台（SA41～43）、6㎡台（SA44）と続き、7㎡台（SA46）が最大の床面積となる。

主柱穴配置や屋内施設等 床面には明確な主柱穴が認められず、堅穴部の内縁や外縁に沿って小穴（ピット）が複数巡る構造である。具体的には、①堅穴部の外縁（SA41・45・46）、②堅穴部の内縁（SA44）、③堅穴部の内外縁（SA42・43）に区分される。堅穴建物の床面は、基本土層の床土層や屋内土坑といった付属施設は認められなかったが、床面中央には浅い方形の掘り込みを有するものがある（SA43・45）。
床面の状況 第Ⅸ層を床面（SM4）、第Ⅹ層を床面（SA41・45・46）とする他に、貼り床（SA42・43）を施すものがある。貼り床は、第Ⅹ層まで掘削したのちに、第Ⅸ～Ⅻ層由来の掘削土で0.1～0.2m程度浅く敷きならすものである。

遺構各説

SA41 長方形プランであるが、北東隅部は不整形である。E4・5Gr. に位置し、SC65・66よりも古い。長軸方向は座標北から東に振る。堅穴部の東縁に沿って、小穴（直径0.2m、深さ0.2m）が並ぶ。

遺構埋土中からは前平式・加栗山式土器の深鉢片が出土し、このうち3点を図化掲載した（第64図603～605）。

SA42 長方形プラン。D4・5Gr. に位置する。SA41と同じく、長軸方向は座標北から東に振る。堅穴部の内外縁に沿って、ほぼ等間隔に小穴が並び、内縁側は直径0.1m、深さ0.1m、外縁側は直径0.2m、深さ0.2mの規模となる。遺構埋土中からは、前平式・加栗山式土器の深鉢片のほか、石鏝も出土しており、このうち6点を図化掲載した（第64図606～610、第69図679）。

SA43 長方形プランであるが、南半部は隅部を持たず半円形となる。D4Gr. に位置し、長軸方向は真北に近い。SA42同様に堅穴部の内外縁に沿って小穴が並ぶが、内縁側の小穴の間隔は密である。床面の中央付近は、方形に浅く窪む。遺構埋土中からは前平式土器の深鉢片が数点出土したが、小破片のため図化に基えない。

SA44 方形プラン。D5Gr. に位置し、長軸方向は座標北から西に振る。堅穴部の内縁に沿って小穴（直径0.1m、深さ0.1m）が規則的な間隔で並ぶ。遺構検出状況から、その掘り込み面は第Ⅸ層の上位付近であるが、検出面付近では、焼礫の集積（散敷）が認められたことから、SA44の埋没後に散敷が形成されたことになる。

遺構埋土中からは吉田式・手向山式土器の深鉢片が数点出土しており、このうち1点を図化掲載した（第64図611）。

SA45 D5Gr. に位置し、遺構の埋没後はSC83に切られる。SA45は長方形プランであるが、北半部は隅部を持たず半円形となることから、SA44と同形態の平面形となる。長軸方向もSA44と同じく座標北から西に振る。堅穴部の外縁に沿って小穴がある程度規則的に並んでいる。

遺構埋土中からは押型土器（楕円形）の深鉢片が数点出土しており、このうち1点を図化掲載した（第64図612）。

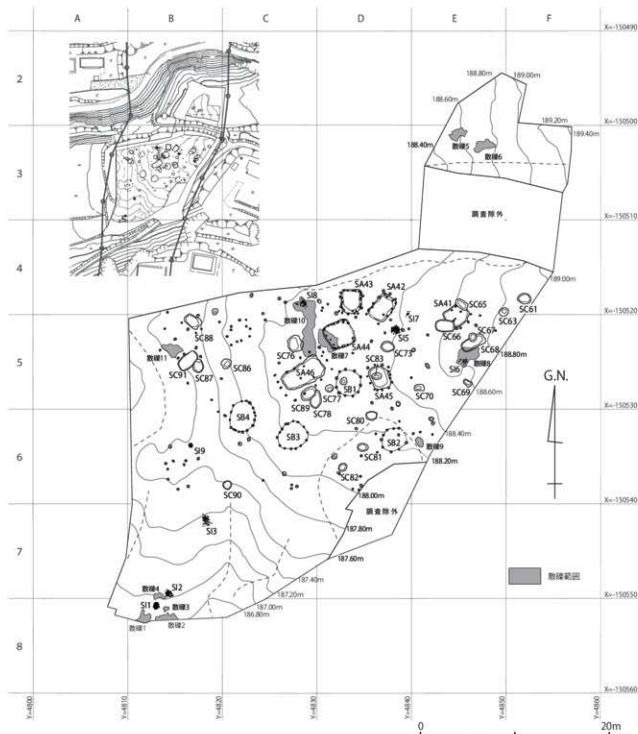
SA46 長方形プラン。C5/D5Gr.に位置し、床面積は7.7㎡と最も大きい。遺構の掘り込み面は第IX層の上位付近と考えられる(写真図版12)。長軸方向は、SA41・42と同じく座標北から東偏する。

竪穴部の外縁から約0.5m離れた位置で竪穴部を取り囲むように並ぶ小穴列が認められた。直径は0.2m前後、深さ0.15～0.2mであり、部分的に小穴のない箇所がある。これら竪穴部を一回り大きく圍繞する小穴列は、竪穴床面に明確な主柱穴が認められないことから、竪穴建物に伴う柱穴列と考えられる。

なお、この柱穴列の一つは、SC89を切る関係にあるので、SC89はSA46よりも古い遺構となる。

遺構内の遺物は、遺構検出面付近から床面よりやや深い位置に分布しており、前平式・加葉山式・吉田式土器の漆絵片と石鏃等の石器類が出土した。これら遺物のうち、7点を図化掲載した(第64図613～616、第69図680～682)。

SA46の遺構埋土を水洗選別した結果、炭化物を少量であるが回収できたので、放射性炭素年代測定を実施した。その結果、9420±30(BP)という値(第10表試料13)が得られた。



第54図 縄文時代早期の遺構分布図(第IX層)

b) 平地式建物跡 (第54・56図)

調査区内にて検出された小穴(ピット)のうち、一定の間隔で円形や楕円形に巡るといった有機的な関連性を有する小穴群を抽出した結果、少なくとも4箇所が認められた。本報告では、これらの小穴群を何らかの建物跡の柱穴と積極的に評価し、「平地式建物跡」(SB1~4)とする。

分布 平地式建物跡は、竪穴建物群内または外縁に分布しており、他遺構との切りあい関係はない。SB2~4は標高188.20~188.00mの等高線上に位置している。

規模と構造 直径0.2~0.3mを測る円形の柱穴(小穴)10~20基弱を円形ないし楕円形に巡らすものであり、個々の柱穴は垂直に掘削されている。深さは検出面から0.2~0.3m程度である。SB1~4の柱穴列よりも内側の空間を建物内部とするならば、その平面積は5~7㎡台となる。

規模(平面積)と柱穴列の配置状況(構造)に着目すると、SB1・2とSB3・4に大きく二分される。SB1・2の平面積は5~6㎡台であり、柱穴は10基程度で正円に近い形で巡る。長軸は2.7~3m、短軸は2.5~2.8m、柱穴間距離は概ね0.6~0.8mである。SB3・4の平面積は7㎡台で、15~17基の柱穴列が楕円形に巡る。長軸は約3.2m、短軸は2.65~2.8m、柱穴間距離は不均等であり、総じてSB1・2のそれよりも短く、密に柱穴が配される。

柱穴埋土 竪穴建物跡と同様に、基本土層の第IX~XII層由来の埋土であり、第X層のブロック土塊を含む。

遺構各説

SB1 D5Gr.に位置し、SA45・46の間に位置する。SB1の中央よりやや東側に寄った位置に土坑があり、その底面付近には焼土や炭化物が堆積していた。この土坑がSB1に伴うものであれば、地床戸とも考えられる。

ただし、当時の生活面は、検出面より0.1~0.2m以上の位置と想定すると、地床戸としては掘り込みが深い。出土遺物は、柱穴内出土の蔽石がある(第69図683)。

SB2 D6Gr.に位置する。南東方向に窪む地形に立地する。SB2の北東部分は柱穴列が途切れているが、攪乱等で欠失したものでなければ、出入口部分にあたると思われる。

柱穴内の遺物はないが、SB2の範囲と重なる遺物包含層(第IX層)からは前平・中原式土器や押型文土器(楕円文)の深鉢片等が出土している(第62・63図)。

SB3 C6Gr.に位置する。柱穴列は比較的密に配されているが、西側部分の一部では柱穴間距離がやや広い箇所がある。柱穴内の出土遺物はない。

SB4 C5・6Gr.に位置する。SB3とは尾根線に対して対称的な位置関係にある。柱穴列はSB3と同じく密に配されるが、北北西方向の一部分では柱穴間距離がやや広がる。柱穴内の遺物はないが、SB4の範囲と重なる遺物包含層(第IX層)からは加栗山・中原式・手向山式土器の深鉢片等が出土している(第62・63図)。

c) 土坑 (第54・57~59図)

土坑として検出された15基(SC61・63・65~70・76・78・86~89・91)の構造上の特徴等をまとめたうえで、それぞれの土坑について概要を記載する。

なお、各遺構の法量や出土遺物の内容については遺構一覧表(第6表)を参照されたい。

土坑の分布 土坑は竪穴建物群の付近や、竪穴建物群から離れた場所等で群在しており、特にE4・5/F4Gr.やB5Gr.では土坑群としてのまとまりを見出せる。

遺構埋土と遺物 竪穴建物跡等と同様な埋土の土色・土質を示す。また、土坑の大半は遺物の出土がなく、SC88の底面で出土した前平式土器の深鉢片が特筆される程度である。

平面形・平面積 土坑の平面形は、円形や楕円形・隅丸長方形プランに大別される。土坑の掘削は基本的に粗く雑であり比較的整えられているのはSC66~68・91程度である。

平面積は、最小で0.1㎡台(SC69・70)、最大で約2.3㎡(SC91)である。その他、0.2㎡台(SC67・86)、約0.4㎡(SC65)、0.7㎡台(SC61・63・87)、約1㎡(SC76・89)、約1.2㎡(SC78・88)約1.7㎡(SC66)、約2㎡(SC68)があり、0.2~0.3㎡ずつ大きくなる規模(平面積)の規則性が読み取れる。

構造 断面形は箱型や逆台形状であり、陥し穴状遺構と比べて深さは浅く、壁面の立ち上がりの角度は緩急。

SC88・91のように、土坑掘り方の周囲に小穴(ピット)が伴う可能性がある土坑も認められた。

遺構各説

SC61 不整な楕円形プラン。F4Gr.に位置し、長軸方向は等高線に直交する。遺物の出土はない。

SC63 不整な楕円形プラン。E4Gr.に位置し、長軸方向は等高線に斜交する。遺物の出土はない。

SC65 隅丸長方形プラン。E4Gr.に位置し、SA41の北東辺を掘り込む。長軸方向は等高線に斜交する。遺物はない。

SC66 隅丸長方形プラン。E5Gr.に位置し、SA41の南東辺を掘り込む。長軸方向は東西方向にとる。検出面付近にて磨鉢石が出土している(第69図684)。

SC67 不整円形プラン。E5Gr.に位置する。SC68の北辺を掘り込む。遺物の出土はない。

SC68 隅丸長方形プラン。E5Gr.に位置し、長軸方向は等高線と直交する方向をとる。SC67に切られ、S16を含む散礎8はSC68より後出する層位関係にある。

遺構内の出土遺物はないが、SC68の範囲と重なる遺物包含層(第IX層)からは下刺式土器や押型文土器(楕円文)の深鉢片等が出土している(第62図)。

SC69 不整長方形プラン。E5Gr.に位置する。長軸方向は等高線に平行する。出土遺物は、剥片が出土したのみである。

SC70 隅丸長方形プラン。E5Gr. に位置する。長軸方向は東西方向をとる。遺物の出土はない。

SC76 不整長方形プラン。C5Gr. に位置する。長軸方向は南北方向にとる。S18 を含む散礫 10 は、SC76 より後出する層位関係にある。

遺構内出土遺物には剥片があり、SC76 の範囲と重なる遺物包含層（第IX層）からは前平・加栗山式土器の深鉢片等が出土している（第62・63図）。

SC78 不整長方形プラン。C5Gr. に位置し、長軸方向は南北方向をとる。SC89 との切りあい関係から、SC89 より古い土坑である。遺物の出土はない。

SC86 不整長方形プラン。C5Gr. に位置し、長軸方向は等高線と直交する。

遺構内の出土遺物はないが、SC86 の範囲と重なる遺物包含層（第IX層）からは前平式土器や押型文土器（山形・楕円文）の深鉢片等が出土している（第62図）。

SC87 不整楕円形プラン。B5Gr. に位置し、長軸方向は南北方向をとる。SC91 の南側長辺を掘り込む、出土遺物はない。

SC88 隅丸長方形プラン。B5Gr. に位置し、長軸方向は等高線と直交する。土坑の東西短辺や南側長辺の壁面立ち上りの状況から、本来は二段掘り状であった可能性がある。また、土坑の周囲には小穴（ピット）が5基確認された。

このうち、長辺方向の小穴は、直径0.3m・深さ0.2～0.3mと他3基の小穴よりも大きくて深い。小穴の存在から土坑に覆層的ないし架橋的な構造物が伴う可能性がある。

遺物は、遺構底面の直上にて前平式土器の深鉢1点（第64図617・写真図版12）、遺構の範囲と重なる遺物包含層（第IX層）より前平式土器の深鉢片が出土した（第62図）。

SC89 楕円形プラン。C5Gr. に位置し、長軸方向は等高線と直交する。SA46 と SC78 との切りあい関係から、SC78 より新しく、SA46 より古い。

遺物は、埋土中より加栗山式土器の深鉢片や剥片が出土した（第64図618）。

SC91 隅丸長方形プラン。B5Gr. に位置し、長軸方向は等高線と直交する。SC87 との切りあい関係から、SC87 より古い土坑である。土坑の周囲には小穴（ピット）が4基確認された。小穴の大きさは、直径0.2～0.3m・深さ0.2mである。遺物の出土はない。

d) 陥し穴状遺構（第8・59図）

第X層面で検出された土坑のうち、その断面形が箱形状でその立ち上がりが垂直に近い形状の土坑は、地形に沿って列状に並ぶことが読み取れた。よって、これらの特徴を

有する土坑を陥し穴状遺構として報告する。

陥し穴状遺構は7基（SC73・77・80～83・90）で、全体の主な特徴等をまとめたうえで、個々の遺構について概要を記す。

なお、遺構の法量等については、遺構一覧表（第6表）を参照されたい。

分布 SC73・81～83 はE5・6Gr. にあり、標高188.40～188.00mの等高線上にあり、尾根線上（SC73）から地形変換線上（SC82）に向けた南北方向に列状に連なる。その間隔は3～3.5mとほぼ等間隔である。これら陥し穴状遺構の長軸方向は、東西方向にとる。

一方、SC70 と SC90 は、北東-南東方向に延びる尾根線上に単独で存在し、遺構の長軸方向は等高線と直交する。**遺構埋土** 陥し穴状遺構の埋土は、基本土層の第IX～XII層を由来とするものである。堅穴建物跡や土坑の埋土と比べて、陥し穴状遺構の埋土は、ローム質で粘性のある埋土が堆積しているものが多く、に比べて黄みを帯びた褐色を呈するものが多いのが特徴である。

規模・構造等 平面形は楕円形・隅丸方形を基調とし、長軸長は概ね1m前後のものが多く、深さは約0.5～0.9mであるが、本来の掘り込み面の高さを考慮すると、さらに0.2m～0.5m程度深かったと考えられる。

遺構の断面形は箱型で、壁面は底面との境からほぼ垂直に立ち上がるものがほとんどである。底面には逆茂木等の痕跡はない。陥し穴状遺構の埋土中遺物はない。

遺構各説

SC73 D5Gr. に位置する。陥し穴状遺構とした土坑の中では最も規模（平面積）が大きい。平面形は楕円形を呈する。

SC77 D5Gr. に位置し、SB1 と SC78・89 の間にある。隅丸方形プランであり、SC83 と同じ小型の規模（平面積）である。

SC80 D6Gr. に位置する。隅丸長方形プランである。掘り込みの断面形は箱型であるが、底部と壁面の立ち上がりとの境は丸みを帯びる。

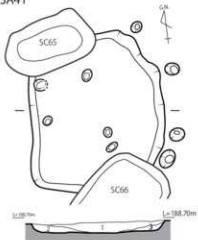
SC81 D6Gr. に位置する。SC80 と同規模（平面積）で隅丸長方形プランである。遺構に伴う遺物はないが、検出面より上位にて平格式土器の深鉢片が出土した（第62図）。

SC82 D6Gr. に位置する。SC80・81 よりやや小型の規模である。平面形は楕円形だが、底面の平面形はむしろに近い。

SC83 D5Gr. に位置する。SA45 の遺構埋土を掘り込んでいる。楕円形プランで、SC77 と同じ小型の規模（平面積）であるが、その深さは0.82mと深めである。遺構に伴う遺物はないが、検出面より上位にて平格式土器の深鉢片が出土したが小破片である（第62図）。

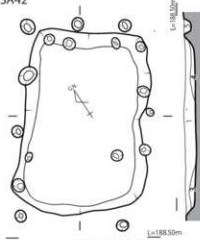
SC90 C6Gr. に位置する。SC77 に類似した隅丸方形プランであり、SC77 よりやや大きめである。

SA41



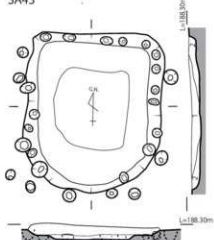
- 1 黒褐色土 しまり弱く、灰白色・黄白色砂や瓦層のフラック土を多く含む
- 2 におい黄褐色土 弱くしまり、瓦層のフラック土を多く含む
- 3 暗茶褐色土 弱くしまり、灰白色・黄白色砂や瓦層のフラック土を多く含む

SA42



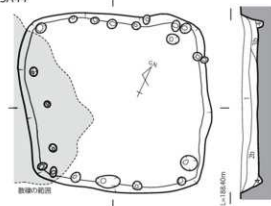
- 1 黒色土 しまり強く、赤い砂を含む
- 2a オリーブ褐色土 しまり強い、瓦層のフラック土をわずかに含む
- 2b オリーブ褐色土 しまりも強い、瓦層のフラック土を多く含む
- 3 におい黄褐色土 しまりあり、瓦層のフラック土を含む
- 4 褐色土 しまり強い、白色砂を多く含む
- 5 暗褐色土 しまり強い、白色砂を含む

SA43



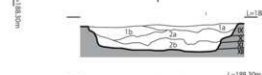
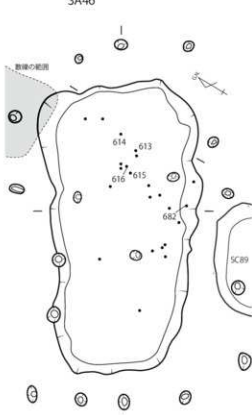
0 2m
1/60

SA44



- 1 黒色土 しまり弱く、灰白色・黄褐色・灰化物砂を含む。縁石部では縁石の断片的な埋め込みあり
- 2 黒褐色土 しまり強く、瓦層のフラック土を多く含む
- 2a 黄褐色土 しまり弱く、黄褐色・灰白色砂の瓦層のフラック土を含む
- 2b 黄褐色土 しまりも強い、瓦層のフラック土を多く含む
- 4 暗褐色土 しまりよく、中粒性あり。下層には小礫を含む

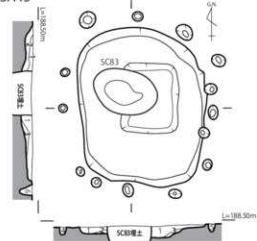
SA46



- 1a 黒褐色粘質土 しまり強く、粘性や中粒性、灰白色や黄褐色砂を含む
- 1b 黒褐色粘質土 1aよりも粘土の含有率が低い
- 2a 暗褐色粘質土 しまり弱く、粘性や中粒性、灰白色の黄褐色砂を含む
- 2b 暗褐色粘質土 2aよりも粘性、瓦層のフラック土を含むもの
- 3 オリーブ黒色土 しまり弱く、灰白色・黄褐色砂を含む
- 4 黒色土 しまり強く、瓦層のフラック土を多く含む

0 2m
1/60

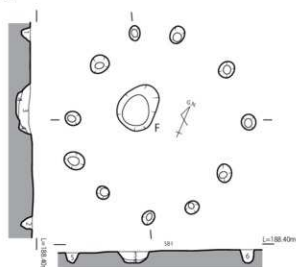
SA45



- 1 黒色土 しまり弱く、粘性や中粒性、灰白色や黄褐色砂を含む
- 2 オリーブ褐色土 しまり弱く、瓦層のフラック土を含む
- 3 におい黄褐色土 弱くしまり、瓦層のフラック土を多く含む
- 4 暗褐色土 しまり強く、白色砂を含む
- 5 黒褐色土 しまり強く、瓦層のフラック土を含む
- 6 暗褐色土 しまり強く、白色砂を含む

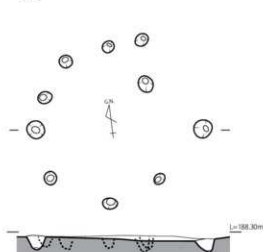
第55図 竪穴建物跡実測図

SB1

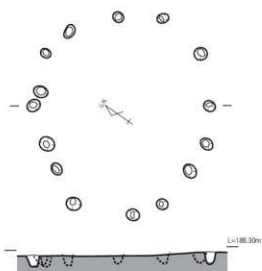


- 1 黒褐色土 しまりなく、灰白色・黄褐色を含む
- 2 暗赤〜アズ黒色土 しまりはやや強い、互層ブロック土を含む
- 3 黒色土 しまり強く、地上段中何れも物跡を含む
- 4 黒褐色土 地上段を比較的多く含む、印化物や互層ブロック土をまばらに含む
- 5 アズ黒色土 しまりなく、互層ブロック土を含む
- 6 黒褐色土 しまり強く、互層ブロック土を多く含む

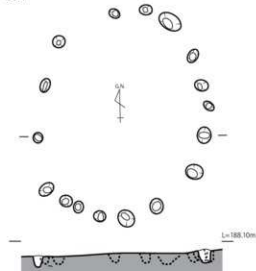
SB2



SB3



SB4



第56図 平地式建物跡実測図

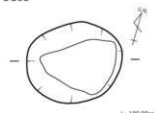
SC61



- 1a 黒色土 しまりなく、灰白色・黄褐色をわずかに含む
 1b 黒色土 1aよりピストルの含有が多い



SC63



- 1 黒褐色土 しまりないが、粘性中や赤
灰白色・黄褐色をわずかに含む
- 2 灰黄褐色土 しまり強い、灰白色・黄褐色
や互層ブロック土を多く含む

SC65



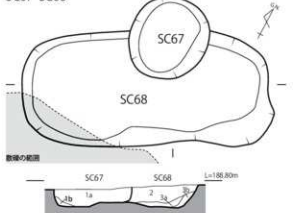
- 1a 黒褐色土 しまりはやや強い、互層ブロック土を少量含む
- 1b 黒褐色土 1aよりも黄味が強い
- 2 灰白〜黄褐色土 しまりない互層土の層上
- 3 黒色土 しまりあり、灰白色・黄褐色を少量含む

第57図 土坑実測図(1)

SC66



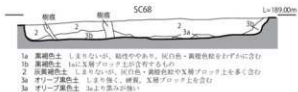
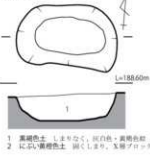
SC67・SC68



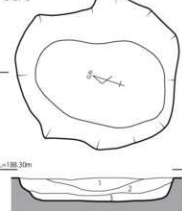
SC69



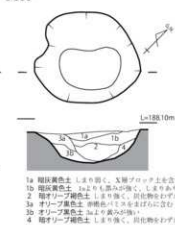
SC70



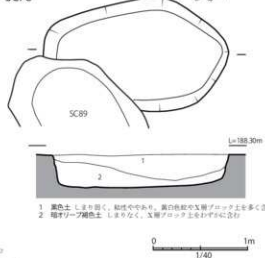
SC76



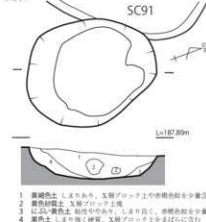
SC86



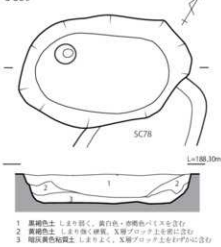
SC78



SC87

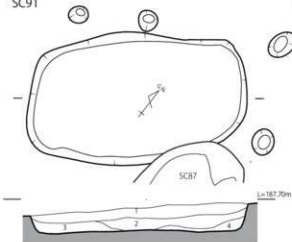


SC89



第58図 土坑実測図(2)

SC91



- 1 黒色土 しまり強く、粘性中であり、黄白色粒を少量含む
- 2 暗オリーブ褐色土 しまり強く、非粘性土と互層ブロック土をわずかに含む
- 3 黄褐色土 しまり強く、硬質、互層ブロック土を多く含む
- 4 黒褐色土 しまり強く、互層ブロック土をわずかに含む

SC88



- 1a 黒色土 しまり強く、粘性中であり、黄白色粒をわずかに含む
- 1b 黒色土 1aよりも黄みが強い
- 2a 黄褐色土 しまり強く、硬質、黄白色粒をわずかに含む
- 2b 黒褐色土 2aよりも黄みが強い
- 3 オリーブ褐色土 しまり強く、硬質、互層ブロック土を含む
- 4 暗オリーブ色粘質土 粘性強く、しまりあり、黄白色粒を少量含む

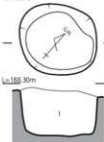
SC73



- 1a 近い黄褐色粘質土 しまり強く、灰白色・黄白色粒を互層ブロック土を含む
- 1b 近い黄褐色粘質土 2aよりも黄みが強い
- 2a 暗褐色粘質土 しまり強く、水気を含む、互層粘土の層上
- 2b 暗褐色粘質土 2aよりも黄みが強く、やや硬くなる

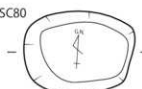


SC77



- 1 近黄褐色土 しまり強く、灰白色・黄白色・黄褐色粒を互層ブロック土を多く含む

SC80



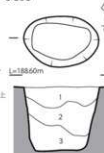
- 1 明黄褐色土 しまり強く、互層ブロック土を含む
- 2a 暗黄褐色粘質土 しまり強く、硬質、黄白色粒をわずかに含む
- 2b 暗黄褐色粘質土 2aよりも黄みが強い
- 3 近い黄褐色粘質土 しまり強く、互層粘土の層上

SC81



- 1 黒褐色土 しまり強く、灰白色・黄褐色粒を含む
- 2 暗褐色粘質土 しまり強く、互層ブロック土を含む
- 3 黒色土 しまり強く、互層ブロック土を含む

SC83



- 1 近い黄褐色粘質土 しまり強く、互層ブロック土を含む
- 2 暗褐色粘質土 しまり強く、互層ブロック土を含む
- 3 暗褐色粘質土 互層ブロック土を多く含む

SC82

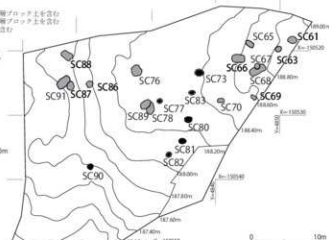


- 1 黒褐色土 しまり強く、灰白色・黄褐色粒を含む
- 2 暗オリーブ粘質土 しまり強く、硬質粒をわずかに含む

SC90



- 1 黒色土 しまり強く、粘性中であり、黄白色粒を少量含む
- 2 黒褐色土 しまり強く、硬質
- 3 オリーブ褐色土 しまり強く、互層ブロック土を多く含む



土坑・陥し穴状遺構分布図
黒塗りは陥し穴状遺構

第59図 土坑・陥し穴状遺構実測図

e) 散礫・集石遺構 (第54・60図)

今回の発掘調査では、焼礫が分布する範囲を散礫とし、その散礫のなかで特に焼礫が密集するものや、散礫を伴わない焼礫の密集部分を集石遺構とした。

散礫は11箇所(散礫1~11)、集石遺構は8基(S11~3・5~9)検出された。散礫や集石遺構内の焼礫は、拳大から人頭大の円礫・亜円礫及び掌大の扁平礫・角礫が被熱により破砕されたものであり、その石材は遺跡周辺の崖面や河川にて採取可能な砂岩や頁岩等である。

これらの散礫・集石遺構は、調査区全体に分布していたが、堅穴建物跡や土坑に比べて数的に少なく、密集度も低い。大きくは、堅穴建物跡や土坑群内(散礫8~11・S15~8等)と、堅穴建物跡群から離れた傾斜面や谷地形沿い(散礫1~6、S11~2等)に分布するものがある。

散礫のうち、散礫3・5~7・9・11のように集石遺構を伴わない点や、散礫7・8・10は、堅穴建物跡や土坑の埋没後に形成される点も特徴的である。

集石遺構は、円形ないし不定形の掘り込みを持つもの6基(S11~3・5・8・9)と、持たないもの2基(S16・7)がある。両タイプとも配石は伴わず、遺物の出土もない。掘り込みの深さは検出面から約0.15~0.3mである。

なお、集石遺構の法量等については、遺構一覧表(第6表)を参照されたい。

遺構各説

散礫1~4/S11-2 B7-8Gr.に位置する。S11-2を囲むように散礫1~4が広がる。この付近は南東方向に舌状に張り出す下り勾配の傾斜面である。

散礫1-2は第IX層でも中~下位(第60図下段)、散礫3-4とS11-2は第IX層の中心にある(写真図版14)。散礫や集石遺構に直接伴う遺物はないが、同グリッド内では加栗山式・中原式・手向山式土器の深鉢片や石鍬、剥片、磨石等が出土している(第62・63図)。

S11は、不整形の掘り込みを有し、断面形は浅いすり鉢状。焼礫は、底面からやや浮いた位置で密集しており、被熱により赤色を呈するものが多く、破砕も進んで小礫化している。

S12は、S11と同じく不整形の掘り込みを持ち、その断面形は箱型に近い。検出面付近に焼石が集中しており、掘り込み内は微細な炭化物粒を含む黒色土で満たされている。

S13 B8Gr.に位置し、S12とS19を結ぶ中間地点にあたる。SC90付近から南側へ延びる浅い谷地形から西側の緩い斜面に立地する。東西方向に長い不整形の掘り込みの断面形は逆台形状である。焼礫は掘り込み内部の全体から出土し、被熱による破砕が進み小礫化が顕著である。

S15 D5Gr.に位置し、付近にはS17・SA42・SC73がある。正円に近い掘り込みをもち、その規模は集石遺構のなかで最も大きい。断面形は逆台形状と考えられる。焼礫は、掘り

り込み底面から浮いた位置から密集して出土したが、南側部分はまばらとなる。

掘り込み底面付近は、黒色土が堆積しており、炭化材が点的に出土した。この炭化材について、樹種同定と放射性炭素年代測定を行った結果、コナラ属アカガシ亜属・8425±30(Ⅱ)という値が得られた(第9表表脚9・第10表表脚20)。

散礫5-6 E3Gr.に位置する。東から西方向に向かう浅い谷地形から北側のかけ上がり部分に分布する。焼礫の密集度は低く、赤化礫もさほど多くない。よって、他所からの流れ込みによる集積という可能性もある。なお、散礫5-6の位置するE2・3/F3Gr.では前平式土器の深鉢片が1点のみ出土している。

散礫7 D5Gr.に位置する。SA44の西辺沿いの遺構埋土中に焼礫が密集して堆積していた(第54図・写真図版12)。散礫の東側では、焼礫検出面と同じレベル上で平栴式土器の深鉢片数点が出土したが、小破片である(第62図)。

散礫8/S16 E5Gr.に位置し、散礫8の南端にS16がある。散礫8はSC68を覆うように広がっており、散礫/S16はSC68より新しい遺構といえる。散礫の範囲内で押型文土器(栴文)の深鉢片が層位的に上下しつつも比較的まとまって出土した(第62図)。

S16は、0.9×1.25mの範囲に焼礫がまとまっており、掘り込みを持たない。あまり赤化しておらず、破砕も進んでいない。

S17 0.5×1.5mの範囲に焼礫がまとまっており、掘り込みを持たない。S16と同じく方形で扁平な礫を多用する。

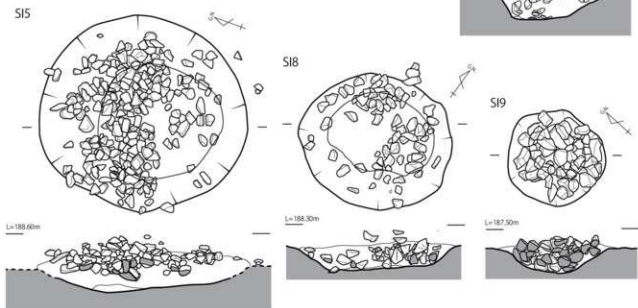
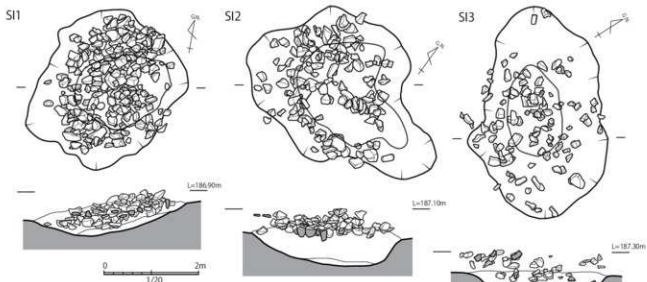
散礫9 E6Gr.に位置する。遺物は、散礫の範囲内では、前平式土器や押型文土器(栴文)の深鉢片がやや上下する位置で出土した(第62図)。

散礫10/S18 C4-5Gr.に位置する。散礫10は南北方向へ帯状に広がっており、その北側起点にS18が位置する。散礫の範囲内では、層位的にやや上下した状態で前平式・加栗山式土器の深鉢片が出土した(第62図)。

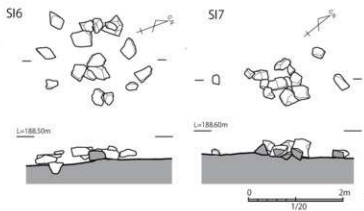
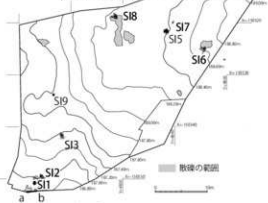
S18は、円形の掘り込みを持ち、検出面から底面までの深さは約0.2mである。断面形は逆台形状を呈する。焼礫は、掘り込み内全体から出土するが、掘り込みの中央付近は、まばらである。

なお、散礫と他遺構との層位的な関係から、SA46とSC76は散礫10/S18より古い遺構、散礫7とは同時期か若干前後する時期とみられる。

S19 B6Gr.に位置し、円形の掘り込みを持つ。集石遺構の中では最も小さい規模であり、検出面から底面までの深さは約0.2mである。断面形は緩く逆台形状である。掘り込み内の焼礫は、充填されたかのようなすき間なく



集石遺構・散礫の分布状況
(第Ⅷ層面検出)



散礫断面土層 (SI1 南側付近の壁面)



第60図 集石遺構実測図

密集している。炭礫の検出面と第X層(掘り込み検出面)との比高差から、第IX層の堆積がそれほど進んでいない時期の集石遺構と考えられる。

散磔 11 B5Gr. に位置する。東側に SC91 が近接する。散磔に伴う遺物はない。

f) 小穴(ピット)(第54図)

竪穴建物跡・平地式建物跡・土坑に伴わない小穴は、調査区全体に分布する。そのうち、規則的な配置(配列)を類推させる円形に巡る小穴列は、2箇所(C5/B6Gr.)認められた。

これらの小穴列は、平地式建物跡の一部とも考えられるが、小穴間の芯々距離が不定であることから、積極的な評価する根拠は乏しい。

(4) 遺物

a) 土器の分類

第VIII層と第IX層および遺構から出土した縄文土器の報告にあたっては、既存の土器型式(型式概念)との対応関係を整理したうえで細分類を行った。本項ではその概要を示したが、個々の掲載遺物の分類名は、第7表を参照されたい。

18類(前平式土器)

口縁部から底部に至るまで直線的な胴部を持つ深鉢形土器。器形には円筒形と角筒形がある。土器の外表面は横立ないし斜位の貝殻腹縁文、内表面は丁寧あるいは粗雑なケズリ調整、口縁部の外表面には貝殻腹縁文あるいはヘラ状工具による刺突文を1段ないし2段施されているものとした。

i類…口縁部(口唇部)は断面三角形状で、口縁部外表面に斜位の貝殻腹縁刺突文が1段施されるもの。また、口縁部の内表面には、縦位の細かき刻線が施されるものもある(第64図603-604等)。

ii類…口縁部の断面形は丸みを帯びた三角形状で、口縁部外表面は縦位の貝殻腹縁刺突文が1段施されるもの。胴部外表面に貝殻腹縁文は斜方向を主体とするi類よりも器壁が厚く傾角がある(第65図619-620等)。

iii類…口縁部が内表面にうす段を有し、口縁部外表面にヘラ状工具による縦位の刺突文を1～2段施されるもの。胴部外表面に貝殻腹縁文は、斜めないし横方向を主体とする。iii類の施文具(二枚貝)は、i・ii類より放物形の幅が広い二枚貝を施文具としている(第64図617・第65図622-623等)。

iv類…i～iii類以外の胴部破片資料を一括したもの。

19類(加葉山式土器)

器形には、円筒形・角筒形・レモン形(横断面が二角のもの)がある。貝殻腹縁文を地文とし、直口ないし緩く外反する口縁部外表面に横立・斜位の貝殻腹縁刺突文を数段施文するものとし、刺突文列の直下に椋形の突帯ないし粘

土紐が貼り付くものも含めた。口縁部には縦位の細かき刻線が施される。また、胴部外表面には貝殻腹縁刺突文による縦列文ないし幾何学文(X字形)、底部外表面は縦位の細かき刻線が施される。土器内面はケズリないしナデ調整である。

i類…口縁部外表面に貼付突帯がない。胴～底部資料のみも含めた(第66図632～635等)。

ii類…口縁部外表面に貼付突帯がある。貼付突帯の形状等によって、さらに細分される。

ii-a類…シャープな椋形の貼付突帯で縦位の貝殻腹縁刺突文が伴う(第64図610)。

ii-b類…粘土紐状の貼付突帯で、縦位の貝殻腹縁刺突文が伴う(第66図643-644-646-647等)。

ii-c類…粘土紐状の貼付突帯、ナデ地文(第66図645)。

20類(吉田式土器)

土器外表面の調整は、貝殻押引文が主体的であるもの。口縁部外表面は、加葉山式土器と類似した文様帯となるが、突帯はナデ調整部分に貼り付けられ、密接な貝殻刺突文によって椋形状を呈する(第64図614～616、第66図648等)。

21類(中原式土器)

前平式や加葉山式土器に比べて器壁が厚い、貝殻腹縁文とナデ調整を主体とするものとした。全体形のわかる資料に乏しいが、口縁部外表面の一部は横位の貝殻腹縁文となるが、それ以外の部位は内表面ともナデまたは粗雑なミガキ調整であり、底部は平底のものを一括した(第67図651～655)。

22類(下刺釜式土器)

口縁部は、ヤマト厚気味に内湾するもので、その外表面には貝殻腹縁文による横立数段の刺突文やヘラ状工具による刺突線文・羽状文が施されるもの。胴部外表面には、横立・斜位の貝殻刺突文の組み合わせがみられる(第67図656～659)。

23類(押型土器)

土器外表面全体に押型文のみを施文するものを一括した。

i類…比較的緻密な横立の山形文で、口縁部は直立気味であるが、わずかに外反する(第67図660等)。

ii類…押型文は楕円文で、口縁部は外反するもの。口縁部内表面にも押型文の施文がある。器形と施文方法から、さらに2分できる。

ii-a類…胴部はオボケに張り、口縁部は外反気味に立ち上がるもの。楕円文は楕円状で施文方法は斜立ないし縦立である(第64図612等)。

ii-b類…口縁部は「八」の字形に開き、その内面に稜を持つもの。外表面の押型文は鋸歯状に施され、楕円文はii-a類に比べて粗大となる。外表面はケズリ調整である(第67図664-665等)。

iii類…口縁部は短く屈曲する。口縁部外表面と端部には、イチゴの実の表面に類似した粒状の文様が施される(第67図667)。

24 類 (手向山式土器)

押型文以外にも刻目突帯等を有する深鉢形土器。

ⅰ類…単一文様(山形文)で、大きく外反する口縁部と、屈曲する胴部をもつもの(第68図668-669)。

ⅱ類…山形文や沈線文、刻目突帯を有する(第68図671)。

25 類 (妙見式土器)

土器外面を縄文施文する一群とした。大きく外反する口縁部外面には押型文の突帯や縦位の沈線文が施される。口縁部端部土やや肥厚気味で矩形的の断面形であるが、垂下気味の三角形までは至らない(第68図673-674等)。

26 類 (平袴式土器)

無文地で、幾何学的沈線文が施されるもの(第68図676)。

27 類 (塞ノ神式土器)

土器外面に網目状の縹系文や縦位の沈線文が施されるものとした。口縁部は短く外反する(第68図677-678)。

b) 遺物の出土分布状況 [第IX層] (第61図)

縄文時代早期の遺物は、遺構および第VIII層と第IX層の遺物包含層から出土しており、縄文土器と石器がある。

なかでも、主体となるのは、第IX層の遺構(第X層上面検出)や遺物包含層(第IX層)の出土遺物である。その出土分布は、堅穴建物跡や土坑といった遺構が群集する範囲と重なって出土したが、E2・3/F2・3Gr、やC7Gr、周辺ではほとんど出土しない傾向がある。

この第IX層は、層厚0.2～0.5mであり、遺物は中層から上層にかけて出土する傾向が強い。

土器の組成と出土分布 第VIII層は塞ノ神式土器(27類土器)が出土する層であり、2点を図化掲載した(第68図677-678)。第IX層は、18～26類(前平式～平袴式土器)が出土する層であり、遺構内出土遺物を合せて74点を図化掲載した(第64～68図603～676)。

土器の取り上げ点数は、第VIII層で2点、遺構内および第IX層では312点であった。その他、遺構埋土一括取り上げ・グッドー一括取り上げ遺物がある。取り上げ点数では、前18類(前平式)土器(約150点)が最も多く、次いで19類(加栗山式)土器(約60点)、23類(押型文)土器(約30点)、25類(妙見式)類は数点で、それ以外は約10～20点である。最低個体数ではなく、取り上げ点数の比較ではあるが、数量的多寡は、集落形成過程を反映しているものと考えられる。

土器の平面分布においては、各土器型式ともに調査区全体に二分している状況であって、土器型式に特徴的な分布は積極的に見出しにくい(第62図)。

垂直分布においても、各土器型式が上下混在して出土する状況で、土器型式ごとの層位的な分離は明確ではないが、第IX層の下層に18類(前平式)土器、中層にて19類(加栗山式)土器、中層～上層では20～28類(吉田式～平袴式)土器が出土する傾向は読み取れた。

石器(石材別)の組成と出土分布 第VIII層からは頁岩製の二次加工剥片が1点出土している(未図化)。

第IX層遺構内からは、213点を取り上げた。総重量は6980.9gで、そのうち26点を図化掲載している(第69図)。これらの石器は18～26類土器に伴う時期とみられる。

器種は石鏃、楔形石器、スクレイパー類、二次加工・使用痕剥片、石核、チップ(碎片)、磨石、敲石、磨敲石、石皿、台石がある。石材は、砂岩、頁岩、チャート、緑色凝灰岩、流紋岩、石英、安山岩、黒曜石類があり、砂岩や安山岩系石材は磨石、敲石、石皿や台石といった工具や調理具系の礫石器、頁岩・チャート・流紋岩・黒曜石は、石鏃等の狩猟具や加工具等の剥片系石器に用いられる(第4表)。

頁岩類、チャート、流紋岩、石英、黒曜石(桑木津留・三船産)については、製品・未製品と剥片・チップないし石核の組み合わせから、調査区内またはその周辺が石器製作の場であったと理解されるが、遺物平面分布上では、石器ブロックといった具体的な痕跡は捉えにくい(第63図)。また、遺跡周辺では産出されない石材として黒曜石が挙げられるが、第IX層の場合は、姫島産と桑木津留産および三船産の三者がある。なかでも桑木津留産黒曜石が多産されており、チャートとともに石鏃製作の主要な石材であったと解釈することも可能である(第63図・第4表)。

なお、緑色凝灰岩製の石鏃(第69図656)は、単品のみであり、剥片や石核等は出土していない。遺跡周辺では産出されない石材であり、現地製作品の可能性も低いことから、他所からの持ち込みと考えられる。同じく、姫島産黒曜石製の石鏃(第69図681)も同様に持ち込み品とみられる。

c) 遺構出土の遺物 (第64-69図)

SA41 603・604は18-i類(前平式土器)の深鉢口縁部である。605は深鉢胴部片であるが、内外面の調整と施文手法から19-i類(加栗山式土器)にあたる。

SA42 606は18-ii類(前平式土器)の深鉢口縁部である。へら状工具による粗雑な刺突文を、たすき掛け状に配する。金雲母を含む。607は貝殻条痕文や器壁の厚さから18-iii類、608は18-ii類で、金雲母を含む。609は19-i類(加栗山式土器)とした。610は19-ii-a類(加栗山式土器)の深鉢胴部片であり、つくりの丁寧な角筒形土器とみられる。679は凹基無蓋罐で、紡錘形平面形の石英製である。

SA44 611は24類(手向山式土器)の深鉢胴部片である。胴部でも屈曲部付近にあたる部分であるが、その屈曲は強い。縦位の突帯文の下に押型文(山形文)を施文する。

SA45 612は23-ii-a類(押型文土器)の深鉢である。つくりは丁寧であり、口径約40cmの大型品である。楕円文は細かく密で縦位に施文される。口縁部端部は丁寧な面取りされ、口縁部付根の内面側には強い稜が入る。土器表面の色調は淡い肌色ないし白色で、破断面は黒色を呈す。

SA46 613・616は19-i類(加栗山式土器)、614・615は器壁の薄いつくりの20類(吉田式土器)の深鉢片である。680～682は打製石鏃である。全て凹基無茎鏃であり、680は珪質頁岩製で側縁部が等辺二等辺三角形、681は姫島産黒曜石製で先端部が欠損する二等辺三角形、682は珪質頁岩製の正三角形に近い二等辺三角形の平面形である。この682は、垂直調整の進行度合いから未製品と考えられる。

SB1 683は砂岩製の敲石である。周縁部に敲打痕がある。

SC66 684は砂岩(硬質)製の磨敲石である。上下面は磨面、周縁部には敲打痕が明瞭に認められる。

SC88 617は18-iii類(前平式土器)の深鉢で、底部を失っている。口縁部にはヘラ状工具による刺突文が施される。外面の貝殻条痕文は施文方向を描えている。器壁は厚手であり、色調は黒味の強い褐色を呈する。胎土に金雲母を含む。

SC89 618は19-i類(加栗山式土器)の深鉢胴部片とみられる。こうした19-i類の外面調整は、施文方向を描えた斜方向の貝殻条痕文であり、各個体とも条痕の幅(助の間隔)が類似したものが多くことから、同一種の二枚貝が施文具として選択されたものと考えられる。

d) 遺物包含層・その他出土の遺物

この項では、第Ⅷ・IX層(遺物包含層)の出土遺物や同時代遺構から出土した縄文時代早期の遺物について報告する。

A) 土器(第65～67図)

18類(前平式土器)[619～631]

第IX層出土土器である。大きく、18-ii類(619～621・624～626・628)と18-iii類(622・623・627・629～631)の深鉢形土器がある。619～620の刺突文は縦位で密である。621は波状口縁の角筒形土器、622・623は胎土に金雲母を含む。624は2段の太めの刺突文である。底部資料は624～626・627・630・631がある。底径は9～10cm・13～14cm・21cm大のものがあり、すべて平底である。底面の外面側は丁寧なナデ調整、内面側はケズリ・ナデ調整または貝殻条痕文である。

19類(加栗山式土器)[632～647]

第IX層出土土器である。大きく、19-i類(632～642)と19-ii類(643～647)がある。i類のうち、640・641はレモン形、642は角筒形深鉢の破片資料である。ii類のうち、643～647の貼付突帯は楔形状であるが、シャープさに欠けるものであり、ii-b類とした。644・647は、貼付突帯より上位の口縁部付近に施文される貝殻条痕刺突文は横位よりは斜位を指向するタイプで、645は貼付突帯の下部にナデ調整である。646・647は角筒型土器の口縁部とみられる。

なお、ii類の胴部・底部資料は、口縁部と連続する良好な資料に恵まれなかったが、i類のうち636～642の一部が該当する可能性がある。634・641は胎土に金雲母を含む。

20類(吉田式土器)[648～650]

第IX層出土土器である。648は深鉢口縁部、649・650は胴部資料である。648は19-ii類と文様構成的に類似するが、ナデ調整を下地に貼付突帯を付し、突帯の側縁を密な貝殻条痕刺突文にて楔形状とする点を以て区別した。

21類(中原式土器)[651～655]

第IX層出土土器である。651は深鉢口縁部で、平坦で幅広い口縁端部を有する。652は胴部、653～655は底部資料で外面をナデ調整されるのが特徴である。底径は9・11・17cm大のものがある。653は胎土に金雲母を含む。

22類(下刺峯式土器)[656～659]

第IX層出土土器である。656は深鉢口縁部で、外面にヘラ状工具の条線文が入る。657・658は横位の貝殻条痕刺突文の下部に羽状文が施され、胎土に金雲母を含む。

23類(押型土器)[660～667]

第IX層出土土器である。660・661は山形文(23-i類)、662～666は楕円文(23-ii類)の口縁部や胴部資料である。667は小さな突起物を有する軸状工具による回転による施文(吉本2002)によって、イチゴの肌のような文様となる(23-iii類)。661・666・667は胎土に金雲母を含む。

24類(手向山式土器)[668～672]

第IX層出土土器である。668～669・672は山形文の単一文様で24-i類、670・671は24-ii類の深鉢形土器である。

25類(妙見式土器)[673～675]

第IX層出土土器である。673は深鉢の口縁部、674・675は胴部片である。674には未貫通の穿孔がある。

26類(平栴式土器)[676]

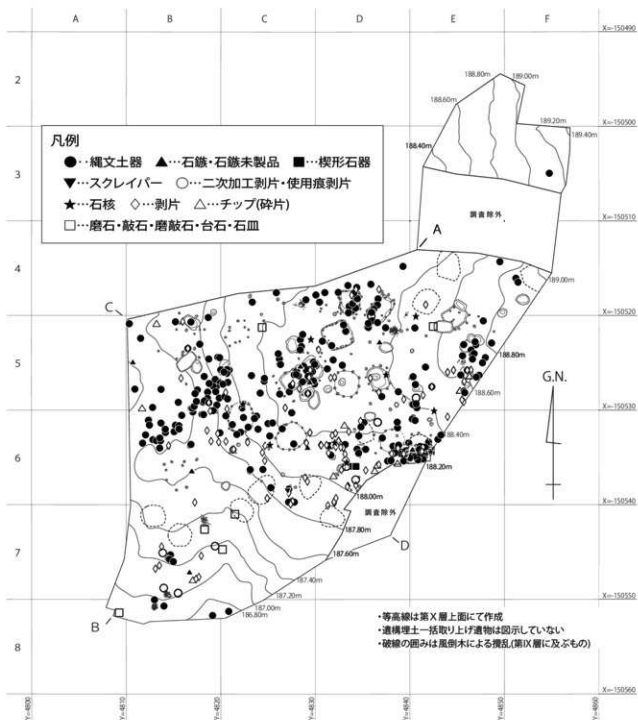
第IX層出土土器である。676は、深鉢の胴部片で、無文地に菱形文の組み合わせをヘラ描きにて表現している。

27類(塞ノ神式土器)[677・678]

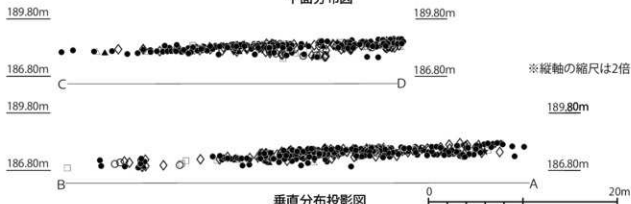
第Ⅷ層出土で、677は深鉢の口縁部、678は胴部片である。

イ) 石器(第69図)

打製石鏃(685～691) 685(チャート製)は平面形が二等辺三角形で深い袈りを持つもの。側縁部はギヤ張り出す。686(緑色輝石製)は二等辺三角形で基部が浅い袈りのもの。687(桑木津留産黒曜石製)・688(チャート製)は、二等辺三角形の平面形でその側縁部は緩く張り出すもの。基部はごく浅いアーチ状の袈りを有する。689(チャート製)は二等辺三角形の平面形で、基部は深い袈りを持つもの。690(チャート製)は正三角形の平面形で基部が浅い袈りのもの。691(チャート製)の平面形は二等辺三角形を基調とするもの、胴部が大きく張り出す。基部の袈りはごく浅いアーチ状となる。

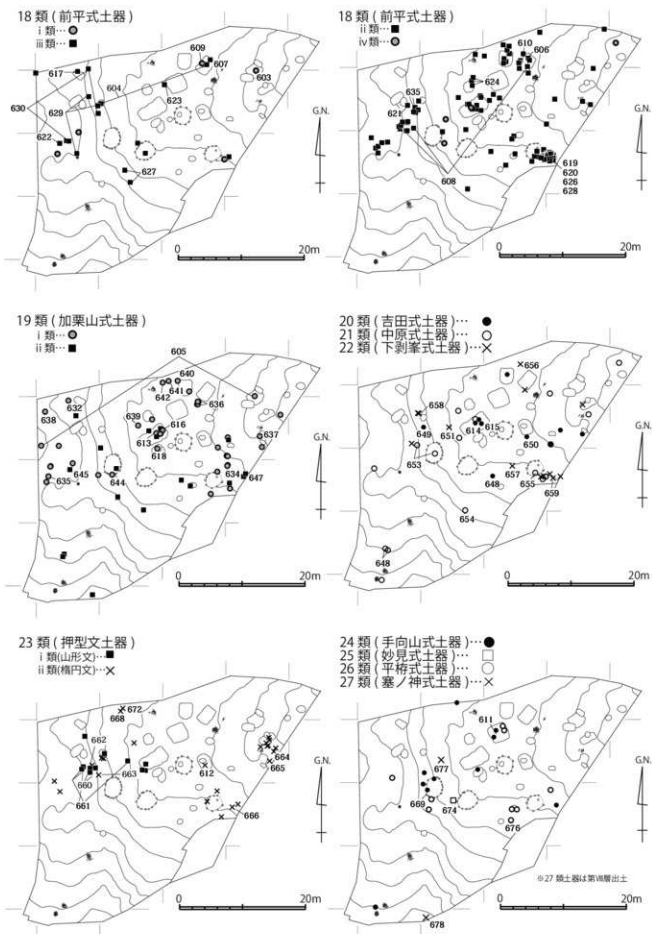


平面分布図



垂直分布投影図

第61図 第Ⅹ層出土遺物分布図(1) [器種別]



第62図 第Ⅱ層出土遺物分布図(2) [土器]

砂岩・安山岩(硬質・多孔質なもの含む)



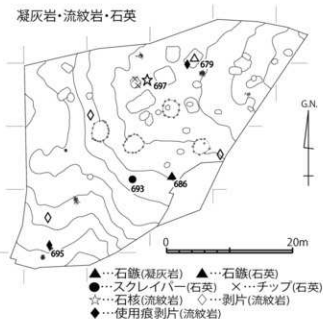
頁岩・珪質頁岩



チャート



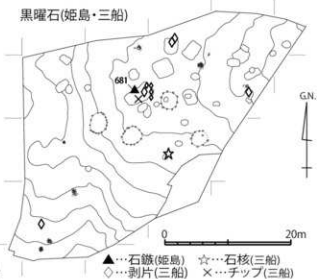
凝灰岩・流紋岩・石英



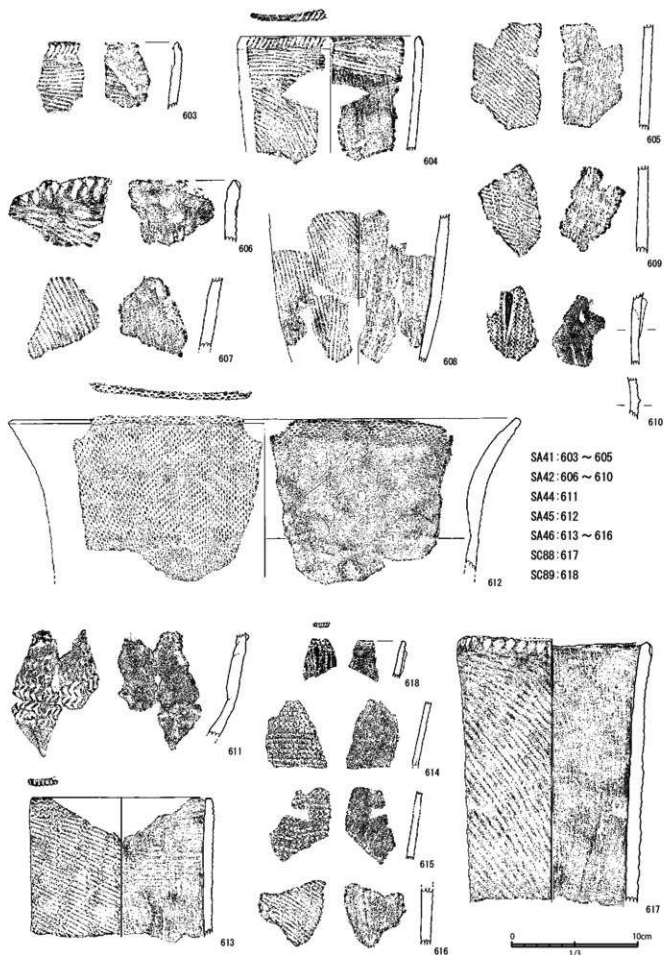
黒曜石(桑木津留)



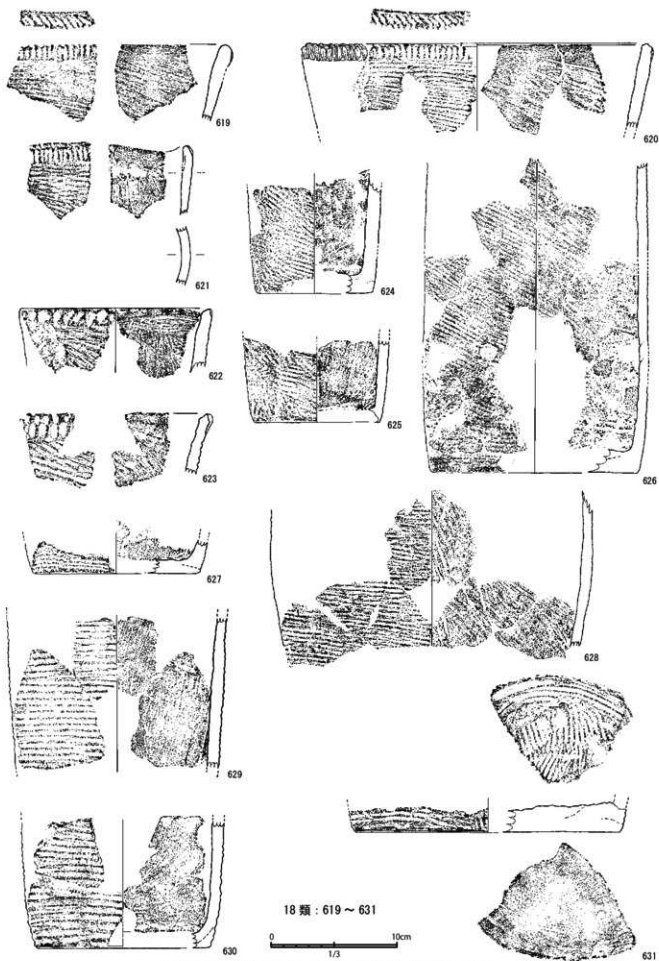
黒曜石(姫島・三船)



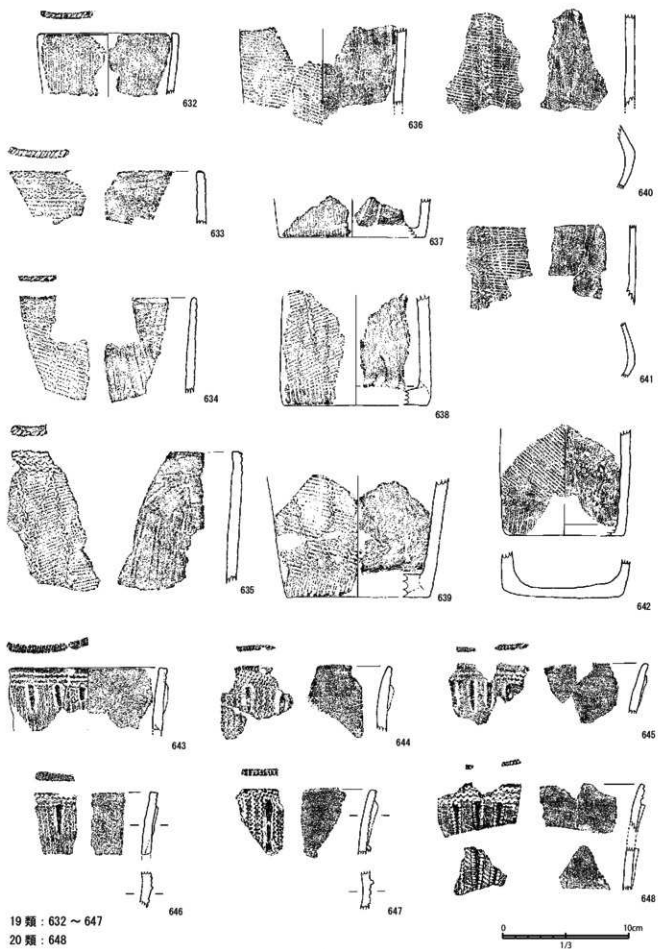
第63図 第Ⅸ層出土遺物分布図(3) [石器]



第 64 図 遺構出土遺物実測図 (土器)

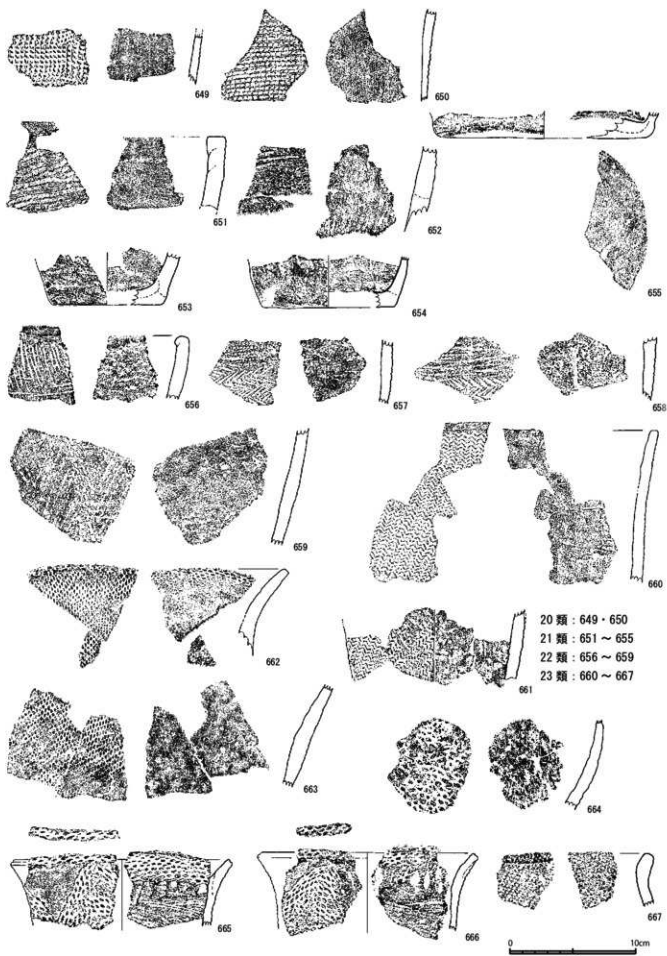


第 65 图 第Ⅸ層出土遺物実測図(土器)〔1〕

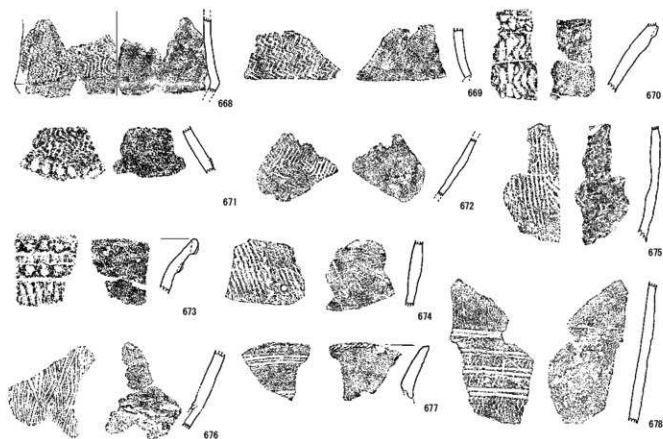


19類：632～647
 20類：648

第66圖 第Ⅸ層出土遺物実測図（土器）〔2〕



第 67 図 第Ⅹ層出土遺物実測図(土器)〔3〕



24類：668～672

25類：673～675

26類：676

27類：677・678



第68図 第Ⅰ層出土遺物実測図（土器）〔4〕

Ⅰ層

器種	石甌	石甌未製品	楔形石器 (向斜・接ぎ)	スクレイパー (向斜・接ぎ)	二次加工製片	使用痕製片	石槌	製片	チップ(碎片)	磨石	磨石	磨盤石	石皿	台石	台石/石皿	原石	各計	重量(g)	参考(カウント外)
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	2	-	1	-	6	1,955.8	
砂岩(硬質)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2	1,379.2	
頁岩	-	-	-	1	1	-	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	49.8	
頁岩(珪質)	1	1	-	-	-	-	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-	7	14.7	
チャート	4	1	-	1	-	-	15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	21	44.2	
凝灰岩(緑色)	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.6	
流紋岩	-	-	-	-	2	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	98.0	
石英	1	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	1	-	-	4	11.7	
安山岩	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	1	-	-	4	3,002.5	
安山岩(多孔質)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	2	221.4	
黒曜石(桑木津窟)	5	-	1	-	1	3	7	93	25	-	-	-	-	-	2	137	175.9		
黒曜石(三船)	-	-	-	-	-	1	10	2	-	-	-	-	-	-	-	-	13	26.4	
黒曜石(姫島)	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.7	
各計	13	2	1	1	3	6	9	135	30	1	4	2	2	1	1	2	213	6,980.9	

第4表 遺構および第Ⅰ層出土石器組成表



SA42 : 679
 SA46 : 680 ~ 682
 SB1 : 683
 SC66 : 684

第 69 図 遺構及び第Ⅱ区層出土遺物実測図 (石器)

楔形石器 (692) 692は桑木津留産黒曜石製で、横長方形状の剥片下縁を表裏両面から微細剥離して刃部となす。

スクレイパー (693) 693は石英製で、縦長剥片の下部両側縁を剥離調整して刃部を形成している。

二次加工剥片 (694) 694はチャート製で、剥片素材の右側側縁をさらに剥離しているもの。

使用痕剥片 (695・696) 剥片の側縁や下縁部分に、刃こぼれ状の微細な剥離が認められるもの。695は流紋岩製、696は桑木津留産黒曜石製である。

石核 (697～700) 697は流紋岩製、698～700は桑木津留産黒曜石製である。697は打面を転回しながら剥片を剥ぎ取っているが、698～700は礫面を一部残す石核である。

敲石・磨敲石 (701～703) 701・702は多孔質な安山岩製の敲石、703は硬質な砂岩の磨敲石である。701・702は鶏卵よりも小さいサイズで、703は上下面に磨面と敲打痕、周縁部4方向に敲打痕があり、断面形は矩形となる。

台石 (704) 安山岩製で、平面形は方形で扁平なカマココ形を呈する。上面は敲打痕、下面は礫面により滑らかとなる。

(5) 小結

遺構の時期と変遷 (第IX層) 第IX層は、縄文土器(18～26類)と石器を多く包含し、竪穴建物跡・平地式建物跡・土坑・集石遺構にて構成される集落が形成され、列状に連なる陥し穴状遺構群も確認された。

竪穴建物跡の時期は、遺構埋土中の土器型式から18前期(前平式期)[SA43]、19前期(加栗山式期)[SA41・42]、20前期(吉田式期)[SA46]、23前期(押型土器期)[SA45]、24前期(手向山式期)[SA44]と推定される。

土坑や集石遺構は、時期推定に必要な遺物に乏しいが、概ね竪穴建物跡の時期に並行すると考えられる。一方で散礫のように26前期(平式期)に形成されたものもある。

陥し穴状遺構は、その詳細な時期の推定は困難である。ただし、SC83は遺構検出面より上位に26類(平式土器)が出土したこと、遺構の切りあき関係からSA45よりも新しい時期であることから、23前期(押型土器期)よりは後出し、26前期(平式期)よりは古い時期である可能性が高い。

このように、第IX層においては、18前期(前平式期)に集落の形成が始まり、26前期(平式期)まで断続的に営みが続いたものと考えられる。より踏み込むならば、第IX層形成初期における遺跡の性格は、18前期(前平式期)～24前期(手向山式期)の縄文時代早期前葉～中葉にかけては集落・生業の場として、その後は狩猟の場(陥し穴状遺構群)へと変化した。後葉段階には再び生業の場への変遷を遂げていったものと理解することが可能である。

第6節 後期旧石器～縄文時代草創期の遺物

(第XI層の調査)

(1) 概要

層位と出土遺物 基本土層の第XI層より、縄文土器(隆帯土器等)に加えて、細石刃・細石刀核・尖頭器・打製石楯・楔形石器・スクレイパー・二次加工剥片・使用痕剥片・石核・チップ・磨石・ヤ碓ならびに石皿といった石器類が出土した。

第XI層は、上位層の第X層(松島隆帯テフラ)の降下年代から、第IX層は約12,800年前よりも若い堆積層であるため、後期旧石器～縄文時代草創期の遺物包含層と判断した。

出土遺物の報告にあたって 隆帯土器と細石刃・細石刀核等の間には時期差を示す調査事例や先行研究が数多いが、今回の発掘調査においては、それらの遺物の出土位置には、明確なレベル差(高低差)を見出しにくい。

よって、本節においては、後期旧石器～縄文時代草創期までに形成された遺物包含層の出土品として報告する。

遺構の判断について 第XI層を掘削後、第X層上に遺構検出作業を行ったが、円形や楕円形に土色に変化する箇所が数箇所みられた(写真版11・15)。

検出の平面形や規模は、あたかも土坑や竪穴建物跡に見えたことから、遺構番号を付与して精査を進めたが、遺構の断ち割りや埋土の比較検討および遺物包含の有無等を現地作業および報告書作成段階にて総合的に検討した結果、人為的な遺構ではないと判断し、遺構番号は欠番とした(SA47・48、SC92～94)。したがって、遺構に伴うとして取り上げた遺物は包含層出土遺物と読み替えている。

(2) 層位と旧地形 (第4・70図)

第XI層は層厚0.1～0.3mと比較的薄い遺物包含層であり、地表面から約2m下に堆積している(第4図)。この第X層における土色や土質からみた細分は困難であった。第XI層堆積時の旧地形は、第X層および第XII層の堆積状況から推測すると、調査区北東側から南東側に向けて緩やかに傾斜する地形で、D5Grより南北側やB5・6Gr、C7Gr。周辺は大きく地形が凹んでいたと復元される。

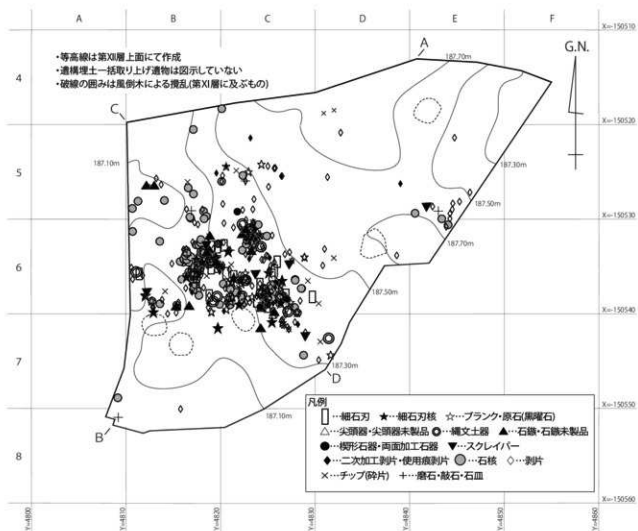
なお、B7/C7Gr。周辺の第XI層は、縄文時代早期～中期頃の風倒木痕によって大きく損なわれていた。

(3) 遺物

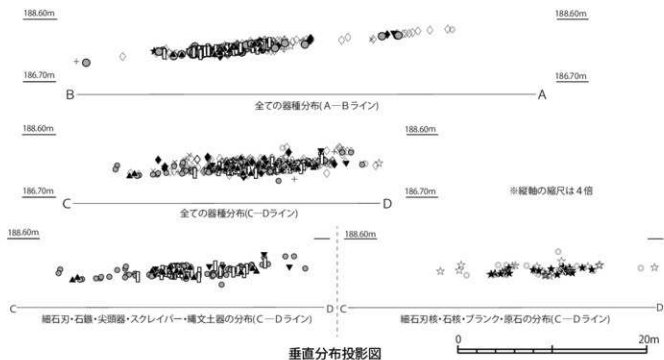
a) 遺物の出土分布状況 [第XI層] (第70～73図)

平面分布 縄文土器や石器類といった遺物の平面分布は、B6/C6Gr。にて特に集中的な分布を示しており、その周辺も含めれば、第XII層上面の等高線でいう187.30mを前後する範囲にて帯状の平面分布が認められる。一方、E5・6Gr。では局所的ではあるが、遺物の集中が認められた(第70図)。

垂直分布 遺物の垂直分布は、第IX層の下位から上位にわたるが、特に中位付近(第X層上面より0.05～0.1m程度浮いた位置)にて出土した。すなわち、遺物は水層ではなく、上下方向にて一定程度の幅を持つ。これは、堆積時の環境下で遺物の沈み込みや浮き上がりが生じたものと考えられる。



平面分布図



垂直分布投影図

第70図 第XI層出土遺物分布図(1) [調査区全体(器種別)]

このように、縄文土器と石器類は、一定の幅のなかに混在して出土する場合が多く、縄文土器と細石刃・細石刃核ならびに打製石鏃等には、明確な高低差は見出せない。

ただし、全体的な傾向として、縄文土器・打製石鏃・尖頭器および小型のスクレイパー等は、第Ⅺ層の上位側、細石刃・細石刃核等は下位側、石核や剥片類は下～上位全体に出土する方向を読み取ることは可能である(第70・71図)。

遺物集約区 調査区内にて集中して遺物が出土したのは、B6/C6Gr.である(第71・72図)。このグリッドでは、縄文土器(無文土器・隆帯土器)や珪質頁岩の細石刃核・尖頭器・スクレイパー、黒曜石(三船・上牛鼻・桑木津産)の細石刃・細石刃核・打製石鏃およびスクレイパー等が出土した。縄文土器はある程度の局所的な平面分布を示す。

石器材料では、特に、桑木津産黒曜石製の細石刃核や細石刃核の平面分布は、直径約8mの範囲でまとまって出土する傾向があり、あたかも円形ブロック状に見える(第71・72図)。

b) 遺物

ア) 土器(第74図)

第Ⅺ層出土の縄文土器について、口縁部の隆帯文の有無や施文方法について以下のように分類した(28～30類)。隆帯文とは、土器外面に薄く突帯を貼り付けて、他の部位よりも線状ないし帯状に厚くなる部分と捉えている。個々の掲載遺物の分類名は、第7表を参照されたい。

28類(無文土器)[705・706]

いわゆる無文土器であり、隆帯文を有さず、その他の施文しないものである。内外ともにナデ調整であり、指頭王痕が比較的明瞭である。705・706は口縁部資料であり、器厚は0.6cmと29類(隆帯土器)よりも薄手である。口縁部は直口気味であり、口縁端部は平坦にまとまるもの(705)と先細り(706)がある。

29類(隆帯土器)[707～709]

口縁部外面に隆帯文を有するものである。直口気味の口縁部で、口縁端部は外傾ないし平坦に仕上げられる。その器厚は0.8cmである。隆帯上は指頭押圧や工具ないし爪による刻目が施文される。隆帯幅は0.6cmで、0.6～0.8cm程の間隔をあけて3条の隆帯が貼り付けられる。器面調整は内外ともにナデ仕上げで、擦痕による条線が良く残っている。隆帯上の施文方法からさらに3つに細分される。

- i 類・隆帯上に工具ないし爪による刺突/刻目(707)
 - ii 類・最上段の隆帯上は、隆帯に平行する指頭押圧(爪圧痕)、中・下段は工具ないし爪の刺突/刻目(708)
 - iii 類・隆帯上は、隆帯に平行する指頭押圧(709)
- なお、709には補修孔が認められる。

30類(その他)[710～720]

胴部や底部資料である。本来は28類ないし29類に帰属されるべき資料群であるが、その識別は困難であったため、

一括して30類とした。内外面はナデ仕上げと考えられる。器形は底部から口縁部へ直線的に移行するタイプ(719等)が多いが、胴部が張り出すタイプ(715・717)もある。719は器壁の厚い底部、720は丸みを帯びた薄手の平底である。

イ) 石器(第74～77図)

第Ⅺ層出土の石器には、主な器種に細石刃・細石刃核・尖頭器・打製石鏃・楔形石器・スクレイパー・石核・剥片のほか、磨石・蔽石・石皿等がある。取り上げ点数は351点で、総重量は4,950.6gである(第5表)。

砂岩は磨石・蔽石・石皿等、珪質頁岩は細石刃核や尖頭器・スクレイパー等、流紋岩はスクレイパー等の石材として、黒曜石は、特に、桑木津産黒曜石が細石刃・細石刃核や打製石鏃・楔形石器等に多用されている(第73図)。

細石刃(721～728) 黒曜石製のもの29点が出土した。28点が桑木津産、1点が上牛鼻産である。細石刃そのものは未検出であったが、後述のように珪質頁岩製と三船産黒曜石製の細石刃核がある。

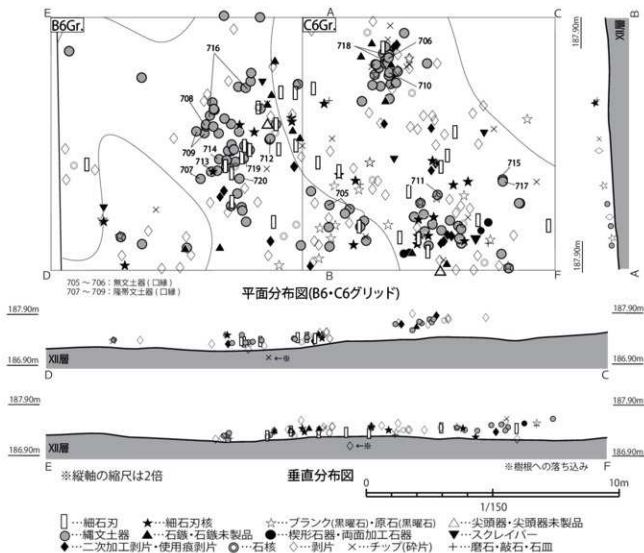
細石刃は、完形のもの、頭部を残すもの、頭部や下部の切断による中央部のみ、下部のみの資料があり、完形品のものはいくつか少ない。打面長は、完形品にて最長1.7cm、最短で1.0cmほど、打面幅は0.2～0.5cmである。打面幅は0.3～0.4cmのものが多い。打面長は細石刃核の素材(原石)の大きさに規定されるが、打面幅は、ある程度規格的といえる。細石刃の横断面形状は三角形と板状があり、形状の差異は細石刃核からの剥離過程と連動しているものとみられる。また、頭部調整や打面調整を施されるものも認められた。これらの細石刃のうち8点を図化掲載した(721～728)。

細石刃核(729～749) 細石刃核は24点出土し、珪質頁岩製1点、黒曜石製が23点である。なかでも、桑木津産黒曜石製は21点であり、細石刃核のほとんどが桑木津産黒曜石を母岩として選択している。

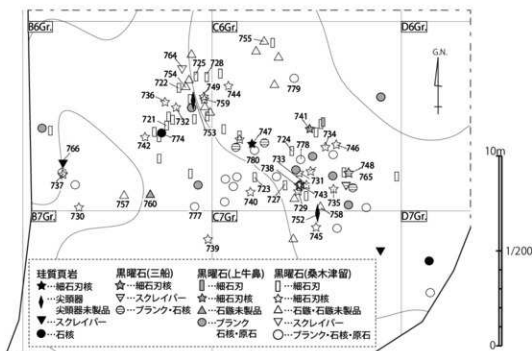
この桑木津産黒曜石を石材とした細石刃核は、側面や背面に礫面をそのまま残している資料が大半であり、その大きさも1.5～3cm大である。礫面の特徴や大きさは、現在も原地にて採取可能な小礫様の原石と通底している。

桑木津産黒曜石をはじめ、珪質頁岩や上牛鼻産・三船産黒曜石を用いた細石刃核は、基本的には礫素材を使用し、打面調整や打面転移による細石刃剥離という特徴を有しており、打面調整の際に剥ぎ取られた調整剥片も認められる。これらの細石刃核について、打面調整や打面転移の有無等に着目して、以下のように整理した。

- ① 打面調整せず、そのまま細石刃剥離する…(729)
- ② 若干の打面調整があるもの…(730)
- ③ - 1 打面調整の後、小口部を細石刃剥離するもの。
 - ③ - 2 に比べて細石刃の獲得数は少ない。
…(731～738・741)※741は円形状を呈する。
- ③ - 2 打面調整の後、広口部を細石刃剥離するもの。

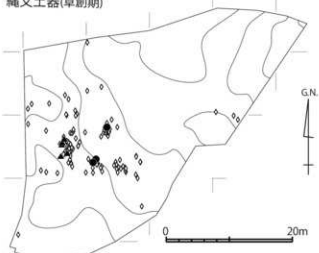


第71図 第XI層出土遺物分布図(2) [遺物集中区(器種別)]



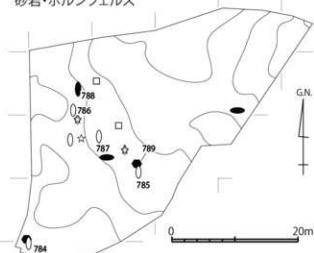
第72図 第XI層出土遺物分布図(3) [遺物集中区(石器石材別)]

縄文土器(草創期)



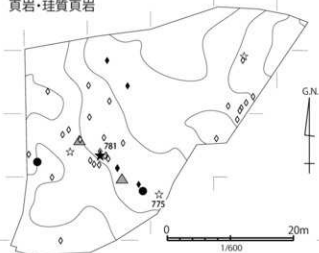
- …無文土器(口縁部) ▲…隆線(帯)文土器(口縁部)
- ◇…無文/隆線文土器(胴~底部)

砂岩・ホルンフェルス



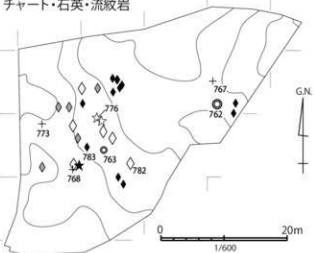
- ☆…石核 ◇…剥片 □…素材礫(原石)
- …磨石 ○…敲石 ●…磨敲石 ●…石皿

頁岩・珪質頁岩



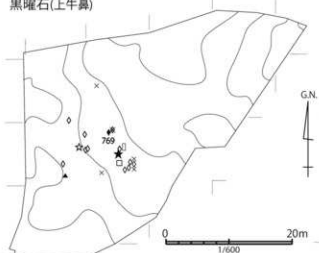
- ★…細石刃核 ▲…尖頭器・尖頭器未製品
- …スクレイパー ◆…二次加工剥片・使用痕剥片
- ☆…石核 ◇…剥片

チャート・石英・流紋岩



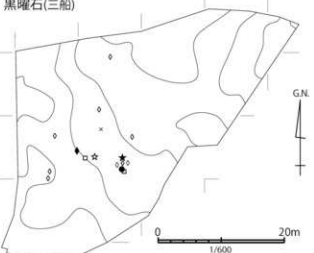
- ★…石核(チャート) ◆…剥片(チャート) ◇…剥片(石英)
- …スクレイパー(流紋岩)
- +…二次加工剥片・使用痕剥片(流紋岩)
- ☆…石核(流紋岩) ◇…剥片(流紋岩)

黒曜石(上牛鼻)



- …細石刃核 ★…細石刃核 □…ブランク
- ▲…石銃未製品 ◆…二次加工剥片
- ☆…石核 ◇…剥片 ×…チップ(砕片)

黒曜石(三船)

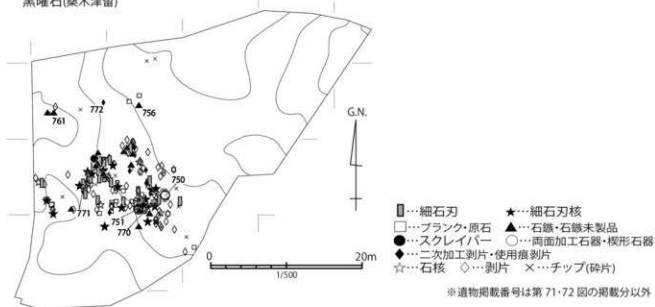


- ★…細石刃核 □…ブランク ●…スクレイパー
- ◆…使用痕剥片 ☆…石核 ◇…剥片
- ×…チップ(砕片)

第73-1図 第Ⅺ層出土遺物分布図(4) [調査区全体(土器・石器石材別)]

※遺物掲載番号は第71-72図の掲載分以外

黒曜石(桑木津留)



第73-2図 第XI層出土遺物分布図(5) [調査区全体(石器石材別)]

XI層

器種	細石刃	細石刃核	プランク	尖頭器	尖頭器未製品	石鏃	石鏃未製品	投石	両面加工石器 (スクレイパー・磨石)	二次加工剥片	使用痕剥片	石核	剥片 (碎片)	チップ (碎片)	磨石	磨石	石皿	原石	各計	重量(g)	参考(未計上)		
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	2	4	-	1	-	10	3,059.5	
砂岩(硬質)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	308.1	
頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	6	126.9	
頁岩(珪質)	-	1	-	1	-	-	-	-	-	3	1	3	22	-	-	-	-	-	-	-	33	491.8	
チャート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	14	-	-	-	-	-	-	15	60.2	
流紋岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	1	2	6	-	-	-	-	-	-	13	278.4	
石英	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	5	9.5	
黒曜石(桑木津留)	28	21	3	-	-	7	8	1	1	1	6	5	6	86	33	-	-	-	-	14	220	347.2	
黒曜石(上牛鼻)	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	11	6	-	-	-	-	-	23	144.5	
黒曜石(三船)	-	-	1	2	-	-	-	-	-	1	1	1	11	2	-	-	-	-	-	-	21	47.6	
黒曜石(産地不明)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2	3	8.7	
ホルンフェルス	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	68.2	
各計	29	24	6	1	1	7	9	1	2	6	13	8	15	163	41	2	5	1	1	16	351	4990.6	

第5表 第XI層出土石器組成表



小迫遺跡周辺の低地帯(参考)

③-1に比べて細石刃の獲得数は多い…(739・740)

④ 打面転移が実施されるもの…(742～745)

⑤ 打面転移と側面調整の実施…(746～748)

⑥ 打面転移が上下面とも実施…(749)

図化掲載した21点(729～749)のうち、741は上牛鼻産黒曜石、747は珪質頁岩、748は三船産黒曜石で、それ以外は桑木津留産黒曜石を母材としている。

その他、細石刃核の関連遺物にブランク6点(上牛鼻産1・桑木津留産3・三船産2)、原石14点(桑木津留産)がある。

両面加工石器(750) 表裏両面とも剥離される石器で、器種を特定できなかったもの。2点出土し、全て黒曜石製である。750は桑木津留産黒曜石製で、その器厚は薄い。

楔形石器(751) 楔形石器は1点のみ出土した。751は、桑木津留産黒曜石製で、本来は横長の平面形とみられる。下縁に刃部を形成し、縦断面は凸レンズ状を呈する。

尖頭器(752・753) 槍先形尖頭器とその未製品である。2点出土しており、全て図化掲載した。2点とも珪質頁岩を石器石材として使用している。

752は完形品である。柳葉形の平面形で、細身ながらも表裏とも丁寧な剥離作業が施される。硬質で黒色の珪質頁岩を石材とし、指先で弾くと高く澄んだ音がよく響く。

753は、尖頭器の未製品とした。先端部とみられ、それ以下を欠損している。表裏ともに礫面を残す。

打製石鏃(754～761) 打製石鏃および未製品である。16点出土し、全て黒曜石製である。特に桑木津留産黒曜石製が15点と卓越している。このうち8点を図化掲載した。

754～757は桑木津留産黒曜石製の石鏃で小型品である。平面形は正三角形および二等辺三角形があり、平基のもの(754・755)と、ごく浅いアーチ状の抉りを持つ凹基のもの(756・757)がある。

758～761は石鏃未製品とした。理由は、先端部や基部を欠損していることや周縁の剥離が粗く平面形が精美ではなためである。758～760の平面形は二等辺三角形で平基、761は両側縁がやや外湾する凹形で平基である。758・759・761は桑木津留産、760は上牛鼻産黒曜石製である。

スクレイパー(762～766) 搔器・削器類を一括した。頁岩・珪質頁岩・流紋岩および黒曜石製の6点が出土し、5点を図化掲載した。縦長剥片や鱗状剥片等を素材とし、側縁や末端を二次加工して刃部とする。

762・763は流紋岩製で小型な縦長、764・765は黒曜石製の小型で幅広い半円形、766は頁岩製の大型で縦長のスクレイパーである。763・766は下半部を欠損している。762・763は剥片素材の表裏や周縁部を比較的丁寧に剥離調整するが、764・765は礫面を一部残している。766は側縁部を二次加工して刃部となす。

二次加工剥片(767～772) 剥片に二次加工を施したもので、何らかの石器の製作途中によるものも含めた。珪質頁岩・流紋岩・黒曜石製の13点が出土しており、このうち6点を図化掲載した。

767・768は流紋岩製である。767はピック状の平面形をもち、下縁と側縁に細かな剥離痕を有する。768は大ぶりの剥片の側縁を粗く二次加工する。

769～772は黒曜石製である。769・771はピック状やペラ状の平面形で、下縁や側縁に細かな剥離を施す。770・772は礫面を残す縦長剥片の側縁を二次加工する。

使用痕剥片(773) 刃こぼれ状の微小な剥離痕を持つ剥片のうち、1点を図化掲載した。珪質頁岩・流紋岩・黒曜石製の8点が出土したが、肉眼のみの観察なので、実数はさらに多い可能性がある。

773は流紋岩製で、不定形で幅広い剥片の縁刃に微小剥離痕が認められる。

石核(774～780) 細石刃核以外の石核は15点出土しており、砂岩・珪質頁岩・チャート・流紋岩・黒曜石製がある。このうち、7点を図化掲載した。

774は礫面を一部残す珪質頁岩製で、打面を転移しながら剥離を行っている。775も珪質頁岩製で、一部礫面を残す。表裏とも最終的な剥離は周縁部から求心的に進んでいる。776は流紋岩製で、短刃側から礫面を剥ぎ取る剥離作業が読み取れる。

777～780は桑木津留産黒曜石製である。細石刃核と同じく小礫を素材に打割したもののみみられるが、778は比較的大きめの原石を素材としており、一見して舟底形に見える。

剥片(781～783) 剥片は163点出土し、砂岩・頁岩・珪質頁岩・チャート・流紋岩・黒曜石製がある。石器製作の際に生じた調整剥片や素材剥片とみられる。

781は頁岩製、782は流紋岩製、783はチャート製の幅広剥片や縦長剥片である。

敲石(784～787) 784～787は砂岩の棒状礫、787はホルンフェルスの円礫を敲石として使用している。

磨敲石(788) 硬質な砂岩の円礫を使用している。磨面のほか凹間接・直接打法による潰打痕が明瞭に残っている。

石皿(789) 砂岩製の石皿である。扁平な円礫を用いており、上面し側縁の一部に使用痕(光沢面)が認められる。

(4) 小結

第XI層からは、細石刃・細石刃核、尖頭器、打製石鏃およびスクレイパー等と縄文土器が出土した。

細石刃核には、黒曜石の小礫を素材とし打面剥離を行いながら細石刃を剥離する技法が認められ、数種類がある。

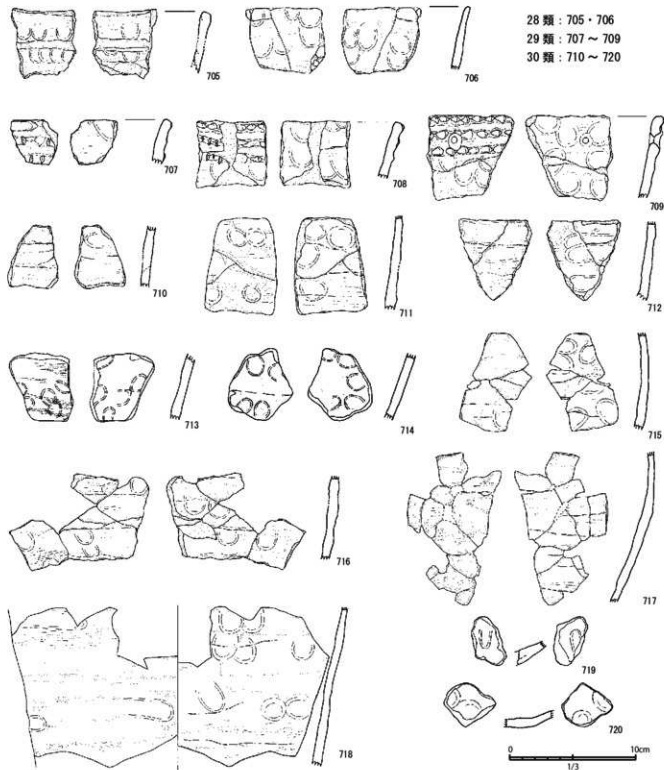
打製石鏃では、多様な平面形の石鏃があり、槍先形尖頭器も出土した。また、スクレイパー類では、縦長と幅広いし半円形のタイプがあり、大小の別がみられた。

一方、縄文土器には29類土器（隆帯文土器）と28類土器（無文土器）の2者の存在も認められた。

前述のように、第XI層出土遺物の出土状況は、各種遺物群の層位的な共時性や時期差の有無を判断する状況証拠としては乏しいものがある。しかし、細石刃核の技術的な遷

移および打製石鏃やスクレイパー類の形態差、さらには28・29類土器の存在等から、個々の遺物群は共伴関係（共時的）にあるとするよりは、同一層中に複数時期の遺物が混在する状態とも考えられる。

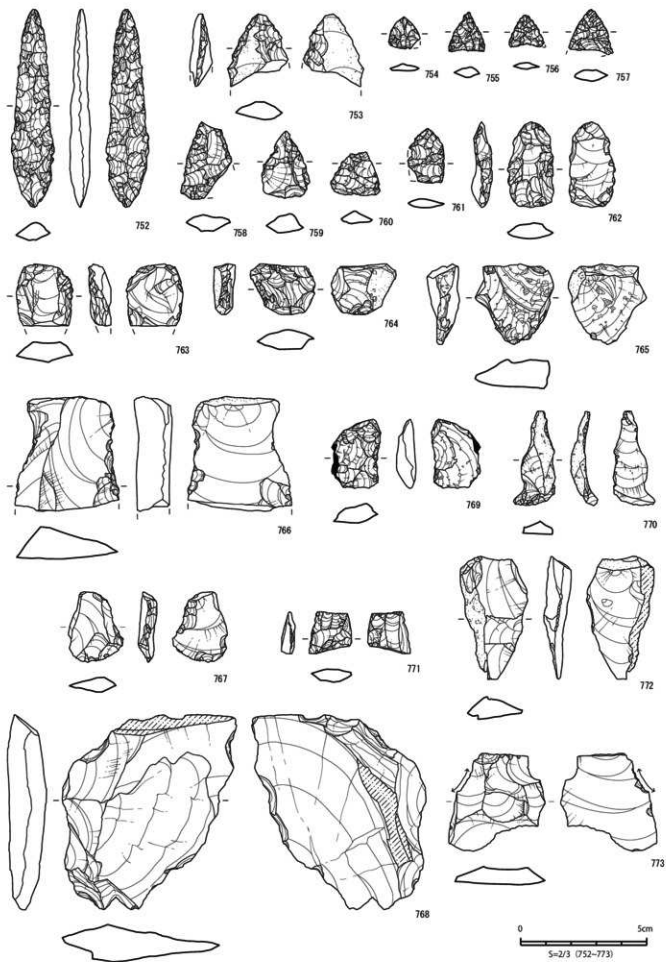
少なくとも、第XII層の堆積後～板島隣摩テフラ（第X層）降灰直前までに形成された遺物包含層（第XI層）の出土遺物中に、28・29類土器と細石刃・細石刃核、尖頭器および打製石鏃等の存在を確認できたことは、大きな成果である。



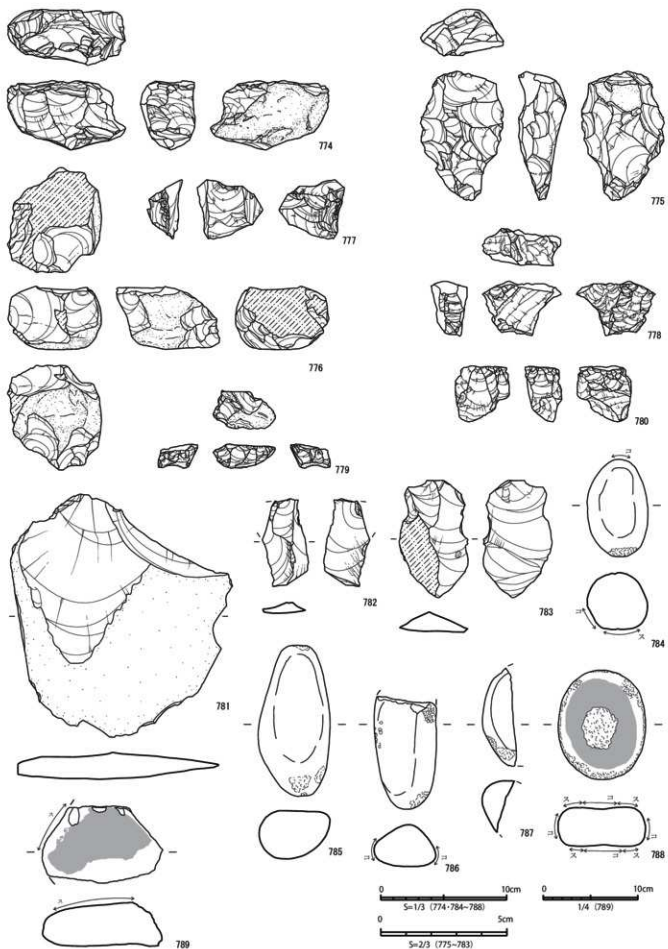
第74図 第XI層出土遺物実測図（土器）



第75图 第Ⅴ層出土遺物実測図(石器)〔1〕



第76图 第Ⅴ層出土遺物実測図(石器)[2]



第77図 第Ⅺ層出土遺物実測図(石器)【3】

壁六建物跡 (SA)

遺構番号	平面形	長さ (m)		床面積 (㎡)	主柱穴	出土遺物		時期	柱穴配置 / 壁 / 塀内土状等
		長軸	短軸			土器 (深鉢) の形式	石器 (磨石)		
SA1	円形	3.9 ± 0	3.73	5.367	1	春日 / 大平 / 宮之庭 / 赤土 / 無文	銅片 / チップ / 緑釉磁	春日式銅	壁穴内縁にビッド列 / 春日式土器は床面付直出土
SA2	横円形	4.8 ± 0	4.68	16.279	1	春日 / 中尾田遺跡 / 無文	石片 / 磁石 / 磨石 / ストレイバー / 二次加工 / 使用痕跡 / 石片 / 銅片 / チップ	春日式銅	壁穴内縁にビッド列 / 春日式土器は床面付直出土
SA3	長方形	5.65	3.7	13.262	2 ± 0	春日 / 中尾田遺跡 / 宮之庭	使用痕跡 / 石片 / 銅片	春日式銅	春日式土器は床面付直出土
SA4	長方形	3.5 ± 0	3.9	7.903	-	春日	銅片	春日式銅	春日式銅
SA5	長方形	4.12	1.7 ± 0	3.954	2 ± 0	春日 / 中尾田遺跡 / 無文	銅片 / チップ	春日式銅	主柱穴は4本4ヶ / 春日式土器は床面付直出土
SA6	横円形	5.94	5.35	22.954	2	春日式 / 中尾田遺跡 / 大平 / 宮之庭 / 無文	ストレイバー / 二次加工 / 銅片 / 磨石 / 磁石 / 石片 / 銅片 / チップ	春日式銅	遺跡中 / 塀内土状 / 壁穴内縁にビッド列 / 春日式土器は床面付直出土
SA7	長方形	4.58	4.45	13.36	不明	春日 / 宮之庭	使用痕跡 / 石片 / 銅片 / チップ	春日式銅	春日式銅
SA8	長方形	3.86	3.15	11.566	3 ± 0	大平 / 宮之庭 / 無文	銅片 / 磨石	大平式銅	春日式銅
SA9	横円形	3.9	3.6	8.511	6	春日 / 大平 / 中尾田遺跡 / 宮之庭	使用痕跡 / 銅片	宮之庭式銅	遺跡中 / 塀内土状 / 主柱穴 10 ± 0 列
SA10	円形	3.13	3.13	6.354	2 ± 0	春日 / 中尾田遺跡 / 無文	石片 / ストレイバー / 二次加工 / 銅片 / 銅片 / 磨石	春日式銅	春日式銅
SA11	方形	3.7	2.45	5.156	不明	春日	銅片	春日式銅	-
SA12	方形	3.15	3.65	7.987	2 ± 0	春日	ストレイバー / 銅片	春日式銅	主柱穴は3本4ヶ
SA13	横長方形	5.65	5.45	24.26	2	宮之庭 / 無文	磁石 / 石片 / 磨石	宮之庭式銅	春日式銅
SA14	長方形	3.0 ± 0	3.23	6.966	1 ± 0	宮之庭	銅片	宮之庭式銅	主柱穴は3本4ヶ
SA15	横長方形	3.0 ± 0	3.9	10.462	2 ± 0	宮之庭	銅片	宮之庭式銅	春日式銅
SA16	方形	3.25	3.2	7.117	1 ± 0	春日 / 宮之庭 / 無文	石片	宮之庭式銅	春日式銅
SA17	横円形	5.38	4.4	16.344	2	大平 / 中尾田遺跡 / 宮之庭	石片 / ストレイバー / 使用痕跡 / 磨石 / 磁石 / 石片 / 石片 / 銅片 / チップ	宮之庭式銅	春日式銅
SA18	横円形	4.0 ± 0	3.45	8.921	4 ± 0	大平 / 宮之庭	使用痕跡 / 銅片	宮之庭式銅	春日式銅
SA19	円形	3.6	3.6	14.022	2 ± 0	宮之庭	石片	宮之庭式銅	春日式銅
SA20	円形	3.4	3.4	3.325	2 ± 0	春日 / 中尾田遺跡 / 宮之庭	銅片 / チップ	宮之庭式銅	春日式銅
SA21	横円形	4.42	3.9	6.389	2	春	銅片 / チップ	鎌文式銅	遺跡中
SA22	横円形	3.62	3.5	8.29	2	春日 / 中尾田遺跡 / 宮之庭	銅片	宮之庭式銅	遺跡中 / 塀内土状 / 壁穴内縁にビッド列
SA23	長方形	33.7 ± 0	3.38	9.464	2 ± 0	中尾田遺跡 / 阿波 / 宮之庭 / 無文	使用痕跡 / 磨石 / 銅片	宮之庭式銅	遺跡中 / 主柱穴は3本4ヶ
SA24	横長方形	3.3 ± 0	-	10.923	-	大平 / 本野原	銅片	本野原式銅	春日式銅
SA25	不整形円形	4.7 ± 0	4.36	11.982	2	春日 / 大平 / 中尾田遺跡 / 宮之庭 / 本野原 / 無文	銅片	本野原式銅	春日式銅
SA26	横円形	5.88	5.1	15.692	不明	大平 / 中尾田遺跡	銅片	大平式銅	春日式銅
SA27	横円形	3.76	3.41	4.363	不明	春	-	鎌文式銅	春日式銅
SA28	横円形	4.18	3.95	9.286	5 ± 0	大平 / 宮之庭 / 無文	-	宮之庭式銅	春日式銅
SA29	横円形	5.65	5.12	21.23	2	大平 / 宮之庭	石片 / 磨石 / 石片 / 磨石 / 銅片	宮之庭式銅	春日式銅
SA30	横円形	6.0 ± 0	6.0 ± 0	5.218	不明	春日 / 無文	-	鎌文式銅	春日式銅
SA31	円形	4.15	4.067	10.972	2	春日 / 宮之庭 / 黒色磨研土塀	-	宮之庭式銅	春日式銅
SA32	横円形	4.82	4.54	14.8	1	春日 / 大平 / 中尾田遺跡	-	大平式銅	春日式銅
SA33	長方形	5.5	1.95	3.816	-	大平 / 本野原 / 無文	使用痕跡 / 銅片 / チップ	本野原式銅	春日式銅
SA34	円形	3.95	3.5	9.727	3 ± 0	大平 / 宮之庭	石片 / 磨石 / 使用痕跡 / 磨石 / 磁石	大平式銅	春日式銅
SA35	方形	3.18	1.65	1.793	-	大平 / 宮之庭	銅片	宮之庭式銅	春日式銅
SA36	長方形	2.39	1.68	3.163	-	中尾田遺跡 / 無文 / 春	ストレイバー / 銅片 / チップ	鎌文式銅	春日式銅
SA37	長方形	3.2	1.78	2.927	-	春日 / 無文	-	鎌文式銅	春日式銅
SA38	長方形	3.3	1.67	3.044	-	大平 / 宮之庭	銅片	宮之庭式銅	遺跡中
SA39	長方形	2.25 ± 0	2.25	4.302	-	春	-	鎌文式銅	遺跡中
SA40	長方形	3.5	2.3	4.809	-	春	-	鎌文式銅	遺跡中
SA41	長方形	3.17	1.12	3.392	不明	前平 / 加藤山	-	加藤山式銅	春日式銅
SA42	長方形	3.92	2.97	5.963	不明	前平 / 加藤山	石片	加藤山式銅	春日式銅
SA43	長方形	2.25	2.12	3.158	不明	春日	-	春日式銅	春日式銅
SA44	方形	3.95	2.83	6.868	不明	吉田 / 手山田	-	手山田式銅	春日式銅
SA45	長方形	3.47	4.03	5.261	不明	神取又(横円)	-	神取又式銅	春日式銅
SA46	長方形	4.5	2.3	7.7	不明	前平 / 加藤山 / 吉田	磁石 / 磨石 / 磨石 / 磨石 / 銅片 / 磨石	吉田式銅	春日式銅

壁六状遺構 (SX)

遺構番号	平面形	長さ (m)	床面積 (㎡)	主柱穴	出土遺物	時期	備考	
SX1	横長方形	2.53	1.97	3.025	9	無文土塀	中鉢	春日式銅を有する / 磁気文明期により推定

平地式建物跡 (SB)

遺構番号	平面形	長さ (m)		床面積 (㎡)	主柱穴	出土遺物		時期	備考
		長軸	短軸			土器 (深鉢) の形式	石器 (磨石)		
SB1	円形	3	3.8	6.174	11	-	-	鎌文式銅	遺跡中あり
SB2	円形	2.7	2.5	5.235	10 ± 0	-	-	鎌文式銅	-
SB3	横円形	3.15	2.9	7.246	15	-	-	鎌文式銅	-
SB4	横円形	3.2	2.65	7.439	17	-	-	鎌文式銅	-

土坑・陥し穴状遺構 (SC) [1]

遺構番号	平面形	長さ (m)		深さ (m)	坪面積 (㎡)	主柱穴	出土遺物		時期	備考
		長軸	短軸				土器 (深鉢) の形式	石器 (磨石)		
SC1	不整形	1.4	1.62	0.75	0.42	春	春	中鉢	磁気文明期により推定	
SC2	不整形円形	1.32	1.65	0.53	0.539	春	春	中鉢	磁気文明期により推定	
SC3	長方形	1.98	0.92	0.28	0.282	春	春	石器	遺物数多い	
SC4	円形	1.65	1.63	0.32	0.343	春	春	宮之庭式銅	遺物数多い	
SC5	不整形円形	1.36	1.63	0.33	0.711	春	春	鎌文式銅	-	
SC6	円形	1.5	1.36	0.35	1.033	春	春	鎌文式銅	凹化材の多量出土	
SC7	円形	0.86	0.76	0.33	0.259	無文	無文	鎌文式銅	-	
SC11	横長方形	1.49	1.26	0.27	0.386	春	春	鎌文式銅	-	
SC12	横長方形	1.36	1.18	0.18	0.748	春	春	鎌文式銅	-	
SC15	不整形長方形	2.13	1.15	0.33	1.682	春日 / 中尾田遺跡 / 本野原	銅片 / チップ	中鉢	磁気文明期により推定	
SC16	長方形	1.85	1.17	0.46	0.963	春日	石片	中鉢	磁気文明期により推定	
SC17	横長方形	2.27	1.37	0.45	2.234	春日 / 中尾田遺跡 / 宮之庭 / 阿波(不明)	使用痕跡 / 銅片	宮之庭式銅	深鉢部が凹化(出土) / 土器類の多量出土	

第6表 遺構一覧表 (1)

土坑・陥し穴状遺構 (SC) [2]

遺構番号	長さ (m)			深さ (m)	平面積 (㎡)	出土遺物		時期	備考
	平面型	長軸	短軸			土器 (深鉢) の形式	石器 (石器)		
S021	方形	1.13	0.97	0.36	0.772	宮之庭 / 成川式宇無文	-	成川式期?	-
S022	長方形	1.17	0.83	0.27	0.778	-	-	成川式期?	-
S024	長方形	1.61	1.2	0.3	1.32	宮之庭	-	宮之庭式期	炭化物較多い
S025	長方形	1.1 + a	0.93	0.3	0.647	太平	-	大平式期?	深鉢底部が凹型で出土 / 炭化物較多い
S027	長方形	1.18	0.91	0.36	0.613	-	削片	縄文中~後期	-
S028	長方形	1.40	0.97	0.42	0.53	-	-	縄文後期	炭化物較多い
S029	長方形	1.38	0.88	0.35	0.752	-	削片	縄文後期	深鉢平底
S030	長方形	1.18	1.02	0.23	0.733	壺 / 無文	削片	縄文中~後期	-
S031	楕円形	1.08	0.7	0.26	0.408	香豆 / 古形	-	古形式期	炭化物較多い
S034	楕円形	1.45	1.03	0.33	0.942	大平 / 宮之庭 (例高平) / 無文	削片	縄文後期	炭化物較多い
S038	長方形	1.22	0.9	0.3	0.707	壺 / 無文	-	縄文後期	-
S037	楕円形	1.94	0.92	0.16	1.174	-	-	縄文後期	-
S038	長方形	0.86	0.65	0.16	0.302	-	-	縄文中~後期	-
S039	長方形	2.61	1.09	0.31	1.718	-	-	中世	板島文明期石により推定
S040	楕円形	1.42	0.83	0.46	0.943	-	削片	縄文中~後期	-
S041	方形	1.33	1.05 + a	0.28	0.789	太平	チップ	宮之庭式期	-
S042	方形	0.95	0.95	0.23	0.526	-	-	縄文中~後期	-
S043	長方形	1.08	0.9	0.23	0.894	-	-	縄文後期	-
S046	長方形	1.51	1.03	0.44	0.653	-	-	縄文中~後期	-
S048	方形	0.9	0.88	0.25	0.422	宮之庭 / 無文	-	宮之庭式期	-
S049	不整形	0.96	0.73	0.27	0.516	-	-	縄文中~後期	-
S050	不整形	0.93	0.79	0.27	0.307	-	-	縄文中~後期	-
S052	不整形	1.18	1.02	0.4	0.619	香豆 / 大平 / 壺	-	大平式期	土器類の多量包含
S053	不整形	1.27	1.14	0.22	0.907	大平 / 宮之庭 / 無文	石鏝	宮之庭式期	土器類の多量包含
S054	不整形	1.06	0.77	1.17	0.189	-	石鏝	縄文中~後期	陥し穴状遺構
S055	不整形	0.92	0.78	1.35	0.607	香豆 / 宮之庭	削片	宮之庭式期	炭化物較多
S057	不整形	1.18	1.04	0.18	0.676	宮之庭	-	宮之庭式期	-
S058	不整形	0.97	0.93	0.23	0.809	-	削片	縄文後期?	-
S060	楕円形	1.22	0.84	0.25	0.586	宮之庭	-	宮之庭式期	-
S061	不整形	1.45	1.08	0.17	0.73	-	-	縄文早期	-
S063	不整形	1.40	0.67	0.19	0.696	-	-	縄文早期	-
S065	楕円形	2.40	0.82	0.36	0.295	-	-	縄文早期	-
S066	楕円形	2.02	0.78	0.27	0.721	-	磨石	縄文早期	-
S067	不整形	0.89	0.82	0.2	0.221	-	-	縄文早期	-
S068	楕円形	2.41	1.23	0.35	1.83	-	-	縄文早期	-
S069	不整形	0.93	0.53	0.19	0.105	-	削片	縄文早期	-
S070	楕円形	1.67	0.62	0.27	0.15	-	-	縄文早期	-
S073	楕円形	1.45	1.12	0.7	0.803	-	-	縄文早期	陥し穴状遺構
S076	不整形	1.66	1.30	0.25	0.961	-	削片	縄文早期	-
S077	楕円形	0.8	0.77	0.48	0.18	-	-	縄文早期	陥し穴状遺構
S078	不整形	1.96	1.19	0.33	1.201	-	-	縄文早期	-
S080	楕円形	1.14	0.94	0.94	0.631	-	-	縄文早期	陥し穴状遺構
S081	楕円形	1.7	0.82	0.7	0.379	-	削片	縄文早期	陥し穴状遺構
S082	楕円形	0.95	0.8	0.74	0.292	-	-	縄文早期	陥し穴状遺構
S083	楕円形	0.96	0.7	0.82	0.156	-	-	縄文早期	陥し穴状遺構
S084	不整形	1.27	0.83	0.22	0.313	-	-	縄文後期	陥し穴状遺構
S086	不整形	1.12	0.95	0.33	0.282	-	-	縄文早期	-
S087	不整形	1.35	1.13	0.28	0.728	-	-	縄文早期	-
S088	楕円形	1.72	1.09	0.30	1.142	前平	-	前平式期	-
S089	楕円形	1.76	1.15	0.28	0.983	加茂山	削片	加茂山式期?	-
S090	楕円形	0.9	0.88	0.6	0.444	-	-	縄文早期	陥し穴状遺構
S091	楕円形	2.26	1.4	0.3	2.267	-	-	縄文早期	-
S095	方形	1.2	0.96	1.36	0.256	-	-	縄文後期	陥し穴状遺構

集石遺構 (S 1)

遺構番号	長さ (m)			深さ (m)	埋込状況	出土遺物		時期	備考
	平面型	長軸	短軸			土器 (深鉢) の形式	石器 (石器)		
S11	1.35	0.72	0.35	0	不明	-	-	縄文早期	砂岩系磁土主体 / 赤土・磁砂
S12	3.47	1.6	0.4	0	不明	-	-	縄文早期	砂岩系磁土主体 / 赤土・磁砂
S13	3.22	1.5	0.64	0	不明	-	-	縄文早期	砂岩系磁土主体 / 赤土・磁砂
S14	0.6	0.40	0.22	0	不明	-	-	縄文中~後期	砂岩系磁土主体 / 赤土・磁砂
S15	2.21	2.06	0.56	0	不明	-	-	縄文早期	砂岩系磁土主体 / 赤土・磁砂
S16	1.25	0.9	-	-	-	-	-	縄文早期	砂岩系磁土主体 / 赤土・磁砂
S17	1.5	0.5	-	-	-	-	-	縄文早期	砂岩系磁土主体 / 赤土・磁砂
S18	1.58	1.42	0.38	0	不明	-	-	縄文早期	砂岩系磁土主体 / 赤土・磁砂
S19	1.05	0.97	0.36	0	不明	-	-	縄文早期	砂岩系磁土主体 / 赤土・磁砂
S110	0.73	0.64	0.33	0	不明	-	-	縄文中~後期	砂岩系磁土主体 / 赤土・磁砂

道路状遺構 (SG)

遺構番号	長さ (m)		深さ (m)	埋込状況		出土遺物		時期	備考
	平面型	幅 (下幅)		有無	状況	土器 (深鉢) の形式	石器 (石器)		
S01	9.4 + a	0.75	0.8	○	硬化層	-	削片	中世	板島文明期石により推定
S02	9.9 + a	0.4	0.5	○	硬化層	-	削片 / チップ	中世	板島文明期石により推定

※一員倉倉集石地の深鉢片 (黒部一産部資料のため形式不明)

第6表 遺構一覧表 (2)

標本番号	種別	器名	出土位置 (遺構・G/層/坑)	分期	文様・調整		色塗		胎土	備考		
					外産	内産	外産	内産				
1	土師	壺	ⅢB・Ⅳ	-	ナデ	ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	白			
2	土師	壺	C5Ⅲ・Ⅳ	-	ナデ	ナデ	灰黄緑	黄緑	黄緑	底縁(Ⅰ)		
3	土師	壺	ⅢA・Ⅳ	-	自然釉/ナデ/高台	ナデ	灰	灰	黄緑			
4	土師	杯	Ⅲ・Ⅳ	-	ナデ/ヘラ切り	ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	半透明/白/赤	底縁(Ⅰ)		
5	土師	壺	ⅢB・Ⅳ	-	ナデ/ヘラ切り	ナデ	灰黄	灰黄	光沢/半透明/白/赤	底縁(Ⅰ)		
6	土師	壺	ⅢA	-	-	ミガキ	灰黄	黄緑	透明/白			
7	土師	壺	ⅢA	-	輪飾	輪飾	オリーブ灰	黄緑	黄緑	底縁(Ⅰ)		
8	土師	壺	ⅢA	1,2	1-3 朝日突帯/貝殻文	貝殻文	黒黒	黄緑	灰/黒/白	スス(外)/口縁(26.0)		
9	土師	壺	ⅢA	1,2	1-3 朝日突帯/朝日突帯/四脚文	ナデ/朝日突帯	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	透明/黒			
10	土師	壺	ⅢA	5-8	ナデ/貝殻文/大流文	貝殻文	黒黒	にぶい・黄	にぶい・黄/白/透明			
11	土師	壺	ⅢA	5-8	高台/輪/朝日突帯/貝殻文/四脚文/多重流線文	貝殻文	灰黄緑	黄	透明/黒/赤/白			
12	土師	壺	ⅢA	17C	貝殻文/ナデ	貝殻文/ナデ	黄	にぶい・黄	白/透明	付着物[白(外)/底縁(Ⅰ)]		
13	土師	壺	ⅢA	17C	ナデ	ナデ	にぶい・黄緑	黄緑/黄緑	透明/黒/白	底縁(Ⅰ)		
14	土師	壺	ⅢA	17A	貝殻文/ナデ	ナデ	にぶい・黄緑	明赤黒	黒/赤/透明/半透明	スス(外)/付着物[白(外)/底縁(Ⅰ)]		
15	土師	壺	ⅢA	11/13/14/46	1-3 高台/輪/朝日突帯/沈線文/朝日突帯/貝殻文	貝殻文	黄緑	灰黄	透明/白	口縁(Ⅰ)		
16	土師	壺	ⅢA	30	1-3 朝日/貝殻文	貝殻文/ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	灰白/黄緑/透明/黒	スス(外)		
17	土師	壺	ⅢA	1-3	朝日突帯/貝殻文	貝殻文	黒黒	にぶい・黄緑	赤/透明			
18	土師	壺	ⅢA	1-3	高台/輪/押引文	貝殻文	黄	灰黄緑	明赤黒			
19	土師	壺	ⅢA	1-3	朝日/ナデ	ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	灰白/黄緑/黄緑	付着物[黄(外)/白]		
20	土師	壺	ⅢA	1-3	朝日突帯/貝殻文	貝殻文	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	黄緑/朝日突帯/白/黒			
21	土師	壺	ⅢA	3	朝日/朝日突帯/貝殻文	貝殻文	オリーブ黒	朝日黄	白/灰白/黒	スス(外)		
22	土師	壺	ⅢA	1-3	朝日突帯/貝殻文/ナデ	貝殻文	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	灰白/黄緑/朝日/明赤黒	スス(外)		
23	土師	壺	ⅢA	16	貝殻文	貝殻文	沈線黄	にぶい・黄緑	黄緑/透明/灰白/黄緑			
24	土師	壺	ⅢA	17	貝殻文/ナデ	貝殻文/ナデ	明赤黒	黄	灰白/黒/透明	スス(外)/付着物[黄(外)]		
25	土師	壺	ⅢA	17D	ナデ/貝殻文	貝殻文	明赤	にぶい・黄	半透明/黒/透明/白	コブ/底縁(Ⅰ)		
26	土師	壺	ⅢA	41	17B-2	貝殻文	黄緑	にぶい・黄	黒/透明/白	付着物[白(外)/底縁(Ⅰ)]		
27	土師	壺	ⅢA	32	17B-1	貝殻文/ナデ	貝殻文/ナデ	黒	黒/白/透明	付着物[白(外)/底縁(Ⅰ)]		
28	土師	壺	ⅢA	17C	ナデ	ナデ	黄	にぶい・黄	白/黒/透明	付着物[白(外)]		
29	土師	壺	ⅢA	4	ナデ/四脚文	貝殻文	黒黒	にぶい・黄緑	黒/白/灰白	スス(外)		
30	土師	壺	ⅢA	7	貝殻文/ナデ	貝殻文	黒黒	にぶい・黄緑	黒/白	スス(外)		
31	土師	壺	ⅢA	4	17B-1	貝殻文/ナデ	貝殻文/ナデ	黄/灰黄緑	灰白/黒	底縁(Ⅰ)		
32	土師	壺	ⅢA	8	1-3	貝殻文/朝日突帯/貝殻文	黄/黒黒	黄	黄/灰白			
33	土師	壺	ⅢA	SC1(地味5)	1-3	貝殻文/朝日突帯/朝日突帯/貝殻文	貝殻文	黒黒	黄緑	透明/黄緑/黄緑	付着物[黄(外)/口縁(25.0)]	
34	土師	壺	ⅢA	SC1(地味5)	1-3	朝日/貝殻文/ナデ	貝殻文	灰黄	明赤黒	白/透明/黒	膝掛孔/付着物[黄(外)/口縁(25.0)]	
35	土師	壺	ⅢA	SC2	1-8	朝日/貝殻文	貝殻文/朝日突帯	にぶい・黄緑	黄緑	灰白/透明/黄緑/沈線黄		
36	土師	壺	ⅢA	1-3	朝日/貝殻文	貝殻文/ナデ	黒黒	黒	黒/灰白/にぶい・黄			
37	土師	壺	ⅢA	66-263	1-3	高台/輪/貝殻文/朝日突帯/ナデ	ナデ	にぶい・黄	灰黄緑	透明	口縁(Ⅰ)	
38	土師	壺	ⅢA	75	1-3	朝日突帯/ナデ	ナデ/貝殻文	灰黄緑	灰黄緑	黄緑/灰白/半透明/白		
39	土師	壺	ⅢA	62	1-3	朝日/朝日突帯/貝殻文	貝殻文	灰黄緑	にぶい・黄緑	透明/白		
40	土師	壺	ⅢA	41	2-1	ナデ/沈線文(朝日文)	貝殻文/ナデ	明赤	明赤	明赤		
41	土師	壺	ⅢA	製土	2-1	ナデ/沈線文(朝日文)	ナデ	にぶい・黄	にぶい・黄	透明/黒/白		
42	土師	壺	ⅢA	33	1-8	朝日/貝殻文	貝殻文	にぶい・黄	にぶい・黄	灰白/明赤/透明	付着物[黄(外)]	
43	土師	壺	ⅢA	21	1-3	朝日/貝殻文	貝殻文	にぶい・黄	黄	透明/白/赤		
44	土師	壺	ⅢA	60	1-3	朝日/貝殻文/ナデ	貝殻文	明赤黒	黄	灰白/透明	付着物[黄(外)]	
45	土師	壺	ⅢA	SA6	1-3	朝日/ナデ/沈線文(朝日文)	沈線文/貝殻文	にぶい・黄	にぶい・黄	透明/白		
46	土師	壺	ⅢA	SA6	17	1-3	朝日/貝殻文	黄	黄	黄		
47	土師	壺	ⅢA	SA6	79	1-3	高台/輪/朝日突帯/貝殻文	貝殻文	にぶい・黄	にぶい・黄	黒	スス(外)/口縁(1.0)
48	土師	壺	ⅢA	SA6	77	1	貝殻文/ナデ	貝殻文	にぶい・黄	にぶい・黄	黄緑/黄緑/沈線黄/白	スス(外)
49	土師	壺	ⅢA	SA6	5?	?	貝殻文/ナデ	貝殻文/ナデ	黄	にぶい・黄	黄	
50	土師	壺	ⅢA	SA6	58	17B-1	ナデ	朝日黄	にぶい・黄	黒	白/灰白/黒/赤	付着物[白(外)/底縁(Ⅰ)]
51	土師	壺	ⅢA	SA6	36	17B-1	ナデ	貝殻文/ナデ	黄	にぶい・黄	黒/透明/白/赤	底縁(Ⅰ)
52	土師	壺	ⅢA	SA6	76	17B-1	ナデ	貝殻文	明赤	にぶい・黄	黒/白/黒	底縁(Ⅰ)
53	土師	壺	ⅢA	SA6	5H	17C	ナデ	ナデ	黄	黄	透明	底縁(Ⅰ)
54	土師	壺	ⅢA	製土	17C	ナデ	ナデ	にぶい・黄	にぶい・黄	白	付着物[白(外)/底縁(Ⅰ)]	
55	土師	壺	ⅢA	SA6	-	-	-	灰黄	黄	半透明/白	付着物[白(外)]	
56	土師	壺	ⅢA	SA7	SC7 28C/193V/164/701/79)	1-3	朝日/朝日突帯/貝殻文	貝殻文	にぶい・黄	にぶい・黄	透明/黒/白	スス(外)
57	土師	壺	ⅢA	SA7	3	1-3	朝日/沈線文(朝日文)/貝殻文	黄	黄	黄	白	
58	土師	壺	ⅢA	SA7	272	5-8	朝日/貝殻文/大流文/ナデ	にぶい・黄	にぶい・黄	黒	スス(外)	
59	土師	壺	ⅢA	SA7	CG 671	5	貝殻文/大流文	貝殻文/ナデ	にぶい・黄	にぶい・黄		

第7表 土器観察表(1)

順番 番号	種別	群位	出土位置 (遺構/Gr/層/No)	分期	文様・調整		色遣		胎土	備考		
					外 産	内 産	外 産	内 産				
60	縄文	深部	Ⅰ深部 SA7 C6-B-N	SA7-16 C6-84	1-V-4	斜目/貝殻敷文	貝殻敷文	にぶい・黄緑	にぶい・赭	赤/透明	仔存物(土器Ⅴ内)	
61	縄文	深部	Ⅰ深部-Ⅱ部	SA7	1-V-1	斜目/押圧斜目/溝/ 貝殻敷文	貝殻敷文	にぶい・黄	にぶい・赭	白/赤		
62	縄文	深部	Ⅱ部	SA7	6	17-C ナデ	ナデ	明赤	にぶい・赤黒	半透明/白/透明	仔存物(白土器/磁器類)	
63	縄文	深部-Ⅱ部	Ⅱ部	SA7 SA23 SA31		17-B-2 貝殻敷文	ナデ	灰黒	黄緑	黒/透明/白/赤	底径(0.6)/胴径	
64	縄文	深部	Ⅰ深部-Ⅱ部	SA8	2-B-1	沈殿文(縦溝状)/貝殻敷文	ナデ/貝殻敷文	黄緑	にぶい・黄緑	透明/半透明/黒/白	スス(外)/口径(35.0)	
65	縄文	深部	Ⅰ深部-Ⅱ部	SA8	5-B-44	斜目/貝殻敷文/加印文/ 貝殻敷文	貝殻敷文/ナデ	黒灰	黒灰	白/透明/黒		
66	縄文	深部	Ⅰ深部	SA8	16	ナデ	貝殻敷文	明赤	にぶい・黄緑	白/透明		
67	縄文	深部	Ⅱ部	SA8	SH	17-A	貝殻敷文/ナデ	ナデ	にぶい・黄緑	黄緑	透明	スス(外)/仔存物(白土器/磁器Ⅰ,Ⅱ)
68	縄文	深部	Ⅱ部	SA8		17-C7 ナデ	ナデ	にぶい・赭	オリーブ黒	透明/白/赤		
69	縄文	深部	Ⅱ部	SA8		17-B-2 ナデ	ナデ	にぶい・赭	にぶい・黄緑	白/黒/透明	仔存物(白土器Ⅴ)	
70	縄文	深部	Ⅰ深部-Ⅱ部	SA9	27	2-B-2 ナデ/沈殿文(縦溝状)	貝殻敷文/ナデ	にぶい・赭	黒	半透明/透明		
71	縄文	深部	Ⅱ部	SA9	3	沈殿文	ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	灰白	スス(外)	
72	縄文	深部	Ⅰ深部-Ⅱ部	SA9	14/15/16/ 17/18/19/25	5-B-1 ナデ/貝殻敷文/貝殻敷 斜紋文/久直文	ナデ	黒灰/赭	赭/黒灰	白/黒/透明	口径(29.0)	
73	縄文	深部	Ⅱ部	SA9	5-1	ナデ/巻文	ナデ	にぶい・赭	にぶい・黄緑	白/透明		
74	縄文	深部	Ⅰ深部	SA9	21	5-B-44 ナデ/加印文/円形刺突文	ナデ/貝殻敷文	黒灰	黒灰	白/赤		
75	縄文	深部	Ⅱ部-Ⅲ部	SA9 SA1	2	17-B-2 貝殻敷文/ナデ	ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄	黒/透明/白	スス(外)/底径(100/ 胴径)	
76	縄文	深部	Ⅱ部	SA9	4	17-A 貝殻敷文/ナデ	貝殻敷文	にぶい・赭	黒	黒	底径(10.2)/胴径	
77	縄文	深部	Ⅱ部	SA9 SA1	SA9-20	17-B-2 ナデ	ナデ	にぶい・黄緑	灰黒	半透明/黒/透明/白	仔存物(白土器Ⅴ)スス (外)/底径(磁器Ⅱ)	
78	縄文	深部	Ⅰ深部-Ⅱ部	SA10	5	1-B-2 貝殻斜紋刺突文/貝殻敷文 /沈殿文(縦溝状)	貝殻敷文/ナデ	赭	黒灰/赭	金/黒/白		
79	縄文	深部	Ⅰ深部	SA10	1-B-1	巻文/1線/ナデ/押圧文 刺突文/貝殻敷文	貝殻敷文/ナデ	黒灰	にぶい・赭	白/透明/半透明		
80	縄文	深部	Ⅰ深部	SA10	1-B-1	縦溝状/1線/押圧文 刺突文/貝殻敷文	貝殻敷文/ナデ	灰黒	灰黒	黒		
81	縄文	深部	Ⅰ深部-Ⅱ部	SA10 SA2	SA10-7 SA2	1-V-4 斜目/貝殻敷文	貝殻敷文	灰黒	黒	透明/白	口径(17.5)	
82	縄文	深部	Ⅰ深部	SA10	SH	1-1-1 ナデ/押圧刺突文/貝殻敷文	貝殻敷文	黒灰	暗黄緑	透明/白/赤		
83	縄文	深部	Ⅰ深部	SA10	11	1-B 沈殿文/貝殻敷文/ナデ	貝殻敷文	黒	にぶい・黄緑	白/透明/黒		
84	縄文	深部	Ⅱ部	SA10	1	17-B-1 貝殻敷文/ナデ	貝殻敷文/ナデ	にぶい・赭	にぶい・黄緑	灰白	底径(8.8)/胴径(土器Ⅴ内)	
85	縄文	深部	Ⅱ部	SA10	17-C	17-C 貝殻敷文/ナデ	貝殻敷文	にぶい・赭	にぶい・黄緑	灰白/透明	底径(10.0)	
86	縄文	深部	Ⅰ深部-Ⅱ部	SA11	1-V-1	巻文/1線/ナデ/斜形刺突 文/貝殻敷文	貝殻敷文	赭	にぶい・黄緑	赤/透明	スス(外)	
87	縄文	深部	Ⅰ深部	SA11 SA12	1-1-1	斜目/斜形刺突文/貝殻敷文	貝殻敷文/ナデ	沈殿文	黒灰	白/半透明/黒		
88	縄文	深部	Ⅰ深部-Ⅱ部	SA12	1-B-1	斜目/斜形刺突文/貝殻敷文	ナデ/貝殻敷文	にぶい・赭	赭	白/黒/透明		
89	縄文	深部	Ⅰ深部-Ⅱ部	SA11 SA12 B7-B-N	B7-888	1-V-2 ナデ/貝殻敷文/貝殻敷 斜紋刺突文	貝殻敷文	赭	赭/にぶい・黄緑	透明/黒		
90	縄文	深部	Ⅰ深部	SA13	1-B	5-B-2B 斜目/加印文/貝殻敷文	貝殻敷文	赭	黒	白/透明		
91	縄文	深部	Ⅱ部	SA13	5	巻文/工具ナデ	貝殻敷文	にぶい・黄緑/黄緑	暗黒	黒	底径(10.0)/胴径	
92	縄文	深部	Ⅱ部	SA13	5-B-1	横長刺突文/工具ナデ	ナデ	灰黒	黒	白	底径(7.0)	
93	縄文	深部	Ⅰ深部	SA13	16	貝殻敷文	貝殻敷文/ナデ	灰黒	にぶい・黄緑	白/透明/黒灰/黒		
94	縄文	深部	Ⅱ部	SA13	1-B	17-C7 ナデ	ナデ	明赤	明赤	白	底径(7.0)	
95	縄文	深部	Ⅱ部	SA13	SH5	17-A ナデ/加印文	ナデ/加印文	にぶい・赭	にぶい・赭	透明/黒/白/赤	底径(8.8)/胴径	
96	縄文	深部	Ⅱ部	SA13	SH5	17-A 貝殻敷文	ナデ	灰黒	赭	透明/黒/白	仔存物(白土器Ⅴ/磁器Ⅱ)	
97	縄文	深部	Ⅱ部	SA13		17-B-2 貝殻敷文	ナデ	赭	灰黒	透明/半透明/黒/白/赤	仔存物(白土器Ⅴ/コ タ(外)/底径(磁器Ⅱ/胴径)	
98	縄文	深部	Ⅱ部	SA13	1-B	17-A 貝殻敷文	貝殻敷文/ナデ	にぶい・赭	赭	白	仔存物(白土器Ⅴ/底 径(5.0))	
99	縄文	深部	Ⅱ部	SA14	1	5-B/8 大直文/ナデ	貝殻敷文/ナデ	明赤/黒	黒灰/にぶい・赭	金/白		
100	縄文	深部	Ⅱ部	SA15 E3-B-N	E3-1023	5-1-3 加印文/貝殻敷文/ナデ	貝殻敷文/ナデ	黄緑	黄緑	透明/黒/白/赤		
101	縄文	深部	Ⅱ部	SA15 E4/F2 (B・N)	E4-1379	5-1 彫形文/貝殻敷文	貝殻敷文	黒	にぶい・黄緑	白		
102	縄文	深部	Ⅱ部	SA15	7	17-C 貝殻敷文	ナデ	灰黒	にぶい・赭	半透明/黒/透明/白/赤/赭	仔存物(白土器Ⅴ・内)/ 底径(10.0)/胴径	
103	縄文	深部	Ⅱ部	SA15	3/4	17-B-2 貝殻敷文	貝殻敷文	灰黒	黄緑	透明/半透明/黒/白/赤	スス(外)/仔存物(白土器Ⅴ) 底径(11.6)/胴径	
104	縄文	深部	Ⅰ深部-Ⅱ部	SA16 C5-B-N	SA16-6 C5-280	5-1-2 ナデ/加印文/彫形文	貝殻敷文/ナデ	にぶい・赤黒	にぶい・黄緑	黒/透明/白	スス(外)	
105	縄文	深部	Ⅰ深部	SA16	1	5-1-3 縦溝状/1線/ナデ/沈殿文	ナデ	明赤	明赤	半透明/黒/白	スス(外)/底径(土器Ⅴ内)	
106	縄文	深部	Ⅰ深部	SA16	6	5-B-44 ナデ/斜目/加印文/沈殿文	貝殻敷文	明赤	明赤	透明/黒/白	スス(外)	
107	縄文	深部	Ⅰ深部-Ⅱ部	SA16 E2-B-N	SA16-3	5-B/8 貝殻敷文/大直文	貝殻敷文	赭	黒灰/赭	透明/赤	仔存物(土器Ⅴ内)	
108	縄文	深部	Ⅰ深部-Ⅱ部	SA16	2	1-V-1 刺突文/貝殻敷文	ナデ	にぶい・赭	赭	透明/白/赤	スス(外)	
109	縄文	深部	Ⅱ部	SA16 E2-B-N	SA16-1	5-B/6 貝殻敷文/ナデ	貝殻敷文/ナデ/ 加印文	にぶい・赭	黒	金/白	スス(外)	
110	縄文	深部	Ⅱ部	SA16 E2-B-N	SA16-10 E2-113	5-B/2 貝殻敷文/ナデ	ナデ	にぶい・赭	にぶい・赭/黒	黒/透明/白	仔存物(白土器Ⅴ)底 径(11.0)/胴径	
111	縄文	深部	Ⅰ深部	SA17/22/ E2-B-N	SA17-27 E2/E3 1821/1710	2-B-1 貝殻敷文/ナデ/沈殿文 (縦溝状)	貝殻敷文	にぶい・赭	にぶい・赭	白/透明		

第7表 土器観察表(2)

編年番号	種類	群名	出土位置 (遺構/Gr/層/坑)	分期	文様・図案		色調		胎土	備考		
					外壁	内面	外壁	内面				
112	縄文	上層部	SA17 E3-B-N	5-B-3	ナデ/乱文/多重凹線文/貝殻条文		にぶい/暗	灰黄	透明/白			
113	縄文	上層部	SA17 18	5-B-1A	斜目/多重凹線文/ナデ/横文	ナデ	暗/暗	灰黄	透明/黒/白			
114	縄文	上層部	SA17 28	5-B-2	斜目/ナデ/多重凹線文/貝殻条文		黒黄/暗	灰黄/暗	透明/黒/白			
115	縄文	上層部	SA17 E2/E3-948/ 1001/1080/ 1089/1204	5-B-3	斜線文(1層)/貝殻条文/大乱文		黒黄/にぶい	暗	透明/白	鑑定(唐047)		
116	縄文	上層部	SA17	5-B-3A	斜目/貝殻条文/加凹線文		暗/灰	灰黄/暗	白/透明/黒/赤			
117	縄文	上層部	SA17	5-B-4	斜目/加凹線文/多重凹線文		灰黄	にぶい/暗				
118	縄文	上層部	SA17	5-B-4A	斜目/貝殻条文/加凹線文/大乱文		にぶい/暗	暗	透明/黒/白	又ス(外)/仔骨物(黄黒外)/1層(24層)		
119	縄文	上層部	SA17 25	5-B-1a	ナデ/乱文	ナデ	明赤	明赤	半透明/白			
120	縄文	上層部	SA17	5-B-3	ナデ/斜目/横文/行文	ナデ	にぶい/暗	灰黄	半透明/透明/白	炭化物付着		
121	縄文	上層部	SA17 SA18	5-B-3A	斜目/貝殻条文/加凹線文/大乱文		明	にぶい/暗	金/白			
122	縄文	上層部	SA17	5-B-3A	波状1層/波状突起/ナデ/加凹線文	ナデ	灰黄	暗	透明/白			
123	縄文	上層部	SA17 E3-B-N	E3-1027	波状1層/貝殻条文/加凹線文/乱文		貝殻条文	暗/暗黄	白/黒黄/透明			
124	縄文	上層部	SA17	22	5	横文突起/斜目/横文/行文	ナデ	明赤/暗 にぶい/暗	暗/赤	透明/赤		
125	縄文	中層部	SA17 SC17	31	5or16	貝殻条文	貝殻条文	灰黄	暗/暗	透明/白	仔骨物(黄黒外)	
126	縄文	中層部	SA17 E3-B-N	E3-1025	5or16	貝殻条文/ナデ	ナデ	黄黒/にぶい/黄	にぶい/暗	透明/白		
127	縄文	中層部	SA17		5or16	貝殻条文/ナデ	貝殻条文	暗	にぶい/暗	金/白		
128	縄文	中層部	SA17 E2/E3 925/1074- *N-IV 1076/1090	5	大乱文/貝殻条文		灰黄	にぶい/暗	白/赤			
129	縄文	中層部	SA17	24	5or16	貝殻条文		にぶい/暗	にぶい/暗	透明/白/赤		
130	縄文	底部	SA17 E2-B-N	17-D	貝殻条文/ナデ	ナデ	暗	暗	白/金	仔骨物(白)外/結合面(黄)		
131	縄文	底部	SA17 E3-B-N	E3-923	17-B-2	貝殻条文	ナデ/貝殻条文	暗	明赤	透明/白	仔骨物(白)外/底径7.4cm/網代	
132	縄文	底部	SA17 E3-B-N	SA17-12 E3-1019	17-B-2	ナデ	貝殻条文/ナデ	暗/にぶい/暗	にぶい/暗	透明/白	仔骨物(白)外/底径10.0cm/網代	
133	縄文	底部	SA17 E3-B-N	下層	17-A	ナデ	ナデ	暗	白/赤	仔骨物(白)外/底径10.0cm/網代		
134	縄文	底部	SA17		17-C	ナデ	ナデ	にぶい/暗	にぶい/暗	光沢/白	仔骨物(白)外/底径10.4cm	
135	縄文	底部	SA17 E3-B-N	E3-946	17-C	貝殻条文	貝殻条文/ナデ	暗	にぶい/暗	透明/白	仔骨物(白)外/底径8.8cm	
136	縄文	底部	SA17		17-B-2	ナデ	ナデ	灰	暗	透明/白	仔骨物(白)外/底径9.5cm/網代	
137	縄文	底部	SA17		17-B-2	ナデ	ナデ	にぶい/暗	にぶい/暗	透明/白/赤	仔骨物(白)外/底径10.0cm/網代	
138	縄文	中層部	SA17 E3-B-N	SA17-12 E3-1024/1025	17-A	貝殻条文	貝殻条文	暗	暗	半透明/透明/赤	又ス(外)/仔骨物(白)外/底径10.9cm/網代(鑑定)	
139	縄文	中層部	SA17		17-A	貝殻条文	貝殻条文	にぶい/暗	にぶい/暗	透明/黒/白	炭化物/仔骨物(白)外/底径10.3cm/網代	
140	縄文	底部	SA17		4	17	ナデ	にぶい/暗/灰黄	にぶい/暗	半透明/透明	仔骨物(白)(外)/底径10.8cm	
141	縄文	底部	SA17 SA20 F4-N	F4-1496	17-B-2	貝殻条文	貝殻条文	灰黄	暗	金/白/赤	底径13.4cm/網代	
142	縄文	中層部	SA17 E3-B-N	E3-1017	17-A	貝殻条文	貝殻条文/ナデ	にぶい/暗	暗	透明/白	底径12.0cm/網代	
143	土器	中層部	SA17	F層		沈線文/刺突文	貝殻条文	暗	にぶい/暗	透明/白		
144	縄文	上層部	SA18		5-B-2a	斜目/貝殻条文/刺突文/横文/行文	ナデ	にぶい/暗	にぶい/暗	透明/白	仔骨物(黄黒外・内)	
145	縄文	上層部	SA18		10	5-1-1	斜目/貝殻条文/大乱文	暗黄	黄	透明/黒/白		
146	縄文	上層部	SA18		1/8/9	5-B-3	斜目/多重凹線文/貝殻条文	ナデ	暗	にぶい/暗	赤/透明	仔骨物(黄黒外内)/1層(19層)
147	縄文	上層部	SA18 E3-B-N	SA18-591 E3-979	5-B-4A	斜目/加凹線文/刺突文/大乱文	ナデ/ナデ	灰	灰黄	透明/黒/赤/白		
148	縄文	上層部	SA18		5-B-3	斜目/貝殻条文/大乱文	ナデ	暗	にぶい/暗	透明/白	又ス(外)/仔骨物(黄黒)	
149	縄文	上層部	SA18		5-B/8	加凹線文/凹線文	ナデ	暗/にぶい/暗	にぶい/暗	半透明/白/赤		
150	縄文	中層部	SA18 E2-B-N	SA18-4 E2-105	5-B/8	大乱文/ナデ	ナデ/凹線	暗	灰黄	透明		
151	縄文	底部	SA18		2	17-B-2	貝殻条文	にぶい/暗	にぶい/暗	白	網代	
152	縄文	上層部	SA19		1	5-B-3	斜線文(1層)/斜目/貝殻条文/大乱文	貝殻条文	にぶい/暗	半透明		
153	縄文	中層部	SA19		7	5-B/8	貝殻条文/大乱文	貝殻条文/ナデ	暗/暗	暗/にぶい/暗	金/白	
154	縄文	底部	SA19 E2-B-N	SA19-2	17-A	ナデ/横文/刺突文/ナデ	ナデ	灰黄/黄	灰	半透明	底径10.6cm	
155	縄文	底部	SA19		5/6	17-B-1	ナデ	にぶい/暗	黄	透明/白	仔骨物(白)外	
156	縄文	中層部	SA19		9	17-A	貝殻条文	ナデ	にぶい/暗	にぶい/暗	透明/白	仔骨物(白)外/底径12.5cm/網代
157	縄文	上層部	SA20		2	5-B-3	斜線文(1層)/斜目/大乱文/貝殻条文	貝殻条文/ナデ	暗	にぶい/暗	白	

第7表 土器観察表(3)

順番 番号	種別	群位	出土位置 (遺構/Gr/層/坑)	分期	文様・図案		色遣		胎土	備考	
					外 産	内 産	外 産	内 産			
158	縄文	深部	SA20 E4 Ⅲ - Ⅴ	1 - v - 4	斜目 / 貝殻象文	貝殻象文	にぶい・暗	にぶい・黄緑	白	口径 17.8	
159	縄文	深部	SA20 D5 Ⅲ - Ⅴ	D5-1543	貝殻象文	貝殻象文	にぶい・黄緑	にぶい・黄	透明	付着物 [白] 外付 / 底径 17.8 / 胴径 16	
160	縄文	深部	SA20	1	貝殻象文 / ナデ	ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	半透明 / 黒	付着物 [白] 外付 / 底径 17.8 / 胴径 16	
161	縄文	深部	SA20	17-8-1	貝殻象文	貝殻象文 / ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	透明	付着物 [白] 外付 / 底径 18.0 / 胴径 16	
162	縄文	深部	SA21	57	貝殻象文 / ナデ	貝殻象文 / ナデ	灰黒	にぶい・暗	透明 / 赤	又ス (外) コゴ (内)	
163	縄文	深部	SA22 SA23	5 Ⅱ - Ⅲ	ナデ / 貝殻象文 / 四脚文 / 刺状文	ナデ	黒灰	にぶい・黄緑	透明 / 黒		
164	縄文	深部	SA22	21	5 Ⅱ 34	ナデ / 加印四脚文 / 横長刺状文	ナデ / 貝殻象文	にぶい・暗	にぶい・暗	白 / 赤 / 透明	
165	縄文	深部	SA22 D4 Ⅲ - Ⅴ	SA22-3 D4-571	57	ナデ / 四脚文 / 斜目 / 横長刺状文	ナデ / 刺頭	黒灰	にぶい・暗	白 / 金	
166	縄文	深部	SA22	1/2	5 Ⅱ 46	ナデ / 加印四脚文 / 多重四脚文 / 貝殻象文	貝殻象文 / ナデ	黒灰	にぶい・暗	透明 / 黒 / 赤 / 白	
167	縄文	深部	SA22	29	17-A	ナデ	ナデ	黒	オリーブ黒	透明 / 白	
168	縄文	深部	SA22 E2 Ⅲ - Ⅴ	E2-1069	17-8-1	ナデ	貝殻象文 / ナデ	黒	黒	透明 / 白	
169	縄文	深部	SA22	5	17-B-2	ナデ	貝殻象文 / ナデ	灰黄黒	にぶい・暗	透明 / 黒 / 白 / 赤	
170	縄文	深部	SA22	9	17-B-2	貝殻象文	貝殻象文 / ナデ	にぶい・暗	明黒	透明 / 黒 / 白 / 赤	
171	縄文	深部	SA22 SA36	SA22-2	17-B-2	貝殻象文	貝殻象文	にぶい・赤黒	明赤黒	透明 / 黒 / 白	
172	縄文	深部	SA22 SA36	SA22-15 SA36-1	17-8-1	貝殻象文 / ナデ	貝殻象文 / ナデ	灰黒 / 黒	黒	白 / 透明	
173	縄文	深部	SA23	SH1	1 Ⅱ - Ⅲ	斜目 / 刺頭 / 横長刺状文 / 貝殻象文	貝殻象文	黒灰	黄灰	透明 / 赤	
174	縄文	深部	SA23	5 Ⅱ - Ⅲ	ナデ / 貝殻象文 / 多重四脚文	ナデ / 貝殻象文	黒 / 灰黒	にぶい・暗	黒 / 透明		
175	縄文	深部	SA23	5or16		貝殻象文	貝殻象文	にぶい・暗	透明 / 黒	コゴ (内)	
176	縄文	深部	SA23 SA31 SA32-SC4 ES Ⅲ - Ⅴ	SA23-SC4-2 ES-1636	4	突起 (台形) / 巻状文 / 沈脚文 / 刺状突起文 / ナデ	ナデ	暗赤灰 / 明赤黒	灰黄黒	白 / 黒 / 透明	
177	縄文	深部	SA25		1 Ⅱ - Ⅲ	貝殻象文 / 斜目突明 (刺状文)	ナデ / 貝殻象文	黒	にぶい・暗	白 / 赤	
178	縄文	深部	SA25		1 Ⅱ - Ⅲ	貝殻象文 / 斜目突明 (刺状文)	ナデ	黄灰	暗赤黒	透明 / 赤	
179	縄文	深部	SA25 E4 Ⅲ - Ⅴ	SA25-12/2/SO E4-1555	8 Ⅱ	刺状 / ナデ / 四脚文 / 刺状文 / 貝殻象文	ナデ	にぶい・暗	黒	透明 / 半透明	
180	縄文	深部	SA25	SC1	16	ナデ / 刺頭	ナデ / 貝殻象文	暗灰	灰	白 / 赤	
181	縄文	深部	SA25	5 Ⅱ	貝殻象文 / 大波文	貝殻象文	黒 / 暗黒	黒	透明 / 白		
182	縄文	深部	SA25	3	16	ナデ	貝殻象文	にぶい・暗	黒	透明 / 白	
183	縄文	深部	SA26	2	17-C	ナデ	貝殻象文 / ナデ	黒	暗赤黒	白	
184	縄文	深部	SA26	1	17-C	貝殻象文 / ナデ	ナデ	にぶい・黄緑	黒 / 黄緑	白	
185	縄文	深部	SA28	2 Ⅱ - Ⅲ	沈脚文 (刺状文)	ナデ	明赤黒	にぶい・暗	白		
186	縄文	深部	SA28	5	ナデ / 四脚文	ナデ	灰黒	にぶい・暗	白		
187	縄文	深部	SA29	2 Ⅱ - Ⅲ	ナデ / 沈脚文 (刺状文)	貝殻象文 / ナデ	黒灰	暗灰	透明		
188	縄文	深部	SA29	SH1	2 Ⅱ - Ⅲ	ナデ / 沈脚文 (刺状文)	ナデ	黒 / 灰赤	にぶい・暗	半透明 / 黒 / 光沢	
189	縄文	深部	SA29	3	波状文 (加印刺状文) / ナデ	貝殻象文	にぶい・暗	にぶい・黄緑	白 / 黒		
190	縄文	深部	SA29 D4 Ⅲ - Ⅴ	5 Ⅱ - 4	ナデ / 加印四脚文 / 四脚文 / 貝殻象文	ナデ / 化粧土	にぶい・暗	黒	透明 / 黒 / 白		
191	縄文	深部	SA29	1	5 Ⅱ 26	ナデ / 加印四脚文	ナデ / 貝殻象文	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	透明 / 黒 / 白	
192	縄文	深部	SA29 F4 Ⅲ - Ⅴ	F4-1000	5 Ⅱ - Ⅲ	ナデ / 刺状突起 / 大波文	ナデ / 刺頭	暗灰	灰黒	白	
193	縄文	深部	SA29	16	ナデ	ナデ	にぶい・赤黒	灰黒	白	付着物 [黄] 外付	
194	縄文	深部	SA29	17	貝殻象文 / ナデ	ナデ	にぶい・暗	暗灰	白	又ス (外) コゴ (内)	
195	縄文	深部	SA29	17-C	貝殻象文 / ナデ	貝殻象文	にぶい・暗	暗灰	透明 / 白 / 赤	付着物 [白] 外付 / 胴径 16	
196	縄文	深部	SA29 E4 Ⅲ - Ⅴ	SA29-2 E4-1549	17-8-1	貝殻象文	貝殻象文 / ナデ	にぶい・暗	にぶい・黄緑	白 / 半透明	
197	縄文	深部	SA30	1 Ⅱ - Ⅲ	ナデ / 斜目突明?	ナデ	黒灰	黄灰	透明		
198	縄文	深部	SA31	1 Ⅱ - 2	斜目 / 斜目突明 / 貝殻象文	貝殻象文	灰黄黒	透明 / 赤	透明 / 赤		
199	縄文	深部	SA31	5	四脚文	貝殻象文	にぶい・暗	にぶい・暗	透明 / 白		
200	縄文	深部	SA32	37	斜目 / ナデ	ナデ	黒	黒	透明 / 白		
201	縄文	深部	SA32	SH3-1	17	貝殻象文 / ナデ	貝殻象文	にぶい・暗	にぶい・暗	透明	付着物 [黄] 外付
202	縄文	深部	SA33	1	2 Ⅱ - Ⅲ	波状 [1 Ⅲ] / ナデ / 沈脚文 (刺状文) / 突起	ナデ	灰黄 / 黒	にぶい・暗	白 / 透明 / 白 / 赤	
203	縄文	深部	SA33	4	2 Ⅱ - Ⅲ	ナデ / 貝殻象文	ナデ / 貝殻象文	黒	にぶい・黄緑	黒 / 灰 / 光沢	
204	縄文	深部	SA33 E4 Ⅲ - Ⅴ	SA33-12/14/15	8 Ⅰ	ナデ / 横長刺状文 (斜目刺状文)	貝殻象文 / ナデ	にぶい・赤黒	暗灰	金 / 黒 / 白	
205	縄文	深部	SA33 F4 Ⅲ - Ⅴ	SA33-2/6 F4-1583	5or16	ナデ	ナデ	にぶい・暗	にぶい・黄緑	白 / 赤 / 半透明	
206	縄文	深部	SA33	F4-1494	17-8-1	貝殻象文 / ナデ	貝殻象文	明赤黒	明赤黒	白 / 透明 / 半透明	
207	縄文	深部	SA33	11	17-C	ナデ	ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	透明 / 半透明	
208	縄文	深部	SA33	17	17-B-2	ナデ	ナデ	にぶい・暗	にぶい・暗	白 / 黒	
209	縄文	深部	SA34	2 Ⅱ - 2	ナデ / 刺状文 (刺状文)	貝殻象文	黒灰 / 暗灰	にぶい・赤黒	白 / 透明 / 黒	底径 11.6	
210	縄文	深部	SA35	2 Ⅱ - 1	沈脚文 (刺状文)	ナデ	灰黄黒	にぶい・暗	白	底径 10.5	
211	縄文	深部	SA35	5 Ⅱ 24	斜目 / 刺状突明文 / 多重沈脚文 / 貝殻象文	ナデ	黒灰	黄灰	透明 / 白		

第7表 土器観察表(4)

順位 番号	種別	群位	出土位置 (遺構/Gr/層/坑)	分期	文様・図案		色塗		胎土	備考		
					外産	内産	外産	内産				
212	縄文	深部	I16-一部	SA35	5-B-3a	ナデ/知内線文/多雲的線文/貝殻条文	ナデ	黒	黒黒	半透明/透明		
213	縄文	深部	集部	SA35	1	5-B-3a	黄斑I16/斜目/知内線文/大英文/貝殻条文	黒黒	黒灰	透明/半透明		
214	縄文	深部	I16-一部	SA35	1	5-B-3a	黄斑I16/斜目/知内線文/大英文/貝殻条文	黒黒	黒灰	透明/半透明	口徑 0.08	
215	縄文	深部	I16部	SA35	1	5-B-2a	黄斑I16/斜目/刺突点文/貝殻条文	黒黒	黄斑I16	にぶい・黄緑	透明/白	付着物 [黒黄] (外)
216	縄文	深部	底部	SA36	17-C	貝殻条文	貝殻条文/ナデ	にぶい・黄緑	灰	透明/黒/白	付着物 [白] (外)	
217	縄文	深部	I16部	SA37	1-V-1	斜目/ナデ	貝殻条文	黒黒	黒黒	白	又ス (内)	
218	縄文	深部	I16部	SA38	2-V-1	ナデ/沈線文 (副線文)	貝殻条文	黒黒	黒灰	透明	付着物 [黒黄] (外)	
219	縄文	深部	I16部	SA38	5-B-2	斜目/横線行文/貝殻条文	貝殻条文/ナデ	にぶい・黒	にぶい・黄緑	黒	口徑 0.97	
220	土器I	内産	-	SA38	-	ナデ	ナデ	にぶい・黄緑	明緑	黒		
221	縄文	深部	I16部	SC3	5-B-2a	斜目/刺突文/貝殻条文/沈線文	貝殻条文	にぶい・黄緑	にぶい・黒	半透明/透明/白		
222	縄文	深部	集部-底部	SC3	17-B-1	貝殻条文/ナデ/動物画	貝殻条文/ナデ	にぶい・黄緑	明赤黒	白/透明	底径 0.0-0.1/現代産	
223	縄文	深部	底部	SC8	17-B-2	ナデ	ナデ	にぶい・黄	黄灰	透明/黒/白	付着物 [黒黄] (外)/ 底径 0.7	
224	縄文	深部	集部	SC8	5a/16	ナデ/貝殻条文	貝殻条文/ナデ	にぶい・黄	にぶい・黒	白/半透明	又ス (内)	
225	縄文	深部	I16部	SC8 B8-B-N	B8-575	1-V-3	黄斑I16/ナデ/貝殻条文	ナデ/貝殻条文	にぶい・黄	灰黒	半透明/黒/透明/白	
226	縄文	深部	集部	SC17	5-I	ナデ/赤点文	ナデ	黒	黄緑/黒	透明/黒/白	コブ (内)	
227	縄文	深部	I16部	SC17	5-B-2	斜目/貝殻条文	ナデ/貝殻条文	にぶい・黒	にぶい・黒	透明/黒		
228	縄文	深部	I16-一部	SC17 E2-1249/1250	5-I-1	黄斑 (台形)/ナデ/菱形文	ナデ/貝殻条文	にぶい・黒	黒	透明/黒/白	口徑 0.1-1	
229	縄文	深部	I16部	SC17 E2-B-N	6	斜目/斜目突帯/凹線文	ナデ/刺突点文/ 貝殻条文	黒黒	黄灰	透明/半透明		
230	縄文	深部	I16部	SC17	5-B-1a	ナデ/斜目/横線文	貝殻条文/ナデ	灰黒	黒灰	赤/黒		
231	縄文	深部	I16部	SC17	5-B-1	黄斑I16/ナデ/貝殻条文/大英文	ナデ	灰黒	灰黒	透明/黒		
232	土器I	内産	-	SA17 E2-B-N	-	貝殻条文/大英文	ナデ/動物画	黒灰	にぶい・赤黒	透明/白		
233	縄文	深部	底部	SC17	17-A	貝殻条文/ナデ	ナデ	にぶい・黒	にぶい・赤黒	白/半透明	底径 0.0-0.1/現代産	
234	縄文	深部	底部	SC17 E2-B-N	E2-1217	17-B-2	貝殻条文/ナデ	ナデ	にぶい・黒	黒	白	付着物 [白] (外)/ 底径 0.0-0.1/現代産
235	縄文	深部	底部	SC17	17-A	貝殻条文/ナデ	貝殻条文/ナデ	黒	灰黒	透明	付着物 [白] (外)/ 底径 0.2-0.1/現代産	
236	縄文	深部	集部-底部	SC17 E3-B-N	E3-1000	17-B-1	貝殻条文	黒	にぶい・赤黒	透明/半透明/白	底径 0.1/現代産	
237	縄文	深部	I16部	SC21	1	9? 黄斑/横線行文?	ナデ	黒黒	にぶい・赤黒	透明	口徑 0.4a	
238	縄文	深部	I16-一部	SC21	3	16 ナデ/貝殻条文	貝殻条文	にぶい・黒	にぶい・黒	透明/白	付着物 [黒黄] (外)/ 口徑 0.2-0.9	
239	縄文	深部	底部	SC24	1	17-C	貝殻条文/へう巻点凹線文	明赤黒	黒	透明/白	底径 12.3	
240	縄文	深部	I16部	SC25	2	2-0-4	ナデ/沈線文 (副線文)/ 貝殻条文	黒黒	にぶい・黄緑	透明/白	付着物 [黒黄] (外)/ 又ス (外)/口徑 0.2a	
241	縄文	深部	I16部	SC31 E4-B-N	E4-1453-1455	2-V-1	ナデ/沈線文 (副線文)	貝殻条文/ナデ	黒灰	にぶい・赤黒	透明/赤	口徑 0.9b
242	縄文	深部	I16部	SC34 E5-B-N	E5-1535-1677	4?	ナデ/斜目/凹線文/貝殻条文	貝殻条文	黒灰	にぶい・黒	白	
243	縄文	深部	I16部	SC34	10?	副線文 (I16)/ナデ	貝殻条文	にぶい・黄緑	にぶい・黒	白/黒		
244	縄文	深部	I16部	SC48 E4-B-N	E4-1376	5-B-1	ナデ/刺突文/横線行文?	ナデ	灰黒/明緑	にぶい・黒	透明/黒/白/赤	
245	縄文	深部	I16部	SC52	5	2-B-2	ナデ/沈線文 (副線文)	貝殻条文	黒黒	灰黒	透明	
246	縄文	深部	I16部	SC52	4	1-V-1	ナデ/斜目突帯 (斜目文)/ 貝殻条文	黒黒	黒灰	透明/赤/白		
247	縄文	深部	集部	SC52	7	1?	貝殻条文	貝殻条文/ナデ	黒灰	黒灰	透明/半透明/黒/白	又ス (外)/付着物 [黒黄] (外)
248	土器I	内産	-	SC52	1	-	貝殻条文	にぶい・黒	にぶい・黄緑	透明/黒/白		
249	縄文	深部	I16部	SC53	12	5-B-4	黄斑I16/斜目/刺突文/ 曲点突起/凹線文/貝殻条文	ナデ	灰黒	にぶい・赤黒	透明	
250	縄文	深部	集部-底部	SC53	2/3/8	17-C	ナデ/動物画	ナデ/動物画	にぶい・黒	白/赤	底径 7.05	
251	縄文	深部	I16部	SO60 D4/ E4-B-N	5-B-4a	4?	斜目/知内線文/貝殻条文/ 多雲的線文	貝殻条文/ナデ	にぶい・黒/ にぶい・黄緑	透明/白/赤	又ス (外)/付着物 [黒黄] (外)	
252	縄文	深部	I16部	E5-B-N	1	1-1	副線文突帯 (刺突文)/貝殻条文	貝殻条文	黒灰	灰黒	白	
253	縄文	深部	I16部	D4-B-N	450	1-1-1	副線文突帯 (刺突文)/貝殻条文	貝殻条文	灰黒	黒灰	透明/黒/白	付着物 [黒黄] (外)
254	縄文	深部	I16部	B9-B-N	1	1-1	副線文I16/副線文突帯 (刺突文)/貝殻条文	貝殻条文	黒灰	黒灰	透明/白	
255	縄文	深部	I16部	C7-B-N	1	1-1	斜目/副線文突帯 (刺突文)/ 貝殻条文	貝殻条文	にぶい・黒	黒灰	透明/白	
256	縄文	深部	I16部	C6-B-N	1	1-1	斜目/副線文突帯 (刺突文)/ 貝殻条文	貝殻条文/ナデ	灰黒	にぶい・黄緑	白/黒/透明	
257	縄文	深部	I16部	E4-B-N	1599	1-1-1	斜目/突帯 (刺突文)/貝殻条文/ナデ	貝殻条文	にぶい・黒	黒	白/透明/黒	
258	縄文	深部	I16-一部	D2-B-N	1851	1-1-2	黄斑I16/ナデ/斜目突帯 (三尖文)	ナデ/動物画	にぶい・黒	にぶい・黒	白/半透明	又ス (外)/付着物 [黒黄] (外)/口徑 1.5
259	縄文	深部	I16部	E3-B-N	933	1-1-1	黄斑I16/沈線文/刺突文/ 扇形突帯	貝殻条文/ナデ	黒灰	黒灰	透明/白	
260	縄文	深部	I16-一部	B6-B-N	627	1-1-3	斜目突帯 (副線文)/刺突文/ 斜目/貝殻条文	貝殻条文/ナデ	黒灰	黒灰	透明/黒/白	
261	縄文	深部	I16部	B7-B-N	856-893	1-B-1	ナデ/斜目突帯 (斜目)/ 貝殻条文	貝殻条文/ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	赤/明黄緑/白	又ス (外)/口徑 0.263
262	縄文	深部	I16部	B7-B-N	856	1-B-1	ナデ/斜目突帯 (斜目)/ 貝殻条文	貝殻条文/ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	白/赤/黒	又ス (外)

第7表 土器観察表 (5)

観測番号	標号	標種	標位	出土位置 (遺構/Gr/層/坑)	分期	文様・図章		色塗		胎土	備考	
						外面	内面	外面	内面			
263	縄文	深部	1	E6	1-B-2	刺突的凸文/ナデ	貝殻染織文	黒	黒	黒/白		
264	縄文	深部	1	溝谷区	1-B-2	刺突的凸文/貝殻染織文	押引刷/工島刷/ナデ	黒	黒	透明/黒		
265	縄文	深部	1	F4 III-N	1459	1-B-3	沈陥文/ナデ	ナデ	にぶい	にぶい	透明/黒/赤/白	
266	縄文	深部	1	C6 III-N	14	1-B	斜目/ナデ/沈陥文/貝殻染織文	貝殻染織文	にぶい	にぶい	透明	
267	縄文	深部	1	F4 III-N	1460	1-B-1	ナデ/斜引突帯(斜目)/貝殻染織文	貝殻染織文/ナデ	黒灰	黒灰	透明/黒/赤	
268	縄文	深部	1	A7 III-N		1-B-1	ナデ/斜引突帯(斜目)/貝殻染織文	貝殻染織文	黒灰黄	黒灰	透明/白/赤	スス(外)
269	縄文	深部	1	C6 III-N		1-B-1	斜目/ナデ/斜引突帯(斜目)/貝殻染織文	貝殻染織文/ナデ	黒	にぶい	透明/黒/白	スス(外)
270	縄文	深部	1	C7 III-N	782	1-B-1	斜目/沈陥文(二文)/貝殻染織文	ナデ/貝殻染織文	灰黒	にぶい	透明/白/赤	
271	縄文	深部	1	C7 III-N	697	1-B-1	斜目/ナデ/斜引突帯(斜目)/貝殻染織文	ナデ/貝殻染織文	黒	にぶい	透明/黒/白	スス(外)
272	縄文	深部	1	SAS		1-B-1	斜目/ナデ/斜引突帯(斜目)/貝殻染織文	ナデ	灰	にぶい	透明/白	付着物(黒黄)(内)
273	縄文	深部	1	C6 III-N	116	1-B-1	斜目/ナデ/斜引突帯(斜目)/貝殻染織文	貝殻染織文	黒灰	黒灰	透明/白	
274	縄文	深部	1	C6 III-N	65	1-B-2	斜目/ナデ/斜引突帯(斜目)/貝殻染織文	ナデ	灰黄	にぶい	透明/白	
275	縄文	深部	1	C6 III-N	599	1-B-2	斜目/ナデ/斜引突帯(斜目)/貝殻染織文	貝殻染織文	オリーブ	暗灰	白	
276	縄文	深部	1	C6 III-N	734	1-B-2	突起的凸文/ナデ/斜引突帯(斜目)/貝殻染織文	ナデ	にぶい	灰	透明/黒/白	スス(外)/付着物(黒黄)(外・内)
277	縄文	深部	1	C6 III-N	729	1-B-3	斜目/ナデ/斜引突帯(斜目)/貝殻染織文	貝殻染織文	灰黒	にぶい	白	付着物(黒黄)(外)
278	縄文	深部	1	E6 III-N	179	1-B-2	斜目/ナデ/斜引突帯(斜目・斜引文)/貝殻染織文	貝殻染織文	黒灰	黒灰	透明/黒/赤	付着物(黒黄)(外)
279	縄文	深部	1	C6 III-N	67/679	1-B-3	ナデ/斜引突帯(斜目)/貝殻染織文	貝殻染織文	黒灰	灰黄	赤	液状/融の可能性
280	縄文	深部	1	E7 III-N		1-B-3	斜引突帯(斜引文)/貝殻染織文	貝殻染織文	灰	灰	透明/白	
281	縄文	深部	1	C6 III-N		1-B-1	斜目/ナデ/貝殻染織文	貝殻染織文/ナデ	にぶい	にぶい	白/透明	口径0.52
282	縄文	深部	1	C6 III-N	674	1-B-1	ナデ/貝殻染織文	貝殻染織文	にぶい	にぶい	白/赤/透明	スス(外)/口径2.6
283	縄文	深部	1	C7 III-N	698	1-B-1	波状/刷/ナデ/斜目/貝殻染織文	貝殻染織文	にぶい	灰黒	透明/白/赤	付着物(黒黄)(内)
284	縄文	深部	1	C5/C6 III-N		1-B-1	波状/刷/斜目/貝殻染織文	貝殻染織文	黒灰	黒	透明/黒/白	
285	縄文	深部	1	E4 III-N		1-B-1	波状/刷/斜目/貝殻染織文	貝殻染織文/ナデ	明灰	にぶい	平透明/透明/白/赤	胎化物(内)
286	縄文	深部	1	E6 III-N	634	1-B-1	波状/刷/貝殻染織文	ナデ/貝殻染織文	にぶい	にぶい	黒/白/平透明/透明	
287	縄文	深部	1	E6 III-N		1-B-3	波状/刷/貝殻染織文	貝殻染織文	灰黄	にぶい	黒/白	
288	縄文	深部	1	C6 III-N	101	1-B-3	波状/刷/貝殻染織文/ナデ	貝殻染織文	灰黒	にぶい	黒	口径0.43
289	縄文	深部	1	E4 III-N	1417	2-B-1	ナデ/沈陥(刷状)文	貝殻染織文	灰	にぶい	透明/白/赤	
290	縄文	深部	1	E3 III-N	1056	2-B-2	ナデ/捺文(刷状)文	刷	黒	透明/平透明		
291	縄文	深部	1	F3 III-N	1722	2-B-1	ナデ/沈陥(刷状)文	ナデ/貝殻染織文	黒灰	にぶい	透明	
292	縄文	深部	1	E5 III-N	1626	2-B-1	ナデ/沈陥(刷状)文	ナデ	黒灰	白/平透明		
293	縄文	深部	1	E4 III-N	1575	2-B-1	ナデ/沈陥(刷状)文	ナデ	にぶい	黒	透明/白	
294	縄文	深部	1	E4 III-N	1451	2-B-1	ナデ/沈陥(刷状)文/貝殻染織文	貝殻染織文	明赤	にぶい	透明	付着物(黒黄)(内)
295	縄文	深部	1	E5 III-N		2-B-1	突的/ナデ/沈陥(刷状)文	貝殻染織文/ナデ	黒灰	黒灰	透明/黒	
296	縄文	深部	1	E3 III-N	974	2-B-1	ナデ/沈陥(刷状)文	ナデ	にぶい	にぶい	白/平透明	内は部分的に明確な工具痕
297	縄文	深部	1	E4 III-N	1411	2-B-1	ナデ/沈陥(刷状)文/貝殻染織文	貝殻染織文/ナデ	黒灰黄	黒	平透明/透明/白	
298	縄文	深部	1	III-N		2-B-1	ナデ/貝殻染織文/捺文(刷状)文	貝殻染織文/ナデ	黄	にぶい	黒/透明/白	スス(外)/胎化物(内)
299	縄文	深部	1	III-N		2-B-2	ナデ/貝殻染織文/捺文(刷状)文	貝殻染織文/ナデ	黒	赤	白/透明/平透明	
300	縄文	深部	1	F3 III-N	1703	2-B-2	ナデ/沈陥(刷状)文	貝殻染織文/ナデ	黄	黒灰	平透明	
301	縄文	深部	1	C5 III-N	274	2-B-2	ナデ/捺文(刷状)文	貝殻染織文	灰	にぶい	透明/白	
302	縄文	深部	1	III-N		2-B-1	ナデ/沈陥/押引文(刷状)文/貝殻染織文	ナデ	にぶい	にぶい	白/赤/透明/黒	
303	縄文	深部	1	C5 III-N	286	2-B-1	ナデ/捺文(刷状)文	ナデ	黒	にぶい	黒/白/透明	
304	縄文	深部	1	E3 III-N	1197	2-B-1	ナデ/捺文(刷状)文	ナデ	灰黄	にぶい	黒/白	
305	縄文	深部	1	E5 III-N	1643	2-B-2	ナデ/捺文(刷状)文	貝殻染織文	にぶい	にぶい	透明/白	
306	縄文	深部	1	E2 III-N	1256	3	刺突的/凸文/沈陥文/ナデ	ナデ	にぶい	黒灰	透明/透明	
307	縄文	深部	1	C6 III-N	743	3	刷状文/斜目/ナデ	ナデ	にぶい	オリーブ	白	
308	縄文	深部	1	C6 III-N	383	3	ナデ/刺突文	ナデ	にぶい	灰	透明/黒/白	
309	縄文	深部	1	C6 III-N		3	斜目/ナデ	ナデ	にぶい	明赤	透明/白	
310	縄文	深部	1	C6 III-N	13	3	ナデ/斜目/貝殻染織文	貝殻染織文	にぶい	黒	透明/黒/白	
311	縄文	深部	1	E3 III-N	1715	3	ナデ/貝殻染織文/刺突的凸文	貝殻染織文	にぶい	灰	透明	
312	縄文	深部	1	C6 III-N		3	斜目/貝殻染織文	貝殻染織文	にぶい	黒	透明	口径0.25
313	縄文	深部	1	C7 III-N	880	3	ナデ/貝殻染織文	貝殻染織文/ナデ	にぶい	灰黄	透明(白)/透明	
314	縄文	深部	1	C6 III-N	193	3	斜目/貝殻染織文	貝殻染織文	灰	黄	透明	付着物(黒黄)(内)
315	縄文	深部	1	E2 III-N	1751	3	ナデ	ナデ	にぶい	黒	透明/赤/白	
316	縄文	深部	1	D6 III-N	261	3	貝殻染織文/ナデ	貝殻染織文	にぶい	黒	透明/白	
317	縄文	深部	1	E5 III-N	534	5-1-1	波状/刷/斜目/凹文/貝殻染織文/ナデ	貝殻染織文/ナデ	灰	にぶい	透明/赤/白	スス(外)
318	縄文	深部	1	E4 III-N	1572	5-1-2	ナデ/刺突的凸文/凹文	貝殻染織文	にぶい	黒灰	白/黒/透明	
319	縄文	深部	1	E6 III-N	1294	5-1-2	斜目/凹文/刷状文/ナデ	貝殻染織文	黒/黒灰	透明/透明/白/黒	付着物(黒黄)(外)/スス(内)	
320	縄文	深部	1	D4/D5 III-N	1346/538	5-1	貝殻染織文/凹文	貝殻染織文/ナデ	にぶい	にぶい	透明/赤/白	管製瓦工具による赤
321	縄文	深部	1	溝谷区		5-1	貝殻染織文/凹文	貝殻染織文	にぶい	にぶい	灰白/黒	化粧土(内)
322	縄文	深部	1	E6 III-N	581	5-1	貝殻染織文/凹文	貝殻染織文	黒灰	にぶい	平透明	スス(外)化粧土(内)

第7表 土器観察表(6)

観測番号	標号	群名	出土位置 (遺構/Gr/層/坑)	分期	文様・図章		色遣		胎土	備考	
					外周	内周	外周	内周			
322	縄文	深部	E4 Ⅱ・N	1440	5-1	貝殻系文/四線文	貝殻系文文	黒	黒	灰白/黒黒/白	
324	縄文	深部	D3/E2(Ⅱ・N)	1782/1787/1820/1829	5-1	貝殻系文/四線文	貝殻系文/ナデ	浅黒	黄灰	透明/赤	
325	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	1157/1262/1774	5-1	貝殻系文/二内文	貝殻系文/ナデ	明赤黒	黒灰	透明/黒/白	
326	縄文	深部	D4 Ⅱ・N	500	5-0-1	貝殻系文/多象形線文	貝殻系文/ナデ	黒灰	黒	半透明/透明/白	
327	縄文	深部	E3 Ⅱ・N	958/959	5-0-1	貝殻系文/大流文	貝殻系文	黒	黒	半透明	又ス(外)
328	縄文	深部	D3 Ⅱ・N	1319	5-0-1	貝殻系文/大流文?	貝殻系文/ナデ	浅黒	黒	半透明/透明/白/赤	
329	縄文	深部	E5 Ⅱ・N	522	5-0-1	ナデ/網交点文/多象形線文	貝殻系文	黒	黒	透明/黒	
330	縄文	深部	E3 Ⅱ・N	1316	5-0-1	網交点文/大流文/貝殻系文	ナデ/貝殻系文	黒	黒	透明/赤/白	流文?網の可能性/又ス(外)
331	縄文	深部	D4/D5 (Ⅱ・N)	1712/1611	5-0-1	流文/網/ナデ/貝殻系文/大流文	貝殻系文/ナデ	黒	黒	透明/黒	
332	縄文	深部	Ⅱ Ⅲ・N		5-0-1	流文/網/ナデ/貝殻系文/四線文	ナデ/貝殻系文	黒	黒	透明	
333	縄文	深部	E3 Ⅱ・N	957	5-0-1	流文/網/網交点/網交文/横長線文	貝殻系文	黒	黒	透明	
334	縄文	深部	C5 Ⅱ・N	823	5-0-1	ナデ/網/貝殻系文/多象形線文	ナデ/貝殻系文	黒	黒	透明/白	又ス(外)/有骨物(表裏内外)
335	縄文	深部	D5 Ⅱ・N		5-0-2	網/貝殻系文/大流文	貝殻系文/ナデ	黒	黒	透明/白	
336	縄文	深部	E6 Ⅱ・N	1550	5-0-2	網/貝殻系文/大流文	ナデ/貝殻系文	黒	黒	透明/白	又ス(外)
337	縄文	深部	E4 Ⅱ・N	1550	5-0-2	網/大流文/貝殻系文	貝殻系文	黒	黒	透明	有骨物(表裏内外)
338	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	1247	5-0-2	網/貝殻系文/横長線文	貝殻系文	明赤黒	明赤	白/透明	
339	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	1151	5-0-2	網/貝殻系文/横長線文	ナデ	黒	黒	半透明/透明/白	有骨物(表裏)
340	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	1130/1142	5-0-2	網/横長線文/貝殻系文/ナデ	ナデ	黒	黒	透明/半透明/白	
341	縄文	深部	D4 Ⅱ・N	450	5-0-2	網/貝殻系文/横長線文	ナデ/貝殻系文	黒	黒	透明/黒/白	又ス(外)
342	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	1060/1080	5-0-2	網/多象形線文(押引文)/貝殻系文	黒	黒	透明/黒	横長孔/口径(14.0)	
343	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	1760	5-0-2	網/網交点/網文/横長線文	貝殻系文	黒	黒	透明	又ス(外)
344	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	1187/1220	5-0-2	網/網交点/網文/大流文	ナデ	黒	黒	透明	
345	縄文	深部	E2/E3 Ⅱ・N	991/1165	5-0-2	網/網交点/大流文/貝殻系文	網/網交点/ナデ	黒	黒	透明/黒/白	
346	縄文	深部	C6 Ⅱ・N	685	5-0-2	網/貝殻系文/多象形線文	貝殻系文/ナデ	黒	黒	透明/白	
347	縄文	深部	D4 Ⅱ・N		5-0-2	網/網交点/貝殻系文/多象形線文	貝殻系文/ナデ	黒	黒	透明/白	又ス(外)
348	縄文	深部	E2/E3 Ⅱ・N	1194/1205/1239	5-0-2	網/網交点/大流文/貝殻系文	貝殻系文/ナデ	黒	黒	透明	口径(23.2)
349	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	1137	5-0-2	網/網交点/貝殻系文/大流文	貝殻系文/ナデ	黒	黒	透明/黒/白	
350	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	1112/1116/1125	5-0-2	網/貝殻系文/大流文	貝殻系文	明赤	灰黄黒	白/赤	口径(22.2)
351	縄文	深部	E2 Ⅱ・N		5-0-2	網/網交点/横長線文/貝殻系文	貝殻系文	黒	黒	白/透明/灰白	流化物(内径)/口径(34.2)
352	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	121	5-0-2	網/網交点/横長線文/ナデ/多象形線文	ナデ	黒	黒	透明/白/半透明	
353	縄文	深部	D4 Ⅱ・N	494	5-0-2	網/網交点/大流文/貝殻系文	ナデ	黒	黒	透明/白/灰白	
354	縄文	深部	C6 Ⅱ・N	39/43	5-0-2	網/網交点/多象形線文	ナデ/網交点	黒	黒	透明/黒/白/半透明	口径(19.0)/径線?
355	縄文	深部	D4 Ⅱ・N	434	5-0-2	流文/網/ナデ/巻流文	ナデ/貝殻系文	黒	黒	透明	
356	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	1153	5-0-2	流文/網/網交点/多象形線文	貝殻系文/ナデ	黒	黒	透明/黒/白	又ス(外)
357	縄文	深部	E4 Ⅱ・N	1697	5-0-2	流文/網/網交点/網/ナデ/貝殻系文/大流文	ナデ/貝殻系文	灰黄黒	黒	赤/透明	又ス(外)/有骨物(表裏内外)/口径(22.5)
358	縄文	深部	D4 Ⅱ・N		5-0-2	流文/網/網交点/横長線文/貝殻系文	貝殻系文	黒	黒	透明	
359	縄文	深部	D4 Ⅱ・N	569	5-0-2	流文/網/網交点/網/横長線文	胎土厚層付/ナデ	黒	黒	赤	又ス(外)/径線(内)
360	縄文	深部	E4 Ⅱ・N	1373/1374	5-0-2	網/横長線文/貝殻系文	貝殻系文/ナデ	黒	黒	透明/赤	
361	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	1218	5-0-2	網/横長線文/ナデ	貝殻系文/ナデ	黒	黒	透明/赤	
362	縄文	深部	E8 Ⅱ・N	872	5-0-4	網/網交点/貝殻系文/大流文	貝殻系文	黒	黒	透明	有骨物(表裏内外)
363	縄文	深部	E3 Ⅱ・N	1041	5-0-4	網/網交点/大流文/貝殻系文	貝殻系文	灰黒	明赤黒	透明	又ス(外)
364	縄文	深部	C4 Ⅱ・N	343	5-0-4	網/網交点/貝殻系文/大流文	貝殻系文/ナデ	黒	黒	半透明/黒/透明/赤/白	有骨物(表裏内外)
365	縄文	深部	F2 Ⅱ・N	1284	5-0-4	網/多象形線文/貝殻系文	ナデ	黒	黒	白/透明	流化物(外)
366	縄文	深部	E5 Ⅱ・N	1634	5-0-4	網/網交点/網交点/網交文	貝殻系文/ナデ	黒	黒	透明/赤	有骨物(表裏内外)
367	縄文	深部	E6 Ⅱ・N		5-0-4	網交点文/大流文	貝殻系文/ナデ	灰黄黒	灰黄黒	白	
368	縄文	深部	F2 Ⅱ・N	1286	5-0-2a	網/網交点文/貝殻系文	貝殻系文	黒	黒	半透明/透明/白	有骨物(表裏内外)
369	縄文	深部	E6 Ⅱ・N	1658	5-0-2a	ナデ/網交点文/四線文	ナデ	黒	黒	白/透明	
370	縄文	深部	C6 Ⅱ・N	63/246	5-0-2a	網交点文/多象形線文/貝殻系文	貝殻系文	黒	黒	赤/白	横長孔/又ス(外)/口径(19.0)
371	縄文	深部	F3 Ⅱ・N	1315	5-0-2a	ナデ/網交点文/巻流文	ナデ	黒	黒	透明/黒	
372	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	1099/1100/1161-1163	5-0-2a	網/大流文/貝殻系文	貝殻系文	黒	黒	透明	口径(24.0)/底径(10.4)/網交点
373	縄文	深部	F3 Ⅱ・N		5-0-2b	ナデ/網交点文/貝殻系文	ナデ	黒	黒	透明/黒/白/赤	
374	縄文	深部	C6 Ⅱ・N	244	5-0-2b	網/網交点文/ナデ/巻流文	ナデ/網交点	黒	黒	透明/赤	
375	縄文	深部	T 4 Ⅱ・N		5-0-2b	流文/網/網交点/網交文/網交文	ナデ	灰黄黒	黒	透明/白	
376	縄文	深部	C6 Ⅱ・N	396/397	5-0-2b	流文/網/網交点/ナデ/網交点文/横長線文	ナデ/網交点	黒	黒	白	
377	縄文	深部	C6 Ⅱ・N	243	5-0-2b	流文/網/網交点/貝殻系文/網交点文/ナデ/横長線文	ナデ/網交点	灰黄黒	灰黄黒	白/赤/黒	

第7表 土器観察表(7)

順番 番号	種別	群位	出土位置 (遺構/Gr/層/No)	分期	文様・調整		色調		胎土	備考	
					外底	内底	外底	内底			
378	縄文	Ⅰ編部	E3 Ⅲ・N	1016	5-B-3a	ナデ/貝殻茶色文/加印線文/内底文	貝殻茶色文	明赤黒	黒灰	金/白/半透明	
379	縄文	Ⅰ編部	B6 Ⅲ・N	233	5-B-3a	ナデ/加印線文	貝殻茶色文	黒	比色・黄橙	明灰黒/灰/透明	又ス(外)/灰化物(内)
380	縄文	Ⅰ編部	B6 Ⅲ・N	598	5-B-3a	貝殻茶色文/加印線文/内底文	ナデ	比色・黒	比色・黒	灰白/白	又ス(外)
381	縄文	Ⅰ編部	E3 Ⅲ・N	1569	5-B-3a	ナデ/加印線文/内底文	ナデ	黒	比色・黄橙	透明/白	又ス(外)
382	縄文	Ⅰ編部	D4 Ⅲ・N	447	5-B-3a	加印線文/横長蛇行文/ナデ	ナデ	比色・黄橙	比色・黄橙	透明/白	又ス(外)
383	縄文	Ⅰ編部	D4 Ⅲ・N		5-B-3A	斜目/加印線文/内底文/ナデ	ナデ	灰黒	黄灰	透明/白/赤	又ス(外)
384	縄文	Ⅰ編部	D4 Ⅲ・N	1356	5-B-3A	斜目/加印線文/内底文/貝殻茶色文	貝殻茶色文	比色・赤黒	比色・赤黒	透明/半透明/白	
385	縄文	Ⅰ編部	B6 Ⅲ・N	209	5-B-3A	斜目/加印線文/内底文/ナデ	ナデ/煎油痕	黄灰	比色・黄橙	透明/赤	又ス(外)
386	縄文	Ⅰ編部	D3 Ⅲ・N	903	5-B-3A	斜目/加印線文/内底文/ナデ	ナデ/煎油痕	比色・黒	比色・黒	金/白	
387	縄文	Ⅰ編部	E2 Ⅲ・N	1106	5-B-3A	斜目/貝殻茶色文/加印線文/内底文	貝殻茶色文	比色・赤黒	比色・黒	透明	付着物(灰黄(外))
388	縄文	Ⅰ編部	E2 Ⅲ・N	1776	5-B-3A	黄灰/黒/斜目/加印線文/大底文/貝殻茶色文	貝殻茶色文/ナデ	黒	比色・黒	透明/黒/白	又ス(外)
389	縄文	Ⅰ編部	E4 Ⅲ・N	1314/1396/1397/1441/1598	5-B-3A	黒黄灰/黒/斜目/加印線文/横長蛇行文/ナデ	貝殻茶色文/ナデ	黄灰	黄灰	透明/白	又ス(外)/口徑28cm
390	縄文	Ⅰ編部	E2 Ⅲ・N	1269	5-B-3B	黄灰/黒/斜目/ナデ/加印線文/内底文	ナデ/煎油痕	比色・黒	灰黄黒	白/黒	
391	縄文	Ⅰ編部	D3 Ⅲ・N	1847	5-B-4a	ナデ/加印線文/大底文/貝殻茶色文	貝殻茶色文/ナデ	黒黒	黒黒	透明/半透明	又ス(外)
392	縄文	Ⅰ編部	D4 Ⅲ・N	1335	5-B-4a	加印線文/多重沈線文	貝殻茶色文	比色・赤黒	比色・赤黒	透明/白	又ス(外)
393	縄文	Ⅰ編部	D4 Ⅲ・N		5-B-4a	斜目/ナデ/加印線文/横長蛇行文	5-B-4a	比色・赤黒	比色・赤黒	透明/半透明	付着物(灰黄(外))
394	縄文	Ⅰ編部	E2 Ⅲ・N	1133/1130/1142	5-B-4a	斜目/貝殻茶色文/加印線文/横長蛇行文	貝殻茶色文	黒	黒	半透明/透明/白	
395	縄文	Ⅰ編部	C6 Ⅲ・N	103	5-B-4a	斜目/貝殻茶色文/加印線文/横長蛇行文	貝殻茶色文/ナデ	黒灰	灰黄黒	透明/半透明/黒/白	
396	縄文	Ⅰ編部	E3 Ⅲ・N	915/916	5-B-4a	黄灰/黒/斜目/加印線文/多重沈線文/貝殻茶色文	ナデ/貝殻茶色文	黒	比色・黄橙	白	
397	縄文	Ⅰ編部	D5 Ⅲ・N	1624	5-B-4a	ナデ/加印線文/斜長列点文/貝殻茶色文	貝殻茶色文	比色・赤黒	明赤黒	白	
398	縄文	Ⅰ編部	E3 Ⅲ・N	976	5-B-4a	加印線文/斜長列点文/貝殻茶色文/内底文	ナデ	黒灰	黒	透明	
399	縄文	Ⅰ編部	E3 Ⅲ・N	956	5-B-4a	黄灰/黒/斜目/ナデ/加印線文/内底文	ナデ	比色・赤黒	黒	光沢/赤/白	付着物(灰黄(外・内))
400	縄文	Ⅰ編部	Ⅲ・N		5-B-4a	加印線文/斜長列点文/貝殻茶色文/横長蛇行文	貝殻茶色文	比色・赤黒	比色・赤黒	赤/白	又ス(外)
401	縄文	Ⅰ編部	SA/E4 Ⅲ・N	442	5-B-4a	黄灰/斜目/貝殻茶色文/加印線文/多重沈線文	ナデ/貝殻茶色文	黒	比色・赤黒	灰黄黒/透明/黄灰	又ス(口徑20.1)
402	縄文	Ⅰ編部	C6 Ⅲ・N	251	5-B-4a	貝殻茶色文/加印線文/多重沈線文	ナデ	灰黒	比色・黄橙	白/赤/透明	又ス(外)
403	縄文	Ⅰ編部	D3 Ⅲ・N	901	5-B-4a	斜目/貝殻茶色文/加印線文/斜長列点文/横長蛇行文	貝殻茶色文/ナデ	黒黒	黒黒	透明/半透明	又ス(外)
404	縄文	Ⅰ編部	E4 Ⅲ・N	1433	5-B-4a	黒黄灰/黒/斜目/加印線文/斜長列点文	ナデ/貝殻茶色文	黒	黒	白/明灰黒/透明	又ス(外)
405	縄文	Ⅰ編部	F4 Ⅲ・N	1500	5-B-4a	黒黄灰/黒/斜目/加印線文/斜長列点文/横長蛇行文/貝殻茶色文	貝殻茶色文/ナデ	比色・赤黒	比色・赤黒	白/半透明	口徑29cm
406	縄文	Ⅰ編部	F4 Ⅲ・N	1500	5-B-4a	斜目/加印線文/斜長列点文/横長蛇行文/貝殻茶色文	貝殻茶色文/ナデ	明黒	黒	白/透明	又ス(外)/灰化物(内)/口徑27cm
407	縄文	Ⅰ編部	E3 Ⅲ・N	1798	5-B-4a	黄灰/黒/斜目/加印線文/斜長列点文	ナデ/煎油痕	比色・赤黒	比色・黄橙	白/黒/赤/半透明	
408	縄文	Ⅰ編部	E3 Ⅲ・N	1352	5-B-1a	ナデ/横長列点文	ナデ	比色・赤黒	黒	透明	
409	縄文	Ⅰ編部	D4 Ⅲ・N	1352	5-B-1a	ナデ/横長列点文/沈線文	ナデ	黒	灰黄黒	透明/白	又ス(外)
410	縄文	Ⅰ編部	T 4 Ⅲ・N		5-B-1A	斜目/ナデ/沈線文	ナデ	黒/黒灰	比色・黄橙	白/黒	
411	縄文	Ⅰ編部	D3 Ⅲ・N	906	5-B-1A	斜目/ナデ/沈線文	ナデ	比色・赤黒	比色・赤黒	白/黒/透明	又ス(外)/灰化物(内)
412	縄文	Ⅰ編部	C4 Ⅲ・N	817	5-B-1A	斜目/ナデ/加印線文/沈線文	ナデ	明赤黒	明赤黒	白/透明	
413	縄文	Ⅰ編部	D5 Ⅲ・N	793	5-B-1A	黒黄灰/黒/沈線文/斜長列点文/ナデ	ナデ	比色・黄橙	比色・黄橙	透明/白	
414	縄文	Ⅰ編部	Ⅲ・N		5-B-1b	黒黄灰/黒/沈線文/斜長列点文/ナデ	ナデ/煎油痕	黒灰	黒灰	透明/白/黒	
415	縄文	Ⅰ編部	C6 Ⅲ・N	673	5-B-1b	黄灰/黒/斜目/加印線文/ナデ	ナデ	黄灰	黄灰	灰白/白	
416	縄文	Ⅰ編部	E3 Ⅲ・N	1705	5-B	黄灰/黒/斜目/加印線文/斜長列点文/ナデ	ナデ	灰黒/黒	灰黒/黒	白/半透明/黒/赤	
417	縄文	Ⅰ編部	E2 Ⅲ・N	1270	6	斜目/ナデ/斜長列点文/斜長列点文/内底文	加印線文/ナデ	比色・赤黒	黒灰	透明/黒	又ス(外)
418	縄文	Ⅰ編部	E2-3 Ⅲ・N	907/1275	6	斜目/ナデ/斜長列点文/斜長列点文/内底文	加印線文/ナデ	黒/黒灰	比色・黄橙	透明/半透明/黒/白	
419	縄文	Ⅰ編部	D3-4 Ⅲ・N	1807	7	貝殻茶色文/ナデ/加印線文/文字	ナデ	比色・黄橙	比色・黄橙	透明/白	又ス(外)/付着物(灰黄(内))
420	縄文	Ⅰ編部	E5 Ⅲ・N	1651	8-II	黄灰/黒/斜目/ナデ/沈線文	ナデ	比色・赤黒	比色・赤黒	半透明/金/赤/白/黒	
421	縄文	Ⅰ編部	C7 Ⅲ・N		8-II	貝殻茶色文/沈線文(人組文)	貝殻茶色文	比色・赤黒	比色・赤黒	透明/金/白	
422	縄文	Ⅰ編部	C5 Ⅲ・N	284	9	加印線文/内底文/横長蛇行文	ナデ	黒	黒	灰白/明赤黒	又ス(外)
423	縄文	Ⅰ編部	E2 Ⅲ・N	475/1777	9	斜目/貝殻茶色文/沈線文(工字文)	貝殻茶色文/ナデ	比色・黄橙	比色・黄橙	透明/白	又ス(外)/付着物(灰黄(内)/口徑22cm)
424	縄文	Ⅰ編部	D4 Ⅲ・N		9	ナデ/沈線文(工字文)	ナデ	明黒	比色・赤黒	白	又ス(外)
425	縄文	Ⅰ編部	D5/4 Ⅲ・N	566	10	黄灰/黒/三斗子/ハコ織文	ナデ	黒	灰黒	透明/半透明/白	
426	縄文	Ⅰ編部	D5 Ⅲ・N	794	10	三斗子/ハコ織文	貝殻茶色文/ナデ	黒灰	黒灰	光沢/半透明	
427	縄文	Ⅰ編部	B7 Ⅲ・N		11	黄灰/黒/ナデ/斜長列点文	ナデ	黒	黒	光沢/半透明/白	
428	縄文	Ⅰ編部	D4 Ⅲ・N	1340	12	沈線文/加印線文/三斗子	貝殻茶色文/ナデ	黒灰	比色・赤黒	白	付着物(灰黄(外))
429	縄文	Ⅰ編部	E5 Ⅲ・N	1530	13	ナデ/三斗子	ナデ/貝殻茶色文	比色・赤黒	灰黒	透明/赤/白	
430	縄文	Ⅰ編部	E4 Ⅲ・N		14	三斗子/沈線文	ナデ	黒灰	黒	透明/白	
431	縄文	Ⅰ編部	SA17	19	15	ナデ/斜長列点文	ナデ	灰黒	比色・黄橙	透明/白	

第7表 土器観察表(8)

順 番	種別	群名	出土位置 (遺構・G・層)	分期	文様・調整				胎土	備考		
					外巻	内巻	外巻	内巻				
432	縄文	深部	I層-III層部	E4層・N	16	ナデ/貝殻染文	ナデ/貝殻染文	にぶい-横縞	金/白	I層(10.0)		
433	縄文	深部	I層-III層部	D5層・N	516	ナデ/貝殻染文	貝殻染文/ナデ	にぶい-横縞	透明/白	スス(外)/I層(11.6)		
434	縄文	深部	I層部	H6層・N	641	ナデ/貝殻染文	ナデ	にぶい-横縞	暗黒黄	スス(外)/灰化層(外・内)/I層(12.6)		
435	縄文	深部	I層-III層部	E2層・N	1782	ナデ/貝殻染文	ナデ	にぶい-横縞	透明/白	ナデ(内)/I層15.0		
436	縄文	深部	I層-III層部	E5層・N	1641	ナデ/貝殻染文	貝殻染文/ナデ	にぶい-横縞	にぶい-横縞	I層(17.8)		
437	縄文	深部	I層部	Ⅱ層・N	ナデ	ナデ/貝殻染文	貝殻染文/ナデ	にぶい-横縞	透明/黒/白	スス(外)		
438	縄文	深部	I層部	F4層・N	1585	ナデ/貝殻染文	貝殻染文	オリーブ縞	透明/白	仔骨物(流黄/内)		
439	縄文	深部	I層部	F2層	16	貝殻染文	貝殻染文	縞	透明/白/黒			
440	縄文	深部	I層部	E2層・N	1150	貝殻染文/ナデ	ナデ	灰黄縞	にぶい-横縞	スス(外)		
441	縄文	深部	底部	E3層・N	1047	貝殻染文/ナデ	ナデ/動物縞	にぶい-横縞	透明/半透明/白	底径10.5/木葉型		
442	縄文	深部	底部	F3層・N	1313	ナデ	ナデ	明赤縞	にぶい-横縞	仔骨物(白/外)/底径6.4/動物縞		
443	縄文	深部	底部	B5層・N	899	貝殻染文/ナデ	貝殻染文/ナデ	にぶい-横縞	透明/黒/白	仔骨物(白/外)/底径6.8		
444	縄文	深部	底部	E2層・N	1733	ナデ	ナデ	明赤縞	白/半透明/黒	仔骨物(白/外)/底径9.2/動物縞		
445	縄文	深部	底部	E2/F2層(N・V)	1062/1853	貝殻染文/ナデ	貝殻染文/ナデ	にぶい-横縞	白/赤/半透明/透明	仔骨物(白/外)/底径10.9/動物縞		
446	縄文	深部	底部	E2層・N	1063/1065	貝殻染文/ナデ	ナデ/動物縞	にぶい-横縞	にぶい-横縞	半透明/透明/白	仔骨物(白/外)/底径10.4/木葉型	
447	縄文	深部	底部	D5層・N	543	貝殻染文	貝殻染文/ナデ	にぶい-横縞	赤縞	白/透明/黒	仔骨物(白/外)/底径10.6/動物縞	
448	縄文	深部	底部	C6層・N	17-B-1	ナデ	貝殻染文/ナデ	にぶい-横縞	暗黒	白	仔骨物(赤/内)/底径7.2	
449	縄文	深部	底部	D3/F2層(N・V)	1790/1852	貝殻染文	貝殻染文/ナデ	にぶい-横縞	にぶい-横縞	白	軟質/地味/底径8.4/動物縞	
450	縄文	深部	底部	E2層・N	1202	貝殻染文	貝殻染文/ナデ	明赤縞	にぶい-横縞	白/透明	仔骨物(白/外)/底径10.4/動物縞	
451	縄文	深部	底部	C6層・N	45/46	貝殻染文	貝殻染文/ナデ	明赤縞	明赤縞	黒/半透明/白/透明	仔骨物(白/外)/底径8.3/動物縞	
452	縄文	深部	底部	C6層・N	88	ナデ	ナデ	にぶい-横縞	明黒	白/透明/黒	底径10.2/動物縞(竹口式)	
453	縄文	深部	底部	B6層・N	194	貝殻染文/ナデ	貝殻染文	にぶい-横縞	黒	透明/黒	仔骨物(赤/内)/底径10.0	
454	縄文	深部	底部	C4層	17-B-2	貝殻染文	貝殻染文/ナデ/動物縞	にぶい-横縞	にぶい-横縞	透明/半透明/赤/金	仔骨物(白/外)/底径10.0/動物縞(横戻)	
455	縄文	深部	底部	D5層・N	520	17-B-17	貝殻染文/ナデ	ナデ/動物縞	にぶい-横縞	にぶい-横縞	半透明/黒/透明/白	仔骨物(白/外)/底径10.2/動物縞
456	縄文	深部	底部	E3層・N	1022	17-B-17	ナデ	ナデ	にぶい-横縞	にぶい-横縞	透明/黒	仔骨物(白/外)/底径10.9/動物縞
457	縄文	深部	底部	D5層・N	587	17-A	ナデ	ナデ	にぶい-横縞	明赤縞	金/白/透明	仔骨物(白/外)/底径10.3/木葉型
458	縄文	深部	底部	E2層・N	1296/1823	17-A	貝殻染文	ナデ/動物縞	にぶい-横縞	縞	透明/半透明/白/黒/赤	仔骨物(白/外)/底径10.6/動物縞
459	縄文	深部	底部	F5層・N	1517/1518	17-B-1	ナデ	ナデ	明赤縞	暗黒/にぶい-横縞	白/透明/黒/半透明	底径(11.1)
460	縄文	深部	底部	Ⅲ層・N	17-B-2	貝殻染文/ナデ	貝殻染文/ナデ	にぶい-横縞	にぶい-赤縞	白/透明	仔骨物(白/外)/底径11.3/動物縞	
461	縄文	深部	底部	B5/D3層(N・V)	160/1842	17-B-1	ナデ	ナデ	明赤縞	縞	白/透明	仔骨物(白/外)/底径11.7/動物縞
462	縄文	深部	底部	C6層・N	77	17-B-2	貝殻染文	貝殻染文/ナデ	にぶい-赤縞	にぶい-横縞	白	仔骨物(白/外)/底径11.0/動物縞
463	縄文	深部	底部	E4層・N	1415	17-A	貝殻染文/ナデ	貝殻染文/ナデ/動物縞	にぶい-横縞	縞	白	仔骨物(白/外)/底径10.4/動物縞
464	縄文	深部	底部	E3層・N	1725	17-B-2	貝殻染文	貝殻染文/動物縞/ナデ	灰黄縞	にぶい-横縞	白/透明	仔骨物(白/外)/底径10.4/動物縞
465	縄文	深部	底部	C6層・N	51	17-B-1	ナデ	ナデ	暗黒黄	黒縞	半透明/透明/白	仔骨物(白/外)/底径11.2/動物縞
466	縄文	深部	底部	E3層・N	982/984	17-B-1	貝殻染文	ナデ	にぶい-横縞	にぶい-横縞	透明/白/赤	仔骨物(白/外)/底径11.1/動物縞
467	縄文	深部	底部	C5層・N	314	17-B-1	貝殻染文	ナデ	灰底	にぶい-横縞	半透明/透明/黒/白	仔骨物(白/外)/底径11.4/動物縞
468	縄文	深部	底部	D4層・N	451/504	17-B-1	ナデ	ナデ/動物縞	にぶい-横縞	白/赤	仔骨物(白/外)/底径11.0/動物縞	
469	縄文	深部	底部	B7/B6層(N・V)	283/723	17-B-1	貝殻染文/ナデ	貝殻染文	にぶい-横縞	にぶい-横縞	半透明/金/白/赤	底径11.0
470	縄文	深部	底部	B6層・N	223/558	17-B-1	ナデ/動物縞	ナデ	にぶい-横縞	灰黄縞	白/半透明	仔骨物(白/外)/底径12.2/動物縞
471	縄文	深部	底部	E4層・N	1394	17-B-1	ナデ	ナデ	にぶい-赤縞	明赤縞	白/透明	仔骨物(白/外)/底径12.0/動物縞
472	縄文	深部	底部	D5層・N	523/529	17-B-1	貝殻染文	貝殻染文/ナデ	にぶい-横縞	にぶい-横縞	透明/金/白	仔骨物(白/外)/底径11.8/動物縞
473	縄文	深部	底部	E3層・N	1055	17	ナデ	貝殻染文/ナデ	灰黄縞	にぶい-横縞	透明/黒/白	仔骨物(白/外)/動物縞
474	縄文	深部	底部	E5層・N	1525	17-A	ナデ	ナデ	縞	にぶい-横縞	透明/半透明/黒/白/赤	仔骨物(赤/内)/底径11.1
475	縄文	深部	底部	E2/F2層(N・V)	1146/1299/1690	17-B-1	貝殻染文	貝殻染文	にぶい-横縞	にぶい-横縞	金/白	底径(13.4)/動物縞
476	縄文	深部	底部	E5層・N	1633	17-C	貝殻染文/ナデ	貝殻染文/ナデ	にぶい-横縞	オリーブ縞	透明/白	仔骨物(白/外)/底径10.2
477	縄文	深部	底部	F4層・N	1514	17-C	貝殻染文	ナデ	にぶい-横縞	黒縞	透明/赤/白	仔骨物(白/外)/底径10.6/動物縞
478	縄文	深部	底部	E3層・N	17-C	貝殻染文	ナデ	灰白	灰	透明/白	底径10.2/木葉型	
479	縄文	深部	底部	F5層・N	1516	17-C	貝殻染文/ナデ	ナデ	縞	にぶい-横縞	透明/白	底径10.8
480	縄文	深部	底部	C6層・N	669	17-C	貝殻染文/ナデ	貝殻染文/ナデ	にぶい-横縞	にぶい-横縞	白/透明	底径9.4
481	縄文	深部	底部	E2層・N	1198	17-C	ナデ	貝殻染文/ナデ	にぶい-横縞	にぶい-横縞	白	ナデ(内)/底径10.8
482	縄文	深部	底部	F3層・N	1314	17-C	貝殻染文	ナデ/動物縞	縞	にぶい-横縞	白/赤	仔骨物(白/外)/底径10.0/動物縞

第7表 土器観察表(9)

順号	種別	群	部位	出土情報 (遺構/Gr/層/No)	分期	文様・調整		色塗		胎土	備考
						外塗	内塗	外塗	内塗		
403	縄文	深部	E4 Ⅱ・N	1499	17-C	ナデ	ナデ	にぶい・黒	オリーブ黒	透明/黒/白	付着物[白]外/底面0.4
404	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	1184	17-C	ナデ	貝殻象文/ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	透明/白	底面 0.0.0
405	縄文	深部	F4 Ⅱ・N	1490	17-B-2	ナデ	貝殻象文/ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	透明/白/赤	付着物[赤]外/底面 [白]外/底面 0.3
406	縄文	深部	C6 Ⅲ・N	653	17-B-2	貝殻象文/ナデ	貝殻象文/ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	透明/白/赤	付着物[白]外/底面 0.0.5
407	縄文	深部	F4 Ⅱ・N	1469	17-B-2	ナデ/煎酒痕	黒	にぶい・黒	白/半透明	底面 0.1.0	付着物[白]外/底面 0.1.0
408	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	721	17-B-2	ナデ	ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	透明/白	底面 0.0.0
409	縄文	深部	D4 Ⅲ・N	429/431 ~ 433	17-B-2	貝殻象文/ナデ	ナデ	にぶい・赤	明赤色/にぶい・黒	白/透明	底面 11.4/煎酒痕
490	縄文	深部	C6 Ⅲ・N	1	17-B-2	ナデ	ナデ	黒	にぶい・黒	白/透明	打ち欠き/付着物 [白]外/底面 0.0.9/煎酒痕
491	縄文	深部	E4 Ⅱ・N	1437	17-C	ナデ/沈殿	ナデ/煎酒痕	にぶい・黒	灰黒/浅黄	白/黒/黒	底面 0.0.0
492	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	-	17-C	貝殻象文/ナデ	ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	透明/黒	底面 0.1.0
493	縄文	深部	E2 Ⅱ・N	1200	17-B-1	貝殻象文/ナデ	貝殻象文/ナデ	黒	にぶい・黒	透明/半透明/黒	底面 0.1.0
494	縄文	深部	D4 Ⅲ・N	492/493	17-C	貝殻象文	貝殻象文/ナデ/煎酒痕	にぶい・赤	にぶい・赤	透明/半透明/白	付着物[白]外/底面
495	縄文	深部	C5 Ⅲ・N	311/312	17-C	貝殻象文	貝殻象文/ナデ	灰黒	灰黒	半透明/透明/白	底面 0.3.3/煎酒痕
496	縄文	深部	C5 Ⅲ・N	292/293	5or16	ナデ/短冊文	貝殻象文/ナデ	灰黒	黒	透明/半透明/白	付着物[赤]外/内面
497	縄文	深部	C4/E2Ⅱ (Ⅲ・N)	342/1067/1109/ 1130/1141/1688	16	ナデ	貝殻象文/ナデ	灰黒	にぶい・赤	白	スス(外)
498	縄文	浅部	F5 Ⅱ・N	-	77	ナデ/割目/沈殿	ナデ	煎酒痕	煎酒痕	白/透明/黒/赤	スス(外)/底面 0.0.0
499	上埴山	内層	C7 Ⅲ・N	-	-	ナデ	ナデ	にぶい・黒	黒	透明	-
500	上埴山	内層	F4 Ⅲ・N	-	-	ナデ	ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	透明/金/白	-
501	上埴山	内層	C7 Ⅲ・N	268	-	ナデ	ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	白/透明/半透明	-
502	上埴山	内層	D4 Ⅲ・N	-	-	ナデ	ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	透明/半透明/黒	-
503	上埴山	内層	E4 Ⅲ・N	-	-	ナデ	ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	金/白/透明	-
504	上埴山	内層	C6 Ⅲ・N	49	-	ナデ	ナデ	にぶい・黒	黄灰	透明/白	付着物[白]外/底面 煎酒痕
505	上埴山	内層	E7 Ⅲ・N	-	-	ナデ	煎酒痕	にぶい・黒	にぶい・黒	赤/白	底面利用
506	上埴山	内層	C5 Ⅲ・N	300	-	巻文/ナデ	貝殻象文/ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	金/白/半透明/透明	-
507	上埴山	内層	D4 Ⅲ・N	568	-	ナデ	ナデ	明赤	にぶい・黒	白/透明	-
603	縄文	深部	ⅢA41	-	18-1	貝殻象文/貝殻線刻突文	ケズリ/ナデ	黒	黒	不透明/透明/黒/灰/白/煎酒痕	-
604	縄文	深部	ⅢA41 B5 IX	B5-3416	18-1	貝殻象文/貝殻線刻突文	貝殻象文/ケズリ/ナデ	にぶい・黒	黒	透明/不透明/黒/赤/煎酒痕	口徑 14.0
605	縄文	深部	ⅢA41 B5 IX	B5-3342	19-1	貝殻象文/貝殻線刻突文	ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	明赤黒/煎酒痕/黒/白/透明/不透明	-
606	縄文	深部	ⅢA42 B5 IX	-	18-1	貝殻象文/刺突点	ケズリ/ナデ	黒	灰黒	灰/白/にぶい・黒/煎酒痕/金/透明/黒	-
607	縄文	深部	ⅢA42	-	18-1	貝殻象文	ケズリ/ナデ	にぶい・赤	にぶい・赤	煎酒痕/灰/白/にぶい・黒/透明/黒	-
608	縄文	深部	ⅢA42 B6 IX	3339/3414	18-1	貝殻象文	ケズリ/ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	灰/白/金/黒/半透明	-
609	縄文	深部	ⅢA42	-	19-1	貝殻象文/貝殻線刻突文	ナデ	明赤	にぶい・黒	にぶい・赤/黒/透明/煎酒痕/不透明/黒	角筒/スス(外)/コブ(内)
610	縄文	深部	ⅢA42	-	19-1	貝殻象文/刺突点/貝殻線刻突文	ナデ	黒	明赤	黒/不透明/透明/灰/白/煎酒痕	-
611	縄文	深部	ⅢA44 C6 IX	-	24	割目突文/ナデ/山形押型文	ナデ/煎酒痕	にぶい・黒	にぶい・黒	灰/白/赤/黒/煎酒痕/煎酒痕/煎酒痕/透明/黒	-
612	縄文	深部	ⅢA45 C5 IX	C5-3451	23 Ⅱ	ナデ/横内型突文/煎酒痕	ケズリ/ナデ/煎酒痕	にぶい・黒	浅黄	煎酒痕/浅黄/透明	スス(外)/コブ(内)/口徑 10.0
613	縄文	深部	ⅢA46	2	19-1	割目/貝殻象文/貝殻線刻突文	ケズリ/ナデ	灰黒	灰黒	灰/白/にぶい・黒/透明/黒	口徑 0.4.0
614	縄文	深部	ⅢA46	1	20	割目/貝殻線刻突文/ナデ/煎酒痕/刺突点	ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	灰/黒/煎酒痕/透明	-
615	縄文	深部	ⅢA46	5	20	貝殻押引文	ケズリ/ナデ	にぶい・黒	灰黒	灰/白/にぶい・黒/透明/黒	スス(外)
616	縄文	深部	ⅢA46	4	19-1	貝殻押引文	ケズリ/ナデ	明赤	にぶい・黒	にぶい・黒/透明/不透明/黒	スス(外)
617	縄文	深部	ⅢA46-1 SC88 C5/B5/ B6 IX	SC88-13355/ 3383/3384/ 3397/3512	18-1	貝殻象文/透刺突文/煎酒痕	ケズリ/ナデ/煎酒痕	明赤	黒/にぶい・黒	煎酒痕/灰/白/にぶい・黒/透明/金	スス(外)
618	縄文	深部	ⅢA46-1 SC89	1	19-1	貝殻象文/貝殻線刻突文/煎酒痕	ナデ	にぶい・黒	灰黒	煎酒痕/灰/白/にぶい・黒/透明/黒	-
619	縄文	深部	ⅢA46-1 B6 IX	3244	18-1	貝殻象文/貝殻線刻突文	貝殻象文	にぶい・黒	明赤	煎酒痕/灰/白/透明	スス(外)
620	縄文	深部	ⅢA46-1 B6 IX	3229/3261	18-1	貝殻象文/貝殻線刻突文	貝殻象文	明赤	明赤	黒/灰/白/透明	スス(外)/口徑 0.27
621	縄文	深部	ⅢA46-1 B5 IX	3427	18-1	真直/貝殻線刻突文/貝殻象文	ナデ/ケズリ	にぶい・黒	にぶい・黒	灰/白/透明	角筒/スス
622	縄文	深部	ⅢA46-1 B6 IX	3399	18-1	貝殻象文/刺突点	ナデ/ケズリ	灰黒	にぶい・黒	浅黄/煎酒痕/灰/白/金/透明	口徑 0.4.0
623	縄文	深部	ⅢA46-1 D5 IX	3087	18-1	貝殻象文/刺突点	ケズリ/ナデ	黒	灰黒	にぶい・黒/黒/煎酒痕/金	-
624	縄文	深部	ⅢA46-1 D4 IX	3080 ~ 3082	18-1	貝殻象文/ナデ	ケズリ/ナデ	黒	にぶい・黒	不透明/煎酒痕/灰/白/煎酒痕/透明/黒	付着物[白]外/底面 0.2
625	縄文	深部	ⅢA46-1 B5/B5 IX	3415/3448/ 3515	18-1	貝殻象文	ケズリ/ナデ/煎酒痕	にぶい・黒	にぶい・黒	灰/白/透明	組合皿/底面 10.0
626	縄文	深部	ⅢA46-1 B6 IX	3190/3202/ 3208/3215 Ⅱ	18-1	貝殻象文/ナデ	貝殻象文/ケズリ	にぶい・赤	にぶい・赤	浅黄/煎酒痕/煎酒痕/黒/不透明/透明	コブ(内)/底面 16.2
627	縄文	深部	ⅢA46-1 C6 IX	3478/3479	18-1	貝殻象文	貝殻象文/ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	灰/白/透明/煎酒痕	底面 0.3.0

第7表 土器観察表(10)

編成 番号	種別	課程	部 位	出土位置 (遺構/Gr/層/坑)	分期	文様・調整		色 調		胎土	備考	
						外 産	内 産	外 産	内 産			
628	縄文	深部	製部	B6 Ⅸ	3201/3209/ 3218/3230/ 3231	18-B	貝殻染文	ケズリ/ナデ	にぶい・黒	にぶい・橙	黒/白・半透明/黒	
629	縄文	深部	製部	B5 Ⅸ	3356/3378/ 3766	18-B	貝殻染文	ケズリ/ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	黒緑/浅黄緑	コグ(内)
630	縄文	深部	製部	B5C/D Ⅸ	3351/3472	18-B	貝殻染文/ナデ	ケズリ/ナデ	黒	にぶい・黄緑	黒緑/浅黄緑/透明	底面(13.6)
631	縄文	深部	製部	T 2 Ⅸ		18-B	貝殻染文/ナデ	ケズリ/ナデ	にぶい・橙	にぶい・橙	灰白/赤黒/透明	底面/付着物(白) (外)/底面(白)
632	縄文	深部	口縁部	B5 Ⅸ	3361	19-A	貝殻染文/貝殻染文/斜目 ナデ/煎直	ナデ	灰黒	灰黒	灰白/透明/黒/にぶい・橙	口縁(11.1)
633	縄文	深部	口縁部	B7 Ⅸ	3026	19-A	貝殻染文/貝殻染文/斜目 ナデ	ナデ	灰黒	灰黒	灰白/にぶい・橙/透明	
634	縄文	深部	口縁部	B6 Ⅸ	3193/3194	19-A	貝殻染文/貝殻染文/斜目 ナデ	ナデ	灰黒	にぶい・橙	暗赤黒/不透明/灰白/金/透明/灰白	
635	縄文	深部	口縁部	B6 Ⅸ	3372	19-A	貝殻染文/貝殻染文/斜目 ナデ	ケズリ/煎直/ナデ	にぶい・橙	にぶい・赤黒	灰白/黒/灰白/黒/にぶい・橙/透明	スス(外)
636	縄文	深部	製部	D5 Ⅸ	3094/3258	19-A	貝殻染文/貝殻染文/斜目 ナデ	ナデ	にぶい・黄緑	灰黄緑	橙/灰白/黒/灰白/黒/透明	
637	縄文	深部	底部	E5 Ⅸ	3148	19-A	ナデ/ヘラ掻き条線	ナデ	にぶい・橙	にぶい・橙	灰白/灰白/赤黒/透明	底面(11.5)
638	縄文	深部	製部	D4 Ⅸ	3083	19-A	ヘラ掻き条線/貝殻染文/貝殻染文/斜目 ナデ	ナデ	にぶい・橙	にぶい・赤黒	不透明/灰白/にぶい・橙/透明/黒	付着物(白)(外)/底 面(13.6)
639	縄文	深部	製部	D5/ C5 Ⅸ	3294	19-A	貝殻染文/貝殻染文/ヘラ掻き条線/ケズリ ナデ	ナデ	にぶい・赤黒	灰黄緑	にぶい・黄緑/灰白/赤黒/黒/透明/黒	付着物(白)(外)/底 面(11.4)
640	縄文	深部	製部	D5 Ⅸ	3091/3092	19-A	貝殻染文/貝殻染文/斜目 ナデ	ケズリ/ナデ	にぶい・黒	灰黒	透明/黒/灰白/灰黒	レモン形
641	縄文	深部	製部	D4 Ⅸ	3077	19-A	貝殻染文/貝殻染文/斜目 ナデ	ナデ	にぶい・黒	黒	金/灰白/黒	レモン形/スス(外)
642	縄文	深部	製部	D4/ E4 Ⅸ	3063/3068/ 6071	19-A	貝殻染文/貝殻染文/斜目 ナデ	ケズリ/ナデ	にぶい・黒	にぶい・赤黒	不透明/灰白/不透明/黒/灰白	角筒
643	縄文	深部	口縁部	B7 Ⅸ	3003/3019	19-A	斜目/貝殻染文/貝殻染文/煎直/斜目 ナデ	ケズリ/ナデ	にぶい・黒	にぶい・橙	灰白/不透明/透明/黒/浅黄緑	スス(外)
644	縄文	深部	口縁部	C6 Ⅸ	3445	19-B	斜目/貝殻染文/斜目/ナ デ/斜目/斜目	ナデ	にぶい・橙	にぶい・橙	不透明/灰白/黒/透明/黒	
645	縄文	深部	口縁部	B6 Ⅸ	3398/3412	19-B	斜目/貝殻染文/斜目/ナ デ/斜目	ナデ	にぶい・橙	にぶい・黄緑	灰白/黒/にぶい・橙/黒/透明	
646	縄文	深部	口縁部	B7 Ⅸ	3020	19-B	斜目/貝殻染文/貝殻染文/斜目 ナデ	ケズリ/ナデ	明赤黒	にぶい・橙	透明/不透明/黒/灰白/黒	
647	縄文	深部	口縁部	B6 Ⅸ	3324	19-B	斜目/貝殻染文/斜目/ナ デ/斜目	ケズリ/ナデ	赤黒	にぶい・赤黒	金/赤黒/灰白/透明/黒	
648	縄文	深部	口縁部	D6 Ⅸ	3287/3288	20	斜目/貝殻染文/貝殻染文/斜目 ナデ	ナデ	橙	にぶい・黄緑	赤黒/黒/灰白/透明/黒	
649	縄文	深部	製部	D4 Ⅸ	3079	20	貝殻染文	ケズリ/ナデ	灰黒	明赤黒	灰白/橙/不透明/透明/黒	
650	縄文	深部	製部	D5 Ⅸ	3112	20	貝殻染文	ケズリ/ナデ	にぶい・赤黒	にぶい・赤黒	灰白/黒/黒/透明/不透明/黒	
651	縄文	深部	口縁部	C5 Ⅸ	3405	21	貝殻染文/ナデ	ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	にぶい・橙/灰白/浅黄緑/黒/黒/透明	スス(外)
652	縄文	深部	製部	B7 Ⅸ-N	3031/3032	21	貝殻染文	ケズリ/ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	透明/半透明/黒/白/スス(外)	
653	縄文	深部	製部	C6/ B5 Ⅸ	3423/3466	21	ナデ	ナデ	にぶい・赤黒	明赤黒	にぶい・橙/にぶい・黒/灰白/黒/金/透明/黒	付着物(白)(外)/底 面(13.6)
654	縄文	深部	製部	C6 Ⅸ	3307	21	ナデ	ナデ	灰黄緑	灰黄緑	にぶい・黄緑・橙/灰白/灰白/透明/不透明/黒	底面(10.4)
655	縄文	深部	底部	D6 Ⅸ	3225	21	ナデ/ミガサ	ナデ	にぶい・橙	灰黒	灰白/灰黒/黒/透明/不透明/黒	底面(16.3)
656	縄文	深部	口縁部	D4 Ⅸ	3066	22	ナデ	ケズリ/ナデ	灰黄緑	灰黄緑	灰白/浅黄緑/黒/透明/不透明/黒	
657	縄文	深部	製部	D6 Ⅸ	3170	22	ナデ/貝殻染文/斜目 ナデ	ケズリ/ナデ	にぶい・赤黒	にぶい・赤黒	金/灰白/浅黄緑/黒/灰白/透明	
658	縄文	深部	製部	B5/ A5 Ⅸ	3352/3353	22	ナデ/貝殻染文/斜目 ナデ	ケズリ/ナデ	にぶい・橙	にぶい・黄緑	灰白/浅黄緑/黄緑/不透明/黒/透明	
659	縄文	深部	製部	B6 Ⅸ	3253	22	ナデ/横線(新換状)	ナデ	にぶい・橙	にぶい・橙	灰白/不透明/黒	
660	縄文	深部	口縁部	B5 Ⅸ	3347/3418/ 3420	23-A	ナデ/山形押型文	ナデ	にぶい・黄緑	橙/灰白	浅黄緑/黒/黒/透明/不透明/黒	
661	縄文	深部	製部	B5/ B5 Ⅸ	3365/3487	23-B	山形押型文	ケズリ/ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	黒/黒/黒/灰白/金/透明	組合皿
662	縄文	深部	口縁部	B5 Ⅸ	3130	23-B	楕円押型文	楕円押型文/ナデ	灰白	浅黄緑	透明/半透明/白/黒	
663	縄文	深部	製部	B5 Ⅸ	3451	23-B	楕円押型文	ナデ	灰黄緑	浅黄	透明/白/白	
664	縄文	深部	口縁部	B5 Ⅸ	3138	23-B	ナデ/楕円押型文	ケズリ/ナデ/煎直	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	灰白	スス(外)/コグ(内)
665	縄文	深部	口縁部	E5 Ⅸ	3142	23-B	ナデ/楕円押型文	ケズリ/ナデ/煎直	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	灰白/透明	
666	縄文	深部	製部	B6 Ⅸ	3222	23-B	楕円押型文	ケズリ/ナデ	にぶい・黒	黒	金/透明/白/赤	炭化物(内)
667	縄文	深部	口縁部	B8 Ⅸ-N	875	23-B	楕円押型文	ナデ	にぶい・黄緑	灰黄緑	透明/半透明/金/白	
668	縄文	深部	製部	C4 Ⅸ	3402	24-1	ナデ/山形押型文	ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	灰白/灰白	スス(外)/コグ(内)
669	縄文	深部	製部	C5 Ⅸ	3511	24-1	山形押型文	ナデ	灰黒	灰黒	灰黄緑/灰白/黒/橙/灰	
670	縄文	深部	製部	C6 Ⅸ-N		24-1	斜目押型文/山形押型文	ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	透明/黒/白	
671	縄文	深部	製部	B-D7 Ⅸ		24-1	斜目押型文/山形押型文	ナデ	にぶい・黄緑	灰黄	透明/白	
672	縄文	深部	製部	C4 Ⅸ	3402	24-1	山形押型文/ナデ	ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	灰白/暗灰	スス(外)/コグ(内)
673	縄文	深部	口縁部	SAB-SC1		25	斜目押型文/浅黄文	ナデ	にぶい・黄緑	にぶい・黄緑	透明/半透明/黒/白	
674	縄文	深部	製部	C6 Ⅸ	3465	25	縄文	ナデ	にぶい・黄緑	暗灰	橙/灰白/暗灰/透明/にぶい・赤黒/黒	スス(外)/底面(13.7)
675	縄文	深部	製部	SAB	製床土	25	縄文	ナデ	にぶい・橙	暗灰	赤黒/灰白/灰黒/透明/黒	

第7表 土器観察表(11)

標本 番号	種類	器種	部位	出土位置 (遺構・G/層/No)	分期	文様・調整		色 澤		胎土	備考
						外 産	内 産	外 産	内 産		
676	縄文	深鉢	胴部	D6 IX 3180	26	沈線文(菱形状)	ナデ	にぶい・黒褐色	にぶい・黒	明褐色/灰白/にぶい 黄褐色/黄灰/透明/ 不透明/黒	
677	縄文	深鉢	口縁部	C5 VII 3453	27	ナデ/沈線文/刻目	ナデ	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	灰白/黒褐色/透明	
678	縄文	深鉢	胴部	C8 VII 3006/3901	27	ナデ/沈線文/磨布文	ケズリ/ナデ	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	灰白/透明	又ス(外)
705	縄文	深鉢	胴部	C6 X 5A48-1	28	ナデ/散点画	ナデ/散点画	にぶい・黄褐色	にぶい・黒	灰赤/橙/赤褐色/黒灰 /灰白/にぶい・橙/透明 /黒	
706	縄文	深鉢	口縁部	C6 X 1 3804	28	ナデ/散点画	無文/ナデ/散点画	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	にぶい・黒/灰白/平透 射	
707	縄文	深鉢	口縁部	B6 X 1 3608	29-1	ナデ、隆帯文	ナデ	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	灰褐色/黒/灰褐色/黒灰	
708	縄文	深鉢	口縁部	B6 X 1 3804/3632/ 3891	29-1	ナデ、隆帯文	ナデ/散点画	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	灰白/灰褐色/透明/黒 /黒褐色	
709	縄文	深鉢	口縁部	B6 VI 3884/3885	29-Ⅱ	ナデ、隆帯文	ナデ/散点画	灰黄褐色	にぶい・黄褐色	にぶい・黒褐色/透明/黒 /黒灰/黒褐色	縦線孔
710	縄文	深鉢	胴部	C6 X 1 3798	30	ナデ	無文/ナデ	灰黄	灰黄	黒褐色/灰白/透明	
711	縄文	深鉢	胴部	C6 X 1 3541	30	ナデ/散点画	無文/ナデ/散点画	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色/灰白/平透 射	
712	縄文	深鉢	胴部	B6 X 1 3725/3738	30	ナデ/散点画	ナデ/散点画	にぶい・橙	にぶい・橙	黒/黒灰/橙/平透明 /黒	
713	縄文	深鉢	胴部	B6 X 1 3610	30	ナデ/散点画	ナデ/散点画	にぶい・橙	灰黄	透明/平透明/黒/赤	
714	縄文	深鉢	胴部	B6 X 1 3609	30	ナデ/散点画	ナデ/散点画	にぶい・橙	にぶい・黄褐色	平透明	
715	縄文	深鉢	胴部	C6 X 1 3516	30	ナデ/散点画	無文/ナデ/散点画	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	灰白/透明	又ス(外)
716	縄文	深鉢	胴部	B5/ B6 X 1 3754/3822/ 3894	30	ナデ/散点画	ナデ/散点画	橙	にぶい・黄褐色	黒/透明/黒褐色/灰褐色 /黒	
717	縄文	深鉢	胴部	C6 X 1 3637	30	ナデ	無文/ナデ	にぶい・黒	にぶい・黒	灰白/透明	又ス(外)コグ(内)
718	縄文	深鉢	胴部	C6 X 1 3749/3800/ 3802	30	ナデ/散点画	無文/ナデ	黒褐色	黒褐色	灰白/灰黄褐色/透明	又ス(外)
719	縄文	深鉢	底部	B6 X 1 3635	30	ナデ/散点画	ナデ/散点画	明褐色	明褐色	白	
720	縄文	深鉢	底部	B6 X 1 3596	30	ナデ/散点画	ナデ/散点画	にぶい・黄褐色	超灰	透明/白	

凡例

種類について 土器→土器類 灰土→灰土器類 緑釉→緑釉陶器 縄文→縄文土器 土製品→円筒形土製品 (土製片加工品)

分期について 縄文中→晩期の土器

1 期→巻目式土器 2 期→大平式土器 3 期→中葉田原式土器 4 期→阿高式土器 5 期→瓦之辻式土器 6 期→型式不明 7 期→南條寺式土器
8 期→本野原式土器 9 期→成川K式土器 10 期→源洪縄文系土器 11 期→市東式土器 12 期→納言式土器 13 期→黄色磨研系土器 14 期→入佐式土器
15 期→黒川式土器 16 期→赤土器 17 期→(1～16 期の) 継群

縄文早期の土器

18 期→新平式土器 19 期→加東山式土器 20 期→吉田式土器 21 期→中葉式土器 22 期→下刺式土器 23 期→神型式土器 24 期→手向山式土器

25 期→砂見式土器 26 期→平輪式土器 27 期→黒ノ澤式土器

縄文中期の土器

28 期→準式土器 29 期→標準式土器 30 期→(28、29 期の) 前期・中期

備考について () 内の数値は反転復元値で、単位は cm。[白] は染めた白色、灰白色物質、[黄] は磨りした淡黄色土の粉骨、(外) は外面、(内) は内面

第7表 土器観察表 (12)

用取番号	出土位置	器種	石材	最大高 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	用取番号	出土位置	器種	石材	最大高 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
508	SA02	2	打製石片	ホルンフェルス	12.30	5.00	1.50	91.80	563	E3 Ⅲ - IV	-	スタレライバー	黒曜石 (三動)	3.40	2.50	1.50	7.40
509	SA02	23	磨製石片	ホルンフェルス	8.80	5.15	2.40	167.60	564	C9 Ⅲ - IV	744	二次加工削片	頁岩	3.70	3.80	0.60	7.80
510	SA02	12	スタレライバー	ガラス質安山岩	7.75	5.60	1.75	53.30	565	C6 Ⅲ - IV	-	二次加工削片	頁岩	1.10	4.40	0.80	12.80
511	SA02	17	石巻	ホルンフェルス	6.20	11.20	1.20	63.30	566	H6 Ⅲ - IV	625	二次加工削片	頁岩 (柱貫)	2.40	2.10	0.90	4.50
512	SA02	25	二次加工削片	チャート	6.20	6.10	1.45	39.80	567	H6 Ⅲ - IV	576	二次加工削片	石英	7.80	3.40	2.10	31.50
513	SA02	45	巖石	安山岩 (多孔質)	5.80	4.30	4.20	136.60	568	E4 Ⅲ - IV	1408	二次加工削片	黒曜石 (上守典)	2.50	2.60	1.20	8.90
514	SA02	3	巖石	安山岩 (多孔質)	6.25	5.25	4.10	194.40	569	C6 Ⅲ - IV	-	使用板削片	砂岩	4.40	4.00	1.40	23.40
515	SA02	4	磨石	安山岩 (剛輝石)	10.10	6.70	4.60	522.20	570	C7 Ⅲ - IV	777	使用板削片	黒曜石 (免木津留)	2.90	2.20	0.50	2.90
516	SA06	26	スタレライバー	頁岩	7.15	4.20	2.20	25.20	571	E2 Ⅲ - IV	1248	使用板削片	黒曜石 (三動)	1.80	2.40	0.60	1.80
517	SA06	19	スタレライバー	頁岩	3.10	3.70	1.00	7.10	572	E5 Ⅲ - IV	1336	使用板削片	黒曜石 (三動)	2.00	2.40	0.80	2.70
518	SA06	39	石核	黒曜石 (三動)	2.30	3.50	2.10	15.60	573	E3 Ⅲ - IV	953	使用板削片	黒曜石 (三動)	3.20	2.20	0.80	4.40
519	SA06	22	石核	黒曜石 (三動)	4.10	2.80	2.30	17.40	574	C8 Ⅲ - IV	752	使用板削片	黒曜石 (三動)	3.10	1.80	0.60	2.40
520	SA06	32	磨石	砂岩	5.90	4.90	3.90	151.80	575	C9 Ⅲ - IV	122	磨製石片	ホルンフェルス	4.70	3.80	0.95	28.40
521	SA06	15	磨石	砂岩	8.60	6.20	4.25	298.50	576	SA36	-	磨製石片	ホルンフェルス	9.50	4.55	1.05	81.40
522	SA06	351	磨石	砂岩	10.00	7.60	4.40	526.90	577	C7 Ⅲ - IV	68+69	磨製石片	ホルンフェルス	7.40	4.20	1.20	58.10
523	SA06	63	巖石	安山岩 (多孔質)	5.20	4.90	4.20	135.10	578	E7 Ⅲ - IV	896	磨石	ホルンフェルス	5.40	6.40	3.20	151.80
524	SA10	1	磨製石片	ホルンフェルス	8.35	4.50	1.50	99.60	579	E7 Ⅲ - IV	720	削片	頁岩	4.10	4.90	0.80	22.20
525	SA10	2	磨製石片	ホルンフェルス	8.80	4.65	1.60	192.20	580	E3 Ⅲ - IV	1933	石核	砂岩	4.50	7.70	4.65	146.30
526	SA10	-	二次加工削片	頁岩	7.80	6.70	1.20	56.50	581	H6 Ⅲ - IV	169	石核	砂岩	6.00	7.30	3.60	144.20
527	SA10	9	スタレライバー	頁岩	11.10	3.30	1.30	26.60	582	E3 Ⅲ - IV	1711	石核	黒曜石 (三動)	2.10	3.90	2.50	28.40
528	SA10	2	スタレライバー	頁岩	6.55	3.30	0.80	15.60	583	C7 Ⅲ - IV	252	石核	黒曜石 (三動)	3.10	3.20	1.10	28.40
529	SA12	3	スタレライバー	頁岩	6.40	3.20	0.60	9.30	584	XXI	2	石核	黒曜石 (三動)	2.80	2.10	1.15	5.60
530	SA13	SH40	巖石	ホルンフェルス	12.20	6.30	4.60	425.20	585	C7 Ⅲ - IV	405	石核	石英	3.20	4.50	1.90	22.30
531	SA16	9	磨製石片	ホルンフェルス	12.00	5.00	2.50	256.90	586	C7 Ⅲ - IV	895	磨石	砂岩	12.60	10.30	6.30	1171.40
532	SA17	10	局部磨製石片	ホルンフェルス	9.90	3.90	4.60	77.20	587	E3 Ⅲ - IV	969	磨石	砂岩	7.20	6.90	3.50	116.80
533	SA17	1	磨製石片	ホルンフェルス	12.95	5.25	3.40	334.00	588	H6 Ⅲ - IV	544	巖石	安山岩 (多孔質)	3.90	3.00	2.30	38.30
534	SA17	6	使用板削片	頁岩	8.20	4.30	0.80	31.30	589	E2 Ⅲ - IV	1235	巖石	安山岩 (多孔質)	5.70	4.95	4.30	167.00
535	SA17	6	石核	黒曜石 (三動)	2.90	2.30	2.70	18.00	590	H6 Ⅲ - IV	832	巖石	安山岩 (多孔質)	6.65	4.50	4.05	141.80
536	SA17	16	磨石	花崗岩	10.60	9.00	4.60	772.00	591	C6 Ⅲ - IV	354	巖石	安山岩 (多孔質)	6.25	5.45	4.60	169.00
537	SA19	12	打製石片	ホルンフェルス	12.50	8.90	1.7	163.40	592	E5 Ⅲ - IV	1646	磨石	砂岩	9.50	5.70	4.70	433.80
538	SA29	6	磨製石片	ホルンフェルス	7.20	5.20	1.50	99.60	593	F4 Ⅲ - IV	1588	磨石	砂岩	10.50	5.40	4.80	371.20
539	SA29	7	磨製石片	砂岩 (硬質)	11.50	9.20	4.50	796.10	594	F4 Ⅲ - IV	1416	磨石	砂岩	10.90	8.45	4.70	296.70
540	SA32	SH2	スタレライバー	黒曜石 (免木津留)	2.10	3.00	1.0	6.10	595	E5 Ⅲ - IV	1510	磨石	砂岩 (硬質)	11.40	8.75	4.75	599.70
541	SA33	16	使用板削片	頁岩	5.20	2.90	0.60	9.20	596	C7 Ⅲ - IV	769	磨石	砂岩	11.60	10.40	4.70	915.00
542	SA34	-	石巻未製品	ガラス質安山岩	4.55	3.40	0.70	12.10	597	H5 Ⅲ - IV	896	磨石	砂岩 (含化石)	11.60	9.50	4.20	517.00
543	SA34	1	巖石	ホルンフェルス	11.90	5.95	2.80	372.70	598	E4 Ⅲ - IV	1305	石巻	砂岩	12.00	11.50	10.00	1899.70
544	SA34	-	使用板削片	砂岩	5.80	5.00	1.00	33.90	599	H4 Ⅲ - IV	490	石巻	礫岩	9.00	6.50	3.25	326.00
545	SA36	-	スタレライバー	頁岩	3.40	4.70	0.60	9.00	600	E4 Ⅲ - IV	1501	石巻	砂岩	9.20	13.90	7.40	1240.40
546	SA38	-	石巻	ガラス質安山岩	2.85	1.60	0.50	1.30	601	H6 Ⅲ - IV	182	石巻	砂岩	13.05	10.85	3.70	642.40
547	SA38	1	磨製石片	頁岩	3.40	4.70	1.10	27.30	602	H6 Ⅲ - IV	635	台石	砂岩	10.90	7.80	3.90	556.10
548	E2 Ⅲ - IV	1775	石巻未製品	頁岩 (柱貫)	2.40	1.60	0.50	1.50	603	SA42	-	石巻	石英	3.35	2.10	3.00	1.20
549	C7 Ⅲ - IV	701	石巻	チャート	2.60	1.40	0.45	1.60	680	SA46	-	石巻	頁岩 (柱貫)	3.40	1.60	0.40	1.60
550	C7 Ⅲ - IV	842	石巻	石英	2.15	1.55	0.40	0.90	681	SA46	-	石巻	黒曜石 (免木津留)	2.20	1.60	0.35	0.80
551	E2 Ⅲ - IV	1757	石巻	チャート	2.40	1.70	0.30	0.70	682	SA46	11	石巻未製品	頁岩 (柱貫)	2.60	1.80	0.60	1.80
552	A8 Ⅲ - IV	876	石巻	ガラス質安山岩	2.15	2.20	0.60	2.30	683	SH1	-	巖石	砂岩	7.35	5.80	4.20	222.30
553	D2 Ⅲ - IV	1859	局部磨製石片	頁岩	2.40	1.40	0.40	0.80	684	SO06	1	磨石	砂岩 (硬質)	10.80	9.60	3.90	590.70
554	F2 Ⅲ - IV	1301	局部磨製石片	頁岩	1.90	1.55	0.80	1.00	685	E7 IX	3027	石巻	チャート	2.55	1.45	0.30	0.90
555	C6 Ⅲ - IV	5	石巻	頁岩 (柱貫)	2.20	2.70	0.85	3.70	686	H6 IX	3177	石巻	凝灰岩 (緑色)	2.00	1.30	0.30	0.50
556	Ⅲ - IV	-	石巻	チャート	2.70	2.40	0.70	6.30	687	C6 IX	3480	石巻	黒曜石 (免木津留)	1.80	1.10	0.20	0.30
557	D4 Ⅲ - IV	836	石巻	黒曜石 (上守典)	1.80	3.40	0.80	3.80	688	H6 IX	3199	石巻	チャート	1.70	1.50	0.30	0.70
558	D4 Ⅲ - IV	-	スタレライバー	砂岩	3.60	6.70	0.90	16.20	689	E3 IX	3492	石巻	チャート	2.10	1.40	0.30	0.70
559	D4 Ⅲ - IV	1338	スタレライバー	砂岩	8.30	5.40	2.70	124.40	690	SH IX	3343	石巻	チャート	1.60	1.60	0.30	0.60
560	C6 Ⅲ - IV	131	スタレライバー	チャート	3.00	2.50	1.50	18.20	691	H5 IX	3102	石巻未製品	チャート	2.70	1.90	0.80	2.50
561	B5 Ⅲ - IV	158	スタレライバー	安山岩	8.60	4.60	0.90	257.00	692	H6 IX	3178	焼石器	黒曜石 (免木津留)	1.80	2.50	1.10	3.40
562	H6 Ⅲ - IV	894	スタレライバー	黒曜石 (三動)	3.50	4.00	1.70	22.90	693	C6 IX	3500	スタレライバー	石英	4.80	2.40	1.20	18.30

第8表 石器計測表(1)

順番 番号	出土位置 ※	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	順番 番号	出土位置 ※	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
694	D6 IX	3184	二次加工剥片	チャート	4.80	3.00	1.10	12.00	765	C6 XI	3733	スタレイバー	黒曜石(三船)	3.20	3.10	1.30	10.00
695	B7 IX	3011	使用痕剥片	流紋岩	6.90	3.10	0.60	11.30	766	B6 XI	3663	スタレイバー	頁岩	4.60	4.10	1.50	30.90
696	B7 IX	3014	使用痕剥片	黒曜石(金本津留)	3.35	1.90	0.80	4.40	767	B5 XI	3335	二次加工剥片	流紋岩	2.80	2.20	0.60	3.90
697	C5 IX	3410	石核	流紋岩	3.30	4.45	2.30	27.60	768	B6 XI	3779	二次加工剥片	流紋岩	7.70	6.90	1.60	67.90
698	E6 IX	3220	石核	黒曜石(金本津留)	2.00	3.50	2.80	21.00	769	C6 XI	3700	二次加工剥片	黒曜石(上牛轟)	2.70	2.00	0.80	4.00
699	D6 IX	3273	石核	黒曜石(金本津留)	1.40	2.20	1.50	3.40	770	C6 XI	3532	二次加工剥片	黒曜石(金本津留)	3.80	1.70	0.50	2.40
700	C6 IX	3475	石核	黒曜石(金本津留)	2.10	2.40	0.90	5.20	771	B6 XI	3308	二次加工剥片	黒曜石(金本津留)	1.70	1.70	0.50	1.40
701	B7 IX	3015	籠石	安山岩(多孔質)	4.80	4.40	2.20	108.80	772	B5 XI	3805	二次加工剥片	黒曜石(金本津留)	4.90	2.70	0.90	10.70
702	E6 IX	3285	籠石	安山岩(多孔質)	6.30	4.10	3.70	112.40	773	B6 XI	3720	使用痕剥片	流紋岩	3.90	3.80	0.70	9.20
703	C5 IX	3400	磨礫石	砂岩(硬質)	11.50	9.40	4.40	785.40	774	B6 XI	3727	石核	頁岩(柱質)	5.50	9.40	4.30	273.60
704	C7 IX	3017	石核	安山岩	20.90	18.80	6.25	2001.80	775	B7 XI	3055	石核	頁岩(柱質)	5.30	3.30	1.90	27.30
721	B6 XI	3611	細石片	黒曜石(金本津留)	2.60	0.75	0.27	0.40	776	C6 XI	3702	石核	流紋岩	2.50	3.70	4.10	40.60
722	B6 XI	3621	細石片	黒曜石(金本津留)	1.10	0.45	0.12	0.10	777	B 6 XI	3389	石核	黒曜石(金本津留)	2.40	2.60	1.50	4.80
723	C6 XI	3675	細石片	黒曜石(金本津留)	2.20	0.85	0.25	0.40	778	C6 XI	3326	石核	黒曜石(金本津留)	2.20	3.10	1.45	7.90
724	C6 XI	3709	細石片	黒曜石(金本津留)	1.70	0.70	0.26	0.30	779	C6 XI	3732	石核	黒曜石(金本津留)	1.00	2.50	1.60	3.20
725	B6 XI	3625	細石片	黒曜石(金本津留)	1.45	0.50	0.14	0.10	780	C6 XI	3545	石核	黒曜石(金本津留)	2.20	2.15	1.45	6.80
726	C6 XI	-	細石片	黒曜石(金本津留)	1.45	0.80	0.12	0.20	781	C6 XI	3832	剥片	頁岩	9.60	8.80	1.10	98.90
727	C6 XI	3361	細石片	黒曜石(金本津留)	1.30	0.60	0.12	0.10	782	C6 XI	SA47-2	剥片	流紋岩	3.50	1.70	0.50	3.00
728	B6 XI	3623	細石片	黒曜石(金本津留)	1.40	0.65	0.20	0.20	783	C6 XI	SA48-5	剥片	チャート	4.60	2.70	0.90	10.20
729	C6 XI	3554	細石片	黒曜石(金本津留)	1.60	0.80	1.20	2.00	784	B6 XI	3634	籠石	砂岩	7.70	4.80	4.50	229.50
730	B6 XI	3664	細石片	黒曜石(金本津留)	2.05	1.55	1.60	3.30	785	C6 XI	3322	籠石	砂岩	11.95	5.70	3.80	354.30
731	C6 XI	3546	細石片	黒曜石(金本津留)	1.85	0.75	1.20	1.70	786	B5 XI	3863	籠石	砂岩	8.90	4.95	3.30	201.30
732	B6 XI	3737-1	細石片	黒曜石(金本津留)	1.90	1.30	0.85	2.30	787	C6 XI	3746	籠石	ホルンフェルス	7.80	2.70	4.05	68.20
733	C6 XI	3714	細石片	黒曜石(金本津留)	2.10	1.30	1.40	2.80	788	C5 XI	SC93-1	磨礫石	砂岩(硬質)	8.65	6.95	3.10	307.40
734	C6 XI	3536	細石片	黒曜石(金本津留)	2.20	1.30	1.30	3.10	789	C6 XI	SA47	石籠	砂岩	12.70	7.90	4.50	611.70
735	C6 XI	3528	細石片	黒曜石(金本津留)	2.40	1.50	1.35	3.80									
736	B6 XI	3619	細石片	黒曜石(金本津留)	2.30	1.90	1.60	2.80									
737	B6 XI	3662	細石片	黒曜石(金本津留)	2.00	1.35	0.90	2.50									
738	C6 XI	3552	細石片	黒曜石(金本津留)	1.75	1.35	0.80	2.00									
739	B7 XI	3016	細石片	黒曜石(金本津留)	1.40	1.55	1.55	3.20									
740	C6 XI	3713	細石片	黒曜石(金本津留)	1.35	1.70	0.90	2.10									
741	C6 XI	3679	細石片	黒曜石(上牛轟)	1.20	1.45	0.85	1.00									
742	B6 XI	3606	細石片	黒曜石(金本津留)	1.55	1.45	1.25	2.00									
743	C6 XI	3551	細石片	黒曜石(金本津留)	1.75	0.90	1.70	3.00									
744	C6 XI	3718	細石片	黒曜石(金本津留)	2.20	0.90	1.55	2.50									
745	C7 XI	3037	細石片	黒曜石(金本津留)	1.75	1.60	1.15	3.30									
746	C6 XI	3676	細石片	黒曜石(金本津留)	1.90	1.10	2.30	4.50									
747	C6 XI	3573	細石片	頁岩(柱質)	2.05	1.35	2.05	5.30									
748	C6 XI	SA47	細石片	黒曜石(三船)	1.75	1.40	1.00	2.40									
749	B6 XI	3642	細石片	黒曜石(金本津留)	1.75	1.05	1.05	2.10									
750	C6 XI	SA47-1	両面加工石器	黒曜石(金本津留)	1.60	1.00	0.30	0.40									
751	C6 XI	3555	楔形石器	黒曜石(金本津留)	1.90	1.80	0.60	1.80									
752	C7 XI	3038	先端器	頁岩(柱質)	7.80	1.70	0.90	9.70									
753	B6 XI	3620	先端器	頁岩(柱質)	2.90	2.40	0.90	3.60									
754	B6 XI	3627	石鏃	黒曜石(金本津留)	1.30	1.30	0.30	0.30									
755	C6 XI	3785	石鏃	黒曜石(金本津留)	1.40	1.40	0.40	0.60									
756	C5 XI	SC93	石鏃	黒曜石(金本津留)	1.25	1.40	0.25	0.30									
757	B6 XI	3776	石鏃	黒曜石(金本津留)	1.80	1.80	0.40	1.00									
758	C6 XI	3875	石鏃	黒曜石(金本津留)	3.00	2.90	0.70	2.80									
759	B6 XI	3586	石鏃	黒曜石(金本津留)	2.70	1.90	0.80	2.40									
760	B6 XI	3731	石鏃	黒曜石(上牛轟)	1.70	2.60	0.50	1.20									
761	B5 XI	3668	石鏃	黒曜石(金本津留)	2.20	1.50	0.40	1.00									
762	E5 XI	3321	スタレイバー	流紋岩	3.40	1.90	0.80	4.80									
763	C6 XI	3568	スタレイバー	流紋岩	2.45	2.25	0.90	6.00									
764	B6 XI	3628	スタレイバー	黒曜石(金本津留)	2.00	2.60	0.80	4.60									

凡例

※塗膜 / グリッド / 帯 / 取り上げ番号

参考資料



SA17出土石器製品 ※取り上げ前に紛失

2cm

第8表 石器計測表(2)

第四章 自然科学分析の結果

第1節 樹種同定

目的と対象試料 炭化材の樹種を同定することで、木材の利用状況や流通を探る手がかりを得るため、縄文時代の集石遺構 (S15) や堅穴建物跡内の炉の燃料材、および土坑内の用途不明木材の合計9点 (No.1~9) について同定した。

方法 試料を洗浄して付着した異物を除去、試料を割折して、木材の基本的三断面 (樹断: 年輪、放射断面: 年目、接線断面: 板目) を作成、落射顕微鏡 (40~1000倍) で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定する方法をとっている。

同定結果 コナラ属アカガシ亜属4、シ属1、アワブキ属1、ヒサカキ属1、タイミンチバナ1、ハノキ属1が同定された(第9表)。

所見 コナラ属アカガシ亜属は、硬質な材で建築材や農耕具などに用いられる。シ属は、耐朽・保存性がやや低い建築材や器具などに用いられ、九州では古くから多用される。アワブキ属は、強さ中庸で杭や工具柄などの棒状木製品への利用が多く、比較的大きな材が得られることから建築部材に利用されることもある。ヒサカキ属は、強さ中庸で杭や農具柄などの棒状木製品に用いられることが多い。

タイミンチバナは、重硬な材で耐朽・保存性が高く、樹皮は染料として有用である。ハノキ属は、やや硬硬、比較的強靱で弾性に富み、工具の柄等の器具や小細工物などに利用される。ハノキ属の灰は染料としても有用である。燃料材 (薪炭材) としての利用では、コナラ属アカガシ亜属属火力が強くて火持ちが良く、現代でも備長炭として利用されている。シ属は、身近に自生する樹木で伐採しても更新が早く、火力が強靱性質からよく利用されている。

タイミンチバナは、神縄では薪炭材として一級の材とされる。

いずれの樹種も、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能と考えられ、これらの多様な樹木が建築材、木製品、燃料材などとして利用されていたと推定される。

第2節 放射性炭素年代測定

目的と対象試料 遺構や土器それ自体の年代を決定する際の参考とするため、縄文時代の堅穴建物跡や土坑および集石遺構から出土した炭化材 (No.10~No.20)、土器付着炭化物 (外面: No.21~No.28) の計19点 (第10表) について、加速器質量分析法 (AMS) によって得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (¹⁴C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。

測定結果 最も古い年代値を示すのはNo.13の9420±30年BP (2σの暦年代でBC 8781~8626年)、その次に古いのはNo.20の8425±30年BP (BC 7572~7468年) であり、新しい年代値を示すのはNo.10の1070±20年BP (AD 900~922, 948~1019年) である (第10表)。

その他の試料のうち、No.11, No.12, No.15, No.17~No.19, No.22, No.25, No.26, No.28の10点は、年代値

が3875±20年BP、3865±25年BP、3875±25年BP、3915±25年BP、3920±25年BP、3900±20年BP、3965±25年BP、3850±25年BP、3880±25年BP、3855±25年BPと比較的近く、暦年代がBC 2450~2300年前後の範囲で重複している。

また、No.14, No.16, No.21, No.23の4点は、年代値が4075±25年BP、4120±25年BP、4065±25年BP、4075±25年BPと比較的近く、暦年代がBC 2850~2500年前後の範囲で重複している。さらにNo.24とNo.27の2点は、年代値が3790±25年BP、3735±25年BPと近く、暦年代がBC 2200~2100年前後の範囲で重複している。

第3節 植物珪酸体分析

目的 小泊遺跡では、縄文時代 (草創期、早期、中期~晩期) および古代~中世の遺構や遺物が検出されており、当時の周囲の植生や環境および農耕等に関する情報を得る目的で植物珪酸体分析を行った。

対象試料 B区北側西壁の第1層 (現表土) から第XV層 (シラス層) までの層準から採取された計44点である (第4写真真図版16)。試料は遺跡調査の担当者によって採取された。なお、テフラ (火山灰) については層相や堆積状況などから判断されたものであり、理化学分析による同定は行われていない。

分析方法 植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原1976) を用いて行った。

分析結果 検出された植物珪酸体の分類群や植物珪酸体の検出状況は第10表・写真真図版16のとおりである。

推定される植生と環境 始良入戸火砕流堆積物 (A-Ito, 約2.9万年前: シラス層) 上部の第XV層では、植物珪酸体がほとんど検出されなことから植生や環境の推定は困難であるが、当時は部分的に少量ながらススキ属やウシクサ族 (チガヤ属など) などのイネ科草本類が生育し、周辺には何らかの樹木が生育していた可能性が考えられる。

植物珪酸体が検出されない原因としては、1) 植物珪酸体を形成する植物群 (イネ科、カヤツリグサ科、ブナ科、マツ科など) の生育に適さない環境であったこと、2) 土層の堆積速度が速かったこと、3) 水流の影響で粒径による淘汰・選別を受けたこと、4) 風化作用などによって植物珪酸体が分解・消失したことなどが考えられるが、ここでは土層の堆積状況から1) や2) の要因が大きいと考えられる。

第XIV層の堆積当時は、少量ながらススキ属、ウシクサ族 (チガヤ属など)、キビ族、メダケ属 (ネザサ節)、ササ属 (チマキザサ節やミヤコザサ節) などが生育するイネ科植生であったと考えられ、遺跡周辺には何らかの樹木が生育していたと推定される。その後、第XIII層から第XII層にかけては、ササ属 (おもにミヤコザサ節) などの笹類が増

加して繁茂するような状況になっていたと考えられる。

タケ亜科のうち、メダケ属は温暖、ササ属は寒冷な気候の指標とされており、メダケ率（両者の推定生産量の比率）の変遷は、地球規模の水期-間氷期サイクルの変動と一致することが知られている（杉山 2001 ほか）。また、ササ属のうちミヤコザサ節は冬季の乾燥に適應しており太平洋側の積雪の少ないところに分布しているが、チマキザサ節やチシマザサ節は冬季の乾燥に弱く日本海側の多雪地帯に分布している（室井 1960、鈴木 1996）。第Ⅷ層から第Ⅸ層にかけては、ササ属ミヤコザサ節が優勢であることから、当時は冷涼-寒冷で積雪（降水量）の少ない比較的乾燥した気候環境であったと推定される。

ササ属などの笹類は常緑であることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカ類などの草食動物の重要な食物となっている（高槻 1992）。遺跡周辺にこれらの笹類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考えると重要と考えられる。

縄文時代草創期の第Ⅷ層から桜島薩摩テフラ（Sz-S、約 12,800 年前）混の第Ⅷ層にかけては、遺跡周辺でクスノキ科やイヌノキ属などの照葉樹（常緑広葉樹）が見られるようになったと考えられる。植物珪酸体分析によるこれまでの研究では、九州南部における照葉樹林の出現は、薩摩半島の沿岸部における Sz-S 下位のクスノキ科が先駆的とされているが（杉山 1999 ほか）、内陸部に位置する本遺跡で Sz-S 下位からクスノキ科やイヌノキ属が検出されたことは、照葉樹林の分布拡大の様相を解明するうえで重要な知見と考えられる。また、同層群ではササ属のうちチマキザサ節型が優勢となっていたことから、この頃には相対的に積雪量（降水量）が増加していた可能性が考えられる。福井県水月湖における花粉分析によると、約 16,500 年前（放射性炭素年代では 13,540 ± 105 年 BP）頃からブナ属の増加が認められ、日本海側を中心に多雪化したことが指摘されている（安田 2004）。第Ⅸ層から第Ⅹ層にかけての植生変化は、晩氷期における広域的な環境変化（温暖・湿潤化）に対応している可能性が考えられる。

縄文時代早期の第Ⅹ層から桜島 11 テフラ（Sz-11、約 8,000 年前）混の第Ⅹ層下部にかけては、ススキ属やウシクサ族（チガヤ属など）をはじめ、ササ属やキビ族なども生育する草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属などの樹木（照葉樹）が生育していたと推定される。ススキ属やチガヤ属は日当たりの悪い林床では生育が困難であり、これらの草原が維持されるためには定期的な刈り取りや火入れ（焼き払い）が必要とされている（堀田 1991、近藤、1995）。このことから、当時は何らかの目的で火入れなど人間による植生干渉が行われていたと考えられ、草原的な植生環境下で土壌中に多量の有機物が供給されて、炭素含量の高い黒色土壌（黒ボク土）が形成されたと推定される（杉山ほか 2002）。

鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約 7,300 年前）直下のⅧ層上部の時期は、遺跡周辺にカシ類（アカガシ亜属）、シ

イ属、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと考えられ、部分的にススキ属やウシクサ族などが生育する草原的なところも見られと推定される。今回の分析では、気候温暖化が進んだ後氷期（縄文時代早期-前期）にもなっても、ササ属からメダケ属への植生変遷が認められないのが特徴的である。ササ属は森林の林床でも生育が可能であるが、メダケ属は日当たりの悪い林床では生育が困難なので、南九州など森林植生が早くから分布拡大した地域では、ササ属からメダケ属への植生変遷が遅れた場合もある（杉山 2009）。

その後、K-Ah（第Ⅷ層）の堆積によって当時の植生は一時的に大きな影響を受けたと考えられるが、K-Ah 直上の第Ⅵ層の時期には第Ⅷ層上部とおおむね同様の植生が再生していたと推定される。このように、鬼界アカホヤ噴火に伴う幸屋火砕流（K-Ky）が及ばなかった鹿児島県中部以北では、照葉樹林が絶えるほどの影響を受けなかったと考えられ、K-Ah 直上で照葉樹林が分布拡大したところも見られたと推定される（杉山 2002）。このような照葉樹林の回復と拡大は、現在よりも平均気温が約 2°C 前後高かったとされる当時の高温・多湿な気候環境が影響したと考えられる。

霧島御池テフラ（Kr-M、約 4,600 年前）混の第Ⅴ層から縄文時代中・後期の第Ⅲ層にかけては、遺跡周辺にシイ属、カシ類、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと考えられ、部分的にススキ属やウシクサ族、キビ族、メダケ属（おもにネザサ節）などが生育する草原的なところも見られたと推定される。

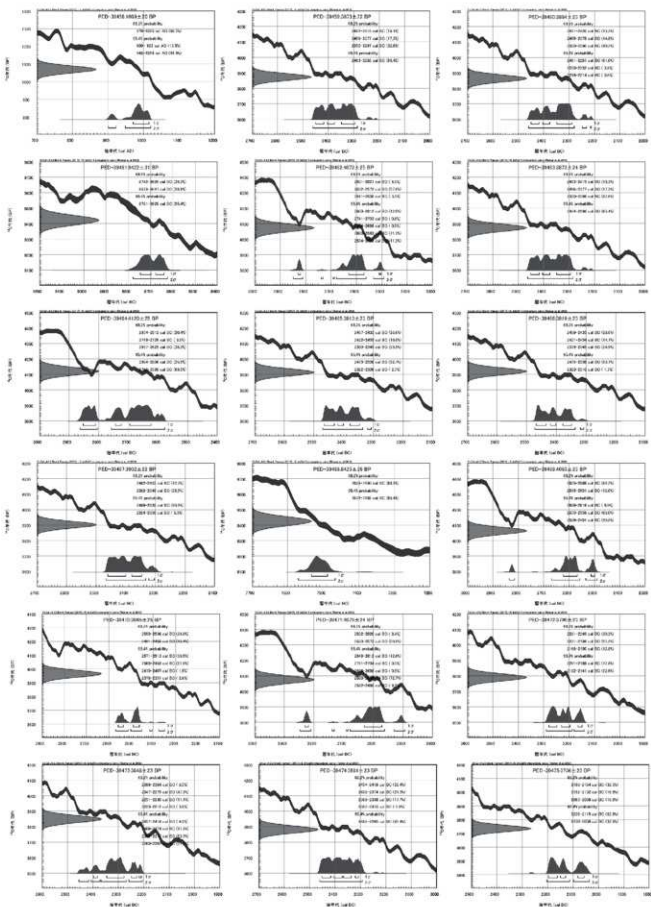
第Ⅱ層から現表土の第Ⅰ層にかけては、ヤブツル量ながらイネが検出されることから、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと考えられる。遺跡の立地や周辺の植生などから、ここで行われた稲作は奥作の系統（隠稲）であったと推定される。また、周辺にはメダケ属（おもにネザサ節）をはじめ、ススキ属やウシクサ族、シノ属、キビ族、マダケ属などが生育し、遺跡周辺にはシイ属、カシ類、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用等の利用価値が高いが、植物珪酸体分析でマダケ属が確認されるのはおおむね中世以降であり、一般的に見られるようになるのは近世以降である。

文献

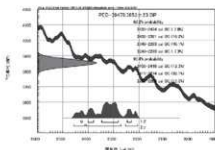
【掘発掘】

- 伊東雄夫・山田昌久（2012）木の考古学。出土土製品用データベース。海書社、449p。
島地 謙・佐伯 清ほか（1985）木材の構造。文芸堂出版、290p。
島地 謙・伊東雄夫（1988）日本の遺跡出土土製品見聞録。雄山閣、296p。
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史。植生史研究特別1号。植生史研究会、242p。
【放射性炭素年代測定】

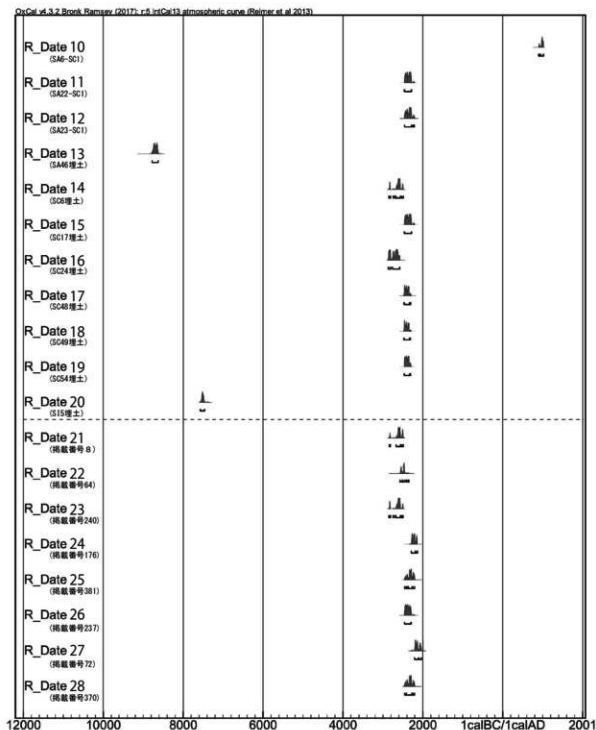
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史学会の「¹⁴C年代編纂委員会編「日本先史時代の14C年代」。日本第四紀学会、p.3-20。
中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代校正。環境考古学マニアル、同成社、p.301-322。
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
Paula J Reimer et al., (2013) IntCal 13 and Marine 13



第78-1図 曆年較正結果(1)



第78-2図 暦年較正結果(2)



第79図 暦年較正年代マルチプロット図

第4節 X線分析

小迫遺跡の遺物整理を進めるにあたり、土器に付着した赤色物質の成分分析、および黒曜石の産地同定を目的としてX線顕微鏡による蛍光X線分析、白色物質については物質の種別特定を目的としてX線回折測定を実施した。これらの分析は、県工業技術センターにおいて同センター材料開発部の協力により実施した。

(1) 赤色物質

目的 小迫遺跡の縄文時代後期の土器には赤色物質の付着するものが複数検出されており、蛍光X線による成分分析を実施した。縄文時代の考古遺物に付着する赤色顔料は一般に、鉄成分由来のベンガラが知られている。このため、赤色物質に鉄成分が濃集することや鉛や水銀など鉄以外の赤色を呈する元素の有無の確認を行った。

測定方法 宮崎県工業技術センターのHORIBAのX線分析顕微鏡 XGT-7200 を用いて実施した。本装置は、遺物試料を直接試料台上載せて非破壊で分析を行うことが可能である。X線の照射径は100 μm (0.1 mm) とし、ターゲットである赤色物質を狙って分析を行った。X線の測定条件はXGT 径100 μm (0.1 mm)、X線管電圧50kV、電流1000mA、プローブ内真空、収集時間100秒である。

対象資料 赤色物質の付着が認められる破片は、報告書番号84・448・453・474・485の5点である。そのうち試料は、大型の縄文土器底部(報告書番号84)である。

この土器は10号壱穴建物跡(SA10)出土で、直径約9cmの平底を呈し、表面はナデ仕上げされている。赤色物質は底部内面に付着している。機器の特性で凹部に接近してX線を照射することは出来ないが、接合面の小片に照射することが可能であった。また、一般的な土器の鉄成分含有量が比較資料(報告書番号130同一個体)として測定した。

分析結果 分析結果を第12表に示す。表の数値は酸化物での質量濃度%である。グラフは赤色物質付着土器のX線強度(cps/mA)である。表では比較資料の土器にも鉄成分が含まれることが見て取れるが、赤色物質では、4倍程度の質量濃度%を示し、X線強度では、鉄成分が顕著に強い。鉛、水銀などの成分は検出されなかった。したがって、赤色物質はベンガラと考えられる。

第12表 成分分析の比較

(2) 白色物質

縄文土器深鉢の底部底面に付着した白色物質に対する分析の結果については、既に公表済である(赤崎2020)。本頁ではその概略について記す。

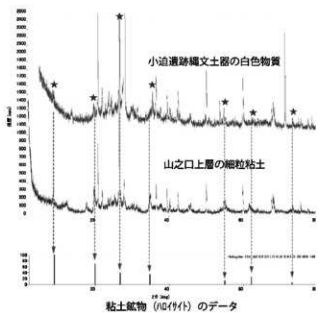
目的 小迫遺跡の縄文時代中期から後期の土器底部に付着した白色物質の蛍光X線による成分分析を実施したところ、主にケイ素やアルミニウムを主体とすることが判明し

た。蛍光X線分析では、含有する成分元素を検出することは出来るが物質名は同定できない。ケイ素やアルミニウムを主体とする鉱物は粘土鉱物や造岩鉱物のあらゆるものが候補に挙げられる。微量成分として検出されたリン、亜鉛、マンガンは、白色鉱物を構成する元素なのか、たまたま濃集しているだけなのか検討する必要がある。このためには、X線回折を実施して白色物質の結晶構造をつかみ、鉱物名を確定した。

測定方法 宮崎県工業技術センターのX線回折測定装置を用いて、粉末法による測定を行った。測定条件は、X線出力40 kV、150 mA、スキャン範囲 $5^{\circ} \sim 80^{\circ}$ である。

対象資料 測定サンプルは、白色物質が比較的多く付着している大型の土器底部から見た目が変わらない程度に耳かき1杯程度を採取した。この微量サンプルを、ガラス試料板に平滑に充填して測定を行った。

分析結果 X線回折測定は、試料にX線を照射して結晶構造に関する情報を取得することができ、物質毎にX線の回折角度や強度が異なることを利用してデータベースの回折パターンと比較し、物質の同定を行う。小迫遺跡の土器から採集した白色物質の回折パターンの判定作業をするにあたり、まず、蛍光X線分析で得られた元素情報からアルミニウムを主体とする粘土鉱物ではないかと推定し、主要な粘土鉱物であるリザーダイト、パーチュレン、アメサイト、ネボアイト、ケリアイト、プロントリアイト、カオルナイト、ディカイト、ナクライト、ハロイサイト、オーディナイトなどと比較した。また、工業技術センターには、平成13年6月11日に都城市山之口町内で採取された土壌サンプルとそれぞれを1000℃、1時間焼成したサンプルが保管されていた。これらのうち山之口上層粘土(良質)と記載された試料と、これを焼成した試料についての比較測定もあわせて実施した。山之口上層の細粒粘土のX線回折パターンに、石英、長石と粘土鉱物の10 Åハロイサイ



第80図 白色物質と粘土鉱物のX線強度比較

トデータで検証したところ、1次鉱物の石英、長石は明瞭に、2次鉱物の10 Åハロイサイトは低いピークながら、7次のピークすべてが合致した。細粒粘土を1000°C1時間焼成した試料は、すべてのサンプルの中で最も白色が強い。この焼成試料のX線回折パターンでは、石英や長石のピークは明瞭に見られるものの、粘土鉱物10 Åハロイサイトに見られる8.8°のピーク等が確認できず、1000°Cという高温による焼成で粘土鉱物の変質が進んでいるようである。山之口上層粘土の回折パターンと小迫遺跡の縄文土器底部に付着する白色物質の回折パターンの縦軸を拡大して10 Åハロイサイトの標準データと比較した(図80)。これを見ると、縄文土器の白色物質と山之口町採取の粘土が類似の回折パターンを示し、粘土鉱物の加水ハロイサイト(10 Åハロイサイト)を含む物質であることが推定できる。

(3) 黒曜石

目的 小迫遺跡の縄文時代の遺物には、約1300点を超える黒曜石が含まれている。この全点について成分分析を実施して、分類することは物理的に不可能である。おもに、双眼実体顕微鏡の透過光による内部の包有物(晶子)や微細な流理構造、発泡による気泡空隙などについて、標準試料との比較検討により分類した。小迫遺跡では、透過光観察の様子が類似する2つのグループについて、包有物の有無で分類している。今回は、肉眼分類の精度推定のために、サンプリング的にX線顕微鏡により成分分析を実施し、産地推定のためのクロスチェックを行った。

測定方法 宮崎県工業技術センターのHORIBAのX線分析顕微鏡XGT-2200を用いて非破壊で測定した。X線の照射径は100 μm(0.1 mm)とし、X線の測定条件はXGT径100 μm(0.1 mm)、X線管電圧50kV、電流1000mA、プローブ内真空、収集時間100秒である。

対象資料 双眼実体顕微鏡の透過光観察で、桑木津留産、三船産の黒曜石の特徴を示すと判断した試料から、Ⅲ・Ⅳ層の桑木津留1点、三船産2点とⅪ層の桑木津留産2点、三船産1点(第13表)をそれぞれサンプリング的に抽出し、X線顕微鏡で成分分析を行った。また、九州内の各黒曜石産地の比較試料は2020年7月に各地で採集した試料を複数測定した。

分析結果 小迫遺跡の約1300点を超える黒曜石の出土層準は、Ⅲ・Ⅳ層、Ⅸ層、Ⅺ層の3層準である。黒曜石の分類は、おもに双眼実体顕微鏡の透過光による観察で行った。なかでも桑木津留産、三船産の黒曜石の特徴を示すと判断した試料が多数見られた。そのボリュームは層準ごとに差異が見られ、時期による流通経路の変遷を知る手がかりとなりそうである。2つの産地の黒曜石は透過光でどちらも、茶褐色の透き通ったガラス質の基質をもち、細片になると判別が難しい。実際に鹿児島県の三船海岸と宮崎県えびの市と鹿児島県伊佐市にまたがる桑木津留・上青木地区産の黒曜石を多数比較したところ、三船海岸の黒曜石では細片になっても多くの試料で棒状の晶子を確認することができた(第81図)。肉眼的にこれに類似するのは同じく伊佐市の日東・五女木地区産の黒曜石であるが、これらには顆粒状の晶子を伴うことが多い。また近隣の遺跡では佐賀県の腰岳産黒曜石も多産している。そこで、三船産4点、桑木津留産4点、上青木産2点、腰岳産5点、日東産2点、五女木産4点(第13表)を比較試料として分析した。データは、K、Mn、Feと微量成分Rb、Sr、Y、ZrについてX線強度(cps/mA)を測定し、Sr分率とRb分率のダイアグラムにプロットして検討した(図82)。

Sr分率のダイアグラムでは、桑木津留・上青木系と日東・五女木系がオーバーラップする部分があるが、Rb分率では、両系系統は明瞭に分離した。また、いずれのダイアグラムでも腰岳系は他の黒曜石とは異なるプロットとなった。小迫遺跡の6試料については、Ⅲ・Ⅳ層、Ⅺ層いずれの層準の黒曜石でも、双眼実体顕微鏡での晶子観察によって分類した結果と、蛍光X線成分分析による結果が一致していた。このことから、肉眼同定の精度は、一定程度保証できそうである。

参考文献

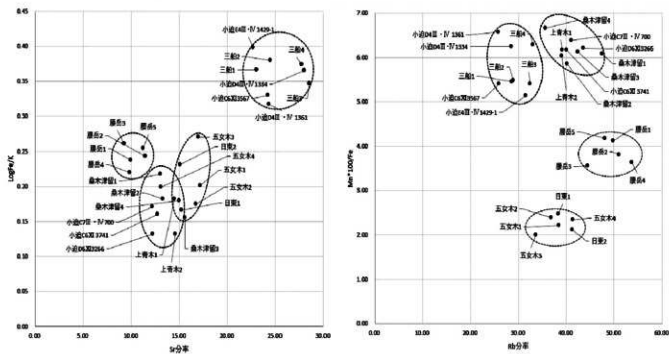
- 赤崎広志 2020 「縄文土器の底部に付着する白色物質」『宮崎県縄文文化財センター研究紀要』5 宮崎県縄文文化財センター
望月明彦 1997 「蛍光X線分析による中部・関東地方の黒曜石産地の判別」『X線分析の進歩』28 アグネ技術センター



第81図 桑木津留産(左)と三船産(右)黒曜石の双眼実体顕微鏡(画像の横軸約25mm) ※三船産には棒状晶子が散在する

肉眼判定	分析試料名	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Sr 分率	LogFe/K	Rb 分率	Mw100/Fe
桑木津留	小道 C7 III - IV 700	122.84	11.61	181.88	10.00	2.97	1.83	9.54	12.20	0.17	41.08	6.38
桑木津留	小道 C6 XI 3741	118.64	10.60	171.62	8.79	2.79	2.45	7.87	12.74	0.16	40.14	6.18
桑木津留	小道 D6 XI 3266	129.23	10.89	175.32	9.57	2.69	2.92	6.80	12.24	0.13	43.54	6.21
三船	小道 E4 III - IV 1429-1	63.87	8.22	159.83	6.07	4.36	1.00	7.78	22.70	0.40	31.60	5.14
三船	小道 D4 III - IV 1334	87.38	12.64	202.53	6.87	6.74	1.41	9.07	27.98	0.37	28.52	6.24
三船	小道 D4 III - IV 1361	102.13	13.93	212.04	7.81	7.35	2.87	12.17	24.34	0.32	25.86	6.57
三船	小道 C6 XI 3567	92.94	10.73	198.60	5.68	5.30	1.23	9.65	24.25	0.33	25.98	5.40
比較試料	三船 1	97.00	12.31	225.41	6.62	5.34	1.78	9.40	23.08	0.37	28.61	5.46
"	三船 2	89.73	11.80	215.22	6.20	5.25	1.50	8.49	24.49	0.38	28.92	5.48
"	三船 3	88.58	10.64	196.83	6.48	5.68	0.38	7.39	28.50	0.35	32.51	5.41
"	三船 4	102.89	15.29	243.47	8.69	7.29	1.27	9.04	27.73	0.37	33.05	6.28
"	桑木津留 1	82.41	8.26	135.86	8.17	2.24	1.58	5.20	13.03	0.22	47.53	6.08
"	桑木津留 2	108.42	9.65	164.92	8.65	2.86	2.29	7.73	13.28	0.18	40.18	5.85
"	桑木津留 3	151.85	13.31	217.36	12.81	4.71	3.26	9.40	15.61	0.16	42.45	6.12
"	桑木津留 4	125.59	12.65	189.93	9.60	4.05	2.33	11.00	15.01	0.18	35.58	6.66
"	上青木 1	132.58	12.44	201.63	10.39	3.84	2.65	9.61	14.50	0.18	39.22	6.17
"	上青木 2	141.24	11.56	191.46	9.91	3.69	2.80	8.95	14.56	0.13	39.09	6.04
"	腰括 1	118.64	8.46	205.01	9.39	1.87	1.88	5.69	9.93	0.24	49.87	4.13
"	腰括 2	123.63	8.23	216.25	11.11	2.50	2.09	6.08	11.48	0.24	51.01	3.81
"	腰括 3	133.98	8.70	244.24	10.71	2.23	3.03	8.14	9.25	0.26	44.42	3.56
"	腰括 4	121.44	7.31	201.36	11.83	2.16	0.98	7.05	9.81	0.22	53.72	3.63
"	腰括 5	132.23	9.90	237.52	11.08	2.59	1.21	8.16	11.24	0.25	48.09	4.17
"	日東 1	160.29	5.82	234.82	12.83	5.09	2.71	12.80	15.23	0.18	35.58	2.48
"	日東 2	152.56	5.48	259.80	16.19	5.91	2.06	15.05	15.07	0.23	41.29	2.11
"	五女木 1	159.48	5.61	253.52	11.38	5.09	2.73	10.42	17.18	0.20	38.42	2.21
"	五女木 2	158.81	5.67	237.34	11.90	5.40	1.84	13.20	16.70	0.17	36.80	2.39
"	五女木 3	163.21	6.10	304.31	7.34	3.70	1.65	9.12	16.96	0.27	33.65	2.00
"	五女木 4	161.62	5.98	255.54	12.46	3.95	1.73	11.98	13.11	0.20	41.37	2.34

第 13 表 黒曜石の成分分析結果 ※数値はX線強度 (cps/mA)



第 82 図 黒曜石の Sr・Rb 分率の散布図

第V章 総括

第1節 後期旧石器～縄文時代草創期（第X層出土遺物）

縄文時代草創期以前と早期を区分する松島薩摩テフラ（第X層）よりも下位に堆積する、にぶい褐色粘質土（第XI層）からは、施文等のない無文土器（28類）と隆帯文土器（29類）のほか、細石刃・細石刃核、尖頭器、打製石鏃・スクレイパー等が出土した。これらの遺物群は、特にB6/C6Gr.に集中的な平面分布を示すが、その垂直分布は層厚約0.1～0.3mとそれほど厚くはない堆積層であるためか、層位的に明確に分離できず、むしろ混在した出土状況であった。

本節では、各遺物の型式学的特徴に着点を置き、時間軸上の位置付けを試みることで、まとめとしておきたい。

縄文土器 29類土器（隆帯文土器）と分類した一群は、隆帯文土の付加文様が口頸部の押玉や爪等の刻目である。幅狭から微隆起状（細・粘土組）の隆帯文で、その隆帯文間の間隔を広めであること、「貝殻押玉文」（秋成2014）ではないことから、宮崎市清武上猪ノ原遺跡における「清武上猪ノ原1期」（秋成2019）に対応関係のある土器群であり、南部九州全体を敷衍した児玉健一郎氏の編年大系に照らせば「隆帯（線）Ⅰ期」（児玉2008）に相当するものと考えられる。

近年、小泊遺跡の所在する都城盆地では、縄文時代草創期土器の出土例が増えてきており、都城市王子山遺跡ではI～VI類に分別される土器群が出土した（都城市教委2011）。このうちI類は本遺跡例と類似する土器群だが、太い隆帯文が間隔を密にして数条貼り付けられる「押玉手法」タイプであるため、児玉五や今村結記氏（今村2018）らの編年観に倣うと、本遺跡例は型式学的にはより古いタイプとなる。よって、29類土器は、都城盆地の隆帯文土器としては最古相の段階、すなわち草創期でも前半頃に位置づけられよう。

一方、28類土器（無文土器）も松島薩摩テフラ層より下位にて出土した点も注目される。文様上の差異が大きく反映される口縁部の出土分布をあらためて見ると、B6Gr.側に29類、C6Gr.側に28類土器が分布しているが、出土状況からの時間軸上の関係性を導きだすことは困難である。もっとも、放射性炭素年代測定が有効な判断材料となるが、残念ながら良好な資料に恵まれなかった。

無文土器の評価については、様々な意見があり一定の見解が得られてはいない現状であるが、松島薩摩テフラ下位や同層準から無文土器が出土する事例等からして単発的な資料と片付けられないという（柴畑2019）。そうした状況において、本遺跡例は新たな出土事例となった。

さて、時期的な位置付けについては、松島薩摩テフラ下位や同層準から出土した鹿児島県建昌城跡・西多羅ヶ追遺跡や、宮崎県上猪ノ原遺跡第5地区土坑（SC313）の放射性炭素年代測定結果（秋成2016）から鑑みると、現時点では、草創期でも後半段階にあたるものとしておきたい。

なお、本遺跡においては、「南九州型爪形土器」（秋成2019）や「爪形土器」は出土していない点に注意される。

石器石材 砂岩・頁岩といった遺跡周辺で採取可能なものと、流紋岩や黒曜石等といった遠隔地からの入手が必要なものがある。流紋岩は五ヶ瀬川流域、黒曜石（上牛鼻・桑木津留産・三船産）は人吉・えびの盆地から錦江湾を結ぶ地域の産出である。すなわち、南九州産の石材のみを石器素材とし、特に、黒曜石では桑木津留産の比重の高さが特徴的である。

石器類 細石刃核は、黒曜石（桑木津留産・三船産・上牛鼻産）と頁岩製のものがあり、桑木津留産が主体である。上牛鼻産（741）は整った円錐形、桑木津留産・三船産は角柱形で小礫を素材にして原礫面や風化面を残すものも多く、打面展開を行いながら細石刃を獲得するもので、頁岩製（747）も同様である。獲得可能な細石刃数も量的に限られる小礫から効率よく剥離するために、表皮部分の剥離調整の省略と剥離可能部分を選び出して細石刃を極力効率よく剥ぎ取るものがある。これらの細石刃核は「野岳・休場型」（鈴木1971）の範疇に含まれ、宮崎県域における後期旧石器の編年上では、宮崎10段階編年（宮崎県旧石器文化研究会2005）の第10段階に位置づけられる。細石刃石器群の終末段階となる。槍先形尖頭器は、柳葉形（752）と幅広形（753）がある。752は両面調整にて押玉剥離が施された頁岩製で、編年上では、松本茂氏の第二期【縄紋草創期段階】（松本2003b）に位置づけられる。なお、局部磨製石斧や丸ノミ形石斧といった石斧類は、今回の調査では出土していない。

打製石鏃は、桑木津留産黒曜石製が主体であり、出現期石鏃の可能性が指摘される「長身二等辺三角形石鏃」（馬籠2018）も出土した（761）。

スクレイパー類は、流紋岩・桑木津留産黒曜石製があり、小型品には細長と幅広いし半円形のタイプがある。特に黒曜石製の円形（幅広）搔器は、縄文時代草創期でも寒冷化が始まる「ヤンガー・ドリアス期」の初め頃出現（萩原2020）したとされ、764・765に相当するものと考えられる。

楕円形で扁平な磨石や棒状の敲石、平滑な擦砥が残る扁平な石皿は、植物質食料の加工具であった可能性がある。

遺物群の変遷 上記のように時期的な位置付けについて検討を加えてきたが、遺物組成や遺物群の前後関係等については未だ不明な点が多い。積極的に関解するならば、細石刃石器群（後期旧石器時代終末）→隆帯文土器・尖頭器？・打製石鏃（縄文時代草創期前半）→無文土器・打製石鏃・尖頭器？・黒曜石製の小型円形スクレイパー（縄文時代草創期後半）という変遷が追えるものと考えられる。すなわち、後期旧石器時代から縄文時代草創期にかけての過渡的な様相、移行期の土器・石器相を示す遺物群と評価される。

本遺跡に隣接する都城市川原谷出水遺跡では松島薩摩テフラ下位層より隆帯文土器や石核が出土しており、大隅半島北部地域でも縄文時代草創期の遺構や遺物の検出例が増加している。今後とも、都城盆地部～大隅半島北部地域における当該期の諸相についての研究深化が期待される。

第2節 縄文時代早期（第IX層出土遺物と遺構）

第X層上面にて、堅穴建物跡6軒、土坑15基、陥し穴状遺構7基、集石遺構8基と散礫11箇所、小穴（ピット）群が検出された。これらの遺構および包含層（第IX層）より、縄文土器（18～26類）と石器類が出土した。

縄文土器 主体となるのは、18類（前平式土器）、19類（加栗山式土器）、20類（吉田式土器）、21類（中平式土器）、22類（下刺峯式土器）、23類（押型文土器）、24類（手向山式土器）である。

18類は、緻密な対応関係は取れないものの、上杉彰紀氏のI～IV式に相当するものと考えられる（上杉2004）。

19類のうち、19-ii-b/c類は、楔形の貼付突帯ではなく、粘土紐をそのまま貼付した施文である。「貼付文を有し2重施文を行わない」（黒川2004）、この一群は、宮崎市田野町札ノ元遺跡2類物品がある（寺師1986）。これは「Ⅷ類土器」と命名した黒川忠広氏は、加栗山式土器の後半から吉田式土器の前半に位置づけられるという（黒川2004）。したがって、19-ii-b/c類も加栗山式土器（19類）から吉田式土器（20類）への移行期における土器群と評価される。さらに黒川氏は、「ⅧノⅧ類土器」と「別府原式土器」（金丸2004）とは同時期とみなされ、南九州貝殻文土器の分布域における地域性の存在を指摘した。本遺跡では、別府原土器の型式として認識可能な口縁部資料はなかったが、仮に存在するのであれば、前平式土器（18類）とした胴部資料中に混在している可能性がある。

21類（中平式土器）とした一群は、マヤ内湾気味の口縁部形態や横方向への貝殻条痕文とナゲ消し調整から、木崎康弘氏の中原V式（木崎1996）に対応するものと考えられる。

23類（押型文土器）は、山下大輔氏による宮崎県域の押型文土器の分類と編年（山下2014）に基づくとして、「南九州押型文土器」に位置づけられる一群である。612は第3段階のVI類、660は第3段階のVI類、665-666は第4段階のX類で、664は第4段階にある。667は「田村式土器」（横手2004）に並行するものであり、山下氏の第4段階にあたる。

24類（手向山式土器）は、横手浩二郎氏の分類と編年（横手1998）に拠れば、611が手向山3式土器、668-669が1式、670-671は3式に相当すると考えられる。

このように、第IX層および遺構出土の縄文土器は、早期前葉の前平式→加栗山式→吉田式土器、早期中葉の下刺峯式土器へと変遷する「貝殻文円筒形土器」と、早期中葉を中心とする「南九州押型文土器」や中原式土器等といった異系列の土器群が存在する。これら土器型式の併存関係を整理した山下大輔氏の試案（山下2014）と照らし合わせると、吉田式土器の次型式である石坂式土器と、石坂式土器に並行・後続する押型文土器の第1・2段階や中原Ⅲ・Ⅳ式は出土せず、下刺峯式土器や中原V式土器の出土量も少ない。一方で、押型文土器の第3・4段階と押型文土器の終末に位置づけられる手向山式土器は比較的多く出土している。

このように、石坂式土器→下刺峯・桑ノ丸式土器（前半段階）の時期、すなわち早期前葉末の後半～中葉の前半段階は土器型式的には空白期になることが読み取れる。

石器石材 第XI層出土石器と同様な傾向であるが、敲石に安山岩が使用されるようになる。姫島産黒曜石（681）や緑色の凝灰岩（686）石礫は、剥片等が伴わない単品での出土であることから、他所からの移入品と考えられる。

石器類 石礫を中心とする石器組成であるが、第XI層と同じく石斧類の出土がない。スクレイパーや磨石、敲石類も出土遺物量の全体から見て相対的に少なく、石礫未製品や二次加工剥片・使用痕剥片といった半製品や代用品な石器の点数が多い傾向がある。そのため、完成品の多くは他所へ持ち出された可能性が考えられる。

遺構の時期と変遷 遺構群の中心となる堅穴建物跡は、遺構内の出土土器の型式から、SA43（18類：前平式※未図化）→SA41・42（19類：加栗山式）→SA46（20類：吉田式）→SA45（23類：押型文土器の第3段階）[山下2014]→SA44（24類：手向山3式）[横手2004]の順に5段階。平地式建物跡については、時期推定の根拠が乏しいが、その性格上、堅穴建物跡群と有難い関係性を有するものと考えられる。

なお、SA46埋土中炭化物のC14年代測定結果（9420±30BP）は、土器編年上では加栗山式土器（桑Ⅲ2015）に並行するもので、同埋土中より19類土器（加栗山式）も出土している。

土坑や集石遺構等についても、SC88以外は縄文土器といった時期推定の手掛かりとなる遺物に乏しく、堅穴建物跡群との時期的・機能的な関係性を読み取るのは困難である。ただし、S15掘り込み中の炭化物のC14年代測定では8425±30BPの結果が得られ、土器編年上では桑ノ丸式土器（桑Ⅲ2015）に並行する。散礫7のように26類土器の時期（平式土器）と考えられる遺構も存在する。従って、集石遺構・散礫は、堅穴建物群とは別期のものがあること、すなわち、居住域（堅穴建物等）を付近に伴わない生業（調理・加工）の場として機能していた時期も存在したといえる。

陥し穴状遺構についても、時期推定が困難なものが多い。このうち、SC83は検出面より上位の土器（26類：平式土器）とSA45との先後関係から、SA45の時期（押型文土器の第3段階：山下2014）よりは新しく、平式土器の時期よりは古い。さらにSA44（手向山3式：横手2004）や遺物包含層の土器型式を鑑みると、SC83は早期中葉の後半段階（押型文土器の第4段階）か、後葉でも前半段階（手向山式と平式土器の間）の時期とみられる。なお、SC83は列状に並ぶ陥し穴状遺構群（SC73・80～83）に含まれることから、SC73・80～82はSC83と同時期の掘削と考えておきたい。

このように、縄文時代早期前葉 [18類期（前平式期）] に集落の形成が始まり、早期後葉 [26類期（平式期）] までの間に居住域や生業の場のない狩猟の場として性格を変貌させつつ移住したとみられる。ただし、集落規模は1土器型式1建物跡という一家族程度の最小単位によるものであり、前葉末～中葉の前半頃は土器型式の欠落、すなわち人間活動の停滞期もある。この事象の理由としては「新統的利用の重複の結果」（上杉2004）とするのが妥当と考えられ、遺跡の所在する都城盆地とその周辺域を地野廻道として、大小集団の移動・回帰が繰り返された結果といえよう。

第3節 縄文時代中～晩期(第Ⅲ・Ⅳ層出土遺物と遺構)

第Ⅴ層上面にて、堅穴建物跡40軒、土坑34基、陥し穴状遺構4基、集石遺構2基および小穴(ピット)群が検出された。これらの遺構および包含層(Ⅲ・Ⅳ層)より、縄文土器(1～17類)と石器類が出土した。

縄文土器 遺物包含層および遺構出土土器で、5類(宮之迫式土器)が最も出土量が多く、次いで1類(春日式土器)と2類(大平式土器)、さらに8類(本野原式土器)が続く。

これら縄文時代中期後葉～後期前葉の土器群は、堅穴建物跡を中核とする集落活動時期に伴うもので、K-Ah(第Ⅷ層)とKr-M(第Ⅴ層)の降灰で遺跡形成が途絶えた後に、再び劣化したことを示す。なお、後期中葉～晩期にかけての土器群(11～15類等)は、各分類ともに少数かつ小破片であり、遺跡形成の停滞期を物語る。

さて、1類(春日式土器)は、春日式土器後半期すなわち轟木ヶ迫・南宮島段階(東1989ほか)に相当する。春日式土器の指標である内湾口縁の退化(直立化)傾向がより顕著となり、刻目突帯の貼り付けや口縁端部に刻目を有するタイプ等、複数の細分型式が派生する。なお、口縁部から底部まで接合できた個体がないため、底部の形態等は判然としない。ただし、SA1～6・10の出土遺物から、底部は網代瓦でなくナデ調整であり、平底とわずかな上げ底なもの1類土器の底部と考えられる。

2類(大平式土器)は、口縁部形態から大きく3つに細分(i～iii類)され、それぞれに2種類の施文(棒状工具・櫛歯状工具)が施される。2-i類土器(掲載番号64・240)についてC14年代測定を行った結果、1類土器(8)とは同時並行か年代的にやや古い値が得られた(第4章)。

一方、鹿児島県下の大平式土器(本書の2-ii類相当)については、中尾田Ⅲ類土器(鹿児島県教委1981)と併行する年代測定値が得られている(川口ら2020)。中尾田Ⅲ類土器は、春日式土器の次段階の土器型式とされるが、春日式土器と同様に複数系譜の土器型式で構成される。三輪英三氏は中尾田Ⅲ類土器を再分類する中で、大平式土器(本書の2-ii・iii類相当)をⅢa-2類とした(三輪1996)。よって、2-ii類は春日式土器の後半段階(轟木ヶ迫・南宮島段階)から中尾田Ⅲ類土器の段階と並行しうである。そうすると、2-i段階は明確なキャリバー状口縁(内湾口縁)であるで型式上の近縁性から春日式土器の後半段階がそれ以前に存在する可能性が出てくる。出土状況にやや難があるが、1類土器が出土するSA6の貼土内に2-i-1類(41)が出土した点は確証となり得る。大平式土器を古・中・新段階に区分した相美伊久雄氏も春日式土器から中尾田Ⅲ類土器と並行させる考え方を提示している(相美2017)。

また、本書の203・302の沈積文は、半截竹管による押し引状となっており、「並木式土器」に通じる施文手法である。なお、中尾田Ⅲ類土器にも「口唇部に粘土紐を歯筒状に貼り付けるもの」(真邊2000 a)があり、本書の1-i類が相当する可能性があるが、中尾田Ⅲ類土器の指標である口縁部の肥厚がみいことから春日式土器の範疇に含めている。

4類は、阿高式土器に相当する。SA23出土(176)は、鋸歯状の突起や凹線文内に刺突文(細凹線)が施されることから荒木隆宏氏の阿高1式に相当するものと考えられる(荒木2008)。滑石の混入は認められず、在地系粘土である。

5類は、宮之迫式土器に相当する。宮之迫式土器は1～4式に細分されるという(金丸2006、真邊2010 a)。破片資料が多いため、各分類型との対応関係の把握は困難であったが、概ね1～4式相当の土器が出土したものと見える。

また、237・370・381のC14年代測定結果は3880±3850±25BPと互いに近似する値が得られており、宮之迫式土器(5類)は大平式土器(2類:64・240)に後続する土器型式であることが追認される。72は3735±25BPの結果が得られた、凹線文が太めの土器で金丸氏の2式に相当する。なお、阿高式土器(4類)とした176のC14年代測定結果は3790±25BPで、5類の測定資料(237・370・381)より若干新しい。今後とも材料数を増やし検討していく必要がある。

371のように底部底面には網代瓦が確認されるため、5類土器には網代瓦が伴うものと考えてよいであろう。

6類は、凹線文・刻目突帯・櫛歯状口縁と内面施文(細凹線文)が特徴的である。この6類は5類と同じ出土分布域に含まれるため、5類の細分型式である可能性が考慮される。

7類は南福寺土器としたものである。この7類は、薩摩半島西部から鹿児島湾岸域では南福寺式と宮之迫式(岩崎氏)が共存する遺跡がみられるという(川口ら2020)。よって、7類は時系列的に5類と併存する関係と考えられる。

8類は本野原式土器としたものである。いわゆる指箱式土器の範疇であり、9類の成川K式土器も同様である。金丸武司氏は、宮之迫式(本書の5類)→本野原式(8類)→成川K式(9類)への変遷過程を示している(金丸2006)。

その他、16類は無文土器としたものであるが、金丸武司氏は、宮之迫式や指箱式土器といった有文土器とセット関係にあると指摘している(金丸2011a・b)。

赤色物質(顔料) 縄文土器陶鉢の底部内面に赤色物質が付着する資料が5点(84・448・453・474・485)あり、84を対象に蛍光X線分析を行った結果、ベンガラであった(第Ⅳ章)。

これらは、底部形態と底面調整(ナデ調整)から春日式土器と考えられ、縄文時代中期後葉頃と位置付けられる。本県域におけるベンガラ使用の最古例は縄文時代草創期の赤彩土器(国富町塚原遺跡)とされている。後続する弥生時代の様相については、谷口めぐみ氏(谷口2012)、古墳時代には戸高真知子氏(戸高1986)の分析が詳しい。

さて、本遺跡出土例は、底部内面に付着するもので、器壁にベトリと張り付く性状である。肉眼観察ではあるが、塗布の状態とは言い難い。また、SA6出土の石器(515・523)は、ベンガラと思しき赤色物質が多孔質部分まで入り込んでいる資料であり、これも春日式土器の時期にあたる。よって、赤色物質(顔料)の付着した縄文土器と破石は、ベンガラを原料を焼成・粉砕した道具である可能性が指摘される。遺跡の南面には湧水と粘土層が発達した地形が広がり、いわゆる「含水酸化鉄」が採取しやすい(101頁下段図)。

白色物質（粘土鉱物） 白色物質が縄文土器の底部底面にて観察される事象については、岡本満子氏（岡本1998）や東和幸氏（東2006 a）らにより注意喚起されてきた。本遺跡でもそうした事例が数多いことから、第III章第4節d）にて個体数や比率、底面調整との関係性等を整理したところである。

理化学的分析については、赤崎広志氏によるSA15とSA17出土（掲載番号102・136）および包含層X（447ほか）の網代痕を有する土器底部を試料とした蛍光X線分析の結果、その由来はアルミニウムを主体とする「細粒な粘土鉱物」（ハロイサイト）で微粒子の焼結等により強く固着したものと考えられており、具体的には「入戸火砕流堆積物」の二次堆積物が有力と結論づけている（赤崎2000）。

また、赤崎氏は、「土器製作過程に微細粒の粘土が底部に網代により押し込まれて付着した可能性は高い」と指摘し、本田道輝氏も「土器製作の際に台から離しやすいうように餅取り粉のような役目」（東2006 a）を想定されている。他方、真邊彩氏は、網代痕は編組製品（編物底）の圧痕であり、編組製品は「土器製作時の敷物（土器製作具）」であるという（真邊2010 b）。そうした網代痕は編組技法や素材形状も観察可能なほどに明確な状態で遺存することは、十分に乾燥した状態で敷物から土器を痕跡を損うことなく、綺麗に取り外されたことを意味する。

上記のような見解に加えて、本遺跡では敷物（網代痕）の有無に関わらず、白色物質の付着率（80%超）が高いことから、地面ないし成形台（敷物）等から取り外しやすいう砂（細粒な粘土鉱物）を「剥離剤」として用いたものと考えられる。これら白色物質の付着する底部の大半は、縄文時代中期後葉～後期前葉（春日式・大平式・宮之迫式）にあたる。

総て、赤崎氏の分析対象は、宮崎県下の縄文遺跡をサンプリング的に抽出したものに拠るにせよ、縄文時代の各時期、さらに地域を越えて白色物質が付着する事例が認められ、それも成分的にも類似することが判明した（赤崎2020）。これらの分析結果は、細粒な粘土鉱物を撒いた上から底部成形を始める行為が、南部九州地域の縄文時代における通的な土器製作技術であった可能性を示唆するものである。無論、灰の付着という可能性（東2006 a）など、様々な視点からの探究と検証が今後とも必要と考えられる。

石器石材 両輝石安山岩や花崗岩、化石を含む砂岩といった都城盆地以外の産出地（大隅半島/錦江湾岸、宮崎海岸）も新たに認められる。ガラス質安山岩については北部九州域に産地が求められる可能性がある。黒曜石では桑木津留産が第VI・IX層に引き続き使用されるが、錦江湾岸の三船産の比重が第VI・IX層と比べて高くなる。上牛鼻産や姫島産黒曜石も入手されるが、腰岳産は皆無である。

石器類 ホルンフェルス製の石斧類が明確となる石器組成である。スクレイパー類は緑色頁岩の不定形剥片を簡易的に二次加工したものが多く、砂岩製など代用的ともいえるスクレイパーの存在も特徴的である。石鏃類は、チャート・石英・ガラス質安山岩・黒曜石製があるが、その石核や剥片類の多さに比べて製品が少ない。

遺構の時期と変遷 第3・4章では、竪穴建物跡や土坑の時期について、遺構の切りあい（前後関係）と出土土器の型式やC14年代測定結果等から検討と推定を試みた（第6表）。本節では、土器型式ごとの遺構の分布状況についてI～V期とそれ以降に区分し、縄文時代中期～後期の集落としての変遷について検討を行うものである（第84図）。

a) 縄文時代中期後葉～末葉

土器編年上、I・II期は縄文時代中期後葉～末葉に位置づけられるもので、時系列的にはI期→II期の順となる。

I期 調査区内で集落形成が始まる段階であり、1類土器（春日式土器）が主体的に出土する遺構群である。調査区の南東側でSA2-6を中心に群生している。SC11・12は時期比定の根拠に乏しいが、SA6に近接した位置関係からI期の遺構である可能性が高い。

II期 2類土器（大平式土器）、特に2-ii・iii類が主体的に出土する遺構群とした。時系列的に併行関係にある3類土器（中尾田皿土器）は客体的なのでII期に含めた。

II期遺構群は、I期遺構群より東側に移動し、竪穴建物跡は調査区の北東～南東方向へ列状に分布する。SC24・25・52等、長方形や円形プランの土坑も伴う。調査区北側（E2・36r、周辺）では2類土器の遺物包含層形成が明確となる。

b) 縄文時代中期末葉～後期前葉（前半期）

5類土器（宮之迫式土器）は、縄文時代中期末葉～後期前葉の土器という（金丸2011b）。時系列的にはIII期～IV期の順となる。調査区内での集落形成が定着化する時期である。

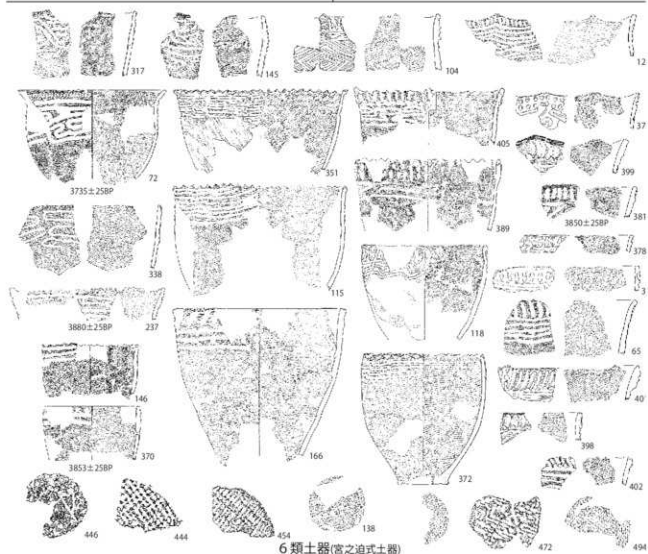
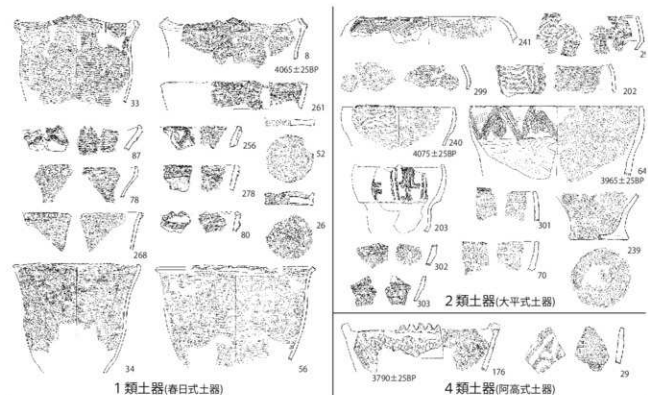
III期 4類（阿高式土器）[III a期]とその影響を受けて成立した5類土器（宮之迫式土器）[III b期]が主体的に出土する遺構群とした。特にIII b期の竪穴建物跡の軒数が最も多く、調査区内の集落としては最盛期にあたる。

III a期の該当遺構はSA23のみであり、その出土土器である4類土器（176）は、5類土器に含めず先行しないC14年代測定結果であるため、III b期に含まれる可能性がある。

III b期遺構群は、II期遺構群よりも北側に移動した分布状況で、谷を挟んだ調査区北側（E2・3/F2・36r.）にもその分布域を拡大する。竪穴建物跡は、列状ないし緩い円弧状に分布し、これに楕円形・円形・長方形・方形プランの土坑群が伴う。集石遺構（SI4・10）もIII b期に伴うものとみられる。

III b期遺構群のうち、SA15～18は比較的早い時期の竪穴建物跡群とみられ、遺構の埋没後に5類土器主体の遺物包含層が形成される。同様に、I期遺構群（SA1～7）周辺でも遺物包含層の形成が進む。

IV期 8類土器（本野原式土器）が主体的に出土する遺構群とした。時期の確実な竪穴建物跡はSA24・25・33の3軒のみであり、調査区内においてはIII b期に比べて大きく減少し、集落形成の停滞期に見える。ただし、IV期の竪穴建物跡群は、III b期遺構群とは位置を違えて分布するので、IV期遺構群から東側の調査区外へ展開していた可能性もある。



第 83 図 縄文時代中～後期の主な土器型式

c) 縄文時代後期前葉（後半期）～中葉

竪穴建物跡の存在は確認されず、土坑のみで構成される。調査区内における集落形成活動の停止期にあたる。

V期 9類土器〔成川式土器（金丸2006）〕や10類土器（市来式土器）が主体的に出土した土坑のうち、V a期〔9類土器：SC21・22〕、V b期〔10類土器：SC3・31〕に細分した。III期の可能性がある（III期？と明示：第84図）とした土坑のうち、V期に掘削されたものも存在する可能性も否定できない。

d) 縄文時代後期後葉～晩期

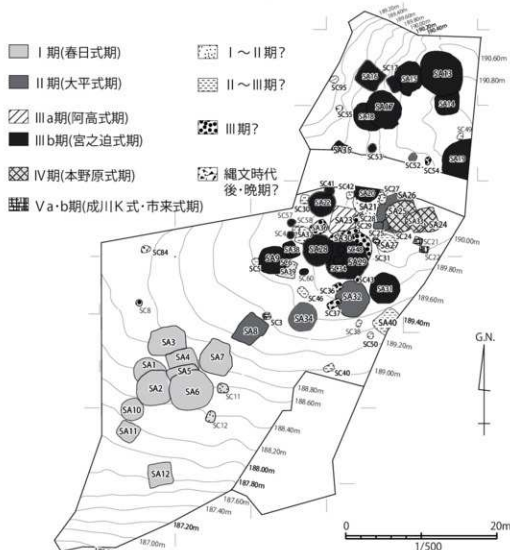
所属時期の明らかな竪穴建物跡や土坑は確認されない。縄文土器そのものは、12類（納骨式土器）、14類（入缶式土器）、15類（黒川式土器）等と晩期段階までの出土が認められる。調査区内での集落形成活動が停止したのちも、断片的な人間活動の痕跡があるが、それ自体は希薄である。

なお、陥し穴状遺構（SC54・55・84・95）については、時期捨推定の確認に乏しいが、平面形が円形プランといった観点から後・晩期段階（松尾2004）となる。より踏み込むならば、SC55の埋土中に1・5類土器を含むことを理由として、V期以降の後期中葉～晩期の間と考えておきたい。

集落構成 I～IV期の遺構群は、竪穴建物跡と土坑等による構成であり縄文時代集落のあり方を示すものである。個々の竪穴建物跡には柱穴や地床戸といった構造上の特徴や、平面形や床面積の差異が認められた〔第3章第4節（3）〕。

I～IV期に属する竪穴建物跡に着目すると、その平面形は、各期ともに円形プランと方形プランがある。例えば、I期遺構群では、方形（SA3→SA4→SA5）→円形（SA6）、円形（SA2）→方形（SA5）/円形（SA6）のように、切りあい関係を重視すれば、円形と方形プランが並立するあり方が読み取れる。なお、III期遺構群では、方形（SA14・15）→円形（SA17）、IV期遺構群では、円形（SA25）→方形（SA24・33）のように、平面プランの変遷を示すものとの理解も可能であるが、検出された竪穴建物跡全体としては円形プランが優勢である。

本遺跡の所在する都城跡地周辺の遺跡に目を向けると、I～III期（縄文時代中期後葉～後期前葉）の竪穴建物跡として、宮崎県都城市柏ノ木遺跡（方形：後期前葉）、上牧第2遺跡（円形：中期末葉～後期初葉）、えびの市上田代遺跡（円形・楕円形・方形・隅丸方形：中期末葉～後期前葉）、日南市南郷町遺跡（方形：中期末葉～後期前葉）、鹿児島県志布志市前谷遺跡（円形・隅丸長方形：中期中葉）、曾於市小迫遺跡（隅丸方形：中期後葉）、



第84図 縄文時代中～後期の遺構変遷図（第Ⅲ・Ⅳ層）

霧島市九日田遺跡(円形・方形:中期末葉)〔以上、九州縄文研究会 2000・2008〕等があり、本遺跡以外にも円形プランと方形プランの併存傾向が読み取れ、当該期の特徴といえる。

また、堅穴建物跡の床面積が 20 ㎡以上のものが、SA6(Ⅰ期)、SA26(Ⅱ期)、SA13・19・29(Ⅲ期)と、Ⅰ～Ⅲ期に少なくとも 1 軒は存在する。すなわち、小・中型規模の堅穴建物跡数軒と、大型の堅穴建物跡 1 軒という組み合わせが見出され、ひいては縄文時代中～後期における集落の構成単位であったとも解釈することが可能である。

まとめ 宮崎県下では縄文時代後期初頭から前葉にかけては、遺跡数が飛躍的に増加する時期(金丸 2011b)という。都城盆地でも顕著な増加傾向が読み取れており(近沢 2015)、その前段階である中期後葉～末葉にあたる遺構や集落の様相、春日式土器や大平式土器といった土器相の一端を窺い知る成果を本遺跡の調査にて得られた。調査事例の増加を踏まえ、より詳細な評価検討を進めていく必要がある。

第 4 節 中世(第Ⅱ層出土遺物と遺構)

第Ⅱ層から古墳時代～中世の遺物と、第Ⅱ層除去後の第Ⅲ・Ⅳ層上面にて中世等の遺構や遺物が検出された。中世に属する遺構としては、土坑 5 基・堅穴状遺構 1 基・道路状遺構 2 条等があり、桜島 3(文明)降下軽石(SZ-3)により埋没するものである。こうした桜島 3(文明)軽石火山灰による埋没遺構については、加藤隆夫氏より溝状遺構や道路状遺構の集成と掘削時期の検討が示されている(加藤 2016)。

本遺跡で検出された道路状遺構(SG1・2)も掘削時期の手掛かりとなる遺物に乏しいが、その下限を 15 世紀前半代(前葉～中葉頃)としておきたい。こうした道路状遺構は、沖積地や台地・丘陵部を直線的・網目の目状に走向する場合(近隣遺跡として都城市大年遺跡・小松尾遺跡・保木島遺跡等)と、低地(谷部)と丘陵部を連絡するもの(椋反遺跡・上高遺跡等)があり、本遺跡の場合はその両者がある。中世期における土地開発や村落形成および経済活動を反映した遺構であると評価されるものである。

結 語

小田遺跡における今回の発掘調査は、遺跡としては初めての大規模な記録保存調査であり、時代の古い順に、後期旧石器時代の終末～縄文時代草創期の遺物群(第Ⅱ層)、縄文時代早期前葉～中葉頃の集落(第Ⅳ層)、縄文時代中期後葉～後期前葉頃の集落(第Ⅲ・Ⅳ層)および中世の遺構群(第Ⅱ層)の存在が明らかとなり、いずれの時代(文化層)の調査も都城盆地、ひいては本県の歴史と文化を明らかにする上で重要な成果が得られた。特に、後期旧石器時代の終末～縄文時代草創期の遺物ならびに縄文時代中期後葉～後期前葉頃の集落を対象とした調査成果は、調査事例の少ない現状においては、貴重な知見を得られたものといえる。

現地調査から報告書作成まで至ることができたのは、数多くの人々によるご協力のおかげである。ここに感謝の意を記すことで結びとしたい。

参考文献

- 始良町教育委員会 1977 「南宮島遺跡」『始良町都市計画事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- 赤崎広志 2020 「縄文土器の底部に付着する白色物質」『宮崎県縄文文化財センター 研究紀要』5
- 秋成雅博 2015 「宮崎県における縄文時代草創期研究の現状」『宮崎県文化講座研究紀要』42 宮崎県立図書館
- 秋成雅博 2018 「第Ⅲ章 まとめ」『清武上落/原遺跡 第 5 地区』宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書 119 宮崎県教育委員会
- 秋成雅博 2019 「宮崎県清武上落/原遺跡の縄文時代草創期の調査」『九州における縄文時代草創期研究の動向と各地の定住生活の様相—』発表要旨 九州縄文研究会
- 荒木隆宏 2003 「阿高式土器の細分と編年」『先史学・考古学論究』Ⅳ 龍岡考古学会
- 今村結記 2018 「東有九州の縄文時代草創期土器群」『九州旧石器』21 九州旧石器文化研究会
- 大根占町教育委員会 1988 「轟木ヶ遺跡」『大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書』1
- 上杉泰宏 2004 「南九州の縄文時代早期前葉の遺跡分布に関する基礎的研究」『関西大学博物館紀要』10
- 岡元清子 1988 「2 地区」『草野貝塚』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 9 鹿児島県教育委員会
- 鹿児島県教育委員会 1981 「中尾田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』15
- 加藤隆夫 2016 「第Ⅳ章 第 4 節 古代～中世の遺構について」『大年遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 237 集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 金丸武司 2004 「宮崎における縄文時代早期前半の土器群—別府原式土器の設定—」『宮崎考古』19 宮崎考古学会
- 金丸武司 2006 「第Ⅲ章 土器型式の設定」『本野原遺跡』3 宮崎市文化財調査報告書(田野町文化財調査報告書 53) 宮崎市教育委員会
- 金丸武司 2011a 「南九州における縄文後期初頭～前葉の土器」『九州における縄文時代後期前葉の土器—中平式・福田Ⅱ式付行期を中心として—』発表要旨 九州縄文研究会
- 金丸武司 2011b 「宮崎県における縄文後期初頭～前葉の土器群」『九州における縄文時代後期前葉の土器—中平式・福田Ⅱ式付行期を中心として—』発表要旨 九州縄文研究会
- 川口雅之 黒木梨絵 立神倫史 2020 「鹿児島県における縄文土器の年代—土器付着炭化物放射性炭素年代測定法から—」『縄文の森から』12 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 川道寛・杉原武之 2019 「第 6 章 野岳遺跡新石刀資料に関する検討」『野岳遺跡』東後付町文化財調査報告書第 7 集 東後付町教育委員会
- 木崎康弘 1996 「第Ⅴ章 総括」『龍生・上ノ原遺跡』熊本県文化財調査報告書 158 熊本県教育委員会
- 九州縄文研究会 2000 「九州の縄文住居」第 10 回九州縄文研究会福岡大会資料集
- 九州縄文研究会 2008 「九州の縄文住居Ⅱ」第 18 回九州縄文研究会熊本大会資料集
- 黒川忠広 2004 「南九州貝紋式土器に見られる地域性について」『縄文の森から』2 鹿児島県立埋蔵文化財センター

東嶺光博 2015 「貝殻円筒形土器群のC 14年代と校正暦年代」『貝殻文と押型文』宮崎考古学会集刊委員会発行委員会

東嶺光博 2019 「九州における縄文前期土器群研究の現状と課題」『九州における縄文時代早期研究の到達点—各地の定住生活の様相—』発表要旨九州縄文研究会

幸泉廣夫 2020 「南九州草創期土器群の地域差や年代に基づく定住化と地層的集約社会形成の過程に向けた基礎的考察」『仰崎考古』30 宮崎考古学会

片岡一博 2008 「南九州漆器文・爪形文土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション

相美伊久雄 2006 「南九州における縄文時代中期初葉～後葉の土器様相」『鹿児島大学考古学研究室 25 周年記念論文集』鹿児島大学考古学研究室

相美伊久雄 2017 「大平式再考—東部部からみた九州縄文時代中期後半の様相—」『鹿児島考古』47 鹿児島考古学会

茂山 護 1957 「福岡市大平出土土器文土器」『九州考古学』1 九州考古学会

茂山 護 1989 「大平遺跡」『宮崎県史』資料編考古1 宮崎県

芝康次郎 2011 「九州における細石万石器群の研究」六一書房

芝康次郎 2020 「西日本の神子集系土器群」『季刊考古学』153 雄山閣

鈴木忠司 1971 「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』23-8 古代学協会

高橋吉武 1997 「平格式と塞ノ神式土器の編年」『先史学・考古学論究』II 竜田考古会

高橋哲郎・徳永貞紹 1994 「九州地方の縄文中期土器編年と 14 C年代」『名古屋大学加器質量分析装置報告書』

立神倫史 2018 「平格式・塞ノ神式土器群の現状と課題—九州南部の事例を中心に—」『九州の縄文時代早期後葉の文化—平格式・塞ノ神式併行の中心を中心に—』発表要旨九州縄文研究会

近沢恒典 2015 「都城の縄文文化」『歴史シンポジウム おどろくべき！九州の縄文文化』記録集 都城市教育委員会

谷口めぐみ 2012 「第6節 自然科学分析の結果」『向原中尾第1・2遺跡』宮崎県縄文文化財センター発掘調査報告書 213 宮崎県縄文文化財センター

寺嶋雄二 1986 「第8章 結語」『礼ノ元遺跡』田野町文化財調査報告書3 田野町教育委員会

堂込秀人 1997 「南九州縄文晩期土器の再検討—入付式と黒川式の細分—」『鹿児島考古』31 鹿児島県考古学会

徳永貞紹 1994 「並木式土器の成立とその背景」『牟田祐二君追悼論集』牟田祐二君追悼論集発行会

徳永貞紹 2010 「並木式土器群の現在地」『九州の縄文時代中期土器を考える』発表要旨九州縄文研究会

戸高真知子 1986 「赤い俱物・朱玉」『えとのか』31

富井寛 2008 「並木式・阿蘇式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション

長野真一・井ノ上秀文 1981 「第5章 まとめにかえて」『宮之迫遺跡』末吉町文化財調査報告書2 末吉町教育委員会

萩原博文 2001 「縄文草創期の細石万石器群」『日本考古学』12 日本考古学協会

萩原博文 2020 「西北九州と大隅半島北部の晩永朝堆積土と遺物—気候変動とスクレーパー類—」『日本考古学』60 日本考古学協会

東和幸 1989 「春日式土器の型式再検討」『鹿児島考古』23 鹿児島県考古学会

東和幸 1991 「鹿児島県における縄文時代中期の様相」『南九州縄文通信』5 南九州縄文研究会

東和幸 1994 「春日式土器と並木式土器・阿高式土器」『南九州縄文通信』8

南九州縄文研究会

東和幸 2006a 「第V章 発掘調査の成果」『山ノ中遺跡』鹿児島県立縄文文化財センター—発掘調査報告書第103 鹿児島県立縄文文化財センター

東和幸 2006b 「第VIII章 調査のまとめ」『山ノ中遺跡』鹿児島県立縄文文化財センター—発掘調査報告書第103 鹿児島県立縄文文化財センター

東和幸 2009 「春日式土器」『鹿児島県の縄文時代中期土器』南九州縄文通信 第20号 学術記念研究会要旨集 南九州縄文研究会

廣田晶子 1998 「第7章 出土土器部品の編年と痕跡—武見塚における編年の技術と地域性—」『鹿児島県桜島町武見塚発掘調査報告書』奈良大学考古学研究所調査報告書 16 奈良大学文学部考古学研究室

馬藤亮道 2018 「東九州の縄文時代草創期土器群」『九州旧石器』21 九州旧石器文化研究会

松尾有年 2004 「宮崎県のおとし穴状遺構について」『九州における縄文時代のおとし穴』縄文誌 発表要旨九州縄文研究会

松本茂 2003a 「鹿骨部九州における細石万石器群編年研究に関する覚書」『富山大学考古学研究所論集 藤久健』秋山連平先生古希記念論集刊行会

松本茂 2003b 「宮崎県における槍先形刃器群の出現と出現」『九州旧石器』7 九州旧石器研究会

真邊彩 2010 a 「九州南部における中期土器の現状と課題—中期後葉～中期末の様相—」『九州の縄文時代中期土器を考える』発表要旨九州縄文研究会

真邊彩 2010 b 「レプリカ法による土器製作具の復元：素材形状からみた南九州地方の編年」『地域政策科学研究』10 鹿児島大学大学院地域政策科学研究会

都城市教育委員会 2012 「王子山遺跡」『都城市文化財調査報告書』107

都城市教育委員会 2014 「川原谷出水遺跡」『都城市文化財調査報告書』112

都城市教育委員会 2016 「東神宮遺跡」『都城市文化財調査報告書』121

宮崎県旧石器調査会 2005 「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66 旧石器文化研究会

宮崎県縄文文化財センター 2019 「塚原遺跡」『宮崎県縄文文化財センター発掘調査報告書』249 宮崎県縄文文化財センター

宮崎県縄文文化財センター 2019 「小毛山遺跡」『宮崎県縄文文化財センター発掘調査報告書』250 宮崎県縄文文化財センター

宮崎県縄文文化財センター 2020 「上高遺跡」『宮崎県縄文文化財センター発掘調査報告書』254 宮崎県縄文文化財センター

三輪晃三 1996 「九州阿高式系・綠条系土器群の研究—縄文中・後期土器ホライズンの形成とその背景—」『奈良大学研究年報』第91号 奈良大学大学院山下大輔 2014 「宮崎の押型文土器」『宮崎県中央地域の考古資料に関する編年的研究』平成 26 年度宮崎考古学会研究会資料 宮崎考古学会

横手浩二郎 1998 「押型文土器様式最末期の様相—九州手向山式土器の再検討—」『古文化談話』41 古文化研究会

横手浩二郎 2004 「田村式土器とその周辺（覚書）」『縄文の森から』2 鹿児島県立縄文文化財センター

吉本正典 1998 「妙見式土器の検討」『九州縄文土器編年の諸問題—早期後半土器群の現状と課題—』発表要旨九州縄文研究会

吉本正典 2002 「第三章 第2節 土器」『白々野第2・第3遺跡』宮崎県縄文文化財センター—発掘調査報告書 82 宮崎県縄文文化財センター

写真図版





遺跡の立地 (1) [霧島連山・都城盆地を望む]



遺跡の立地 (2) [宮田山・志布志市方面を望む]



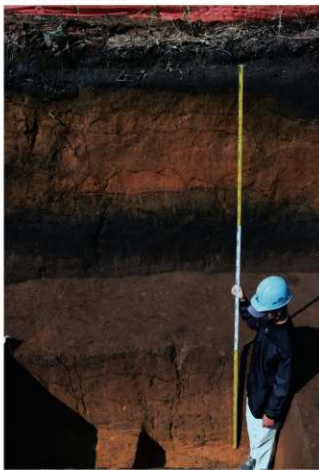
遺跡の立地 (3) [「仙人谷」から北方向]



遺跡の遠望 (県境より北を望む)



遺跡からみた眺望 (南方向)



基本土層 (B区北西壁の試料採取箇所)



調査区全景 (1)〔第V層上面検出遺構群〕



SA7 を切り込む SX1 (北から)



S62 土層断面 (東から)



B区近景(1) [第V層上面:北東より]



第Ⅲ・Ⅳ層遺物出土状況 (E4Gr. 周辺)



発掘調査風景(1) [2018.10]



B区近景(2) [第V層面:C7Gr. 周辺]



SA1 全景 (北より)



SA4 全景 (北東より)



SA6 全景 (東より)



SA6 地床炉内遺物出土状況 (北西より)



SA8 全景 (南東より)



SA9 遺物出土状況 (北東より)



SA11 全景 (南東より)



遺構検出状況 (D5Gr. 周辺: 西より)



A区調査区近景(1) [第V層面: 北西より]



A区近景(2) [第V層面: 西より]



SA13 全景 (1) [南東より]



SA13 全景 (2) [北東より]



SA13 竪穴部内柱穴 (西より)



SA13 土層断面 (北東より)



SA13 柱穴遺物出土状況 (掲載番号 530)